

早稲田大学審査学位論文（博士）

石炭産業の漸次的撤退と閉山離職者の子どものライフコース

—雄別炭砒株式会社尺別炭砒の閉山と中学生に関する追跡研究—

笠原 良太



## 目次

第1部 課題と方法.....	1
第1章 石炭産業の構造転換と炭鉱離職者の子ども.....	2
第1節 石炭産業の構造転換.....	3
第2節 炭鉱離職者対策と離職者の再就職.....	5
第3節 炭鉱離職者の子どもに関する先行研究.....	9
第4節 本論の目的.....	13
第2章 研究の枠組みと課題.....	15
第1節 研究対象の概要.....	15
第2節 理論枠組み.....	23
第3節 調査方法とデータの概要.....	29
第4節 分析方法.....	37
第2部 分析.....	41
第3章 職縁社会における子どもの生活・教育と進路——1950～60年代の尺別炭山.....	42
第1節 職縁社会における子どもの生活.....	42
第2節 「炭鉱の学校」の役割と子どもの生活・教育.....	48
第3節 尺別炭砦の盛衰と中学生の進路.....	51
第4節 小括.....	55
第4章 炭鉱の閉山と中学生の状況理解・計画的な能力——閉山直後の作文分析.....	57
第1節 尺別炭砦の閉山と中学生の受け止め.....	57
第2節 閉山直後の家族、学校、地域に対する認識.....	62
第3節 中学生の将来に対する不安.....	76
第4節 小括.....	83
第5章 父親の再就職と中学生の転校と進路——閉山時中学1・2年生の生活史分析.....	85
第1節 父親の再就職と中学生の適応・進路に関する分析課題.....	85
第2節 父親の道外他産業への再就職と中学生の適応・進路.....	94
第3節 父親の道内他産業への再就職・未就職と中学生の適応・進路.....	100
第4節 小括.....	105

第6章 父親の再就職と高校生の適応・進路——閉山時中学3年生の生活史分析 .....	107
第1節 父親の再就職と高校生の適応・進路に関する分析課題.....	107
第2節 父親の再就職先決定前の進路変更——高校進学から就職へ .....	109
第3節 父親の道外他産業への再就職と高校生の適応・進路 .....	111
第4節 父親の道内再就職と高校生の適応・進路.....	115
第5節 小括.....	119
第7章 結論——石炭産業の漸次的撤退と閉山離職者の子どものライフコース.....	120
第1節 尺別炭砦の閉山と中学生のライフコース.....	120
第2節 本論の知見と課題.....	127
参考資料・文献 .....	132

# 第 1 部

## 課題と方法

## 第1章 石炭産業の構造転換と炭鉱離職者の子ども

本論は、高度成長後期に閉山した北海道東部の大手炭鉱を例に、産業転換が労働者家族の子どもにもたらした短期的・中長期的影響を明らかにするライフコース研究である。戦後の基幹産業であった石炭産業は、1950年代後半以降、約50年をかけて政策的に転換した。最盛期にはおよそ900の炭鉱と約30万人の労働者を擁したが、2002年に最後の炭鉱である太平洋炭硯（北海道釧路市）が閉山し、終焉を迎えた。その間、大量の離職者が発生した。産業転換初期（1950年代）には、失業者とその家族の貧困と滞留が社会問題となった。1959（昭和34）年12月に離職者対策臨時措置法が成立し、それまでの応急的な失業対策事業から、広域職業紹介を主とした総合的な離職者対策へと整備・拡充された（嶋崎 2013）。政府は、炭鉱閉山による社会的混乱を避けるため、石炭産業の転換に対して、他産業以上に手厚い産業政策をとった。九次におよぶ石炭政策の実施に要した財政資金は、予算ベースで総額4兆円（名目額）にのぼった（島西 2011: 7-8）。なかでも、「炭鉱離職者対策は、私企業、各産炭地の個別問題にとどまらない国家的課題として認識され、公共性がきわめて強い国家事業と位置づけられた」（嶋崎 2018a: 85）。炭鉱離職者は、主に製造業をはじめとする成長産業に吸収され、太平洋ベルトの各都市に移っていった。炭鉱離職者対策は、総体としては大きな社会的混乱を生じることなく、粛々と遂行されたのである（嶋崎 2018: 85）。

しかし、炭鉱離職者の子どもはどうであったか。彼らは、石炭政策の対象に含まれていなかった。彼らもまた、閉山による直接的な影響を受けたのではないだろうか。本研究は、こうした問いにもとづいている。これまで、炭鉱離職者の再就職に関する研究は、石炭政策開始前（1950年代）の筑豊を対象とした研究から（戸木田 1989 など）、最後の炭鉱である太平洋炭硯に関する研究まで（嶋崎・須藤 2013）、豊富に蓄積されてきた。一方、炭鉱離職者の子どもに関する研究は、蓄積されていない。本章でみるように、1950年代から60年代前半の「筑豊の子ども」に関する同時代的研究はあるが、その後、石炭産業が急速に衰退した1960年代後半から70年代初頭の炭鉱離職者の子どもに関する研究はほとんどない。この時期の閉山は、内陸部や島嶼部をはじめ、炭鉱の閉山が地域の崩壊をもたらすような衝撃的な出来事であり、多くの子どもが閉山による直接的かつ長期的影響を受けたと考えられる。

以上の問題関心のもと、本論は、石炭産業の漸次的撤退期における「閉山＝地域崩壊」という出来事を経験した中学生に対する追跡調査をもとに、ライフコースの攪乱と軌道修正過程を明らかにする。本章では、石炭産業の構造転換過程と炭鉱離職者対策ならびに離職者の再就職過程について概観し、本論で対象とする漸次的撤退期の閉山が政府主導で進められた特異な出来事であったことを確認する。そのうえで、炭鉱離職者の子どもについて、これまでどのように論じられてきたのか、離職者対策整備前後（1950年代から60年代前半）の調査研究の知見をもとに明らかにする。そして、最後に本論の目的と課題を提示する。

## 第1節 石炭産業の構造転換

戦後日本における石炭産業の構造転換について、矢田俊文（1995）は、石炭の生産量・炭鉱数・常用労働者数の推移に注目して、6つの時期に区分している<sup>1</sup>。本節では、この時期区分に即して、漸次的撤退期までの過程を概観する。

### 1 戦後復興期からスクラップ・アンド・ビルド期

第一期は、「傾斜生産方式と生産の復興期」（1945～51年）であり、石炭産業が戦前の水準にまで急速に回復した時期である<sup>2</sup>。労働者確保のため生活必需品の優先的配給ならびに資金・資材の重点的投入、さらには朝鮮戦争による特需ブームによって、炭鉱数・労働者数が急増した。生産量は、1951（昭和26）年に、5,000万トンにまで増加し、まさに「黒ダイヤ」時代であった。

つづく第二期「朝鮮戦争後の不況期」（1952～54年）では、早くも石炭産業に陰りがみえはじめた。この時期の石炭生産は過剰となり、人海戦術による増産の弱点が高炭価問題として露呈し、各炭鉱は厳しい合理化を迫られた（矢田 1995: 996）。1952（昭和27）年には、63日にわたるストライキ（全山無期限スト）が起こり、需給の混乱を招いて重油の輸入が促進された。この間、炭鉱数・常用実働労働者数ともに急激に減少し、とくに、最大の炭田であった筑豊では、中小炭鉱の休閉山が相次ぎ、「黒い失業地帯」と呼ばれた（島西 2018: 60）。

そして、高度成長期にあたる1950年代後半から60年代にかけて、石炭産業は大きく転換した（「スクラップ・アンド・ビルド期」、1955～66年度）。1950年代後半に中東から安価な石油が大量に輸入されるようになり、石炭から石油へのエネルギー転換が進んだのである（「炭主油従」から「油主炭従」）。政府は、「石炭が重油に対抗できないということは今や決定的である」ことを認め、「経済的合理性」を優先して石炭から石油への切り替えを容認する一方、「安全保障」および「社会的摩擦の回避」の観点から、石炭産業を存続させる方針をとった（矢田 1995: 1001）。1955（昭和30）年に石炭鉱業合理化臨時措置法が施行され、スクラップ・アンド・ビルド政策（非能率炭鉱を閉山し（＝スクラップ）、高能率炭鉱を育成（＝ビルド）する政策）が開始された<sup>3</sup>。

政府は、「社会的摩擦」を回避するため、「炭鉱離職者臨時措置法」（1959年12月公布）、「雇用促進事業団法」（1961年6月公布）、「産炭地域振興臨時措置法」（1961年11月公布）、「産炭地域振興事業団法」（1962年4月公布）を成立し、離職者対策と産炭地域対策を進め

<sup>1</sup> 以下、戦後の石炭産業通史は、矢田（1995）をもとに記述している。

<sup>2</sup> 1946（昭和21）年12月に出された「鉄鋼・石炭の超重点的増産による経済危機突破対策」により、石炭産業は、鉄鋼業とともに最優先で復興が図られた（矢田 1995: 996）。

<sup>3</sup> 具体的には、炭鉱の買収（のちに交付金を交付）による非能率炭鉱の閉山と残存炭鉱の高能率化に対する政策支援、不況カルテルの容認、炭価の目安（標準単価）の提示などからなる（島西 2018: 60）。

た（矢田 1995: 1002）。そして、1963（昭和 38）年度から第一次石炭政策が始まり、以後、九次にわたった。第一次政策（1963・64 年度）ならびに第二次政策（1965・66 年度）では、政府資金を投下して補強すべき「ビルド鉱」、「維持鉱」、早期の閉山を促す「スクラップ鉱」に全国の炭鉱を弁別した（嶋崎 2018b: 105）。以降、スクラップ鉱に指定された大手炭鉱は順次閉山し、閉山炭鉱数、離職者数ともに急増した。閉山炭鉱数のピークは、1963 年度の 146 炭鉱、閉山離職者数も 1965（昭和 40）年度にかけて、毎年 16,000 人を超えた（嶋崎 2018a: 84）。

このスクラップ・アンド・ビルド期に、各炭田のシェアは大きく変化した。1955（昭和 30）年時点で全国石炭生産量の 30%を占めていた筑豊は、1966（昭和 41）年時点で 15.7%まで減少した。代わって、石狩が生産量シェアで最大となり（1966 年度、34.6%）、九州に代わって北海道が主要な産炭地となったのである（矢田 1995: 1004）。

## 2 漸次的撤退期

1960 年代後半は、「経済合理性」に基づく石油中心の供給体制確立を目指すエネルギー政策方針のもと、石炭産業の急激な崩壊が生じた（「漸次的撤退期」1967～72 年度）。第三次政策（1967・68 年度）では、従来の生産目標 5,500 万トン を 5,000 万トンに設定し、地域社会経済に対する影響など、「社会的摩擦の回避」を目指して、ゆっくりと縮小する姿勢が打ち出された。また、企業に石炭産業からの撤退を促すため、従来の「一般閉山交付金」が大幅に引き上げられた（矢田 1995: 1002-3）。

そして、第四次政策（1969～72 年度）では、生産目標を明示せずに「なだらか閉山」という漸次的撤退を促した（矢田 1995: 1009）。この第四次政策は、石炭産業のゆるやかな撤退をめざす方向へと方針が明確に転換した点で、石炭政策の大きな転機となった（牛島 2012: 126）。すなわち、第四次政策下での助成によって企業の維持再建が困難である場合、「勇断をもって進退を決すべき」という基本方針が出されたのである（石炭政策史編纂委員会編 2002: 2）。この政策では、閉山交付金の単価引き上げと「企業ぐるみ閉山」（会社解散を前提とする閉山方式）に対する助成（特別閉山交付金）が新設され、事業継続と会社解散の狭間でゆらぐ企業に対し、会社解散に踏み切ることへの強い政策的インセンティブを与えた（牛島 2012: 141）。

この特別閉山交付金制度は、1969・70 年度限定の措置であったため、明治鉱業や麻生産業、杵島炭砒、雄別炭砒など、累積赤字に悩む石炭企業がこぞって解散を選択した（矢田 1995: 1009）。他方、旧財閥系の手炭鉱は、石炭生産部門を切り離して第二会社化し、事業を縮小して存続させた（島西 2018: 64）。その結果、生産量は 4,600 万トン（1968 年度）から 2,600 万トンにまで減少し（1972 年度）、労働者数は 8 万人から 3 万人にまで減少した（石炭政策史編纂委員会編 2002: 32）。

このように、石炭産業の構造転換は、高度成長期に急速に進行した。とくに、1960 年代後半から 70 年代初頭にかけての漸次的撤退期に大手炭鉱が相次いで閉山し、急速に衰退し

た。そして、この間、大量の炭鉱離職者が発生し、大規模な労働力移動が生じたのである。次節では、炭鉱離職者対策の推移と離職者の再就職過程についてみていく。

## 第2節 炭鉱離職者対策と離職者の再就職

### 1 炭鉱離職者の失業問題と離職者対策の整備

炭鉱離職者対策は、1959（昭和34）年12月に炭鉱離職者臨時措置法が施行されるまで、公共事業や失業対策事業等による応急的対策がとられていた。そのため、1950年代に中小・零細炭鉱の閉山が集中した筑豊を中心に、炭鉱離職者の失業問題が社会問題となった。中小炭鉱の炭住残留者を対象とした調査を実施した戸木田（1989）は、筑豊における「大手→中小→零細炭鉱へと、あるいは土工・日雇へと下降する」法則を指摘している（戸木田 1989: 214）<sup>4</sup>。炭鉱離職者の失業問題と下降法則は、石炭鉱業合理化臨時措置法施行（1955年）後のスクラップ・アンド・ビルド期にさらに顕著になった。筑豊では、1955（昭和30）年から1958（昭和33）年末までに40鉱が買い上げ閉山、31鉱が買い上げを申請し、離職者数は1万人を超えた（福岡県政研究会 1959: 14）。福岡県政研究会の実態調査によれば、旧炭住区に滞留する失業者たちは、失対事業では十分な収入を得られず、経済的に困窮し、生活保護を受給するようになった。中小・零細炭鉱の離職者たちは、炭鉱会社から退職金や未払い賃金さえ支払われないことも多く、「その日の生活にも事欠くような状況であり他地域に移動できず、その多くは地域に留まるしかなかった」（高橋 2002: 39）。

炭鉱離職者の失業問題は社会問題となり<sup>5</sup>、政府は炭鉱離職者臨時措置法を施行し、広域職業紹介、職業訓練、援護業務を含む「総合的な炭鉱離職者対策」へと拡充した。本来、職業紹介は、「職業安定法の定めに従い、適格紹介とその居住地を変更しない就職先への紹介を原則としている」が、炭鉱離職者の場合、石炭産業の構造的不況により他産業への職業転換に重点を置かねばならず、かつ地域経済全体の不振から、地元紹介よりも広域紹介を本則とすることとなった（労働職業安定局失業対策部編 1971: 86）。

具体的な援護業務は、炭鉱離職者援護会（1961年度からは雇用促進事業団）が担い、主に給付金給付業務（移住資金、広域求職活動費、雇用奨励金、職業訓練手当、再就職奨励金、自営業支度金）と、職業訓練、住宅対策、窓口相談、援護協力員、債務保証等業務をおこなった（嶋崎 2013: 5）。移住資金は、「炭鉱離職者の他地域への移住を促進するため、炭鉱地域から指定地域へ扶養家族全員と移住した場合、その移住した炭鉱離職者の年令、扶養家族数、移住距離等に応じて」（労働職業安定局失業対策部編 1971: 110）支給された。また、

<sup>4</sup> 1955（昭和30）年3月に中小炭鉱の炭住残留者（815世帯）を対象とした調査を実施した戸木田（1989）によれば、残留者のうちおよそ4割が不就業状態で、生活保護世帯も全体の2割を占めた。また、就業中の者も多くが零細炭鉱や土建・日雇・拾い仕事などの不安定職に就いていた。不就業者・就業者ともに生活環境は劣悪で、電灯やタンス、雨傘のない世帯が3割程度を占めた（戸木田 1989: 232）。

<sup>5</sup> 1959（昭和34）年8月の福岡県母親大会で決議された「黒い羽根運動」（炭鉱失業者の救済を求めた助け合い運動）や映画やドキュメンタリーによって社会問題化された（藤野 2019: 296）。

雇用奨励金は、とくに再就職が困難な中高年齢の離職者を雇い入れる事業主に対して、「当該離職者のための職場適応指導に要する費用等の補助を行なうことにより、その再就職の促進をはかろうとするもの」（労働職業安定局失業対策部編 1971: 174）であった。

さらに雇用促進事業団は、広域就職する炭鉱離職者用の住宅対策として、1961（昭和 36）年から雇用促進住宅の建設を開始した（吉田 2002: 135）。同法は 1963（昭和 38）年に改正され、離職者の産業転換と他地域への移住を円滑に行うための鉱業権者による就職援助措置の義務化、炭鉱離職者求職手帳制度（「黒手帳制度」、有効期間 3 年）の創設により体制が整えられた<sup>6</sup>。このように、「炭鉱離職者対策は、私企業、各産炭地の個別問題にとどまらない国家的課題として認識され、公共性がきわめて強い国家事業と位置づけられた」のである（嶋崎 2018a: 85）。

このような手厚い対策がとられた背景には、社会的摩擦（失業者の滞留問題）の回避、成長産業における労働力需要の拡大に加え、炭鉱労働と生活の特性から、炭鉱離職者の産業転換ならびに地域移動が容易ではなかった点があげられる。この特性とは、すなわち、炭鉱における作業・業務の多様性、就労形態（24 時間操業、三交代制）、生活形態（生産施設に近接した炭住区での集住）である（嶋崎 2017: 155-6）。そのため、離職者対策では、炭鉱で身につけた技術の特殊性、雇用条件の特殊性（請負給の賃金体系、採炭業務での相対的高賃金）、両義的な労働者エートス（勤勉さや協調性の強調と、粗暴性の強調）、労働者家族固有のライフスタイルの 4 点が認識されていた（嶋崎 2017: 156）。つまり、離職者対策は、政策のみならず、閉山炭鉱の会社、組合、地元自治体、職業安定所等の連携によって進められる必要があった。とくに、大手炭鉱では、会社、組合による手厚い支援体制が整えられた。財閥系炭鉱では、企業グループの相互援助システム機能もあり、その他の大手も第二会社設立による「ゆるやかな閉山」の実現によって、会社・労組・職安が時間的・経済的ゆとりをもって斡旋業務にあたった（高橋 2002: 39）。また、山元には労組役員などが離職者と職安を仲介する「山元相談員」（炭鉱離職者援護協力員）が配置され、各種相談対応（再就職先での給与や手当、住宅、子どもの学校関係、老親問題、移住後の妻の就業機会など）および再就職先への移住支援など、個別支援をおこなった。こうした支援体制の背景には、炭鉱社会固有の「ヤマの仲間」や「一山一家」精神があった（嶋崎 2013: 8）。

## 2 炭鉱離職者対策整備後の再就職

炭鉱離職者臨時措置法の成立以降、離職者の再就職は、広域就職が主流になっていく。主な再就職先は、高度成長下の労働力不足地域（主要には「太平洋ベルト」）であり、多くの離職者が製造業等に産業転換した。たとえば、離職者対策初年度（1960 年度）の福岡県内

---

<sup>6</sup> 炭鉱離職者は、離職日から一定の待機期間を経て、黒手帳の交付を受け、失業保険の受給が開始される（2002 年時点で最長 330 日）。その間に公共職業安定所の仲介で再就職に向けた求職や職業訓練校での受講などを行い、再就職が決まると移住資金などが支給される。再就職が決まらない場合、就職促進手当を 2 年間受けられる。石炭年金の受給が 55 歳に開始されるため、52 歳で退職すると、3 年間の手当ののちに石炭年金への移行が可能だった（嶋崎 2018a: 84-5）。

炭鉱離職者（10,854人）のうち、およそ2割が広域就職した（戸木田 1989: 365）。主な受け入れ先であった大阪では、1959（昭和34）年から1966（昭和41）年春までに、全国からおよそ8,000人の炭鉱離職者を受け入れた（戸木田 1989: 368）。

しかし、産業転換と地域移動は、若年層が圧倒的に有利であり、高年層や子どもの教育・老親扶養を抱える離職者にとって不利であった。炭鉱離職者の広域就職は、離職者個人の年齢やライフステージ、炭鉱での職位・職種といったミクロな条件によって規定された（嶋崎 2018a: 97）。たとえば、「筑豊御三家」の一つである貝島炭礦では、1963年から1966年までに4,355人が離職し、1,675人（38%）が県外就職したが（吉田 2002: 132）、「それは、年齢的に中堅をなす基幹的な労働者であり、家族構成などの諸条件が比較的めぐまれていた」人びとであった。一方、定年間近の離職者や「子どもの学校、年寄りのこと」で「動けない」、「第二の人生を始めるには遅すぎる」人びとは、「産炭地にとどまり困難極まる再就職の道を探らざるを得なかった」（高橋 2002: 37）。採用側の企業も大企業（安定した職場、労働条件のよい企業）ほど採用条件の年齢制限が厳しく、ほぼ「40歳まで」としていた。そのため、貝島炭礦の会社・組合は、中高年を35歳以上、高年を45歳以上として、高年層の再就職に特別な配慮を払った（高橋 2002: 37）。このように、安定した職業に再就職するためには、「再就職する本人の職業・職種に対する適正と適応力が問題」となり、それらが発揮できるのは、「身体的・精神的条件から考えておよそ30歳代が限界」であった。つまり、再就職時の年齢が重要だったのである（吉田 2002: 132）。

また、石炭産業の堅固かつ明確な階層構造である職員・鉱員の区分、鉱員内の直接夫と間接夫（組夫）の区分も再就職の条件となった。産業転換の可能性においては、職員よりも鉱員への求人のほうが豊富であった。一方、直接夫と間接夫の間では、間接夫が高度成長期の時点で「黒手帳」の対象外であり、再就職において圧倒的に不利だった（嶋崎 2018a: 98）。さらに、広域就職における集団就職形態で活用される社会的ネットワークをどれほど持っているかということも重要だった（吉田 2002: 132）。前述の貝島炭礦のOB会調査によれば、職業安定所による紹介が42%と最も多かったが、ついで、上司や同僚・知人による紹介も23%におよんでいた（吉田 2002: 133）。換言すれば、こうしたネットワークを有していない間接夫は、条件のよい再就職が難しかったのである。

### 3 石炭産業の漸次的撤退期における大手炭鉱離職者の再就職

石炭産業の漸次的撤退期には、多くの閉山離職者が発生したが、上記の手厚い離職者対策のもと、大手炭鉱の離職者を中心に、おおむね早期に、他産業に再就職した。ただし、再就職先の条件や定着は、離職者が閉山と遭遇するタイミング（年齢、ライフステージ、職位・職種）に規定された。ここでは、国内最多の閉山離職者が生じた常磐炭砦（福島県いわき市）に関する先行研究の知見をもとにみていこう。

1971（昭和46）年4月の常磐炭砦の大閉山により、4,288名もの離職者が発生した。しかし、離職者の再就職は、常磐炭砦KK、地元、職安が一丸となった就職対策によってスム

ーズに進み、閉山から16か月で91.2%が再就職を決定した（純求職者4,141名）。主な再就職先は、「新会社（西部砒）」25%、「系列会社」9%、「誘致会社」9%など、市内での再就職が71%に達した（嶋崎 2017: 164-5）。常磐炭砒は、京浜・京葉工業地帯に近く、「系列会社」が地元で拡張したため（「オール常磐」、観光業への転身）、地元での再就職が可能だったのである（嶋崎 2017: 166）。

ただし、就職先の地域には、年齢による差異がみられた。若年・高年ともに地元就職を希望していたが、結果的に「39歳以下」では地元就職が少なく、県外就職が多かった。一方、「50歳以上」では「新会社」への就職をはじめとする地元就職が多かった。また、就職先の決定時期も若年ほど早く、高齢ほど遅かった。このように高齢者の就職が難航したため、就職対策本部は、県外の大口求人企業に対して、高齢者の抱き合わせ求人の方を探った。若年者（39歳以下）の県外転出者のうち、約3割が50名以上を採用した企業に集団で就職しており、そこに高齢者（50歳以上）における県外転出者のうち、2割が抱き合わせで就職した（嶋崎 2003: 52-3）。

転出者の主な再就職先は、千葉県や神奈川県、茨城県など、関東地方に集中した。そのうち、7割以上が上記の集団就職にもとづいて2世帯以上の集住形態をとった。彼らは、同一の雇用促進事業団宿舍や再就職先企業の社宅に居住し、「多数の常磐炭砒出身者がまとまって生活している状態・地域」である「リトル常磐」を形成した（正岡ほか編 2006: 37）。

では、常磐炭砒の閉山離職者たちは、再就職後、どのように定着したのだろうか。離職者研究のなかで定着過程までを明らかにした研究が少ないなか、常磐炭砒の研究では、追跡調査の結果をもとに、職業の安定性（閉山後の初職継続期間）について明らかにしている（正岡ほか編 2006: 61-72）。それによると、再就職先の決定と同じく閉山時の年齢と職位に加えて、幹経路、就職先企業種別、従業上の地位、就労時間と収入の変化が職業の安定性を規定する要因としてあげられている。

すなわち、40歳以下の若年層（鉱員）では、閉山後の初職を20年以上継続した割合が4割と多かったが、46歳以上の高齢層では5年未満で退職する割合が4割を超えた。とくに、「公共職業安定所」ならびに「縁故」で就職した者は、他の職を求めて自発的に早期退職する傾向がみられた。また、常磐炭砒の系列会社に就職した者は安定性が高かったが、非関連企業に就職した者は、継続年数が短かった（5年未満の割合が全体で4割）。そして、再就職後の収入は、就労時間が増加した者やホワイトカラーとして再就職した者を除いて、全体の7割で減少した。ブルーカラーとして就職した場合、収入が減少したグループでは、5年未満で退職する割合が7割にもおよんだ。このように、若年層で条件のよい大口求人企業に再就職した者を除いて、再就職先でのキャリアは決して安定していなかったのである。

ここまでみてきたように、大手炭鉱離職者の再就職は、離職者対策が整備されて以降、おおむねスムーズに進行し、高度成長下の一般産業に吸収された。ただし、炭鉱労働と生活の特性から、炭鉱離職者の産業転換と地域移動は容易ではなく、離職者の年齢、ライフステージ、職位・職種によっては、不安定な再出発を余儀なくされた。そして、石炭政策が主に大

手炭鉱を対象にしていたため、中小・零細炭鉱の離職者をはじめ「炭鉱離職者の負のスパイラル」は、高度成長期をとおして解消されなかったのである（嶋崎 2018a: 98）。

### 第3節 炭鉱離職者の子どもに関する先行研究

では、炭鉱離職者の子どもは、石炭産業の衰退をいかに経験し、その後の人生にどのような影響をもたらしたのか。炭鉱離職者の子どもに関する研究は、スクラップ・アンド・ビルド期の筑豊を対象としており、離職者の長期的な失業と子どもの貧困などが主なテーマとなっている。調査研究の主体は、学校教員等の教育関係者と大学の研究者に分類できる。前者は子どもの生活実態の把握、後者はその要因・メカニズムの解明を目指している（新藤 2015）。以下では、離職者対策整備前後（1950年代と60年代）に区分して、先行調査・研究の知見を整理する。

#### 1 1950年代の「筑豊の子ども」

##### （1）教育関係者による報告

1950年代の教育関係者による報告をみると、産業転換初期の筑豊における子どもの惨状が伝わってくる。福岡県教職員組合と福岡県政研究会は、県政や国政、社会全般に筑豊の子ども現状を伝えるため、小中学校を対象とする実態調査をもとに、『炭鉱不況の中の子供たち』を作成した。そこで報告されている子どもの問題は、主に以下の3点である（福岡県政研究会 1959）。

第一に、学校の長期欠席（長欠）・不就学問題である。学用品や通学用品の不足は、子どもの足を学校から遠ざけ、長期欠席につながった。また、父親の失業状態が続き、生活保護受給世帯となった場合、子どもは家計補助のため「ボタ拾い」や家事を手伝い、学校を欠席した<sup>7</sup>。調査結果によれば、1学期中に8日以上欠席した児童・生徒は、一般の子どもで6%だったのに対し、炭鉱の子どもは22%にのぼった（福岡県政研究会 1959: 43）。

第二に、学力低下や生活態度の悪化である。失業者世帯における学用品の不足に加え、学習環境の劣悪さ（勉強部屋・電灯がない、新聞・雑誌をとっていない、勉強をみる人がいないなど）が学力に影響し、学力テストの点数や通信簿の評価が一般の子どもより炭鉱の子どものほうが低かった（福岡県政研究会 1959: 17）。また、中小炭鉱の子どもに特徴的な転校経験者の多さと、それにとまなう児童生徒間の学習進度の違いが、教員たちの学校・学級運営を困難にさせ、全体的に学力の低下をもたらしていると指摘している（福岡県政研究会

<sup>7</sup> 1950年代末の筑豊で流行していた「炭坑の子守唄」（作詞・作曲 森中鎮雄）の歌詞に、子どもたちが学校に行けない実情が描かれている。「1. 父ちゃん今日も帰らんき／母ちゃん炭坑にボタひろい／2. 秀坊のおもりはうちばかり／ふみちゃんと縄飛びしたいとに／3. 兄ちゃんどこまで／ザリガニ取りに／学校やすんでいたやろ／4. ザリガニ取ってなんにする／ゆうげのカユのサイにする／5. 夕やけ雲はあかいのに／あしたも学校にゆかれんと」（林 1983: 280-1）。

1959: 33)。

第三に、進路への影響である。1950年代の全日制高校への進学は、決して一般的ではなかったが、成績優秀な生徒は高校進学を志望した。しかし、炭鉱離職者の子どもは、家計の悪化が障壁となり、進学を断念せざるを得なかった。何よりも「口べらし」のため他出し、就職を求められた(徳本・依田 1963: 165)。父親が高齢や病気等で失業期間が延びている場合はなおさらである。この報告書では、中学3年男子の作文<sup>8</sup>を引用しながら、進学か就職かで悩む生徒の葛藤を指摘している。

このほか、身体発達への影響(皮膚病、トラコーマ、近視の罹病率の高さ)や非行問題(「ずるやすみ」、「野あらし」、「暴力」などの増加)などが、炭鉱の合理化・閉山による影響として挙げられている(福岡県政研究会 1959: 28-30)。筑豊の教員たちは、教育現場における問題を「同じ状況を共有する教師同士で連携して解決にあたろうと」記録に残し(新藤 2015: 132)、改善にむけて社会に訴えかけていた<sup>9</sup>。

## (2) 教育社会学的研究

教育関係者による調査は、実態を把握するうえでやや不十分な点がみられる。その点を克服しようとしたのが、大学の研究者による研究である(新藤 2015: 127)。同時代の教育社会学的研究は、上記の諸問題の背景として、炭鉱の子どもの家庭環境ならびに親の教育的関心に着眼している。矢野峻(1954a)は、筑豊における大手炭鉱と中小炭鉱の家庭環境と親の教育的関心を、農村および都市と比較しながら整理している。まず、家庭環境の一般的基礎条件<sup>10</sup>は、大手・中小ともに農村や都市に劣っていたが、大手炭鉱における両親の教育的関心<sup>11</sup>は、都市、農村と大差なかった。大手・中小ともに、親は子どもに「炭鉱には就いて

<sup>8</sup> 「私の悩み」(田川郡 H 中学校 3年男子)「近づいてくる、近づいてくる、すぐそばに眼前に、希望をもたせるそして悩みの高校入試が。ああ俺は高校へ行きたい、そして立派な社会人と成長し、老いた父を楽にしてやりたい。でも高校へは行けないかもしれない。いやむりだ。5人家族収入は炭坑を離職し、日雇をしている父の収入それだけだ。食べるのにも困っているのに高校なんか、とても、無理だ。しかしどうしても行きたいのだ。俺は一家を養っていかなければいけないのだ。老いた父、小児麻痺で働けない兄、三つ下の弟、亡き母の顔も知らない二年坊、父兄を養い3人の弟を立派に育てあげねばならない身、責任は重い。こんなことを考えていると勉強なんかまったく精が出ない。授業中の真剣な友の顔、10分休みの友の語り、笑い声、それが、みな冷たく強く胸を圧迫する。毎日が暗い、真暗い世界をさまよっているかのようだ。どうしたら、高校へ行けるのだろうか。だれにもたよるものがない。たよるのは自分一人だ。自分の実力だけだ。しかしその自分が今まよっているのだ。こんなことではいけない」(福岡県政研究会 1959: 27)。

<sup>9</sup> 「炭鉱不況の中の子どもたち」の生活実態は、映画『にあんちゃん』(安本末子、1959年)や写真集『筑豊のこどもたち』(土門拳、1959年)などによって全国に知れ渡り、離職者の失業とともに社会問題となった。1959(昭和34)年の「黒い羽根運動」では、全国から支援が集まり、炭住区の設備新設や補修に加え、学童用の傘の購入などに充てられた(藤野 2019: 349)。「黒い羽根運動」は、同年末の炭鉱離職者臨時措置法成立の誘因となったが(藤野 2019: 257)、子どもの学校・家庭での生活環境の改善には至らなかった。

<sup>10</sup> 具体的な質問項目は、両親の学歴、現住所居住年数、住居(自宅か社宅か)、一人当たりの畳数、平均月収、蔵書数、ラジオ・ミシン・新聞・雑誌、文化・娯楽用品である(矢野 1954a: 65)。

<sup>11</sup> 具体的な質問項目は、家庭での勉強に対する関心、長所・短所に対する関心と指導、しかり方、友だちと遊びに対する関心、進学・職業の関心と備え(進学のための貯蓄・保険)、学校と

もらいたくない」という希望を持っていたが、中小炭鉱では教育的関心を払えないほど労働条件や家庭環境が劣悪であった。また、矢野（1954b）は、大手炭鉱に限定した調査を行い、社員階層のほうが鉱員階層に比べて家庭環境が良好であり、親の教育的関心も高いという階層差を指摘している（矢野 1954b: 94-100）。このように、1950年代前半の炭鉱における家庭環境と教育的関心の水準は、大手炭鉱の社員階層で最も高く、ついで大手炭鉱の鉱員階層、そして中小炭鉱となっていた。

家庭環境と教育的関心の違いは、子どもの学業成績、身なり等の違いとして表れた。矢野（1954b）は、社員階層ならびに鉱員階層の子ども（小学生）の学業成績や身なりなどを比較し、社員階層の子どもが優位であると指摘している<sup>12</sup>（矢野 1954b: 102-3）。また、原俊之（1954）は、中小炭鉱の子ども（小学生）の転出入が、大手炭鉱労働者の子どもより頻繁であり、学習進度や教科書の違い、父兄の教育的関心の低さから、学習に困難をきたしていると指摘した（原 1954: 71）。ここでは、大手炭鉱と中小炭鉱の横断的比較であるため、個人水準での学力の変化は測定できないが、炭鉱の合理化・閉山が家庭環境と親の教育的関心を介して子どもの学習活動に影響をおよぼしたことを示唆している。

## 2 1960年代の「筑豊の子ども」

### （1）教育関係者による報告

1950年代の子どもが直面した問題は、離職者対策整備後も報告されている。とくに、大手炭鉱の第二会社付近にあった学校では、児童生徒の学力低下や生活態度の悪化、親の教育的関心の低さがみられた。ある教員はその原因について、つぎのように述べている。

石炭産業合理化政策の強行は筑豊産炭地方における学校児童数の急激な減少をきたしたのである。しかしながら、生活扶助、学用品扶助児童数は総数においてほとんど減少していないということがわかる。この原因を考察してみると、急激な転出数児童数のそれよりもやや少ないが、県内外の閉山炭坑より転入児童数も急激に増加したためである。そして、転入して来た児童の多くは、転出した多くの優良児に比して、相対的に学力や能力その他の生活諸条件が非常に劣っている。（福岡県教職員組合 1965: 123）

この教員によれば、転出児童は「優良児」であり、転入児童は「学力や能力」「生活諸条件が非常に劣っている」児童であった。児童数が減少したにもかかわらず、「生活扶助」や「学用品扶助児童数」が変わらない点からも、転入児童の生活環境が劣悪だったことがわか

---

の協力である（矢野 1954a: 65）。

<sup>12</sup> 学業成績については、アチーブメント・テストの結果と担任教師の判定による学業成績の等級づけを比較し、担任教師が社員階層の児童を上位に等級づける傾向を指摘している。新藤（2015）は、この点を「教育社会学において学校内部から再生産過程を把握しようとする解釈論的アプローチにも通じるものであり、重要な知見が示されていた」（新藤 2015: 129）と評している。

る。このほか、同報告書では、多くの教員が「補導教師」や「雑務に追われる教師」として、学校環境の悪化への対応に追われる様子が記されている。

このように、1960年代の筑豊の学校では、「炭鉱離職者の負のスパイラル」によって子どもが転入・滞留し、学校環境が悪化した。1960年代の教育関係者による報告は、福岡県教職員組合を中心に、滞留した子どもが抱えた問題を社会全般や政府に訴えかける内容が多い<sup>13</sup>。一方、転出した子どもについては、ほとんど言及されず、「優良児」が新天地に転出したという表現にとどまっている。

## (2) 教育社会学的研究

同じく、1960年代の教育社会学的研究も滞留する子どもに焦点を当てている。塚本正三郎(1963)は、中小炭鉱のスクラップによって形成された「失業炭住社会」における共同体的性格の喪失、生活水準の低さ、離婚率の高さを指摘したうえで(塚本 1963: 142-4)、失業世帯の教育期待(ここでは、親の子どもに対する進学期待、高校以上を期待する割合)が大手炭鉱や中小炭鉱に比べて低く、高校以上の進学を期待していた世帯でも、「子どものため」というより「家計援助のために工高〔工業高校〕に進めたいと願う」傾向にあると指摘した(塚本 1963: 146、〔 〕は引用者注)。

こうした家庭環境の悪化と教育的関心の低下は、教育関係者による報告では、子どもの学力低下等につながるとしていた。しかし、教育社会学的研究では、必ずしも子どもに悪影響をもたらしたとはいえないとしている。藤吉利男・塚本正三郎(1962)は、筑豊地域の小中学校を対象にした調査<sup>14</sup>の結果から、失業者ならびに中小炭鉱の子どもの学業成績や身体発達が、大手炭鉱や一般の子どもと相違なかったと結論づけている。対象校の学力水準が全体として低い可能性や測定方法に限界があった点を踏まえつつ、「義務教育段階における学業成績は、家庭学習その他が例えば炭失〔炭鉱失業〕家庭のように不徹底不満足であり、環境的に問題のある家庭であっても、学校に出席し、学習しさえすれば能力に応じた成績を獲得しうる」(藤吉・塚本 1962: 87、〔 〕は引用者注)としている。

ただし、子どもの問題行動は増加・悪質化しており、「石炭不況という過酷な現象は先ず炭鉱学童の心情行動に影響を及ぼし、次に学業成績、身体に影響が及ぶ」、「あるいは心情、行動への影響が累積されて学業成績、身体に及ぶ」可能性を指摘している(藤吉・塚本 1962: 87-8)。すなわち、炭鉱の合理化・閉山による子どもへの影響は、長期的視点で観測しなければならないことを示唆している。

以上のように、炭鉱離職者の子どもに関する研究は、スクラップ・アンド・ビルド期の筑

<sup>13</sup> 報告書のタイトルからもその趣旨が伝わる(1965年『産炭地の教師は訴える』、1968年『政治の谷間の子どもたち』)。

<sup>14</sup> 1960(昭和35)年9月から11月、小学6年500人、中学3年300人を対象に、知能、標準学力検査(国語・数学)、運動能力・適性測定、家庭環境・生活状況・学習状態に関する質問紙調査を実施し、さらに児童生徒の心情行動について担任教師から報告を求めている(藤吉・塚本 1962: 57)。

豊を中心に同時代に行われ、主に中小炭鉱の閉山による炭山コミュニティの変容、学校環境の悪化、家計の悪化や家族関係の変化が、子どもに短期的影響をもたらしたことを明らかにした。とくに、離職者対策整備前の1950年代は、父親（炭鉱離職者）の失業問題が深刻化・長期化し、子どもが家計維持のための家族戦略に組み込まれ、長期欠席・不就学、学力低下などの問題が生じた。離職者対策整備後の1960年代は、父親の広域就職によって産炭地を離れることが望ましいとみなされていたが、実際は「炭鉱離職者の負のスパイラル」によって滞留せざるをえない子どもが多く、50年代と同様の傾向が続いていたのである。

#### 第4節 本論の目的

一方、先行研究の課題として、つぎの3点があげられる。第一に、転出した子どもへの着目が不足している点である。先行研究の主な対象は、合理化・閉山後も炭住区や産炭地に滞留した子どもであった。転出した子どもは、炭鉱から「脱出」して、新天地に移動できた「優良児」としてみなされ、研究対象にならなかった。しかし、本章でみたように、転出した子どもの父親は、再就職後、仕事・生活の双方で多くの課題に直面していた。精神的・経済的自立前の子どもも、間接的ではあるが、こうした親の困難を経験することになる。とくに、義務教育課程修了と進路選択を控えた中学生というタイミングで閉山と転出を経験した子どもは、多くの課題に直面したと考えられる。

第二に、転出前の炭山コミュニティにおける子どもの生活や教育が十分に捉えられていない点である。転出した子どもの大半は、父親の産業転換に伴い、成長産業都市に移動した。この移動がいかなる意味を持っているのかを解明するためには、まず、子どもが生まれ育った炭山コミュニティの特徴と、そこでの生活や教育、子どもが参加する諸活動について把握する必要がある。先行研究では、階層ごとの家庭環境や親の教育期待などが明らかにされているが、学校や地域を含めた炭山コミュニティの特性に関する言及は少ない。後述するように、炭山コミュニティは典型的な職縁社会であり、人びとの生活と社会関係は炭鉱を中心に展開していた。職縁社会・炭山コミュニティでの生活・教育経験が転出後の適応と進路にどのように作用したのかについて精査していく必要がある。

そして第三に、産業転換が子どもにもたらす中長期的影響が解明されていない点である。先行研究では、合理化・閉山直後の子どもの学力低下や生活態度の悪化等、短期的影響に焦点が当てられているが、閉山による影響はこれにとどまらない。子どもは、炭山を離れたのち、転校先への適応や中卒後の進路などの課題に直面した。これらの課題は、父親がどのような産業・企業・地域に再就職し、家族がいかに対応したのかによって左右される。さらに、その後の人生移行においても、中等教育期における閉山経験が顕在化するであろう。こうした中長期的影響の精査を含めた研究によって、産業転換と子どもを包括的に捉えることができる。

以上の課題を解決するために、本研究は、石炭産業の漸次的撤退期における大手炭鉱の閉

山を対象とし、当時の中学生のライフコースを検討する。前述したように、この時期の内陸部や島嶼部における炭鉱閉山は地域の崩壊を意味しており、子どもを含む全住民に移動を強いた。すなわち、この時期の閉山は、父親の産業転換と炭山コミュニティからの移動が子どもにもたらした影響を明らかにするうえで重要な事例である。

また、先行研究において見落とされている炭山コミュニティの職縁社会としての特性に注目し、子どもがどのように生活していたのかを捉えたうえで、閉山直後の状況理解、転出先での適応・進路を明らかにする。炭山をはじめとする鉱山社会は、生産を第一とした封鎖的・閉鎖的社会であり、家族主義的結合原理によって凝集性の強い社会であった。内陸部や島嶼部など、他地域と隔絶していた地域では、入口に門番を設けて外部からの入山を禁止するほど、封鎖的・閉鎖的社会であった。さらに炭山コミュニティは、何より石炭の生産を第一とし、労働者とその家族の生活も生産体制下に組み込まれていた。坑内労働の危険さと不規則な就業形態という炭鉱労働の特殊性は、家族に父親の労働力再生産を最優先とする生活を強いた（嶋崎 2020b）。加えて、熟練と労働者同士の信頼関係を要する労働特性から、職業の世襲制、従業員子弟の優先採用という点でも封鎖的・閉鎖的であった（尾高 [1948]1987）。石炭産業の初期には、労働者の脱落的性格と不安定な生活、危険な坑内労働という特性から自助的救済組織「友子」（親分子分集団）が組織され、鉱山作業を紐帯として、血縁性がなくとも「根本的に家族主義的集団」が成立した（松島 [1951]1987: 57）。これらの特徴は戦後も継承され、炭鉱を単位としてさらに強まった。友子が解体されたのちも労働組合が「横に広がる結合原理」として成長し（松島 [1951]1987: 42）、地域社会の私的・公的領域を編成して、画一的で閉鎖的な「炭鉱社会」を生み出した（市原 1997: 376-7）。1950年代以降、労働者家族が1つの炭鉱に定着し、炭鉱を単位とする地域社会へのアイデンティティが強まり（市原 1997: 351）、「一山一家」や「全山一家」といった共同精神を強調する炭鉱があらわれたのである。

このように、炭山コミュニティは炭鉱を中心とした職縁社会であり、労働者家族の生活は、炭鉱の生産体制下に組み込まれていた。閉山によって転出した子どもが、こうした職縁社会で生活していたという文脈をおさえなければ、彼らの閉山経験と転出後の適応を十分に捉えることはできない。したがって、本論では1970（昭和45）年に閉山した尺別炭砦（北海道旧音別町）を事例に、閉山前の炭山コミュニティにおける生活・教育を捉えたうえで、閉山時中学生のライフコース研究、すなわち人生移行過程の全体を明らかにする。

次章では、尺別炭砦を研究対象とする理由と意義を示したうえで、本研究の理論枠組み、調査方法とデータの概要、分析方法について論じる。

## 第2章 研究の枠組みと課題

本研究の対象は、石炭産業の漸次的撤退期に閉山した尺別炭砦（北海道旧音別町）である。すでに尺別炭砦については、その職縁・血縁・学縁・地縁にもとづいた人びとの「つながり」について整理したモノグラフがまとめられている（嶋崎ほか 2020）。本論は、そのなかでもとくに子どもに注目する。尺別炭山は、他地域から隔絶した山間に位置し、地理的・空間的に独立した閉鎖的な街であった。人口はおよそ 4,000 人の炭砦街であり、人びとの生活は炭山で完結していた。さらに、戦前の友子制度の名残や全山による戦後復興の経験から、「全山一家」の共同精神が涵養された家族主義的結合原理を有し、かつ労働力の再生産が世代間でなされるなど、職縁社会の特徴を有していた。すなわち、尺別炭山は職縁社会の原理が空間的にも一致した稀有な例であり、中等教育期における異なる環境への移行の影響をみようとする本論の研究対象に適している。

本章では、尺別炭山の概要と職縁社会としての特徴を論じたうえで、閉山時中学生のライフコースを分析する理論枠組みならびに分析方法を検討する。

### 第1節 研究対象の概要

#### 1 尺別炭砦と尺別炭山の概要<sup>15</sup>

##### (1) 開鉱から戦後復興まで

尺別炭砦は、1910（明治 43）年、白糠郡音別村尺別、尺別川上流の奥地に開発され、1918（大正 7）年から営業出炭を開始した。1928（昭和 3）年に三菱系の雄別炭砦鉄道株式会社（以下、雄別炭砦社）に買収・合併され、雄別炭砦（旧阿寒町）、茂尻炭砦（赤平市）とともに「雄別三山」の一山となった。1930年代から 40年代初頭にかけて、新坑の開発や諸施設の近代化を図り、出炭量が飛躍的に増大した。出炭量のピークは、1941（昭和 16）年の 42 万トンであり、従業員数は 1940 年代前半に 1,000 人に達した。

炭鉱開発によって拓かれた尺別炭山は、炭鉱の拡大とともに発展した。開鉱当初は坑口付近に限られていた炭住区は次第に拡張され、戦前に坑口より約 3 km 下流の新尺別に「緑町」が、さらに下流域に「錦町」の一部が建設された。緑町には協和会館（映画館）や役場支所、郵便局などのサービス機関が建設され、戦後に建設される「旭町」と「栄町」とあわせて、主に鉱員が居住した。一方、職員は錦町、下請（組夫）は坑口付近の仲町に居住するなど、階層ごとに居住区が明確に分かれていた（図 2-1）。

---

<sup>15</sup> 嶋崎（2020a）を参照。

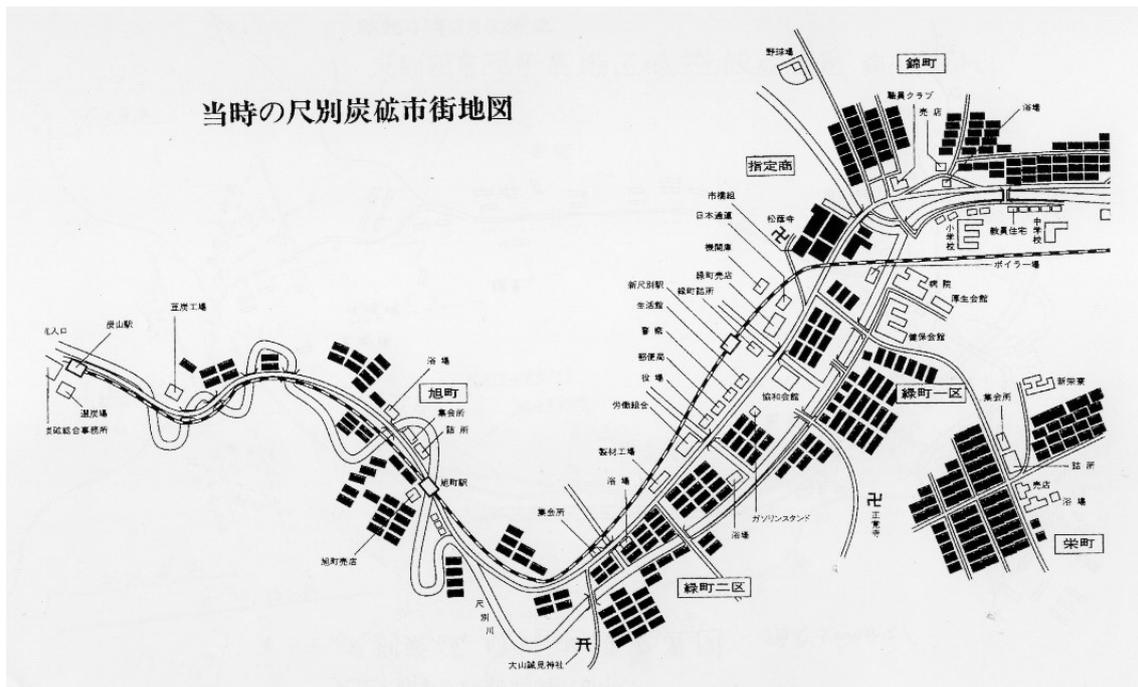


図 2 - 1 尺別炭山市街地図 (1960 年代末)

出典：記念誌編集委員会編 (2000: 51) より転載

このように、尺別炭山は炭鉱開基によって成立した街であり、移住者によって構成された。これは他の北海道内炭鉱に共通する特徴であり、「東北農村から単身出稼の形態で流出した者が専業鉱夫の中心を占め、彼らは地元から娘を呼び寄せて縁組みし、炭鉱で家族形成をした」(市原 1997: 30)。また、昭和初期には炭鉱開基のころからいた自坑夫のほか、他山からの渡坑夫も増え、他の炭鉱と同様、友子組織(「尺別全山自渡両友子」)ができた。これは、坑内労働における「先山、後山の関係で、熟練坑夫の下に子分として若い坑夫が編入される」形の共助組織・同職組合組織であり(岡崎ほか 1974: 293)、「個別の擬制的親子関係(親分・子分関係や兄弟関係)によって成立した(嶋崎 2020b: 63)。後述するように、この友子組織にみられた擬制的家族関係が、戦後も継承されることになる。

尺別炭鉱は開鉱以来、出炭量・従業員数ともに拡大していたが、1944(昭和19)年8月の「樺太及釧路に於ける炭鉱勤労者、資材等の急速転換の件」(「急速転換」)閣議決定により休坑・廃坑<sup>16</sup>となり、労働者1,047人中780人(うち朝鮮人410人)が筑豊の三菱鉱業新入炭鉱に転換となった<sup>17</sup>(石川ほか 2012)。戦後、転換者たちは尺別に戻ったが、坑内は荒れ果て、すぐに再開できる状態になく、再び離山する者もいた。しかし、次第に復興に向け

<sup>16</sup> 尺別炭鉱では奈多内坑が休坑、奥沢坑が廃坑、浦幌炭鉱では第一坑と太平坑が休坑となった(岡崎ほか 1974: 275)。

<sup>17</sup> 炭鉱の施設や機械も空知管内の美唄に移転された。残された妻や子どもたちのなかには、休坑中の坑内に入り、冬の「ヤマたき炭」用の石炭を手ぼりしたり、ズリ山からひろい炭をする者もいた(岡崎ほか 1974: 275)。

た動きが活発になり、友子組織の親分の尽力もあって尺別炭鉱労働組合を結成し（1946年1月）、従業員以外も含めた全山で坑内の復旧作業に取り組んだ。そして、同年8月に出炭が再開され、9月に復興記念式典が盛大に開かれた。この全山による復興は、尺別炭山の「全山一家」を象徴する出来事となった。

### （2）戦後復興・停滞期（1946年から1950年代末まで）

復興後の尺別炭鉱は、その趨勢から3つの時期に区分できる。まず、復興から1950年代末までの「復興・停滞期」である。尺別炭鉱は、復興後、主要坑（奈多内坑）の出炭能率が伸びず、1950年代初頭にかけて赤字経営が続いた。1950（昭和25）年4・5月には、賃金分割払いや遅配が生じ、1953（昭和28）年には、雄別炭鉱社が希望退職を募り、尺別では636名が応募した。尺別炭山の炭住区では、「櫛の歯が欠けたような」状態になるところもあった（尺別炭鉱労働組合 1966: 43）。1953（昭和28）年に新坑（双久坑）が着炭し、新たな機械が導入され出炭能率が上がったが（『北海道新聞』1954.2.3）、翌年10月には「可採炭量枯渇」の理由から浦幌炭鉱が閉山し、12月に90名が尺別炭鉱に転換となった（尺別炭鉱労働組合 1966: 46-7）。このように尺別炭鉱は、「黒ダイヤ」ブームと呼ばれた石炭産業の好況期に乗ることができなかった。その後、神武景気の好況で増産体制となるが、1950年代末以降、石炭産業の急速な衰退によって、尺別炭鉱でも大規模な合理化が進められた。

### （3）合理化期（1950年代末から1960年代半ばまで）

つづく「合理化期」は、雄別炭鉱社が大規模な合理化を進める時期である。同社は、1959（昭和34）年5月に三山に対して希望退職募集や減耗無補充などを提案し（第一次合理化案）、組合の抵抗によって一度は大部分を撤回したが、再度、10月に第二次合理化案を提出、11月に希望退職を募集した。その結果、三山で400名の退職と、茂尻から雄別・尺別への希望転換が行われた<sup>18</sup>。さらに、1960（昭和35）年には第三次合理化案、翌年には第四次合理化案が出され、人員整理と賃金の引き下げ、社宅関係費用の徴収などが提案された。

会社による合理化提案と組合による闘争が続くなか、尺別炭山では「全山一家」の共同精神を揺るがす「尺別事件」が発生した（1961年11月）。これは、会社側の「生産阻害排除についての申し入れ」に始まり、該当者が職場復帰するまでの約6年間にわたり、「労使だけでなく、労働者・地域メンバー内に深い断絶と不信感をもたらした」（嶋崎 2020b: 69）。当時の組合関係者（尺労二十年史編纂委員）によれば、尺別炭山は事件発生により異常なムードが漂い、それを嫌って多くの鉱員が離山したという（工藤 1999: 33）。

さらに、1963（昭和38）年には、雄別炭鉱社から尺別鉱業所に対して職場の分離、賃金の引き下げを含む数十項目におよぶ合理化案が提示された。組合は対置要求を掲げて団交を続けたが、「自立協定」が労使間で締結された（尺別炭鉱労働組合 1966: 94）。これによ

---

<sup>18</sup> このとき、「とくに若手労働者は、相次ぐ首切り合理化に嫌気をさしたり、都会生活にあこがれをもって、就職先を変える者もあった」（尺別炭鉱労働組合 1966: 69）。

り、職場の分離、統廃合による職場機構の簡素化（坑外職場が工作所・興産・林業・商事に分かれ、病院は本社総務部に移管）、日産 1,270 トン生産体制確立のための坑外より坑内への配置転換、さらに賃金の引き下げは一人当たり月額約 2,500 円におよんだ（尺別炭鉱労働組合 1966: 94）。

こうした一連の合理化により、従業員数は、1950 年代初頭の 1,300 人から 1960 年代半ばまでに 600 人に減少し、出炭能率は 1964（昭和 39）年 2 月に「全国第一位」となり、年産 30 万トン体制が整えられた（雄別炭鉱株式会社尺別礦業所 1964）。1966（昭和 41）年には、ベルト斜坑の完成によって原炭搬出が本格化し（尺別炭鉱労働組合 1970）、新坑（南直別）の開発にも着手した（尺別炭鉱労働組合 1966: 104）。雄別炭鉱社は 1966 年に、新鉱である上茶路炭鉱（白糠町）で営業出炭を開始するなど、斜陽化する石炭業界のなかで、その躍進に注目が集まる会社になっていた<sup>19</sup>。

#### （4）閉山期（1960 年代末）

しかし、合理化に伴う退職手当や近代化・機械化のための設備投資などの負担が大きく、雄別炭鉱社の経営収益は悪化した。加えて、尺別炭鉱では 1968（昭和 43）年に最有力箇所ですら自然発火が起り、鎮火のため密閉・放棄せざるをえなかった。そして、ベルト斜坑の開発にかかった財政的負担も大きく、慢性的な赤字を抱え<sup>20</sup>、尺別炭鉱の閉山がうわさされるようになった。

1969（昭和 44）年 1 月、石炭産業の撤退を明示した第四次石炭政策が閣議決定されると、この頃から雄別炭鉱社の経営危機が報じられるようになった。同年 4 月には、同社唯一の原料炭産出炭鉱で「期待の星」だった茂尻炭鉱がガス爆発事故を起こし、7 月に閉山した（三輪 2014: 91-6）。この特別損失が加わり、同社の資金繰りはさらに悪化した。同社は再建計画を立てたが、最も高齢化していた尺別炭鉱の閉山はやむをえないと地元紙も報じていた（『北海道新聞』1969.11.9）。組合と音別町は、近隣自治体なども巻き込みながら、閉山反対闘争を繰り広げたが、1970（昭和 45）年 1 月、同社の資金繰りは 1 月分の給料を支払えないほど悪化しており、尺別炭鉱の閉山が提案された。組合は、2 月初めに閉山阻止のため、100 名の中央動員をおこなったが、月末の企業ぐるみ閉山が確定した（『北海道新聞』1970.2.15）。組合は、退職に関する条件闘争に切り換え、会社との間に、①退職金の上積み支給、②5 月末までの福利厚生施設（社宅、電気、水道、購買など）の確保、③高校在学学生用の学生寮の設置に関する合意を得て、閉山協定書に調印した（『北海道新聞』1970.2.26）。そして、2 月 27 日に雄別、尺別、上茶路の全従業員が解雇され、三山が閉山した。尺別炭

<sup>19</sup> 『クォリティー』（1966 年 12 月創刊号）では、「石炭業界という最悪の業種のなかで、なお今後の躍進が確実に予想される数少ない会社」として、岡田益十社長へのインタビュー記事が掲載されている。

<sup>20</sup> 1969（昭和 44）年に尺別炭業所所長に赴任した佐藤正男氏は、同炭業所の資金事情について、「昭和 24 年に再建して以来、黒字決算を示したのは、258 ヶ月の中、28 ヶ月でありこれは 11.4% で慢性的赤字経営であります」と社内報で従業員たちに説明している（『やまの光』1969 年 11 月 5 日付）。

山は、閉山からわずか10か月で全住民約4,000人が転出し、消滅した。

## 2 職縁社会のモデルケースとしての尺別炭山

以上のように、尺別炭山は炭鉱開基によって成立し、およそ50年の歴史を刻んで、閉山によって消滅した。「閉山＝地域崩壊」という出来事のインパクトもさることながら、尺別炭山は、前章で指摘した職縁社会の特徴が顕著にみられた稀有な炭山であった。

尺別炭山の職縁社会としての特徴（閉鎖性、家族主義的結合、次世代労働力の再生産）は、以下の構造的・内的特性から説明できる。まず、構造的特性として、地理的・空間的特徴と就業人口構成があげられる。図2-2のとおり、尺別炭山は他地域から隔絶した山間に位置し、地理的・空間的に独立した閉鎖的社会であった。隣接の尺別原野（農村）や岐線地区（国鉄関係）との交流・往来はあったが、その規模は小さく、なおかつ他地域からの出入りはほとんどなかった。炭山には商店や病院、学校、映画館、役場支所、郵便局など各種施設がそろい、人びとの生活は炭山で完結していた。また、新尺別駅に隣接した緑町詰所をはじめ、各炭住区の詰所が「門番」の代わりとなり<sup>21</sup>、炭山の外から人が入ることも容易ではなかった。入口も錦町の一つに限られ、鉱業所方面からの入山はほぼ不可能だった<sup>22</sup>。

さらに、全住民の大半が炭鉱関係者によって占められており、就業人口構成の点からも画一的かつ閉鎖的社会であった。閉山時の就業人口構成をみると、全人口4,070人のうち、3,456人（85%）が炭鉱関係者（炭鉱労働者とその家族）であり、そのほか工業関係者も炭鉱会社の下請け企業（組）の従業員（組夫）だった。また、商業関係者も会社に許可を得て炭山で商売をしていた「指定商」であり、寺社関係者や郵便局員とともに、労働組合の組合員であった<sup>23</sup>。他方、公務員（役場支所職員と教員）は組合員ではなかったが、炭住区に居住し、炭鉱労働者の家族とともに共同浴場・水道、娯楽施設など各種施設を利用していた。また、役場支所職員や教員には尺別炭山出身者（炭鉱労働者の子ども）が多く、「全山一家」の共同生活体に包摂されていた。このように、尺別炭山は、地理的・空間的に一つの炭鉱街として完結し、なおかつ炭鉱関係者が大半を占めていたため、とりわけ凝集性の強い炭山コミュニティであった。

加えて、内的要因として、戦前の友子制度にもとづく擬制的家族関係があげられる。尺別炭山では、敗戦直後に友子組織の取立式が行われなくなったが、その後も友子組織の「親分・子分」関係がインフォーマルに維持された。血縁はなくとも親しい関係が世代間で継承されたのである。なかには、人生上の大きな決断の際に子分とその家族が親分に相談したり、親分が炭山内の秩序を維持する役割を果たしていた。

<sup>21</sup> 2021年11月23日、元尺別炭鉱労務課職員への電話インタビューより。

<sup>22</sup> 姉妹鉱である浦幌炭鉱と尺別を結ぶ「尺浦隧道」があったが、浦幌炭鉱は1954（昭和29）年に閉山した。

<sup>23</sup> 商業関係者（指定商）は、閉山まで組合員であり、組合解散記念誌の名簿に記載されている。

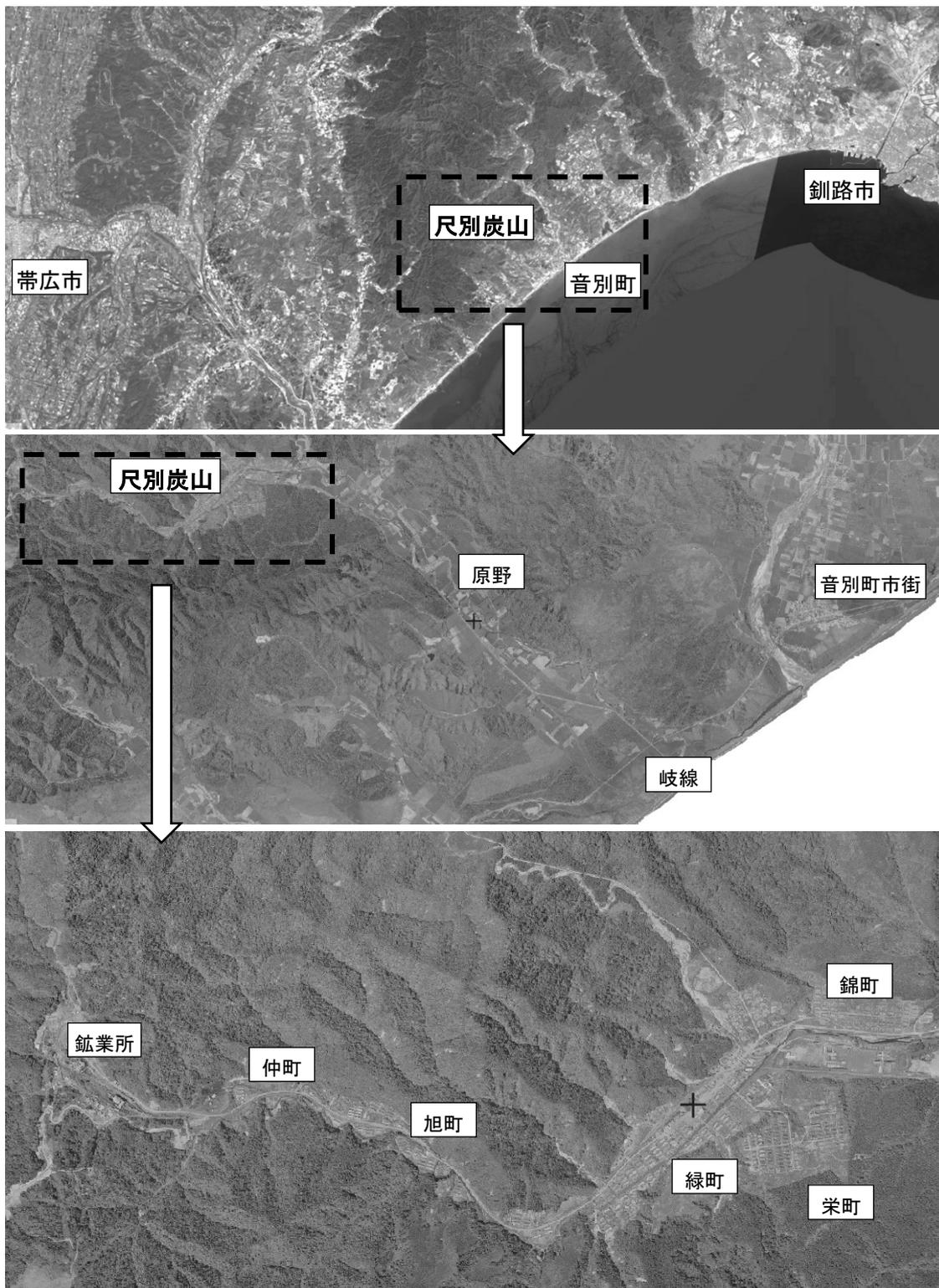


図 2 - 2 尺別炭山の位置 (1961~69 年航空写真)

出典：国土地理院地図より作成。

こうした職縁にもとづいた擬制的家族関係に加えて、全山による復興という共通体験も、尺別炭山の「全山一家」精神を醸成した。前述のように、友子組織の親分たちが炭鉱の復興を目指して労働組合を結成し、炭鉱労働者以外も組合員に加えて、全山で復旧作業に取り組んだ。当時を知る元尺炭中教員は、全山による復興をつぎのように語り継いでいる。

「よしっ、俺たちの手で尺別を元どおりにしよう」、「ここが俺たちの炭鉱だ」とがんばった。まず、坑内から水を抜くことから始めた。私らはその水が出てくるところに立ち会った。おかで働いていた人、事務所の人もみんなで力を合わせて、そこから始めたんです。そして、最初の石炭が出る時、みんなその石炭を見送った。僕も、子どもたちも、みんなで「俺たちの石炭だ」って送った。一緒にいた〇〇君（尺炭中8期生）のお父さんが「バンザイ」と言って、みんなでバンザイした。尺別にはそういういいところがある。（2017年7月インタビュー、記号は固有名詞）

この出来事は、全山の人びとが一つの目標にむかって自発的に協同・結合した最初の出来事であり、「全山一家」精神を醸成し、家族主義的結合を持続させる要因となった。市街地の中心部（協和会館前）に建立された復興記念碑は、その後も人びとの拠り所であり続けた<sup>24</sup>。加えて、1950年代以降、他の大手炭鉱と同様に労働者家族が定着し、炭鉱を単位とした地域社会へのアイデンティティを強めた。さらに、次世代労働力の再生産については、炭鉱労働が危険を伴うため、熟練と労働者間の信頼関係を必要とし、従業員子弟の優先採用ならびに交替採用を基本とした世代間での再生産が行われた（職業の世襲制・世代間継承、第3章参照）。

このように尺別炭山は、職縁社会の原理がおよぶ範囲と炭山の地理・空間、人口構成が一致していた稀有な炭山であった。さらに、友子組織の擬制的家族関係や全山による戦後復興という共通体験の経路依存性によって、強固な家族主義的結合原理が維持された。この原理は、炭鉱労働者のみならず、その家族・子どもの生活も規定した（第3章参照）。そして、家族や学校、地域において、血縁、学縁、地縁を活用したつながりが形成され、炭山に二重、三重の強度なつながりが形成されたのである（嶋崎ほか 2020）。

興味深いことに、そのつながりが閉山後も持続し、現在にかけて展開している。たとえば、閉山直後の再就職活動や再就職後の生活においても活用された（畑山 2020; 嶋崎 2020d）。そして、閉山から20年近く経ってから同郷会が結成され（1986年に在京・在札幌別会、1998年に東京尺別会）、近年では炭鉱OBの高齢化にともない、炭鉱での勤務経験がない閉山当時の中高生など若年層の割合が増加し、世代を越えたつながりが再形成されている（新藤 2020）。

---

<sup>24</sup> なお、復興記念碑は閉山後も尺別炭山出身者によって繰り返し補修され、現在も尺別に残っている。

### 3 分析対象——尺別炭砒閉山時の中学生

このように、尺別炭山は、職縁社会のモデルケースであり、閉山から 50 年の時を経た現在も同郷会・同窓会が活発に継続している。これは同時期に閉山した他の炭鉱ではみられない稀有な事例である。本論では、同郷会・同窓会を通じた追跡調査をもとに、閉山当時の中学生が炭山コミュニティでどのように生活し、閉山時の状況をいかに理解し、転出先の社会にどのように適応して進路を決定したのかについて明らかにする。すなわち、彼らの閉山経験を彼らの生活歴を含む文脈に位置づけて理解する。

本論の対象は、尺別炭砒閉山当時（1970 年 2 月）の尺別炭砒中学校在校生 342 名（1 年生 102 名、2 年生 118 名、3 年生 122 名）である。彼らの世帯主の職業をみると、「鉱業」が 300 名（88%）、「農業」（原野）が 16 名（5%）、「公務員」（教員等）が 13 名（4%）、「小売業」（指定商等）が 7 名（2%）、「林業」が 3 名（1%）、「運輸業」が 1 名、「その他」が 2 名であり<sup>25</sup>、大半が「炭鉱の子ども」であった。彼らが炭山コミュニティ・職縁社会でどのように生活し、閉山によって短期的・中長期的影響を受けたのかを明らかにすることが本論の主な目的である。

尺別炭山は地理的・空間的に他地域と隔絶しており、なおかつ炭山が一つの学区を成していたため、子どもの生活は炭山内で完結し、幼稚園から中学卒業まで、ほぼ同一のメンバーで成長した。このように統制された条件の下で育った子どもを対象とすることで、そのグループ内部の変数（出身階層、ジェンダー、個人的資質など）に着目して、閉山経験の多層性を明らかにする。また、閉山前に尺炭中を卒業した先行コーホートの進学・就職動向を捉え、閉山時中学生の生活や進学・就職を尺別炭山のコンテクストに位置づける。分析コーホートは、前節でみた尺別炭砒の時期区分に即して、表 2-1 のように分類する。

表 2-1 尺炭中出身者の中卒年コーホート区分

中卒年コーホート	中卒年	尺中卒業期	出生年	尺別炭砒時期区分
コーホート1 (C1) (黒ダイヤ世代)	1948-58年	1-11期	1932-42年	復興・停滞期
コーホート2 (C2) (炭鉱衰退世代)	1959-66年	12-19期	1943-50年	衰退期
コーホート3 (C3) (閉山時高校生世代)	1967-69年	20-22期	1951-53年	閉山期
コーホート4 (C4) (閉山時中学生世代)	1970-72年	23-25期	1954-56年	閉山期

出典：本節時期区分にもとづき筆者作成。

<sup>25</sup> 1969（昭和 44）年 11 月 1 日現在。元教頭提供資料より。

## 第2節 理論枠組み

本節では、尺別炭砒閉山時の中学生を分析するための方法論を検討する。父親をはじめとする家族と子どもの人生を結びつけて、閉山による短期的・中長期的影響を捉えるうえでライフコース・アプローチについてまず整理する。ついで、職縁社会である炭山コミュニティから異なる社会への移行に注目するうえで、人間発達の生態学における生態学的環境の枠組みについてまとめる。

### 1 ライフコース・アプローチ

炭鉱離職者の子どもたちが、閉山によってどのような短期的・中長期的影響を受けたのかを明らかにするためには、ライフコース・アプローチが有効である。このアプローチでは、複数の時間が相互に関係しながら同時に進行する様相を観察できる（嶋崎 2011: 116）。第1章でみた『炭鉱労働者の閉山離職とキャリアの再形成』とその一連の研究は、多元的時間枠組みをもとにおこなった国内の代表的なライフコース研究である。この研究では、1971（昭和46）年に起きた常磐炭砒（福島県いわき市）の大閉山という出来事に遭遇したときの離職者の個人時間（年齢）と家族時間（ライフステージ）が、離職者の希望する再就職先と実際の再就職先に影響を与えたことを明らかにしている。さらに、炭鉱会社の企業時間（それまでの経緯、どのような経営組織だったのか、組合との関係など）、いわき市の地域時間（地域社会が石炭産業とどうかかわってきたのか）、産業時間（日本社会における石炭政策）、歴史時間（日本社会の経済産業過程）が離職者の再就職や地域の再生を規定した（嶋崎 2011: 116-7）。このようにライフコース・アプローチは、人生の展開過程を理解するうえで、時空間上の位置（歴史的・社会的文脈）と出来事経験のタイミングが決定的に重要となる（Giele and Elder eds. 1998=2003）。本論では、上記の時間枠組みに、さらに子ども（中学生）の年齢（学年）という個人時間を加えて分析することになる。

上記のように、個人と家族を歴史的・社会的文脈に位置づける道具として有用なのが年齢・時代・コーホート（A・P・C）の説明枠組みである。個人は出生年から出発する年齢と時代の交差線上をたどる。これがコーホートであり、同時期に特定の社会システムに参入した人びとからなる集団を指す。同じコーホート内部の個々人の経験にみられる差異は、社会のジェンダー構造や社会階層による影響として説明できる（嶋崎 2019: 29）。本論では、1970（昭和45）年2月27日の「雄別炭砒企業ぐるみ閉山」という出来事を、中学生で経験した1954-56年出生コーホートを対象に、その内部の差異について検討する（コーホート内比較）。さらに、閉山前に中学校を卒業した先行コーホートの進路と比較し、閉山による地域移動の効果を捉える（コーホート間比較）。

ライフコース論の伝統的アプローチは、人間発達に主軸を据え、出生から死亡までの人生軌道という対象へと接近しようとする（Elder 1974=1986）。このアプローチでは、「人びとの経験がどのように蓄積されてその後の人生に効果をもつのか（累積的効果）、自らの意思

決定がどの程度伝記的過程を変えうるのか、周囲の環境や重要な他者からの影響がどうであるのかについての探求」(嶋崎 2011: 120)が進められてきた。古典的研究である『大恐慌の子どもたち』(Elder 1974=1986)は、大恐慌という歴史的出来事を10代前半で経験したオークランド・コーホート(1920-21年生まれ、小学5年生167人)を1930年代初期から1960年代初期(44歳)まで追跡した<sup>26</sup>。この研究は、パネルデータの利点を活用し、大恐慌による経済的剥奪の影響と家族の社会経済的地位による影響を識別するため、子どもたちを4つのグループ(「中流階級・剥奪家族」、「中流階級・非剥奪家族」、「労働者階級・剥奪家族」、「労働者階級・非剥奪家族」)に分類し、当時の生活への直接的影響とその後の人生経験への長期的影響を結びつけて分析している。

具体的な2時点の影響をみると、まず、当時の子どもたちの生活への影響は、態度・行動、家族外の世界との関わり、家族関係の変化などがみられた。中流階級・労働者階級ともに、経済損失は、家庭経営に子どもをまきこみ、父親の魅力を低下させ、母親中心の傾向を強めた。さらに、子どものつきあいの範囲を家族以外へと拡大させた。性別でみると、剥奪家族において、男子は賃金労働、女子は家事手伝いという新たな役割が付与され、「おとなになること」への関心や勤勉さ、金銭に対する責任感の変化など、剥奪経験の影響がみられた。男子は賃金就労によって家族外の世界が広がり、交際面で早期に自立し、家族からの統制が弱まった。一方、女子は、家事労働を通して拘束が強まり、家族内の葛藤に敏感になる等の影響がみられた。とくに、中流階級の剥奪家族では、社会的威信の低下により、母親の劣等感や自意識過剰、不適切感が強まり、女子の劣等感や自意識過剰を助長した。

こうした当時の生活への影響は、成人期への移行を含むその後の人生経験に作用した。男子は、子ども期の賃金労働経験が職業に対する予期的社会化となり、両階級とも剥奪家族出身者で職業的関心が強く、実際に早期に職業キャリアを確立した。もちろん、時代背景として第二次世界大戦(兵役)と高等教育の伸長、組織の巨大化と大企業サラリーマンの出現があげられる。また、成人期への移行のタイミングは、中流階級では剥奪経験の有無で差はなかったが、労働者階級では、剥奪家族出身者のほうが早期に労働市場に参入する傾向にあった。結果的に、労働者階級では、高学歴を取得できなかったため、中年期における職業的地位が低くなった。一方、女子は、中流階級の剥奪家族出身者の家事的役割への志向性を増大させ、非剥奪家族出身者に比べて、早期に結婚する傾向にあった。経済的地位を喪失した父親との緊張関係が家族からの早期の自立を促したのである。彼女たちは、伝統的役割を容・遂行するようになり、母親に対する批判が青年期よりも強くなった。大恐慌時の社会経済的地位によって、剥奪経験の影響が中長期的に差異化したことがわかる。

前章でみた「筑豊の子ども」は、父親の失業に伴う経済的剥奪状況にあり、家庭経営にまきこまれ、不就学や学力の低下などの短期的影響を受けた。一方、本論で対象とする尺別炭砒閉山時の中学生は、父親が早期に再就職し、職員・鉦員であれば退職金も支給されたため、経済的剥奪を経験した生徒は少なかった。しかし、父親の職業が変わり、収入が減少し、母

<sup>26</sup> 以下、『大恐慌の子どもたち』に関する整理は、嶋崎(1999)を参照。

親が就労に出るなどの変化は、中学生にとって大きな影響をもたらしたと考えられる。

『大恐慌の子どもたち』と一連の研究の「大不況→家族システムの状態（経済的剥奪、家族関係の凝集性、家族の生活段階）→子どもたちのライフコースへの影響の差異という下降的因果関係の図式」（正岡 1996: 198）をもとに、本論では、炭鉱閉山が家族を介して子どものライフコースにどのような短期的・中長期的影響をもたらしたのかを明らかにする。本論は、パネルデータこそ利用できないが、閉山時点の個人的資料と閉山 50 年後の回顧資料の 2 時点データを利用して、当時の生活への影響とその後の人生経験への影響について明らかにする。

分析の際、ライフコースの 4 つの構成要素（時空間上の位置、タイミング、結び合わされる人生、人間行為力）に着目して整理する。本論の対象である尺別炭砒は、前節でみたとおり、道東の山間に位置し、石炭産業の漸次的撤退期、高度成長後期に閉山した（時空間上の位置）。閉山時の中学生は、歴史的状況に対処するうえで不可欠な人生経験を積む前に閉山を経験した。その影響は、同じ中学生でも学年によって異なると考えられる（タイミング）。彼らは、父親の離職と再就職や母親の就労、きょうだいの進路など、重要な他者の人生に左右された（結び合わされる人生<sup>27</sup>）。そして、攪乱したライフコースの軌道を修正するうえで人間行為力<sup>28</sup>が重要な資源となった。本論では、青年中期の目標志向性を捉えるために、人間行為力を計画的能力<sup>29</sup>として観察する<sup>30</sup>。これら時空間上の位置、結び合わされる人生、人間行為力の要素がタイミングという漏斗を通して集約され、ライフコース軌道に差異をもたらす（Elder and Giele eds. 2009=2013: 32）。本論では、中学生が家族を介していかに閉山を経験し、計画的能力をどの程度有していたのかについて、閉山時の個人的資料から捉える。そして、実際に中卒以降の進路でどのように軌道修正を図ったのかについて、回顧資料から明らかにする。

## 2 人間発達の生態学

さらに、炭山コミュニティから異なる環境に移行した中学生を対象とする本論にとって、示唆的なパースペクティブである「人間発達の生態学」（Bronfenbrenner 1979）について簡潔に整理する。このパースペクティブは、ライフコース論と同じく、ダイナミックな世界が人びとをいかに変化させ、人びとがいかに環境を選び構築するのか、という関心を持ち、相互に発展してきた（Elder 1995）。

発達心理学者のブロンフェンブレナーは、生態学的環境を以下の 4 つの水準から説明し

---

<sup>27</sup> ライフコース上の選択や意思決定をする際に、重要な他者の人生上の位置からの影響を受けることをさす（嶋崎 2011: 120）。

<sup>28</sup> 個人や集団が自らの目標にむけて積極的に意思決定を行い、自らの生活を組織化する際に発揮される力、能力のことである（嶋崎 2011: 121）。

<sup>29</sup> 各人の目標や価値観、強さにもっとも適した社会的慣行を選択する能力や才能を示す（Clausen 1991）。

<sup>30</sup> 計画的能力は、本来、追跡パネル調査によって把握できるが（Shanahan and Elder 2002）、本論では閉山直後に書かれた作文に表れた部分での計画的能力を測定する。

ている。第一に、個々の行動場面であるマイクロシステム（家族や学校など、子どもが経験する活動、役割、対人関係のパターン）、第二に、2つ以上の行動場面の相互関係であるメゾシステム（子どもにとっては、家庭と学校との関係など）、第三に、間接的な行動場面であるエクソシステム（子どもにとっては、両親の職場や友人ネットワーク、きょうだいの学級など）、第四に、これらのシステム間にみられる一貫性として存在する文化であるマクロシステム（信念体系やイデオロギーに対応）である（Bronfenbrenner 1979=1996: 24-8）。そして、人間の発達をつぎのように定義している。

人間の発達とは、それを通して成長しつつある人が、生態学的環境についてより拡張した、分化した、そして妥当な考えを獲得していく過程であり、生態学的環境の特質を明らかにしたり、生態学的環境を維持したり、あるいは形態や内容的に同じレベルかさらに複雑なレベルで生態学的環境を再構成するといった活動を動機づけ、可能にする過程である。

（Bronfenbrenner 1979=1996: 307）

彼は『大恐慌の子どもたち』と一連の研究が、これら4つのシステムに関する実証研究であるとして評価している。とくに、「エクソシステムとメゾシステムの結びつきの時間的延長」、すなわち「ある行動場面での出来事が、個人の能力や数十年後の全く違った行動場面での他者との関係に影響を及ぼすこと」、「ある行動場面での経験は、他の行動場面の中に持ち越され、しばしば時間を超えて拡張される」ことを例証したとしている（Bronfenbrenner 1979=1996: 302）。エルダーの研究では、家族と仲間集団が子どもにとっての最も重要な行動場面であり、家から学校へ、学校から上級学校あるいは仕事の世界への移行を通して、それまでの発達の軌道を維持したり、時に強化させるメカニズムに焦点が当てられていた（Bronfenbrenner 1979=1996: 303）。

このように、子どもの主な行動場面間の相互関係や間接的環境で生じる出来事を射程に入れ、中長期的影響を解明する点は、本論において重要な着眼点である。尺別炭鉱中学校の生徒にとって、メゾシステムである家族・学校・地域の相互関係ならびにエクソシステムである炭鉱（父親の職場）の盛衰が、彼らの炭山コミュニティにおける生活にどのような影響をもたらし、その後のほかの行動場面にかかに持ち越され、時間を越えて拡張するのかについて捉える。

分析に際し、炭山コミュニティにおける子どもの実情に即した生態学的環境の図を示す（図2-3）。職縁社会である炭山コミュニティの中心は炭鉱であり、家族や地域は炭鉱の盛衰や労働特性に強く規定されていた。そして、子どもの生活と進路も同様に炭鉱に規定されていた（次章参照）。したがって、子どもを中心とした従来の生態学的環境の図ではなく、炭鉱を中心に、子どもを周辺に据えた図のほうが、炭山コミュニティの実態に即している。この図をもとに、次章で炭山コミュニティにおける子どもたちの生活と進路について検討する。

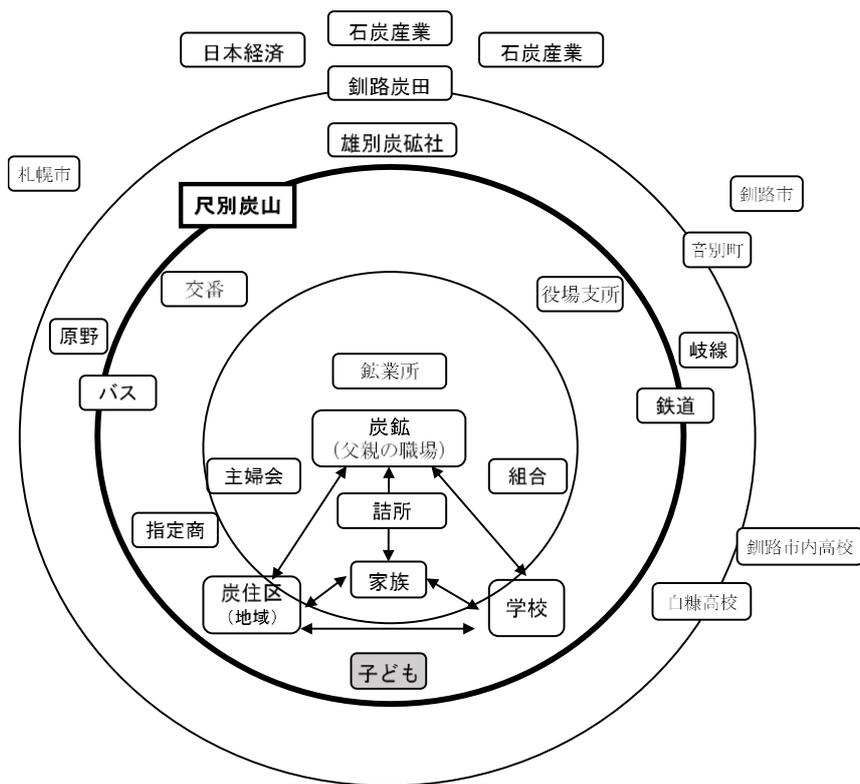


図 2-3 尺別炭山における生態学的環境

出典：Bronfenbrenner（1979=1996）ならびに第3章内容にもとづき作成。

### 3 分析枠組み

本論の対象である閉山時の中学生を A-P-C 空間図に示すと、図 2-4 のようになる。本論では、まず、閉山後の動向を捉える前提として、炭山コミュニティにおける子どもの生活と教育について検討し、職縁社会における子どもの生態学的環境を捉える（図 2-4 の①、次章にて検討）。職縁社会の特徴を有する尺別炭山において、子どもはどのような位置づけにあり、どのような対人関係があったのか（マイクロシステム）。また、彼らを取り巻く家族・学校・地域の相互関係はどのようなものであり（メゾシステム）、間接的環境である炭鉱やその他の各種組織が子どもの生活や進路をどのように規定していたのか（エクソシステム）。さらに、石炭産業や石炭政策、経済状況の影響についても検討する（マクロシステム）。

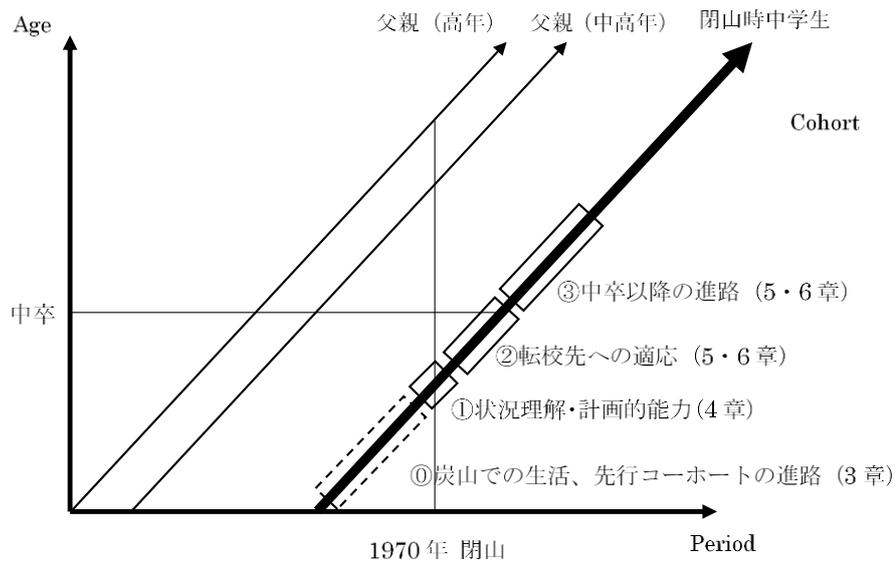


図 2-4 分析枠組み (括弧内は該当の章)

出典：嶋崎 (2011: 119) を参考に改変・作成。

そのうえで、彼らの閉山経験とその後について検討する。彼らが尺別炭砒の閉山と遭遇したのは進級・卒業の直前であり、ライフコースの軌道が攪乱するタイミングであった。閉山時の1・2年生 (転校時2・3年生) は、中学生生活途中での突然の転校を経験し、適応と進路決定などの課題に直面した。さらに、最も衝撃が大きかったのは、閉山時の3年生である。彼らは中学卒業の直前、進路変更ができない段階で閉山を経験した。彼らは父親の再就職活動と家族の状況と照らし合わせながら、進学または就職を決断しなければならず、ライフコース上に大きな痕跡を残した。

閉山後の彼らのライフコースを規定したのは、父親の再就職・地域移動とそれに伴う生態学的環境の変化である。図2-4に示したように、父親が何歳で閉山を経験したのかというタイミングが、再就職先の決定とその後の家族状況を左右した。中学生の父親は、大半が中高年 (30代後半から40代前半) もしくは高年 (40代後半以降) であり、再就職・産業転換するうえで不利であった。加えて、父親の職位や健康状態、家族の状況によって再就職先の地域や産業が決定した。再就職の詳細については、第5章で検討する。

中学生の閉山経験とその後については、①閉山直後の状況理解・計画的能力、②転校先への適応 (以上、短期的影響)、③中卒以降の進路とその後の人生移行 (中長期的影響) の3つの局面を観察する。それぞれの着眼点は以下のとおりである。

①閉山直後の状況理解・計画的能力は、当時の作文をもとに、閉山直後の中学生が家族や学校、地域、さらには産業、社会全般についてどのような認識を持っていたのかについて捉え、彼らの生態学的環境に関する考えを明らかにする。第1章でみた「筑豊の子ども」に関する研究や『大恐慌の子どもたち』では、家族をはじめ周囲の状況に対する子どもの認知が

解明されておらず、さまざまな選択の動機づけが不明である。したがって、本論では当時の個人的資料を用いて、炭山コミュニティから外に出ることに対する不安や対処、目標に関する言及から、彼らの計画的能力を測定する。

②転出・転校先への適応は、炭山コミュニティとは異質な転出・転校先（主に道内外の都市部）にどのように適応し、新たな行動場面に移行したのかについて、当時の手紙や回顧から捉える。閉山時の中学1・2年生と3年生の進学者は、転校先の対人的環境と社会文化的環境にいかに対応したのかについて、3年生のうち就職者は、進路変更に対する意味づけと職業キャリアの形成についてみていく。その際、閉山直後の作文が残されている対象者については、①で測定された状況理解にどのような変化があり、計画的能力が活用されたのかについて検討する。

そして、③中卒以降の進路は、①、②の累積的効果として、中卒・高卒時点の進路を捉える。閉山時の中学1・2年生は、転校後まもなく進路を決定することになり、閉山時の3年生は、中卒後の進路変更を経て、どのようにライフコースの軌道を修正したのかについてみていく。

以上の内容に関する一連の分析を行い、閉山と炭山コミュニティからの他出が中学生にもたらした短期的・中長期的影響を捉える。

### 第3節 調査方法とデータの概要

50年以上前の炭山での生活や閉山経験を詳らにすることは、容易ではない。当時の一次資料は、閉山と地域崩壊の混乱によって散逸し、住民は全国に離散した。さらに、元住民の高齢化も進行している。そこで本研究では、いくつかの調査を併用し、可能な限り当時の実態を再現することを試みた。具体的には、尺別炭砦に暮らした人びとを対象とした量的・質的調査を行い、学校・地域関連の各種資料を収集・分析した。

調査主体は、産炭地研究会（JAFCOF）尺別研究チーム（嶋崎尚子（代表）、新藤慶、木村至聖、畑山直子、笠原良太）であり、筆者はこれらの調査の準備・実査・集計など全般を担当した。これらの調査には、本論の主な対象である閉山時の中学生以外（先行コーホート）も多く含まれており、尺別炭山での生活や中卒後の進路の傾向を知るうえで重要な調査である。以下では共同研究で実施した各調査の方法とデータの概要を、調査経緯とともに記す。

#### 1 閉山時中学生の作文・手紙資料の収集

筆者らが尺別炭砦に関する研究をスタートしたきっかけは、2014年8月1日に行われた元尺別炭砦中学校教頭の松実寛氏による講演「尺別炭砦の閉山と子どもたち」<sup>31</sup>を拝聴した

<sup>31</sup> 早稲田大学文学社会学コース嶋崎ゼミ「“生きている炭砦”と釧路研究」フィールドワークの一環として行われた。詳細は嶋崎・笠原（2016）を参照。釧路市立博物館の石川孝織学芸員の紹介による。

ことであった。「閉山＝地域崩壊」という衝撃的な出来事が多感な中学生たちにもたらした影響について考えさせられる機会となった。この講演の際、筆者らは、閉山直後に中学生が執筆した作文と転出後の手紙を松実氏から拝借した。資料の概要は以下の通りである。

#### ① 閉山直後の作文

閉山（1970年2月27日）の直後、卒業式（3月13日）の直前に書かれた作文187名分が保存されていた。学年別にみると、3年生（尺炭中23期生）103名（男子57名、女子46名）、2年生（24期生）69名（男子33名、女子36名）、1年生（25期生）15名（男子6名、女子9名）となっている。これらの作文は、松実氏が閉山直後の生徒たちの心境を記録するために、全校生徒に書かせた作文であり、閉山から40年以上、個人で保管していた資料である。閉山直後の状況理解と計画的能力を把握するうえで貴重な資料である。

#### ② 閉校直前の作文

尺別炭砦中学校の閉校（1970年7月20日）の約2週間前に在校生が書いた作文8名分が保存されていた。いずれも閉山時2年生（24期生）が執筆した作文である（男子4名、女子4名）。このうち、男子3名、女子3名は、上記の閉山直後（1970年3月）の作文も執筆し、原物が保存されていた。この閉校直前の作文も、閉山直後と同様、松実氏の発案で生徒が執筆した作文である。閉校まで残留した生徒の状況理解と計画的能力を捉えるうえで、重要な資料である。

#### ③ 転出先からの手紙

1970年4月以降、閉山時の2年生33名（24期生、男子7名、女子26名）が転出先から松実教頭宛に送った手紙48通が保存されていた。これらの手紙は、松実氏が転校前の生徒たちに「余裕ができたなら手紙を送るように」と、封筒と原稿用紙を持たせ、返ってきた手紙である（嶋崎・笠原 2016: 25）。なかには同一生徒の手紙が複数保管されており、最も多いもので5通あった。なお、作文・手紙の双方が保管されている生徒は25名であり、転出前後の心境の変化を読み取ることができる。

以上の作文・手紙資料は、原資料（原稿用紙、便箋など）のまま保存されていた。松実氏から研究目的での利用許諾を得てPDF形式にスキャンし、テキストデータとして入力した（新藤 2016: 1-3）。松実氏はこれらの作文と手紙を長年にわたり保管してきたが、残念ながら、全編が保管されていたわけではなく、閉山時1・2年生の作文を中心に紛失・廃棄されている。これは、松実氏の転居等に伴って生じたものと考えられる。可能な限り補完できるように、本論では、松実氏所蔵資料に加え、尺別炭砦中学校閉校記念誌『地底の灯』（1970年）に掲載されている作文・手紙で、松実氏提供資料と重複していない分（閉校1か月前の作文5名分（閉山時1年生2名、2年生3名）、閉校直前の作文1名分（閉山時2年生）、転出先からの手紙1名分（閉山時1年生））を分析対象に加えた（表2-2）。

表 2-2 閉山後の作文・手紙資料の収集率

閉山時学年		S44年度 在籍数	閉山直後の作文	転校先からの手紙	閉校直前の作文
1年生（25期生）	計	102	14.7	1.0	2.9
	男	60	10.0	0.0	1.7
	女	42	21.4	2.4	4.8
2年生（24期生）	計	118	56.8	27.1	6.8
	男	56	58.9	14.3	7.1
	女	62	54.8	38.7	6.5
3年生（23期生）	計	122	84.4	-	-
	男	71	80.3	-	-
	女	51	90.2	-	-

出典：ライフコース調査より作成。

## 2 ライフコース調査

つぎに、尺別炭山での生活と中学生の進路、地域移動・職業経歴などを把握するため、尺別炭砦中学校同窓生を含む「尺別炭砦に暮らした人びと」を対象とするライフコース調査を実施した（2016年以降継続）。まず、東京尺別会ならびに尺別炭砦中学校各同期会の協力を得て質問紙調査を行い、回答者のうち協力者（一部未回答者を含む）に対して生活史インタビュー調査を実施した<sup>32</sup>。各調査の概要は、以下の通りである。

### ① 質問紙調査：「尺別炭砦で暮らした人びと調査」<sup>33</sup>

#### i) 調査対象

本調査の母集団は、尺別炭砦（尺別原野、岐線を含む）で暮らした人びとである。具体的には、①尺別炭砦で働いた人たちと、②尺別炭砦中学校に在籍した人たちである。母集団名簿として、『尺別炭砦労働組合解散記念誌 道標 山峡の灯』（1970年10月発行）、『尺別炭砦中学校閉校30周年記念誌 あこがれ』（2000年7月発行）ならびに尺別炭砦中学校各同期会作成名簿を利用した。

#### ii) 調査方法

原則として集合配布・郵送回収とし、ケースによって直接配布・直接回収で実施した。

#### iii) 調査票

無記名・自記式調査票を用いた。対象者の区分（「尺別炭砦閉山時に、世帯内でどのような位置にあったか」）に基づいて、3種の調査票（世帯主票、妻票、子ども・きょうだい票）を用意した。なお、ここでいう「世帯」とは、尺別在住時に対象者が属していた世帯を指す。

「子・きょうだい」調査票の場合には、父親が世帯主の場合と、きょうだいが世帯主の場合

<sup>32</sup> 実査前の2015年7月、9月、2016年5月に東京尺別会会長・副会長と面談し、質問項目の検討をおこなった。

<sup>33</sup> 笠原ほか（2019）参照。

を想定している。

主な調査項目は表2-3のとおりである。このうち、「尺別での経歴」は、調査票ごとに異なる対象を指定して尋ねている。すなわち、世帯主の場合には、「本人」の尺別炭砒での経歴（入社年、地位、仕事内容など）を尋ねている。他方、妻の場合には「夫」について、子・きょうだいの場合には、「父親もしくは尺別で働いていたきょうだい」について尋ねている。

なお、実査前に東京尺別会幹事にプレ調査を実施し、最終的な調整をおこなった。

表2-3 「尺別炭砒で暮らした人びと調査」質問項目

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1. 尺別での経歴：全員（質問内容は調査種別によって異なる）</li><li>2. 家族経歴：全員（質問内容は調査種別によって異なる）</li><li>3. 閉山後の地域移動経歴：全員（質問内容は調査種別によって異なる）</li><li>4. 閉山後の職業経歴：全員（質問内容は調査種別によって異なる）</li><li>5. 尺別の記憶：全員（共通）</li><li>6. 石炭産業・閉山についての思い：全員（共通）</li><li>7. 尺別炭砒中学校の思い出：尺別炭砒中学校在籍者・卒業生</li><li>8. 基本属性：全員（質問内容は調査種別によって異なる）</li></ol> |
|---|

出典：笠原ほか（2019：14）より転載（一部修正）

#### iv) 実査

調査票の配布は、以下の通り実施した（表2-4）。

表2-4 「尺別炭砒で暮らした人びと調査」調査票配布

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>・東京尺別会<br/>第17回（2016年5月21日）会場<br/>第19回（2018年5月19日）会場</li><li>・座談会<br/>「尺別炭砒中学校23・24・25期生の座談会」（2017年8月19日、釧路市立博物館）<br/>「尺別炭砒中学校23・24・25期生の座談会」（2017年9月16日、早稲田大学）</li><li>・尺別炭砒中学校同期会<br/>6期（2018年）、14期（2016年）、15期（2016年）、16期（2018年）、17期（2018年）、<br/>18期（2018年）、19期（2018年）、20期（2017年）、21期（2017年）、22期（2018年）</li><li>・沼隈尺別会（2018年3月24日、福山市南公民館）</li></ul> |
|--|

出典：笠原ほか（2019：14）より転載（一部修正）

#### v) 回収

総配布数 984 票のうち宛先不明と重複配布（東京尺別会と同期会で重複配布）を除いた有効配布数は 864 票であった。回収票は全体で 432 票、うち白票等を除く有効回収票は 428 票であり、最終的な有効回収率は 49.5%であった。

このうち、本論の主な対象である閉山時中学生（23～25 期）に限定してみると、調査票（「子・きょうだい票」）の有効配布数は 66 票、有効回収票は 49 票、有効回収率は 74.2% と他の学年より高かった。彼らの父親の出生年・閉山時年齢や定位家族キャリア、父親の炭鉱での職位・職種、再就職キャリア、本人の最終学歴と初職等は、この質問紙調査で把握している。

### ② 生活史インタビュー調査

#### i) 調査対象

上記の「尺別炭砦に暮らした人びと調査」回答者のうち、聴き取り調査への協力依頼（配布した調査票セットに返信用はがきを同封）に応諾した 89 名から各学年数名ずつを選定し、46 名に実施した。また、スノウボウル方式で、質問紙調査無回答者ならびに閉山時中学 2 年生以下（24 期生以降）をはじめとする母集団名簿非記載者で協力意思のある対象者 22 名を加えて実施した。このうち、閉山時中学生（23～25 期生）は 29 名であり、作文・手紙が保存されていた対象者は 16 名だった。

#### ii) 調査方法

インタビュー調査の形式は、個別形式と座談会形式に分かれる。前者は、対象者 1 名ないし 2 名（夫婦、親子ペアなど）の生活史を、基本的には調査者 2 名以上の体制でおこなった。後者は、同学年・同地域居住者が複数参加する場合に採用した。座談会形式は、個別形式に比べて参加者がプライベートな内容を話しにくいといった制約がある一方、他の参加者の話から過去の出来事を想起しやすい等の利点がある。とくに、50 年以上前の学校生活や炭山での思い出などを想起するうえで有効であると考え、本研究では合計 6 回の座談会を開催した。このうち、閉山時の中学生を中心とした座談会を 2017 年に釧路ならびに東京で実施した（前掲表 2-5 参照）。

いずれの形式も半構造化インタビューをおこなった。主な調査項目は、表 2-5 の通りである。実査では、対象者の語りに合わせて適宜質問を入れるなど、柔軟に対応した。なお、座談会形式では、座談会実施前にフェイスシートをもとに個別のインタビューを行い、対象者の基本情報を把握した。また、個別・座談会形式ともに、当時の出来事の想起を促すために、尺別炭砦や尺炭小・中学校に関する資料（写真、新聞記事など）を適宜提示した。閉山時中学生で作文・手紙が保存されていた対象者には、個別に原資料のコピーを手渡し、当時の心境を回顧してもらった。座談会の場合、本人の同意を得られた場合、全体に共有して参加者の想起を促した。

インタビュー実施前に、対象者に対して調査目的、プライバシー・個人情報保護の遵守、データの管理方法について説明し、同意を得たうえで実施した。また、インタビューの内容は、対象者の同意を得て IC レコーダーに録音した。インタビュー時間は、個別形式で約 2 時間、座談会形式で約 3 時間であった。

表 2-5 生活史インタビュー調査の主な質問項目

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1. 閉山の予感・気配</li><li>2. 閉山前後の家族・学校・地域のようす</li><li>3. 閉山当時の作文・手紙に対する感想</li><li>4. 離散後の同期生との関係</li><li>5. 移動後の学校生活</li><li>6. 自身にとっての炭鉱閉山の経験</li><li>7. 「尺別の絆」について</li></ol> |
|---|

出典：新藤ほか（2019）より作成

本論の主な分析対象者となるライフコース調査回答者の一覧は表 2-6 および表 2-7 のとおりである。本論では、閉山経験のタイミングに着目するため、閉山時の中学 1・2 年生（表 2-6）と 3 年生（表 2-7）に分けている。

表2-6 ライフコース調査（質問紙調査、生活史インタビュー調査）回答者一覧（閉山時中学1・2年生）

父再就職先	父再就職形態 (採用者数)	本人転校時学年 (閉山時学年)	ID	本人 性別	父再就職 先地域	父再就職時 期	閉山時 父年齢	閉山前父職	閉山時世帯構成	きょうだい数・ 本人出生順位	父収入変化	本人中卒後進路	作文 有	手紙 有	生活 史有
道外 他産業	集団 (10名以上)	中2(中1)	JH-2A	男	神奈川	1970年3月	40	鉱員(坑内助手)	父・母・妹	2人・長男	不明	高校(神奈川)→大学→就職(サービス業、東京)			
			JH-2B	男	神奈川	1970年4月	39	鉱員(坑外助手)	父・母・弟	2人・長男	非常に増えた	高校(神奈川)→就職(金融業、神奈川)			
			JH-2C	男	神奈川	1970年4月	43	鉱員(坑外)	父・母	2人・長男	不明	高校(神奈川)→大学→就職(サービス業、神奈川)			
			JH-2D	男	神奈川	1970年6月	40	鉱員(坑内間接)	父・母・兄・姉	3人・次男	少し増えた	高校(神奈川)→大学→就職(製造業、神奈川)			
			JH-2E	男	広島	1970年4月	不明	関連	父・母・兄・姉	5人・三男	不明	高校(広島)→就職(サービス業、広島)			
			JH-2a	女	神奈川	1970年4月	43	鉱員(坑内直接)	父・母	2人・長女	不明	高校(神奈川)→就職(製造業、神奈川)			
	少数 (2-9名)	中2(中1)	JH-3A	男	千葉	1970年4月	42	鉱員(坑内直接)	父・母・弟	2人・長男	非常に増えた	高校(千葉)→大学→就職(養護学校教諭、千葉)			
			JH-3a	女	千葉	1970年5月	41	鉱員(坑内直接)	父・母・兄・姉(高1)・祖父・祖母	3人・次女	不明	高校(千葉)→専門学校→就職(販売・セールス業、千葉)		○	○
			JH-3b	女	千葉	1970年4月	42	職員(登用)	父・母・姉・妹	3人・次女	非常に増えた	高校(千葉)→就職(金融業、東京)			
		中3(中2)	JH-2F	男	静岡	1970年4月	49	鉱員(坑内直接)	父・母・兄・兄(高1)	4人・三男	不明	高校(静岡)→就職(情報・通信業、東京)			
			JH-3B	男	東京	1970年3月	43	鉱員(坑外助手)	父・母・祖母	2人・長男	非常に増えた	高校(東京)→大学→就職(卸売・小売業、神奈川)			○
			JH-3C	男	静岡	1970年4月	39	鉱員(兄、坑内直接)	兄・義姉・姪・姪	11人・六男	少し減った	高校(静岡)→就職(製造業、静岡)		○	○
	単独 (1名)	中2(中1)	JH-3c	女	茨城	1970年5月	40	職員(登用)	父・母・姉(高2)・祖母	2人・次女	少し減った	高校(埼玉)→短大→就職(製造業、東京)			
			JH-3d	女	神奈川	1970年5月	50	鉱員(坑内直接)	父・母・妹・弟・妹	6人・次女	非常に増えた	高校(神奈川)→就職(金融業、東京)			○
			JH-2E	男	千葉	1970年5月	48	鉱員(坑内直接)	父・母・兄・祖母	2人・次男	少し減った	高校(東京)→大学(東京)→就職(金融業、千葉)			
			JH-2F	男	東京	1970年5月	49	職員(登用)	父・母・兄(高1)・姉(高3)	4人・次男	少し減った	高校(東京)→大学(東京)→就職(販売・セールス業、東京)			
道内 他産業	少数 (2-9名)	中3(中2)	JH-3D	男	後志	1970年5月	46	職員(本社)	父・母	2人・次男	不明	高校(小樽)→大学(札幌)→就職(建築設計、札幌)		○	○
			JH-3e	女	胆振	1970年3月	38	鉱員(坑外助手)	父・母・弟	2人・長女	非常に減った	高校(静岡)→短大→就職(幼稚園教諭、静岡)			○
	単独 (1名)	中2(中1)	JH-2d	女	釧路	1970年5月	43	鉱員(坑外助手)	父・母・兄(中3)・妹(小5)・祖母	3人・長女	不明	高校(釧路)→就職(釧路)			○
			JH-3E	男	釧路	1971年2月	41	鉱員(坑内間接)	父・母・姉・姉	7人・長男	少し増えた	高校(釧路)→就職(製造業、神奈川)			
	(原野・岐線)	中3(中2)	JH-3f	女	音別	1970年4月	45	鉱員(坑外)・原野	父・母	?	不明	就職(製造業、滋賀)・定時制高校→転職(釧路)		○	○
			JH-3g	女	空知	1970年3月	44	鉱員(坑外)	父・母・弟・妹	3人・長女	不明	専門学校→就職(看護職、帯広)			
未就職	中3(中2)	JH-3F	男	十勝	1970年5月	49	鉱員(坑内直接・休職)	父・母・祖父	養子	-	-	高校(帯広)→就職(建築設計、札幌)		○	○
		JH-3h	女	音別	1970年7月	40	鉱員(坑内間接・休職)	父・母・姉(18歳)・兄(高1)	3人・次女	-	-	高校(釧路)→専門学校→就職(保育士、十勝)		○	○

出典：ライフコース調査より作成。

表2-7 ライフコース調査（質問紙調査、生活史インタビュー調査）回答者一覧（閉山時中学3年生、高校1年生）

父再就職先	父再就職形態 (採用者数)	本人転校時学年 (閉山時学年)	ID	本人 性別	父再就職 先地域	本人 転出先	本人中卒 時進路	父再就職時 期	閉山時 父年齢	閉山前父職	閉山時世帯構成	きょうだい数・ 本人出生順位	父収入変化	本人中卒後進路	作文 有	生活 史有
道外 他産業	集団 (10名以上)	高1(中3)	H-1A	男	神奈川	釧路	進学	1970年4月	41	鉱員(坑内助手)	父・母	1人・長男	変化なし	高専(釧路)→就職(建設業、東京)	○	
			H-1B	男	神奈川	札幌	進学	1971年4月	51	関連	父・母・姉・妹・祖父・祖母	5人・次男	不明	高校(札幌)→大学→就職(販売・セールス、神奈川)	○	
			H-1C	男	千葉	千葉	就職	1970年5月	40	鉱員(坑外助手)	父・母・妹・妹・祖母	3人・長男	不明	就職(自動車整備、千葉)		
			H-1D	男	静岡	岐阜	就職	1970年7月	47	関連	父	4人・次男	不明	就職(繊維業、岐阜)・定時制高校→転職(製造業、静岡)	○	○
			H-1a	女	広島	広島	進学	1970年4月	45	職員(登用)	父・母	3人・長女	不明	高校(広島)→専門学校→就職(製造業、広島)	○	
	少数 (2-9名)	高1(中3)	H-1E	男	千葉	千葉	進学	1970年4月	51	鉱員(坑内直接)	父・母・姉・弟	3人・長男	不明	高校(千葉)→大学→就職(千葉)	○	
			H-1b	女	三重	三重	進学	1970年7月	40	職員(登用)	父・母・弟・妹・祖母	3人・長女	非常に減った	高校(三重)→就職(販売・セールス業、神奈川)	○	
			H-1F	男	宮城	宮城	進学	1970年5月	42	職員(本社)	父・母・妹(中2)	2人・長男	不明	高校(宮城)→専門学校?	○	
	単独 (1名)	高2(高1)	H-2A	男	千葉	千葉	進学	1970年11月	42	組合専従	父・母	2人・次男	不明	高校(釧路)→就職(製造業、東京)		○
			H-1c	女	千葉	千葉	進学	1970年5月	46	職員(本社)	父・母	1人・長女	少し増えた	高校(千葉)→短大→就職(金融業、東京)	○	
		高1(中3)	H-1d	女	大阪	大阪	就職	1970年4月	38	鉱員(坑内助手)	父・母	1人・長女	不明	就職(大阪)	○	
	不明 (閉山前再就職)	高1(中3)	H-1e	女	富山	富山	未定	1970年3月	47	鉱員(坑内直接)	父・母	3人・次女	不明	未定(富山)→就職(S46年、サービス業、神奈川県)		
			H-1G	男	神奈川	岐阜	就職	1970年5月	41	関連	父・母・姉	2人・長男	不明	就職(繊維業、岐阜)・定時制高校→転職(製造業、神奈川)	○	○
			H-1H	男	神奈川	神奈川	進学	1968年5月	50	鉱員	父・母・兄	4人・次男	少し増えた	高校(神奈川)→就職(製造業、神奈川)		○
			H-1I	男	東京	東京	進学	1969年8月	45	鉱員	父・母・弟・妹・祖父	3人・長男	変化なし	高校(東京)→大学(東京)→就職(金融・サービス業、東京)		○
道内 他産業	少数 (2-9名)	高1(中3)	H-1J	男	釧路	釧路	進学	1970年4月	45	職員(登用)	父・母・姉(高2)	3人・長男	不明	高校(釧路)→就職(建設業、釧路)	○	○
			H-1f	女	釧路	釧路	進学	1970年3月	42	鉱員(坑内助手)	父・母・兄(19歳)・兄(高2)	3人・長女	不明	高校(釧路)→就職(釧路)?	○	○
	単独(1名)	高1(中3)	H-1K	男	石狩	白糠	進学	1970年7月	40	鉱員(坑内直接)	父・母・姉・姉・兄	5人・三男	不明	高校(白糠)→就職(サービス業、愛知)	○	
			H-1L	男	釧路	釧路	進学	1970年3月	43	鉱員(坑外助手)	父・母・妹(中1)・妹(小5)・祖母	3人・長男	不明	高校(釧路)→短大(札幌)→就職(卸売・小売業、埼玉)	○	
	(原野・岐線)	高1(中3)	H-1M	男	原野	原野	進学	1970年4月	53	鉱員(坑外)・原野	父・母・兄(23歳)・妹(中1)・妹・祖母	4人・長男	少し減った	高校(帯広)→就職(建設業、帯広)	○	○
			H-1N	男	釧路	釧路	進学	1971年7月	51	国鉄	父・母・兄・妹	4人・次男	-	高校(釧路)→就職(郵便局、釧路)	○	○
			H-1g	女	原野	原野	進学	1974年4月	42	原野	父・母	2人・長女	-	専門学校(釧路)→就職(販売・セールス業、釧路)	○	○
			H-1h	女	原野	原野	進学	1973年4月	42	原野	父・母・兄	2人・長女	-	高校(釧路)→短大(東京)→就職(製紙業・事務、東京)	○	○
	(教員)	高1(中3)	H-1P	男	釧路	釧路	進学	1970年4月	?	教員	父・母・祖父	3人・長男	-	高専(釧路)→就職(電機)	○	○
			H-1i	女	釧路	釧路	進学	1969年3月	41	教員	父・母・弟	2人・長女	-	高専(釧路)→結婚して退学→就職(事務、苫小牧)		○
	不明 (閉山前再就職)	高1(中3)	H-1h	女	釧路	釧路	進学	1970年5月	43	不明	父・母・妹	2人・長女	不明	高校(釧路)→就職(事務作業、札幌)	○	
			H-1j	女	音別	音別	進学	1970年4月	46	関連	父・母・弟	5人・長女	非常に減った	高校(釧路)→専門学校?→就職(公務員、釧路)	○	○
			H-1k	女	音別	釧路	就職	1970年7月	40	鉱員(坑外助手)・町議	父・母・兄・弟・弟	7人・四女	不明	就職(釧路)	○	
	道内他炭鉱	高1(中3)	H-1Q	男	釧路	釧路	進学	1969年3月	42	職員(本社)	父・母・妹	3人・長男	少し増えた	高校(釧路)→大学→就職(製薬・販売業、千葉)		○
H-1R			男	空知	白糠	進学	1970年7月	44	鉱員(坑内直接)	父・母・弟・妹	5人・長男	不明	高校(白糠)→就職(愛知)	○		
	高2(高1)	H-2B	男	羽幌	羽幌	進学	1970年4月	23	鉱員(兄、坑外)	父・母・兄・妹	6人・三男	変化なし	高校(白糠→羽幌→赤平→夕張)→就職(製造業、千葉)		○	

出典：ライフコース調査より作成

### 3 地域・学校資料の収集と元教員インタビュー

先述した調査と並行して、尺別炭山の地域史ならびに学校史を把握するため、地域・学校資料の収集と尺炭小・中学校で教鞭を執った元教員へのインタビュー調査を実施した。資料収集は、2014年から2019年にかけて、釧路市中央図書館、釧路市音別町ふれあい図書館、釧路市立博物館、古潭・雄別の歴史資料室（布伏内コミュニティセンター）、北海道立図書館、北海道教育研究所などで行い、同時に元教員や同窓生が個人的に所蔵している資料の収集・閲覧もおこなった。

収集した資料のうち、北海道立白糠高校同窓会記念誌（白糠町、1969年・1979年）、音別高校同窓会記念誌（音別町尺別炭山、1988年）ならびに尺別炭鉱労働組合解散記念誌名簿は、尺別炭砦中学校卒業後の進路を把握する補完資料として利用した（第3章参照）。また、元教員へのインタビュー調査は、前述した同窓生に対するインタビュー調査と同様の方法（個別形式）で実施した。調査項目は、表2-8の通りである。

表2-8 元教員インタビュー調査の主な質問項目

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1. プロフィール（出生年・出生地・最終学歴・教職キャリア）</li><li>2. 教員から見た炭山と学校</li><li>3. 尺炭小・中学校での教育実践</li><li>4. 尺別炭砦閉山時の対応（該当者のみ）</li><li>5. 離山後の職業キャリア</li><li>6. 尺炭小・中学校の同窓会</li></ol> |
|--|

出典：笠原（2018a）より作成

## 第4節 分析方法

以上の調査データをもとに、中学生の①閉山直後の状況理解、②転出先への適応、③中卒以降の進路までの過程を明らかにする。そのために、本論では作文分析と生活史分析を行う。以下では、主な分析資料である作文の資料的価値と制約を確認し、追跡調査の結果と結び付けて分析する意義と課題を示す。

### 1 作文分析の意義と課題

まず、作文資料を分析する意義と課題を確認する。これまで子どもたちの作文は、主に教育学や教育心理学の領域で分析され、子どもの自己認識や他者認識<sup>34</sup>、災害等の歴史的出来

<sup>34</sup> 自己認識の発達に焦点を当てた守屋ほか（1972）は、質問紙法の包括性と回顧的制約を指摘し、作文分析の有用性を主張・実践した。対象は小学生11名と少数であったが、同一児童を1年生から5年生にかけて追跡的に分析し、自己認識のプロセス（他者批判から自己評価・批判、他者評価、そして、他者と自己の認識を過去から現在へ、個人から集団へと広げること）を解明

事を経験した子どもたちの心理的变化<sup>35</sup>を把握するうえで、有用な資料として位置づけられている。一方、社会学の領域では、作文資料の制約、とりわけ作文の内容が対読者（教師や父母など）意識によって前向き・肯定的になるという性質から、主な分析資料になりにくかった。しかし近年、その資料的価値が見直され、教育社会学をはじめとする領域で作文分析に基づいた研究が着手されている。

教育社会学者の元森絵里子（2016）は、1950年代後半から70年代の生徒会誌やコンクールの作文を時系列に分析し、子どもたちが直面する「貧困」の語られ方を明らかにしている。元森は作文を分析する意義として、子どもたちが直面する問題として何が語られているか、「期待される語り口——自分の状況の何を問題とみて、どのようなレトリックでそれを肯定的に語り替えるか——」（元森 2016: 152）を把握できる点をあげている。そして、次第に作文のなかで「貧困」という「現実」が語られなくなり、「『理想』を実現する場としての学校、子ども・若者時代という公式の語りが好まれていく過程」（元森 2016: 157）を明らかにしている。このように、作文をはじめとする文書資料は、執筆者の意味付けを理解するとともに、その時代の知識や規範を明らかにできる資料である（朴 2017: 110）。

ライフコース研究においても作文は有用な資料である。ライフコース研究においては、回顧法の制約（観測時点効果）を避けるために、逐次的なパネルデータの収集・分析が望まれており、前述した『大恐慌の子どもたち』（Elder 1974=1986）では、人間発達研究所のオークランド成長研究データを用いて、子どもたちの当時の生活とその後の人生経験を考察している。

ただし、成長過程の逐次的把握は難しく、回顧的データに基づく研究も多い。ハレーブンの『家族時間と産業時間』（Hareven 1982=2001）では、企業記録のほかに面接調査による口述生活史を用いている。ハレーブンは、「面接から得られた生活史によって、記録資料だけでは容易にしえない、人間的な生々しい体験、人生についての意味付け、歴史的条件に接近でき」とし、生活史の主観性がむしろ「当事者の意味付けについて知るための資料として用いられるならば」、「かえって強みとなる」と述べている（Hareven 1982= 2001: xxv）。

また、国内のライフコース研究では、森岡（1993）が「決死の世代」の遺書を分析し、青年たちの生と死の間の意味付けや葛藤を明らかにしている。森岡は、遺書を「一種の個人的記録」とし、信頼性や代表性において弱みがあるものの「記者にとっての意味のある社会関係、つまり彼の行動や価値観を左右する社会関係を露呈させ、彼を一定の行動に駆り立てる動機、内的な闘いなどをあらわにする」点が強みであるとしている（森岡 1993: 19）。子どもたちの作文も一種の個人的資料であり、意味付けや内的葛藤を理解できるという点で、分

---

した。この知見に依拠しつつ、山本・小松（2016）は、小学4年生の日記を分析し、対読者（とくに担任の教員）意識や子どもたちが持つ日記執筆に対する評価が、日記の表記に影響すると指摘した。

<sup>35</sup> 小林朋子・櫻田智子（2012）は、突発的な歴史的出来事といえる災害（ここでは地震）を経験した中学生の作文を分析し、被災直後の「不安」や「願い」、その後の「自身の成長」、これからの生活への抱負等「未来の自分」に考えが及ぶといった心理的变化を明らかにしている。

析可能な記述的生活史といえる。

このように、子どもたちの作文は、ライフコース研究における回顧法の補足資料として利用・分析が可能である。上記の先行研究からわかるように、文集などのまとまった量の作文を分析対象とし、全体的な傾向を示しつつ、典型的な作文の具体的な検討から、子どもたちの意味付けや内的葛藤を明らかにする方法が有効である。

一方、子どもたちの作文を分析するうえで、いくつかの制約があることも指摘しておかなければならない。第一に、前述のとおり、対読者意識により作文の結論部分が肯定的な意思表示になりやすい点である。とくに、作文コンクール等に選出された「優秀作品」は、全体的に前向きな結論になりやすい。したがって、分析の際は、結論だけでなく、全体の文脈から作者が「何を問題とみて、どのようなレトリックでそれを肯定的に語り替えるか」をみる必要がある。また、市内文集等の「優秀作品」だけでなく、全校生徒分の作文から全体の傾向を捉えることが望ましい。第二に、作文内容に影響をおよぼす諸要因、たとえば、作文執筆の経緯や目的、それまでの作文指導や学校文化等が、文集のみでは把握しづらい点である。この点は、元教員に対するインタビューや学校資料・教育実践集などから確認・補完し、制約を最小限に抑えることができる。

## 2 尺別炭碓中学校生徒の作文の特徴

本論で分析する尺別炭碓中学校生徒の作文は、①全校生徒が執筆した学校文集であり、②当時の教員に対するインタビューと学校資料の収集・分析から、作文執筆の背景や同校の教育コンテクストを把握しているという2点において、分析上、優れたデータといえる。①については、前述のとおり、一部の作文が紛失・廃棄されている点が制約となるが、これは松実氏の転居等によって散逸したものであり、意図的に選別して廃棄・保管されていたわけではない（新藤 2016: 3）。

また、②については、この作文が生徒たちの心境を整理し記録するために書かれたものであり、作文コンクール用の課題でも、国語科等の成績に反映される課題でもなかった。その点において、当時の生徒たちの率直な考えや状況理解が記されていると考えられる。他方、教育のコンテクストについては、尺炭小・中学校の教師たちが作文教育に力を入れていたことを確認しており（笠原 2018a）、生徒たちが作文を書くことに一定程度慣れていたことが考えられる。さらに、両校では「集団主義的」な教育実践が行われ、尺炭中でも「平和を守り真実を貫く教育の確立」を教育目標に掲げていた（新藤 2016: 8）。したがって、生徒たちの作文内容に、社会に対する問題意識が反映されている可能性がある。本論では、以上の点を踏まえながら、作文全体を通読し、閉山直後の状況理解と将来に対する展望について、学年および性別の特徴を把握する（分類方法などの詳細は第4章を参照）。

### 3 追跡調査データと結び付けた分析

本研究のオリジナリティは、閉山直後の作文を執筆した中学生に対し、閉山から約 50 年後に追跡調査を実施し、作文分析の結果とあわせて分析することである。これにより、閉山直後の状況理解や計画的能力が、転校後、どのように変化または維持されて適応したのかを捉える。

この方法は、ライフコースの質的研究において有意義である。回顧的なインタビュー調査では、調査時点の対象者の状況によって事実の書き換えや脚色、忘却などが生じる。まして、50 年以上前の経験を正確に想起することは容易ではない。そこで本調査では、作文提供者（元教頭）と執筆者の同意を得たうえで、インタビュー対象者（座談会では同席者）が当時を想起する手がかりとして作文を提示した。実際、作文を閲覧した対象者たちは、忘却していた事実や関連する出来事を想起していた（笠原 2017: 118）。これは、作文分析が回顧法による生活史の制約、すなわち観測時点効果を抑えることができることの証左であろう。

また、この調査は作文の「行間」を読むうえでも役立つ方法である。インタビュー対象者のなかには、作文に表れていない心境を想起し、語る者もいた。この方法によって、観測時点効果の抑制に加え、作文内容の確認、強がりや鼓舞といった前向きな意思表示の背景を知ることができる。

したがって本論では、作文が保存されていた生活史インタビュー調査回答者を中心に分析する。ただし、両方が揃っているケースは決して多くないため、質問紙調査のみの回答者も補完的に分析する。その際、学年・性別だけでなく、父親の再就職類型（比較的条件のよい道外他産業・集団就職から道外他産業・少数就職、道内他産業、炭鉱復帰、未就職）ごとに分析し、父親の再就職を介した閉山の中期的影響を捉える（再就職類型は第 5 章 1 節を参照）。

## 第 2 部 分析

### 第3章 職縁社会における子どもの生活・教育と進路——1950～60年代の尺別炭山

本章は、1950年代から60年代の尺別炭山における子どもの生活、教育、進路を捉え、炭山コミュニティにおける彼らの生態学的環境を描く。前章でみたように、尺別炭山は、職縁社会の原理が炭山の地理・空間と一致した共同体（コミュニティ）であり、労働者家族の生活は、石炭の生産体制下に組み込まれていた。では、炭鉱と直接関わりを持たない子どもは、炭鉱によっていかに規定されていたのだろうか。本章では、ライフコース調査の結果や当時の学校資料、元教員へのインタビューからこの点を明らかにし、閉山時中学生の炭山における生活と、彼らが中学卒業後に辿る予定だった進路を明らかにする。

#### 第1節 職縁社会における子どもの生活

炭鉱を中心とした炭山コミュニティにおいて、炭鉱労働者の子どもは、どのように生活していたのか。本節では、彼らの個々の行動場面（マイクロシステム）に着目して整理する。

##### 1 炭鉱会社の管理下にあった子どもの生活

炭山コミュニティの特徴として、まず指摘しなければならない点は、炭鉱労働者の子どもが次世代労働力とみなされていた点である。第1章で職縁社会の特徴として職業の世襲制や従業員子弟の優先採用を挙げたように、炭鉱ではその労働特性から、職場の上下関係や労働者の父子世代間の関係、労働者同士のつながりが重視されていた。新規労働力として顔の知れた従業員の子どもが重宝されていたのである。とくに、炭鉱会社は次世代労働力養成のため、学校を設立して従業員の子どもの教育に力を入れた。尺別では、炭鉱開基の直後に会社（北日本鉱業株式会社）が簡易の校舎を設けて初等教育を開始した。公立に移管して尺別炭砒尋常小学校（尺炭小）となったのちも、会社（雄別炭砒社）は学校教育の定着と発展のために支援をおこなった（笠原 2018a: 3-6）。戦後、新制の公立中学校（尺別炭砒中学校）が設置された際も、会社は多大な支援を行い、鉱業所長をはじめ幹部職員が継続的に後援活動をおこなった<sup>36</sup>（笠原 2018a: 16）。

さらに、会社は中卒後の従業員子弟・子女を対象とした養成所を設けた。1950（昭和25）年に中卒後の従業員子弟を対象とした中堅鉱員養成所（尺別礦業実習所）を設け、坑内労働が可能になる18歳までの男子を雇用して教育をおこなった。また、女子に対しては、1953（昭和28）年に准看護婦養成所を設け（雄別）、将来の炭鉱病院の看護婦を養成した。尺別礦業実習所は翌年に廃止されるが、代わりに夜間定時制高校を会社が主導して誘致し、従業員の子どもが炭山で働きながら高卒学歴を取得する機会を設けた。そして、全日制高校への進学を促す「雄別寮」（子弟寮）を釧路市内に設け、工業高校等を卒業して炭鉱に就職する

<sup>36</sup> 主な支援内容として、生徒数の増加に伴う校舎等の増改築や校庭拡張にかかる資金・資材の提供などがある。

道も用意した。このように炭鉱の発展期は、会社が従業員の子どもを次世代労働力として養成する機会を用意した。炭鉱への就職を志望する子どもは、これらの機会を活用し、親子二代で炭鉱に勤めることができた。後述するように、炭鉱発展期における尺炭中の卒業生は、尺別炭砦に就職する割合が大きかった。ただし、炭鉱が衰退すると、子どもは養成の対象ではなくなり、移出の対象となった（第3節参照）。

このように、次世代労働力とみなされた子どもは、会社を中心とした炭山全体で育てられた。炭山にあるほとんどの施設は会社が所有していたため、子どもの生活全般は会社の影響を強く受けていた。とりわけ、「生産施設」である炭住区での生活をみると、子どもが石炭の生産体制下に組み込まれていたようすがうかがえる。

前述のとおり、炭鉱労働は24時間操業体制の三交代制であり、3つの番方を週ごとに交替した。坑内・坑外とも人力に依存した労働集約的体制であり、先山、中山、後山と呼ばれるメンバーが事故・災害と隣り合わせの条件下で協働作業にあたった（嶋崎 2020b: 56）。これらの特性が家族の生活を強度に規定した。とくに、炭鉱労働者の妻は、夫の不規則な就業形態に由来して、夫の生活時間と子どもの生活時間の2つの生活時間をマネジメントしなければならなかった。そのため、妻は必然的に専業主婦となって家事・育児のすべてを担った。「1950年代以降の炭鉱家族は、世帯主である夫だけが働き、妻は家庭役割を担うという『稼ぎ手一人家族世帯』が一般的だった」（嶋崎 2020c: 82）。

子どもの生活も父親の労働力再生産を第一として、炭住区を中心に展開した。炭鉱の勤務時間を知らせるサイレン（全山放送）は、子どもの生活時間の目安になっていた。尺別出身者は、「3時とか6時とか、僕はそのサイレンを目安に生活、遊んでいたら帰るとか、してました」（木村ほか 2020: 33）と振り返る。また、父親が三番方の場合、子どもは日中、父親の睡眠を妨げないようにしていた。1950年代前半に尺炭小の児童が書いた「父親の現場」という以下の詩が象徴的である。

僕のおとうさんは 坑内やだ／炭じんだらけの真黒い顔で／おでこには、かいちゅう電燈をつけて／まっくらな中で／てらし、てらし、炭をほっているのだ／天井から、いつ石がおちてくるかわからない中で／とにかく、いっしょうけんめいだ、／三番方の時には さわがないで、／ゆっくりねてもらおうと思っている。（尺炭小文集「カンテラの子」、『やまの光』1952.9.25より）

この詩が社内報に掲載されていることからわかるように、会社がこうした子どもの心がけを望んでいたことが読み取れる。

炭鉱労働者の不規則な就労形態は、厳格な労務管理によってのみ可能であり、会社は労働者とその家族を坑口付近の炭鉱住宅（炭住）に集住させた。会社と家族を仲介する機関が「詰所」であり、〈炭鉱会社－詰所－家族〉という統制が整えられた（武田 1963）。詰所には、区長（労務課職員）と24時間常駐の3人の労務係員（外勤者）が勤務しており、出勤督励、

地域諸活動、社宅保全、生活指導などの業務を担った（嶋崎 2020c: 76）。詰所は炭鉱家族の生活全般に多大な影響を与えており、それは子どもにまでおよんだ。尺別炭砦の友山、雄別炭砦で区長を務めた元労務課職員は、つぎのように振り返っている。

私が行くと小学生か幼稚園くらいの子どもが逃げるのです。「区長さんが来た！」という声と同時に、遊んでいたのが皆逃げて、家の中に入っていくのです。〔中略〕子どもが何かイタズラすると、奥さん方は「詰所に言う」と言います。一番効果がある言い方は「区長さんに言う」。もう裁判官から死刑判決を下されるのではないかと子どもは思うのですね。（釧路市立博物館 2011: 69-73、〔 〕は引用者注）

このほか、詰所勤務の労務課職員も、炭住区や全山で子どもに関する問題（たとえば、青少年の不良化・非行化問題）が生じた際、学校や父母とともに協議会等に参加して、子どもの生活に深く関与した<sup>37</sup>。

## 2 炭山コミュニティの閉鎖性・家族主義的結合原理と子どもの炭住区での共同生活

他地域と隔絶した閉鎖的な尺別炭山では、子どもの生活は炭山内で完結していた。小中学校も炭山に一枚ずつであったため、尺別炭山に生まれた子どもは、中学卒業までほとんど炭山内で生活したのである。彼らは主な行動場面である炭住区で、家族主義的結合原理にもとづいた共同生活を送った。

尺別炭砦の鉱員住宅（緑町、栄町、旭町）は、一棟四戸の長屋であり、六畳二間と狭隘であった。したがって、子どもは、父親の労働力再生産を優先するためにも、炭住のなかではなく、炭住区の広場や山・川などで遊んでいた。同じ炭住区には同級生だけでなく、きょうだいの同級生も含めて多くの遊び仲間がいた。緑町に暮らしていた鉱員の子は、つぎのように振り返る。

（四軒長屋のうち）三軒は私と姉の同級生でした。長屋の壁はベニヤ板で隣の声もよく聴こえて来ます。ベニヤ板のすき間から手紙ごっこをしたり、外でゴム飛び、石けり。学校から帰ると（隣の）おばあちゃんが「じゃがいもを食べにおいで」といつも言ってくれて御馳走になりました。〔中略〕兄弟も多く、広場で男女年令関係なく缶けりして遊びました。〔中略〕午後4時を過ぎると白い割烹着姿の母が現われます。その姿を待っていた私は、いつも一目散に（母のところへ）走って行きました。（尺炭中 16 期生、女子、1963 年卒、笠原ほか 2019: 154-5、〔 〕は引用者注）

---

<sup>37</sup> 後述する青少年不良化対策を進めた「青少年少女不良化防止対策協議会」には、鉱業所長・副所長・労務課職員、組合青年代表、主婦会各地区代表、小中学校長、PTA 会長、役場児童福祉課職員、警察署長などが参加した（『やまの光』1951.1.1）。

また、各炭住区にあった共同浴場も子どもの交流の場となった。家事・育児全般を担う母親を手助けするため、年長の子どもは、弟妹だけでなく、近所に住む年少の子どもを共同浴場に連れていった。「尺別炭砦に暮らした人びと調査」の「思い出深い場所」には、「共同浴場」が多く挙げられ、以下のような振り返りがみられる。

共同浴場。小学校高学年の時、友達の妹（1才くらい）を2人でよくおふろに連れて行った。近所の人たちと行っていたのが思い出深い。（尺炭中 22 期生、女子、1969 年卒、笠原ほか 2019: 177）

このほか、子どもを炭住区で育てる仕組みとして、少年団と子供会があった。1949（昭和 24）年に少年団（全 12 分団）が組織され、中学生が小学生の面倒をみる形で地域の清掃活動や学習会などをおこなった<sup>38</sup>。また、子供会活動も活発に行われた<sup>39</sup>。愛唱歌である「子供会の歌」は、現在も同郷会や同期会で歌い継がれている。これらの組織は、大人たち（会社・組合・主婦会・役場・教員の代表による委員会）によって青少年不良化対策を兼ねて組織され（『やまの光』1951.1.1）、各炭住区の大人たちが見守る形で活動した。

また、子どもは近所の大人から「〇〇の息子（娘）」と呼ばれ、父親の名前とセットで認識されていた<sup>40</sup>。炭鉱の採用面接でも「〇〇の息子」と呼ばれて採用されたという（尺炭中 6 期生、1956 年入社、2020 年 7 月インタビュー）。子どもが日ごろから近所の大人に面倒をみてもらう背景には、こうした父子ともに顔の知れた信頼関係があった<sup>41</sup>。このように、父親の職場での人間関係・信頼関係が子どものアイデンティティに反映していたのである。

そして、子どもの最大の楽しみであったヤマの行事（山神祭、運動会、盆踊り）も炭住区単位で参加し、子どもの「全山一家」精神を醸成した。毎年 5 月 11 日から 13 日にかけて開かれる山神祭は、炭鉱も学校も休みとなり、日ごろ不規則な勤務形態で顔を合わせられない父親と子ども、親戚一同が集まる貴重な機会だった（北海道新聞社編 2003: 147）。各炭住区には子どもが担ぐ「子ども神輿」もあり、最終日の奉納相撲大会では、「子ども相撲」、

<sup>38</sup> 尺別砦業所社内報（『やまの光』1950.6.19）および尺炭中同窓生（1951-3 年在学）の日記による。少年団は、このうち廃止となるが（廃止年不明）、閉山前年の 1969（昭和 44）年度に再結成している（尺別炭砦中学校生徒会編 1970）。

<sup>39</sup> 子供会はこの時代、全国的に結成されていたが、特に炭鉱で盛んに行われていた。その背景には炭住住宅の集団生活があった。炭鉱山文化協会は、1957（昭和 32）年に山口・九州の炭鉱を対象として「第 1 回子供会研究会」を開催し、各炭鉱関係者による討議、講師による講演などをおこなった（炭鉱山文化協会 1957）。

<sup>40</sup> 同じ釧路炭田に位置した太平洋炭砦では、社内報に子どもの進学先一覧が掲載された際、従業員（父親）の氏名も掲載された（『太平洋』1965.4.16）。しかし、尺別の場合、社内報や組合機関紙に子どもの作文等が掲載された場合でも、父親の名前は掲載されていない。炭鉱の規模が比較的小さく、父子ともに顔の知れた関係が構築されており、改めて連名で掲載するまでもなかったと考えられる。

<sup>41</sup> それゆえ、父親からすれば、炭住区と職場における人間関係のバランスをとることが難しかった。とくに、職場で指導する立場にある助手や先山は、子どもが後山の家で「飯食わしてもらっても、仕事に行ったら、そのお父さんに指示しなければならない。そういうバランスをうまくとった」という（尺炭中 6 期生、1956 年入社、2020 年 7 月インタビュー）。

「青年相撲」が炭住区対抗で行われた（『やまの光』1952.6.20）。従業員運動会にも地区別の対抗リレーがあり、炭住区の子どもと大人が1つのチームになって参加した（『やまの光』1952.8.25）。

また、炭鉱で盛んだったスポーツも子どもの「全山一家」精神を醸成した。炭鉱で盛んだった野球部は、子どものあこがれだった。尺別炭砦中学校の野球部は、炭鉱野球部の影響を受けて、地区予選等で好成績をおさめた（元尺炭中教諭（野球部顧問）インタビュー、2017年3月）。子どもは、しばしば炭鉱で働く大人たちを、職種ではなく、彼らが所属する部活と結びつけて覚えていた。たとえば、1961（昭和36）年に尺炭中を卒業した14期生は、当時、炭鉱でリクルートしていた職員について、「野球部で有名だった人」と記憶している（2016年6月インタビュー）。

彼らの父母が参加する労働組合や主婦会の活動も子どもにとってヤマの行事であった。メーデーをはじめ組合や主婦会の集会に参加した子どもは、当時のことを鮮明に記憶している。「尺別炭砦に暮らした人びと調査」の「印象に残っている出来事」に、つぎのような回答がみられる。

メーデー。小さい頃、母親と集会場（婦人のあつまり）にいきました。あとでわかったことですが「がんばろう！」という歌をみんながうたっていた。大人になってその歌を聞いてちょっとふしぎな気持ちでした。（尺炭中20期生、女子、1967年卒、笠原ほか2019:168、一部修正）

普段、炭鉱で働く父親や大人たちの様子を知ることができない子どもは、日ごろの炭住区での生活や炭山の行事、スポーツ、労働組合・主婦会の活動などを通して、炭山の文化に触れ、「全山一家」の精神を醸成していった。その結果、尺別の子どもは、団結力が強かった<sup>42</sup>。元尺別炭砦中学校の教頭は、尺別の子どもが炭鉱労働組合の組合員である父親の影響を受けて、他産業の子どもより団結していたと振り返る。

尺別の子どもは、やはり尺別の地域から影響を受けているのです。尺別は炭鉱労働組合が一番大きな組織なので、組合の影響はあります。いろいろな掲示板がたくさんありますし、親たちも大体組合員で、集会やなんかをやりますから。そして、メーデーもさかんにやっていたから、そのなかで育っていくので、生徒たちも団結していました。（嶋崎・笠原編2016:30、一部修正）。

---

<sup>42</sup> 炭山における子どもの団結力の強さは、他の炭鉱でも指摘されている。たとえば、尺別と同じ釧路炭田に位置する太平洋炭砦では、小中学校教員が「ヤマッ子 教壇から見れば」という座談会（1963年）で、「生活環境のせいでしょうか、いわゆる“団結”はお手のもの」、「共同生活になれているというか、生徒会の役員選挙なんかはとてもうまい」と述べている（笠原2019:82）。

一方、凝集性の強い炭山コミュニティには排他性もあり、子どもの生活や社会関係に表れていた。とくに、炭鉱における父親の階層差が子どもの間にも明確に表れた。居住区が職員用の錦町、鉱員用の緑町・栄町・旭町、組夫用の仲町と明確に分かれていたことをはじめ、間取りや生活水準の違いがみられた。職員住宅は間取りが広く、とくに会社幹部（本社採用の職員、東大・北大など「学卒」）の社宅は一戸建てであり、ピアノや勉強部屋があった。緑町に住んでいた鉱員の子ども（尺炭中6期生、1953年卒）は、「職員の同級生のところに遊びに行ったということはあまりない」（2017年10月インタビュー）と記憶している。幹部職員の子どものなかには、バレエやバイオリンなどの習い事をする子どももいた。鉱員の子どもは、彼らについて「東京から来た人」、「親が（高学歴で）違う」、「頭がいい」「お坊ちゃん、お嬢ちゃん」「服装がしっかりしていた」と振り返っている（2018年8月、尺炭中21期生座談会より）。また、鉱員と組夫の子どもの間にも境界があった。鉱員用の共同浴場に組夫の子どもが先に入ると、大人たちから「私たち従業員の家族よりも、あんたの方が先にくることは、どういうことなの？」（2017年8月インタビュー）と言われたという。

「全山一家」を揺るがした尺別事件の影響も子どもの間に表れた。教員をはじめ大人たちは子どもに影響が出ないようにしていたが、子どもは炭山の不穏な空気を感じていた。会社から解雇処分を受けた従業員の子どもや弟妹、そのクラスメイトも不信感を募らせていた。当時の中学2年生は作文のなかで「この前まで、尺別事件などという暗い空気のものがこの尺炭をつつんでいましたが、私達が考えてもいやなことでした」（尺別炭鉱中学校生徒会編1962: 48）と述べている。尺別事件は子どもに炭鉱の衰退を認識させる出来事となり、事件から50年以上経った現在も当時のことを鮮明に語る同窓生も多くみられる。

以上のように、炭山コミュニティにおける子どもの生活は、炭鉱の生産体制下に組み込まれ、父親の職場である炭鉱の労働特性や人間関係に規定されていた。炭鉱の発展期を中心に、彼らは炭鉱の次世代労働力とみなされ、会社の管理下で共同生活を送った。また、職縁社会の特徴の一つである家族主義的結合原理によって、彼らも「全山一家」精神や団結力を高めた。とくに、尺別炭山は都市から隔絶した閉鎖的な地域だったが、彼らは、炭住区で近隣の子どもや大人と関わる場面が多くあり、炭山のなかで育てられた。

一方、父親の階層が子どもの居住区と生活水準の違いとして表れる場面もみられた。鉱業所長の子どもから組夫の子どもまで、あらゆる階層の子どもが一堂に会した場所が学校であった。子どもの主な行動場面である学校では、どのような教育が行われたのか。職縁社会の原理で生活していた子どもに対し、学校は「炭山の子ども」としての特徴を平準化したのか、あるいは補強したのか。次節では、尺別炭鉱小中学校の炭山コミュニティにおける役割と教育、子どもの生活についてみていく。

## 第2節 「炭鉱の学校」の役割と子どもの生活・教育

### 1 子どもの教育をめぐる会社・学校・父母・地域の協働体制

子どもにとってのメゾシステムである家族・学校・地域の相互関係はどのような関係だったのだろうか。会社と同じく家族・地域も学校に対して期待・信頼し、子どもの教育をめぐる協働体制をとった。以下でその詳細をみていこう。

前述のように、尺別炭山には小中学校が一枚ずつあり、炭山が一つの学区をなしていた。両校は、次世代労働力である子どもを教育する機関であるため、会社をはじめ、全山から期待された。児童生徒の父母も学校に期待・信頼していた。とくに、家事・育児の全てを担っていた母親は、家庭における子どもの教育を学校に任せた。さらにいえば、坑内の重筋労働を要する炭鉱では、農村社会のように親の労働補助を介した子どもの人間形成が難しかったため、父母たちは学校に家庭教育の代替を求めたのである。また、父母の学歴が相対的に低かったため、高学歴な教員を信頼・支持する傾向にあった<sup>43</sup>。加えて、前章で指摘したように、両校には尺別炭山出身の「顔が知れた教員」が多く、なおかつ外部からの教員も含めて炭山内で子どもとその父母たちと共同生活を送っていたため、信頼関係を構築しやすい環境にあった。

学校への期待は子どもの教育だけでなく、社会教育にもおよんだ。1950年前後から盛んになっていた新生活運動の一環として、社会学級が毎月、尺炭小で開かれた。そして、父母だけでなく地域住民も学校に文化の中心的機関としての役割を期待した。閉鎖的な炭山では娯楽が少なく、学校の運動会や学芸会などの行事が全山の行事として親しまれた。

こうした期待を背景に、会社・父母・地域は、学校に対する後援活動をおこなった。尺炭小・中学校のPTA活動は活発で、全道的に高く評価された（開校50周年記念誌編纂委員会編 1969: 3）。父母の「石炭拾い作業」で調達した資金をもとに実現した学校給食（尺炭小、1948年）は、釧路管内で先進的だった（開校50周年記念誌編纂委員会編 1969: 14）。教員たちは、父母と地域住民の学校教育への参加を促し、学校環境の整備だけでなく、会員の教養を高めていった。

このように、尺別炭山には子どもの教育をめぐる会社・学校・父母・地域の協働体制がとられ、全山で子どもを育てた。子どもに関する問題が生じたときは、この協働体制で対応した。たとえば、1950年代初頭には、中卒後未就職者の「不良化」を懸念して<sup>44</sup>、会社・組合・

<sup>43</sup> 第1章でみた筑豊をはじめ、北海道においても鉱員・組夫層の学歴は低かった。たとえば、1970年代前半の夕張では、鉱員層・組夫層の8割は戦前・戦後の義務教育段階にとどまり、登用職員も義務教育修了が大半を占めていた（布施 1976: 47）。

<sup>44</sup> 1950年代の筑豊炭田における青少年の不良化・非行については、第1章でみた通りであるが、北海道内の産炭地においても青少年の不良化・非行は社会問題として大きくとりあげられていた。赤平市の青少年を対象とした同時代の調査によれば、他都市に比べて赤平市の失業率が高く、労働市場が逼迫しているため、学卒者の就職がふるわず、青少年の非行化が懸念されていた。「失業と貧困、住宅環境の密住、不衛生、教養、娯楽の欠如、これらはいずれも犯罪、非行、家出などの温床」となっており、とくに「中小炭鉱の鉱員住宅地区」で顕著にみられると指摘されている（石原・石井 1956: 20）。

主婦会・役場・教員の代表が会議を開き、全山で対応するために「尺別炭砦青少年育成指導班連合会」を結成し、運営細目<sup>45</sup>を策定した（『やまの光』1951.1.1）。また、家事を一手に引き受けていた主婦のため、尺炭小 PTA は、1953（昭和 28）年に小学校を間借りする形で幼稚園を設置した<sup>46</sup>。小学校児童数の増加で教室が使用できなくなると、PTA は音別村教育委員会に働きかけ、1956（昭和 31）年に園舎を新築して小学校附属幼稚園が設置された（『北海道新聞』1956.2.2 朝刊）。このように、会社・学校・父母・地域は、それぞれの必要に応じて、子どもの教育に関する問題に協働で対処していたのである。

## 2 炭砦の学校における教育と子どもの生活

では、学校ではどのような教育が行われ、子どもはどのように生活していたのだろうか。尺炭小・中学校の教員たちは、父母や地域、会社からの期待を受けて、精力的な教育実践に取り組んだ。両校では、「尺炭教育」という独創的な教育実践が行われた（笠原 2018a）。具体的には、上記の社会教育や PTA 活動などの「地域・父母提携」ならびに「一人はみんなのために、みんなは一人のために」というスローガンを掲げた「主体形成・集団づくり」（班活動、児童会、生徒会活動など）の二本柱であり、釧路・北海道の教育研究会などで先進的実践として注目された<sup>47</sup>。とくに後者は、前節でみた子どもの団結力を向上させた。児童会や生徒会、委員会活動は活発に行われ、校則や学外の生活に関する規則を児童生徒自ら決定した。尺炭小・中学校は、炭山に特徴的な子どもの結合関係を補強していたのである。

一方、教員たちは、炭山のもう一つの特徴である子どもの階層差を平準化しようと、平等を意識させる教育に力を入れた。学校には職員、鉦員、組夫の子どもに加え、商店、原野、岐線の子どもが集まった<sup>48</sup>。そのうちの大多数は、鉦員の子どもだった。尺別炭山出身の教員は、自身が小学生のころに「社外（組）」の子として差別を受けた経験をもとに、「職員の子と従業員の子の間で絶対に差別や区別がないよう、十分配慮した」と述べている（2017 年 8 月インタビュー）。また、外部出身の教員も「階級社会ということ、学校には絶対に持ち込まないことを信条にして、徹底しました」と述べている（嶋崎・笠原編 2016: 31）。

---

<sup>45</sup> このとき策定された運営細目は、つぎの通りである。①子どもの自主的組織の援助、②青少年の運営による座談会の援助、③児童劇団の組織とその運営に対する協力、④青少年のみによる各種運動競技立案と援助、⑤不良化青少年の家庭における主婦の教育指導、⑥学校 PTA 会その他社会学級との密接な連絡と協議、⑦映画、演劇の選択教育的映画並びに劇団の斡旋、⑧視覚、聴覚による生活、衛生、その他の教育指導、⑨子供の遊び場の推進と実行、運営、⑩精神薄弱児、不具児童等の援助と指導、⑪情操陶冶により宗教的精神教育の実施、⑫この会の運営に必要な座談会と協議会の開催、⑬その他会の運営に必要な事項（『やまの光』1951.1.1）。

<sup>46</sup> 就学 1 年前の満 6 歳の子どもが入園していた。村の補助金 10 万円と園児 1 人 210 円の園費をもとに、尺炭小 PTA の社会委員会が運営していた（『北海道新聞』1956.2.2 朝刊）。

<sup>47</sup> こうした先進的教育が可能だった要因について、尺炭中に 1955（昭和 30）年から 1969（昭和 44）年まで勤めた教員は、「あそこ（尺炭中）は閉じこもった一か所だけの学校だったので、釧路市や近隣の学校との交流もなかなか難しく、いろいろなデータもなかったので、[中略]なんとか自分たちでやらねばならないということで、先生方もがんばったと思います」と述べている（2017 年 3 月インタビュー）。

<sup>48</sup> 1963（昭和 38）年に岐線が尺炭小の学区に統合され、翌年の尺別小学校廃校に伴い、原野の児童も尺炭小に通学することになった。

当時の教室の写真をみると、「友愛」や「結ばれる心」などのスローガンが掲示され、子どもに日ごろから「平等」を意識させていたことがわかる。「尺別炭砦に暮らした人びと調査」によれば、尺炭小・中学校で子どもの間に「親の職種の違い（炭鉱の職員か鉱員か）を気にする雰囲気」は、「なかった」と回答する割合が8割におよんでいる（笠原ほか 2019）。ただし、同窓生のなかには、「当時はそれが当たり前だったが、あとで考えると」階層差にもとづく差別やいじめがあったと振り返る者もいた（2018年8月、尺炭中 21 期生座談会より）。校内に階層差があればこそその平等を意識させる教育だった。

また、炭山の閉鎖性という観点から、教員たちは、児童生徒に炭山外の社会を意識させる教育もおこなった。尺炭中では、「平和を守り、真実をつらぬく尺中教育を確立しよう」という教育目標が掲げられ（尺別炭砦中学校 1969: 3）<sup>49</sup>、社会意識を醸成させる教育が行われた。尺炭小も同様であり、児童が書いた詩集には、「沖縄の問題、政府、戦争、平和」に関する詩が多くみられる（尺別炭砦小学校 1966: 31-2）。「尺別炭砦に暮らした人びと調査」によれば、「社会への問題意識を喚起された」という割合は3割におよんでいる<sup>50</sup>。こうした社会全般について考えさせる教育は、炭山内で完結していた子どもの思考を炭山の外に広げるきっかけになった。

さらに、中学校での社会科見学や修学旅行<sup>51</sup>も炭山外を知る機会となった。とくに、炭鉱の衰退期（1960年代）の見学は、生徒たちに炭山外の社会と自らの将来を考えさせた。閉山前年の2年生（尺炭中 24 期生）代表は、釧路見学の行程を振り返り、つぎのように述べている。

ぼくらは、これから大人になる。そして、やがて働くようになるだろう。〔中略〕働くにも、いろいろな場所とかんきょうがある。ぼくたちは、社会のほんの一部をのぞいたにすぎなかった。それだけ社会が複雑にできているんだ。話しを聞くのと違って、実際に社会を見たこの1日は、ぼくの未来のために、頭の記事に記録された。（尺別炭砦中学校生徒会編 1970: 2、〔 〕は引用者注）

学校では、炭山外出身の教員を中心に、生徒たちに炭山コミュニティの特殊性を伝えていた。樺太出身で芦別、札幌と移った経験のある尺炭中の教員は、1968（昭和 43）年度の卒業生に、外の世界を知ることの重要性を説いている。

<sup>49</sup> こうした思想的傾向のみられる教育は、教員の教職員組合への加入率が高かった当時の特徴であり、尺別に限ったことではない。とくに、革新勢力の伸長がみられる地域の学校では、尺別同様の集団主義的教育がみられた（新藤 2016: 8）。

<sup>50</sup> 「子・きょうだい票」問 38「あなたは、尺別炭砦中学校の先生から、社会への問題意識を喚起されましたか」の選択肢「大いに喚起された」「やや喚起された」を合わせた割合（笠原ほか 2019: 192）。

<sup>51</sup> 年度によって異なるが、尺炭中では、2年次の社会見学で釧路市を、3年次の修学旅行で札幌市などを訪問した。

君たちの考えはあまりにもせまく、君たちの知識はあまりにも乏しく、君たちの世間に対する認識はあまりにも浅い。〔中略〕（僕も含めて）君たち若人は、外に向かって積極的に知識を吸収し、そしてなによりも将来をになうために生産的に生きて下さい。そのように生き続ける時、はじめて尺別は君たちの「ふるさと」になるでしょう。（尺別炭砒中学校生徒会編 1969: 34、〔 〕は引用者注）

しかし、閉鎖的な炭山コミュニティで育った彼らにとって、その特殊性を理解することは容易でなかった。彼らが炭山の外を知る機会乏しく、なおかつ炭鉱について知る機会もほとんどなかった。学校でも炭鉱労働の実態や石炭産業を扱った授業は少なかった。炭鉱の衰退についてはなおさらであった。たとえば、尺別事件について授業で扱うことは禁止されていた<sup>52</sup>。また、閉山がうわさされるようになったときも（1960年代末）、社会科の授業に来た「組合のおじさん」は、石炭の埋蔵量が「だいぶ多いと」強調していた（閉山時中学3年生の作文より）。子どもが炭山の特殊性に気づくのは、卒業後あるいは閉山後、異郷の地で生活し始めてからであった。

このように、尺別炭山における子どもは、会社・学校・父母・地域の協働体制のもと、炭山コミュニティのなかで育てられた。炭山コミュニティの中心は炭鉱であり、子どもは炭山コミュニティにおいて周辺的な位置づけだった。しかし、彼らを取り巻く家族・学校・地域の相互関係（メゾシステム）は、子どもの教育に関して支持的であり、子どもの発達の可能性を高めたといえる。とくに、「尺炭教育」は、彼らの主体性や団結力、社会意識を醸成し、炭山の外に目を向けさせるきっかけとなった。それらの特性は、次節でみるように、中卒後の進路選択において活用される重要な個人的資源となった。

### 第3節 尺別炭砒の盛衰と中学生の進路

炭鉱の発展と衰退の影響は、とくに子どもの進路に表れた。炭鉱の発展期には炭鉱への就職が可能であったが、衰退期にはそれが不可能となり、他産業への転換を求められた。尺別炭砒の時期区分に対応した中卒年コーホート（第2章参照）ごとに、尺炭中卒業生の中卒後進路ならびに就職先地域の内訳を示したのが表3-1である。2016年以降に実施した同郷会会員に対する調査の結果であるため、実際よりも「高校進学」の割合が大きいなどの偏りがみられるが、コーホートの趨勢を把握できる。まず、炭鉱の復興・停滞期（1950年代）に中学校を卒業した年長のコーホート（C1：1958年以前中卒、「黒ダイヤ世代」）は、尺別炭山での就職の割合が大きく、就職経路も多様であった（中卒後就職、就職しつつ進学、高校卒業後就職など）。一方、炭鉱の衰退期に中学校を卒業したコーホート（C2：1959-66年

<sup>52</sup> 1960年代前半に尺炭中に赴任した教員は、校長から「あんたのクラスに該当者のきょうだいがいるから、いろいろな捉え方があるかもしれないけど、とにかく炭鉱全体、神経がピリピリしているから、下手なことは言ったり、やらないでくれ」と忠告された（2017年3月インタビュー）。

中卒、「炭鉱衰退世代」)では、尺別炭砦への就職は大幅に減少し、高校進学後、男子は道外へ、女子は釧路の他産業に就職する割合が増加した。およそ20年間で中学生の進路パターンが、炭鉱の盛衰と全国的な高学歴化の進展によって大きく変容したことがわかる。以下でその変容過程をみよう。

表3-1 尺炭中出身者の中卒後の進路と就職先地域(中卒年コーホート・性別、%)

中卒年 コーホート	C1: 黒ダイヤ世代 (~1958年卒)			C2: 炭鉱衰退世代 (1959~66年卒)			C3: 閉山時高校生世代 (1967~69年卒)			C4: 閉山時中学生世代 (1970~72年卒)			
	性別	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
n		25	2	27	90	56	146	47	37	84	31	17	48
就職	全体	12.0	50.0	14.8	13.3	12.5	13.0	10.6	8.1	9.5	3.2	5.9	4.2
	尺別	100.0	100.0	100.0	16.7	28.6	21.1	40.0	0.0	25.0	0.0	0.0	0.0
	釧路	0.0	0.0	0.0	33.3	28.6	31.6	40.0	0.0	25.0	0.0	100.0	50.0
	道内	0.0	0.0	0.0	33.3	0.0	21.1	0.0	66.7	25.0	0.0	0.0	0.0
	道外	0.0	0.0	0.0	16.7	42.9	26.3	20.0	33.3	25.0	100.0	0.0	50.0
就職しつつ 進学	全体	28.0	0.0	25.9	0.0	3.6	1.4	2.1	0.0	1.2	6.5	5.9	6.3
	尺別	85.7	0.0	85.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	釧路	14.3	0.0	14.3	0.0	0.0	100.0	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
	道内	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	道外	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	100.0
専門学校等 進学	全体	8.0	0.0	7.4	4.4	10.7	6.8	6.4	16.2	10.7	0.0	5.9	2.1
	尺別	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	釧路	0.0	0.0	0.0	25.0	0.0	40.0	33.3	0.0	44.4	0.0	0.0	100.0
	道内	50.0	0.0	50.0	25.0	0.0	30.0	33.3	0.0	33.3	0.0	0.0	0.0
	道外	0.0	0.0	0.0	50.0	0.0	30.0	33.3	0.0	22.2	0.0	0.0	0.0
高校 進学	全体	52.0	50.0	51.9	82.2	73.2	78.8	80.9	75.7	78.6	90.3	82.4	87.5
	尺別	69.2	100.0	71.4	4.1	22.0	10.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	釧路	15.4	0.0	14.3	13.5	39.0	22.6	21.1	39.3	28.8	10.7	7.1	9.5
	道内	0.0	0.0	0.0	27.0	22.0	25.2	10.5	14.3	12.1	3.6	21.4	9.5
	道外	15.4	0.0	14.3	55.4	17.1	41.7	68.4	46.4	59.1	85.7	71.4	81.0
就職先地域 合計	尺別	76.0	100.0	77.8	5.6	19.6	11.0	4.3	0.0	2.4	0.0	0.0	0.0
	釧路	12.0	0.0	11.1	16.7	41.1	26.0	25.5	37.8	31.0	9.7	17.6	12.5
	道内	4.0	0.0	3.7	27.8	19.6	24.7	10.6	21.6	15.5	3.2	17.6	8.3
	道外	8.0	0.0	7.4	50.0	19.6	38.4	59.6	40.5	51.2	87.1	64.7	79.2
	最終学歴: 大学等	0.0	50.0	3.7	33.3	14.3	26.0	14.9	16.2	15.5	45.2	35.3	41.7

\*C1~C3は尺炭中卒業前転校生を除く卒業生のみ。C4は転校生を含む回答者全員

\*「高校進学」の卒業後就職先地域内訳には大学等進学者の卒業後就職先地域が含まれる

\*「釧路」は尺別を除く釧路管内、「道内」は尺別および釧路を除く道内をさす

出典: ライフコース調査より作成。

## 1 炭鉱の復興・停滞期(1950年代)の中卒後進路

1950年代の尺別炭山は、第1節でみたように、従業員の子ども(男子)を将来の中堅鉱員として養成するための「尺別礦業実習所」と女子を炭鉱病院の看護婦として養成する准看護婦養成所(雄別)を設け、次世代労働力の養成に取り組んでいた。いずれも会社に雇用されながら教育を受けられる機関であり、就学・就業機会の少ない炭山において望ましい進路であった<sup>53</sup>。また、夜間定時制高校(釧路湖陵高校分校、のちの音別高校、1951~62年)が

<sup>53</sup> 社内報には実習生が就職難の時代に入所できた喜びのコメントを掲載している(『やまの光』1951.1.1)。また、実習所の設置は、鉱員養成に加え、前述の「青少年不良化対策」を目的としていた。坑内労働が可能となる18歳までの青年たちを収容する養成所が必要となったのである。そのため、会社だけでなく、中学校・PTA・労働組合が協力して実習所を設立した(『やまの光』1950.6.19)。

設置され、炭山で働きながら高卒学歴を取得することが可能になった（北海道音別高等学校同窓会編 1988）。さらに、当時は一般的ではなかった全日制高校への進学を促すため、「子弟寮」（雄別寮）が釧路市内に設けられ、工業高校等を卒業して炭鉱に就職する者もいた。いずれも父母、学校、地域の強い期待のもと、会社主導で設立された機関・施設である。

こうした諸制度に加え、家族や親族、炭住区の知人による紹介（縁故）によって、中卒・高卒後の尺別炭砦への就職が可能になった。1956（昭和31）年に工業高校を卒業した尺炭中6期生の男子は、学卒時に炭鉱の新規採用がなかったが、「高校で野球をやっていた関係で、炭鉱野球部の監督のついで」協力会社に就職し、のちに炭鉱に採用された（2020年7月インタビュー）。また、女子も家族や親族の紹介で炭鉱の総務課事務職員や購買会の店員、労働組合事務所書記などに就職した。当時、女子の高校進学は稀であったが、釧路市内の商業高校を出て炭鉱の総務に就職し、職員と結婚して退職するという例もみられた（尺炭中9期生、2020年2月インタビュー）。炭鉱への就職は、高賃金で光熱費等がほぼ無料であり、生活しやすい環境であるという利点があったのである。

一方、会社幹部の子どもをはじめ、尺炭中卒業生から有名難関大学への入学が決まると、全山のニュースになった。1950年代後半に「北海道大学に合格者が出たとき、みんなに知らせるために炭鉱のサイレンが鳴った」という（2016年8月、釧路市音別町尺別原野インタビュー）。また、この時期から他産業への就職も期待されていた。釧路工業高校に進学した鉱員の子（尺炭中8期生）は、高校の教員に東京への就職を勧められたが、長男として炭住を継承しなければならず、炭鉱に就職した（2017年12月インタビュー）。すでに1950年代後半には炭鉱の新規採用が抑制され、他産業への転換が主な進路となった。炭鉱への就職は、学卒時に新規採用があり、家族や親族による炭鉱就職への期待と支援があった場合に可能だったのである。

## 2 炭鉱衰退期（1960年代）の中卒後進路

そして、1960年代には炭鉱への就職がほぼ閉ざされた（表3-1、C2「炭鉱衰退世代」）。前述の夜間定時制高校は廃校となり、炭鉱の合理化・人員整理時には、会社が親子の他産業・地域への職業斡旋を行うなど、若年労働力の移出を進めた<sup>54</sup>。炭鉱が衰退するにつれ、家族や炭住区の大人たちも、子どもの炭鉱以外への就職・移動を期待するようになった。ある鉱員の子（尺炭中18期生、1965年卒）は、「鉱山保安監督・通産大臣賞をもらった」父親から「お前だけは炭鉱には入れない、入れたくない」と言われたという（笠原ほか 2019: 221）。また、子どもは次第に石炭産業・炭鉱の衰退を実感し、炭山を離れて就職することを予期していた。とくに、1961（昭和36）年の尺別事件は、子どもが炭鉱衰退を認識するメルクマ

<sup>54</sup> 1960（昭和35）年の友山・雄別炭砦の社内報には、「就職斡旋員」によるつぎのような文章が掲載されている。「これからは、子どもの就職も、炭鉱のみにたよることはムリですし、都会にはまだまだ将来性のある職業がありますから、『かわいい子には旅させよ』とあるように、子弟の将来のために、広く職業をえらべる都会に出し、技術を身につけさせることがたいせつと思えます」（『雄別』1960.2.1）。

ールとなった<sup>55</sup>。

加えて、60年代には釧路郡部でも遅ればせながら高校進学率が上昇し<sup>56</sup>、隣町の道立白糖高校に全日制課程が新設（1957年）された影響もあり、尺炭中の高校進学率が上昇した（表3-1）。1960年代半ばには、男女ともに高校進学が主な中卒時の進路となった。ただし、高卒後の進路は出身階層によって異なった。C2（「炭鉱衰退世代」）の最終学歴をみると（表3-2）、男女ともに職員の子どもは「大学等」の割合が大きく、鉱員や関連・その他の子どもは「高校」の割合が大きかった。高校進学者が学卒後、尺別で就職する割合は女子を中心に一定数みられるが、大半は道内外の都市部に移動し、他産業に就職した（表3-1）。

つづくC3（1967-69年卒、「閉山時高校生世代」）も先行コーホート（C2）、すなわち彼らの兄姉や隣近所の上級生（かつて炭住区で遊んだ「お兄さん」「お姉さん」）が辿った進路を参考に、中学卒業後、多くの生徒が高校に進学した。この当時の中卒就職は1割程度にとどまった。中卒での道外就職は、厳しい環境・条件での労働になると、学校で伝えられていた<sup>57</sup>。閉山前年に卒業した学年（1968年度卒業生）の進路データをみると、進学者が7割を占めた。これは全道の進学率とほぼ同じであり、釧路郡部のなかでは顕著に高かった（同年釧路郡部の進学率は57%、北海道1969）。進学先は、7割が白糖高校、3割が釧路市内の高校だった（尺別炭砒中学校1969）。釧路市内の高校に進学した男子生徒は、「隣のばあちゃんに『ソロバン習って銀行マンになれ』と言われ」、商業高校に進学したという（笠原ほか2019: 216）。彼らのうち高校進学者は、先行コーホートと同様の進路を辿るはずだったが、在学中に閉山に遭遇したため、多くの生徒が進路変更を余儀なくされた（第6章参照）。

以上のように、尺別炭山における子どもの進路は、炭鉱の盛衰はもちろん、それに伴う会社、家族、学校、地域の期待や支援に水路づけられていた。炭鉱発展期の子どもは、炭山の次世代労働力として養成の対象だったが、衰退期には移出の対象となった。その際、家族・学校・地域の期待と支援が、炭鉱就職または高校進学・他産業への就職を促進した。尺別炭山は都市部から離れ、高校進学は決して容易ではなかった。しかし、尺炭中の生徒たちは、炭山内の資源をうまく活用し、先行者たちと同様の進路を辿った。すなわち、近隣の高校に進学し、他産業に就職するようになっていたのである。

---

<sup>55</sup> 1960年代前半に白糖高校に通っていた男子生徒は、「組合の事故（尺別事件）があつて、『おれは尺別炭鉱では勤めれないな』と感じました。〔中略〕九州の炭鉱が閉山になって、転校生がたくさん来て、『ダメだな』と察しがつきました」と述べている（2017年3月インタビュー）。

<sup>56</sup> 学校基本調査データ（北海道1958-62）によれば、尺別炭山が含まれる釧路郡部の中卒後進学率（高等学校、専門学校など中卒後の進学全般）は、1962（昭和37）年によく5割を超えた（北海道全体は1958年）。

<sup>57</sup> 1968（昭和43）年に尺炭中を卒業し、道外に就職した男子生徒（21期生）は、尺炭中教頭宛の手紙でつぎのように述べている。「僕は来年又、商業高校を受験しようと思っています。自分は（高校に）落ちたとわかった時、恥ずかしかったし、それにも増して、くやしかったです。「今働いてみてつくづく感じたのは、高校へ行けると言うことは、どんなに幸福かということ」、「生徒達に声を大にしてこう言って下さい。『現実はきびしい！！』」（1968年4月、6月手紙より）。

表3-2 尺炭中出身者の最終学歴（中卒年コーホート、性別、父親階層）

中卒年コーホート	性別	父親階層	n	中学校	高校	大学等	その他
C2：炭鉱衰退世代 (1959～66年卒)	男	職員	18	5.6	16.7	72.2	5.6
		鉱員	45	17.8	40.0	24.4	17.8
		関連・その他	8	12.5	25.0	12.5	50.0
	女	職員	12	0.0	50.0	41.7	8.3
		鉱員	33	18.2	51.5	12.1	18.2
		関連・その他	7	0.0	57.1	14.3	28.6
C3：閉山時高校生世代 (1967～69年卒)	男	職員	7	0.0	42.9	42.9	14.3
		鉱員	36	11.1	66.7	8.3	13.9
		関連・その他	0	0.0	0.0	0.0	0.0
	女	職員	11	9.1	27.3	45.5	18.2
		鉱員	20	20.0	25.0	5.0	50.0
		関連・その他	4	25.0	0.0	25.0	50.0
C4：閉山時中学生世代 (1970～72年卒)	男	職員	5	0.0	20.0	60.0	20.0
		鉱員	22	4.5	54.5	40.9	0.0
		関連・その他	3	0.0	66.7	33.3	0.0
	女	職員	5	0.0	40.0	40.0	20.0
		鉱員	10	10.0	40.0	20.0	30.0
		関連・その他	1	0.0	0.0	0.0	100.0

\*C1 は父親階層不明のため割愛

\*父親階層は「尺別炭鉱に暮らした人びと調査」、組合解散記念誌名簿より。調査回答の「准員」は「職員」に含めた

\* C2～C3 は尺炭中卒業前転校生を除く卒業生のみ。C4 は転校生を含む回答者全員

出典：ライフコース調査、尺別炭鉱労働組合（1970）より作成。

#### 第4節 小括

本章では、1950年代から60年代の尺別炭山における子どもの生活、教育と中卒後の進路が、彼らの父親の職場である炭鉱にいかん規定されていたのかについてみてきた。炭山コミュニティにおける子どもは、次世代労働力としてみなされ、養成の対象であった。また、子どもの生活全般は、炭鉱の生産体制下に組み込まれ、会社（詰所）が管理する炭住区で展開した。彼らは、職縁社会の特徴である家族主義的結合原理によって、近隣の子どもや大人とつながり、ヤマの行事や娯楽、文化活動への参加を通して「全山一家」精神を醸成した。一方、炭鉱における父親の階層差が炭住区の違いや生活水準の違いとして子どもの間に表れた。

尺炭小・中学校は、全山のあらゆる階層の子どもを一堂に集め、主体性や集団意識、平等意識、社会意識を醸成させる教育をおこなった。会社・父母・地域から期待・信頼された教員たちは、炭山のなかで育った子どもに、炭山の外を志向させる役割も果たした。そして、尺炭中の卒業生の進路は、炭鉱発展期では炭山での就職が主な選択肢だったが、炭鉱衰退期では炭山の就職機会が縮小し、高校進学後、男子は道外、女子は釧路を中心に他産業に就職した。このような進路パターンの変容は、炭鉱の盛衰に伴う就職機会の変化だけでなく、高学歴化の進展、会社の制度や家族・学校・地域の期待と支援の変化によるものであった。ま

た、高卒後の進路には階層差もみられた。鉱員の子は高卒後に就職し、職員の子は大学等に進学する傾向がみられた。

このように、尺別炭山の子どもたちの生活は、労働者家族と同じく、職縁社会の原理で展開していた。ここで、前章で提示した炭山コミュニティにおける生態学的環境の各システムについて整理しよう（前掲図2-3）。炭山コミュニティの中心は炭鉱（エクソシステム）であり、子どもは周辺に位置づけられた。しかし、子どもは、家族はもちろんのこと、同じ炭住区の子どもや大人たちなど、炭山の人びとと関わる場面（マイクロシステム）が多くあり、そのなかで育てられた。彼らを取り巻く家族、学校、地域は、子どもの教育をはじめ各種課題に連携して取り組むなど、子どもの発達の可能性を高めるような支持的関係にあった（メゾシステム）。父親の職場である炭鉱は、詰所を介して家族を統制し、子どもたちの生活も規定した。また、父親が所属する労働組合や母親が所属する主婦会も、子どもにとって間接的だが重要な組織だった（エクソシステム）。そして、これらの下位システムの形態や内容における一貫性として、職縁社会の原理が存在しており、石炭産業の趨勢や石炭政策、経済状況の影響を強く受けていた（マクロシステム）。子どもは、大人との関わりや学校教育のなかで、職縁社会の原理や産業、政策、経済状況を認知したり、関心を持っていた。彼らは、会社、学校、家族、地域に育てられ、炭山内の資源を活用して生活し、進学・就職していった。彼らにとって炭山は生活のすべてであり、自らの人生を切り拓くための基盤だったのである。

では、そうした基盤を中学卒業前に突如として損なうことはいかなる経験であり、その後の人生にどのような影響をもたらしたのだろうか。閉山時の中学生は、兄姉や上級生（C2、C3）と同じく進学・就職でいずれ他出する予定だったが、中学在学中に閉山と地域崩壊を経験し、他出と進路変更を強制された。なにより、職縁社会の外、炭山コミュニティと対照的な地域に転出することは大きな障壁になっただろう。一方、本章の内容を踏まえると、子どもたちの間に多様な閉山経験があったことも予想される。とくに、他出した兄姉の有無や尺別炭山外での生活経験の有無によって、閉山や尺別炭山に対する捉え方が異なるだろう。さらにいえば、父親の階層と年齢によっても左右される。次章ではこれらの点に留意しながら、閉山時中学生の状況理解と計画的な能力について、当時の作文をもとに明らかにする。

## 第4章 炭鉱の閉山と中学生の状況理解・計画的能力——閉山直後の作文分析

本章では、尺別炭鉱の閉山直後に中学生が書いた作文をもとに、彼らの閉山に対する受け止め、家族や学校、地域に関する状況理解ならびに計画的能力を捉える。周囲の状況理解とは、生態学的環境（家族、友人・教員、近隣、石炭産業、社会全般など）に関する認知であり、その拡張した、分化した、妥当な考えを獲得していく過程は発達を意味する（Bronfenbrenner 1979=1996: 307）。また、青年期における計画的能力は、その後の人生移行に累積的影響をもたらす。本章は、閉山直後の中学生の状況理解と計画的能力から、閉山による短期的影響を明らかにし、中学生が転出後の新たな行動場面に、どのように参入しようしていたのかについてみていく。

### 第1節 尺別炭鉱の閉山と中学生の受け止め

#### 1 閉山時の中学生と家族

閉山当時の尺別炭鉱中学校在校生は342名（1年生102名、2年生118名、3年生122名）であり、世帯主の職業が「鉱業」だった生徒は300名（88%）におよび、ついで「農業」（原野）が16名（5%）、「公務員」（教員等）が13名（4%）、「小売業」（指定商等）が7名（2%）、「林業」が3名（1%）、「運輸業」が1名、「その他」が2名であった<sup>58</sup>。このうち、労働組合解散記念誌名簿、質問紙調査結果、閉山時作文等の資料から、父親の年齢・職位、同居家族構成、本人の出生順位を特定した結果が表4-1である。まず、父親の年齢をみると、おおむね30代後半から50代前半に分布しており（30代前半以下は養父の年齢）、中央値は40代前半となっている。5歳区分では、40代前半が最も多く（47%）、ついで40代後半となっており（27%）、あわせて7割を超える。中学生の父親たちの大半が、再就職するうえで「中高年」（35歳以上44歳以下）または「高年」（45歳以上）の段階にあったことがわかる<sup>59</sup>。また、世帯主の閉山時職位をみると、いずれの学年も「坑内直接」が最も多く、4割前後を占めている。ついで「坑内間接」、「坑内助手」となっており、大半が鉱員だった。

同居していた家族の構成をみると、ほとんどが父母のいずれかと同居しており、上のきょうだい・下のきょうだいがいた割合は、いずれも5割から6割だった。閉山時の中学生にみられたきょうだいは10組におよんだ。また、祖父母やほかと同居していた割合は2割から3割だった。さらに、本人の出生順位は、長子が5割から6割を占め、ついで二子が2割から3割となっていた。

<sup>58</sup> 以上、1969（昭和44）年11月1日現在。元教頭提供資料より。

<sup>59</sup> 区分は高橋（2002）より。

表 4 - 1 閉山時中学生の父親年齢・職位、同居家族構成・出生順位

		1年生		2年生		3年生		
		男	女	男	女	男	女	
N		18	13	32	34	45	35	
父親年齢	最小値	27.0	19.0	38.0	38.0	32.0	38.0	
	中央値	41.0	44.0	44.5	42.5	44.0	42.0	
	最大値	53.0	53.0	54.0	54.0	54.0	49.0	
	30代以下	29.4%	8.3%	3.6%	6.3%	10.5%	6.9%	
	40-44歳	41.2%	41.7%	46.4%	56.3%	47.4%	62.1%	
	45-49歳	23.5%	33.3%	35.7%	25.0%	26.3%	31.0%	
50-54歳	5.9%	16.7%	14.3%	12.5%	15.8%	0.0%		
父・兄職位 (%)	職員	5.6%	0.0%	3.1%	5.9%	4.4%	8.6%	
	坑内助手	5.6%	30.8%	9.4%	11.8%	8.9%	8.6%	
	坑内直接	50.0%	38.5%	43.8%	35.3%	48.9%	45.7%	
	坑内間接	11.1%	7.7%	18.8%	17.6%	6.7%	14.3%	
	坑外助手	11.1%	7.7%	12.5%	8.8%	6.7%	2.9%	
	坑外	16.7%	15.4%	6.3%	20.6%	8.9%	8.6%	
	関連会社	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	6.7%	2.9%	
	原野	0.0%	0.0%	6.3%	0.0%	2.2%	5.7%	
	教員	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.2%	2.9%	
	国鉄	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	4.4%	0.0%	
同居家族構成 (%)	父母有	100.0%	100.0%	96.7%	100.0%	100.0%	100.0%	
	上きょうだい有	66.7%	69.2%	60.0%	52.9%	59.5%	48.6%	
	下きょうだい有	61.1%	61.5%	43.3%	55.9%	54.8%	54.3%	
	祖父母ほか有	11.1%	38.5%	26.7%	17.6%	19.0%	17.1%	
本人出生順位 (%)	長子		50.0%	53.8%	50.0%	53.1%	56.4%	68.8%
		父親年齢中央値	39.0	43.0	42.0	42.0	42.0	42.0
	二子		27.8%	7.7%	23.3%	31.3%	23.1%	12.5%
		父親年齢中央値	48.0	41.0	44.0	42.0	46.0	43.0
	三子		22.2%	23.1%	16.7%	3.1%	12.8%	9.4%
		父親年齢中央値	46.0	47.0	50.0	45.0	47.0	45.0
	四子以降		0.0%	15.4%	6.7%	12.5%	2.6%	6.3%
		父親年齢中央値	-	49.0	48.0	50.0	50.0	40.0
養子		0.0%	0.0%	3.3%	0.0%	5.1%	3.1%	
	父親年齢中央値	-	-	49.0	-	38.0	45.0	

\* 「N」は父・兄職位判明人数

出典：ライフコース調査、尺別炭鉱労働組合（1970）より作成。

以上のように、閉山時の家族に関する基礎的情報の整理から、作文を分析する際の課題が浮かび上がる。第一に、父親の年齢による作文内容の違いである。父親の年齢を高齢と捉える生徒とそうではない生徒は、それぞれ父親がどのような地域・産業に再就職すると考えていたのだろうか。第二に、父親の階層および職位による作文内容の違いである。職員・鉱員・組夫による違い、さらには炭鉱従業員かそれ以外かによって、子どもの閉山に対する受け止めや将来展望が異なるだろう。そして第三に、閉山時の家族構成による作文内容の違いである。家族員数やきょうだいの有無、本人の出生順位によって家族に関する記述内容や不安が異なると考えられる。

## 2 尺別炭砒の閉山と尺別炭砒中学校

本章で分析する中学生の作文は、尺別炭砒の閉山から約2週間後、1970（昭和45）年3月11日ころに書かれた。この作文は、当時の教頭が「炭砒閉山に思う」というタイトルで全校生徒に書かせたものである。この頃はまだ住民の転出は少なかったが、閉山以降、中学生を含むさまざまな文教対策が協議され、決定していた。

閉山前日の2月26日、釧路教育局、阿寒町、白糠町、音別町の教育長ならびに小中学校・高校の校長が集まり、文教対策会議が開かれた。そこで、尺別炭砒が位置する音別町は、尺別原野・岐線地区の児童・生徒を4月から音別小・中学校に転校させ、いずれ尺別炭砒小・中学校を廃校する方針を示した。また、小中学生以上に転校が難しい高校生（新入生を含む）については、転校に関する特例措置ならびに残留生徒用収容施設の設置と生徒指導の配慮について集中的に議論された（『釧路新聞』1970.2.27朝刊）。3月5日には、北海道教育庁が釧路教育局に「雄別炭砒閉山緊急教育相談室」を設け、白糠・阿寒両高校生徒の適切な転入指導を行う体制を整えた（「内外教育」1970.3.17）。当時の北海道教育長は、4月以降、道立高校で転校試験を行い、定員を超えても炭砒離職者子弟を優先して受け入れる措置をとること、学資補助、寄宿舎の改修、生徒・保護者に対する相談対応などを行う方針を示した（『北海道新聞』1970.3.6朝刊）。このように、文教対策は重要な課題として認識され、閉山直後から進められていた。

尺別炭山においても3月1日に設置された閉山処理対策委員会（労組、職組、会社）が文教対策を進めていた。3月6日に開かれた第1回委員会では、小・中学校を7月に閉校する方針がこの時点で確認された<sup>60</sup>。また、高校生については、釧路市内の高校に通う生徒に対して、音別町から1人あたり2,500円を助成し、下宿を斡旋した。さらに、隣町の白糠高校への通学者用に、山元の職員合宿（清和寮）と生活館を寄宿施設とすることにした。ただし、この寮に入寮できる期間は、1学期末（7月末）までであり、暫定的な簡易寮にすぎなかった<sup>61</sup>。

同時に、同委員会は、最大の課題である離職者対策と地域撤退を進めた。閉山前から職安による再就職支援がスタートし、3月1日から本格化した。また、3月上旬に、各種施設の閉鎖時期を決定し、撤退作業を進めた。具体的には、炭砒病院は3月末で閉鎖、鉄道は4月半ばに廃線、生協と郵便局は5月末に廃止、そして居住地を錦町（職員居住区）に集約することを決定した。この時点で、尺別炭山は年内に、つぎの冬が来るまでに「消滅」することが決まっていた。これら閉山処理対策委員会での決定事項は、労組ミニコミ誌などを通じて、従業員とその家族に周知された。

学校では、教員たちが生徒たちの不安を取り払おうと通常どおりの学級運営を心掛けた。その陣頭に立った教頭は、『中学校だより』のなかで、閉山前後の生徒の様子と学校の役割について、つぎのように述べている。

<sup>60</sup> 同委員会議事録（音別町提供資料「昭和45年尺別炭砒閉山処理記録」）より。

<sup>61</sup> 同委員会議事録（音別町提供資料「昭和45年尺別炭砒閉山処理記録」）より。

この地域に住む人々が最もおそれ、そして私達も生徒達も長い間、あえて正面きって話題にすることを避け続けて来たこと、「閉山」が、いよいよ「2月27日付けで全員解雇」という形で現実のものとなってしまいました。／「もし閉山になったら」という不安、おそれが長い間生徒の全生活に直接、間接におおいかぶさっておりました。／そういう不安が現実のものとなった今、感じ易い年代にある生徒達が受ける影響を軽視することは出来ず、学級での話し合いや、作文の中にも〔中略〕さまざまな不安が出されています。／しかもこのような状態がきょう明日中に何とかなるといふものでないことを考えるとき今ほど「子供の教育」を真剣に考えねばならないときはないと思われまふ。／張りを失ないかけ、人口が漸減する地域社会の中にあつても、家庭が最も血のつながりの濃い集団として、又最も自然で莫大な時間を用意された教育機能集団としての役割を果たし、一方で学校がその設備と人員により意図的、計画的な教育機関として、真に機能を果たすことが今ほど大切なときはないということです。（『中学校だより』1970.3.10、〔 〕は引用者注）

この教頭は、のちの振り返りのなかで、尺炭中の教員たちが、不安を抱える生徒たちに「せめて学校だけは、いつもどおりに」という方針で接したと述べている（嶋崎・笠原編 2016）。

### 3 中学生の閉山に対する受け止め

元教頭が述べるように、閉山前の学校では、「閉山」は「あえて正面きって話題に」せず、「避け続けて来た」。しかし、閉山に対する「不安」や「おそれ」が生徒たちの間に長くあったと述べている。生徒たちは閉山を迎え、どのような不安を吐露し、閉山をどのように受け止めていたのだろうか。閉山2週間後に書かれた作文にその詳細が記されている。

まず、彼らは直接関わりのない炭鉱（父親の職場、エクソシステム）の閉山を、いつから、どの程度予想していたのかについてみていく。具体的な時期として最も多くあげられているのが「1969年（昭和44年）」（閉山前年）であり、33人にのぼる。そのうち18名は、同年の秋以降と記している。ある生徒（ID: 231038、3年男子、父職：坑外助手）は、1969年末に「テレビ、新聞、ラジオなどのマスコミ機関が、さわいできた」と述べている。他方、さらに前から閉山を予感していた生徒もいた。閉山の「2、3年前」（1967～68年）とする者や「そうとう前」とする者、「炭鉱はいつか閉山するとわかっていた」という者など、炭鉱の将来が長くないと予想していた。閉山はいずれ生じると考えていた生徒が多いことがわかる。

ただし、そうした生徒たちも閉山はまだ先のことであると捉えていた。「ずいぶん前」に閉山のうわさを耳にしたという生徒（232006、3年女子、父職：坑内直接）は、つぎのように述べる。

まだ当分先の事という気が、心の一番深い所では、しっかりとおかれてあつた。茂尻鉱が閉山〔雄別炭硯社、1969年7月〕してもその気持は変らなかつた。／私は尺別で生まれ育

ったので尺別しか知らない。／その尺別がそう簡単につぶれるなんてなんとなくおかしい気がした。(〔 〕は引用者注)

彼女のように尺別に生まれ育った生徒を中心に、閉山のうわさを信じないようにしていたことがわかる<sup>62</sup>。こうした捉え方は、前章でみたように、学校において炭鉱や石炭産業の実態を知る機会が少なかったことと関連する。ある生徒は(231013、3年男子、父職：坑内間接)、閉山のうわさを「3年前」(1967年)に聞いていたが、「先生方に、『絶対に閉山はしませんから安心してください。』という事を聞かされていたので、かなりのほほんとして暮らしていた」(傍点ママ)。また、別の生徒(242013、2年女子、父職：坑内助手)は、中学1年時(1968年)の社会科で「組合のおじさん」から「まいぞうりょうが」「だいたい多いとおしえてもらった」ため、閉山に対する危機感を抱いていなかった。閉山前年に完成した生活館や道路も、彼らにとって「閉山はまだ先」と思える根拠となった。「こんなに良い道路もできたし、生活館だって立派なのができる。友達と一緒に歩いていると尺別は閉山になんかならないな」といっていた。もちろんなつてほしくなかった(242019、2年女子、父職：坑内直接)。

したがって、彼らにとっての閉山は、予想された出来事であると同時に、「受け入れられない」出来事でもあった。作文に表れた閉山に対する受け止めに学年別に分類すると、表4-2のようになる。「受け入れられない」は、いずれの学年も5割近くを占める。「こんなにも早く閉山するとは、思いませんでした」(242013、2年女子、父職：坑内助手)、「まさか自分が、閉山の立場に立つなんて全然思っていませんでした」(252005、1年女子、父職：坑内直接)など、中学在学時の閉山にショックを受けていた。

一方、「受け入れられた」も4分の1を占めており、予想された閉山ゆえに、彼らに対する衝撃が弱まったことがわかる。ある生徒は「閉山と決まったときは、別に何とも感じなかった。それは、だいぶ前から閉山になるとかいつていたから」(232025、3年女子、父職：不明)と述べている。なかには「炭鉱に閉山はつきもの」(241031、2年男子、父職：不明)、「石炭をとればとるほど赤字が多くなる。だから閉山と言う事になる」(231047、3年男子、父職：関連会社)など、閉山の理由を整理して、受け止めようとする生徒もいた。

そして、上記2つに該当しない「どちらでもない」が1割程度を占める。「実感がわかない」という作文や、閉山直後のため、閉山について「深刻に考えてもみななかった」(232029、3年女子、父職：不明)という作文がみられる。父親の職業が炭鉱以外(教員や国鉄など)の場合、「私の家庭にはそう影響はない」(232013、3年女子、父職：教員)と、閉山を間接的出来事であると捉えている。また、卒業と重なった3年生は、閉山の有無にかかわらず

<sup>62</sup> ほかに「茂尻が閉山になったときもこの炭鉱はどうにかなるだろうと思っていた」というように、閉山前年になつてもうわさを信じようとしなかった(242020、2年女子、父職：不明)。対照的に1966年に転校してきたという生徒(231037、3年男子、父職：坑内直接)は、「そのころから尺別閉山のうわさが少々きかれていた。それから中1、中2とあやしい年が過ぎ去っていったと閉山を意識していたようすがわかる。

友人らと離別するため、「炭鉱閉山と言っても直接私にはひびかない」（232014、3年女子、父職：坑内助手）と述べている。

閉山に対する受け止めは、同一の作文に複数記されている場合もある。「受け入れられた」、「受け入れられない」、「どちらでもない」を2つ以上併記する生徒は2割におよぶ。とくに、「受け入れられない」、「受け入れられた」と相反する内容がしばしば併記されているように、当時の彼らの心境は複雑であった。彼らは、家族や学校、地域の変化に言及しながら、自らの考えや心境を作文に表していた。次節以降で、その詳細についてみていく。

表 4-2 閉山に対する受け止め（複数回答として分類、%）

		N	受け入れ	+受け入れ			受け入れ	+どちらで	
			られない*	られた**	どちらでもない***	られた	られた	もない	もない
全体	男	97	47.4	12.4	3.1	1.0	26.8	3.1	8.2
	女	95	47.4	12.6	5.3	1.1	24.2	4.2	12.6
	合計	192	47.4	12.5	4.2	1.0	25.5	3.6	10.4
1年生	男	6	50.0	0.0	16.7	0.0	0.0	0.0	16.7
	女	9	44.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	合計	15	46.7	0.0	6.7	0.0	0.0	0.0	6.7
2年生	男	33	48.5	21.2	3.0	3.0	36.4	3.0	9.1
	女	36	50.0	13.9	2.8	2.8	30.6	2.8	8.3
	合計	69	49.3	17.4	2.9	2.9	33.3	2.9	8.7
3年生	男	58	46.6	8.6	1.7	0.0	24.1	1.7	6.9
	女	46	50.0	15.2	8.7	0.0	26.1	4.3	19.6
	合計	104	48.1	11.5	4.8	0.0	25.0	2.9	12.5

\*「信じられない」「ショック」「残念」「不安・悩んだ」「悲しい」など

\*\*「いつか閉山すると思っていた」「仕方がない」「やはり・いよいよ」「不安・ショックはない」など

\*\*\*「実感がない」「わからない」「自分とは関係がない」など

出典：作文分析結果にもとづき作成。

## 第2節 閉山直後の家族、学校、地域に対する認識

### 1 家族、学校、地域に対する認識の全体像

中学生は、閉山から10日後の家族や学校、地域の状況をどのようにみていたのだろうか。この点の解明は、彼らの生態学的環境に関する認知を把握するうえで重要である。また、ここでは家族に関する言及から、閉山直後の家族関係にどのような変化があったのかについて把握する。

家族、学校、地域に関する語は、キーワードとして各作文で頻出している。KH Coderを

用いて、頻出上位 30 の語をみると (表 4-3)、「家」(76 回、40%)、「父」(54 回、28%)、「家庭」(35 回、18%) など「家族」に関する語、「学校」(109 回、57%)、「友達」(77 回、40%)、「中学校」(44 回、23%) など「学校」に関する語、そして、「炭鉱・炭砒」、「尺別炭砒」(38 回、20%)、「山」(30 回、16%) など「地域」に関する語が頻出している。また、語と語の関連の強さを示す共起ネットワークをみると (図 4-1)、「家族」「学校」「地域」の語が相互に関連しつつ「不安」や「心配」、「寂しい」などの心境とともに述べられていることがわかる。

さらに、学年別 (1・2 年生、3 年生) にみると (図 4-2)、1・2 年生は「転校」と「友達」との「別れ」、その後の「勉強」に関する「心配」などがあげられる。また 3 年生は、間近に迫った「卒業」とその後の「就職」あるいは「高校」への進学などが特徴的な語となっている。このように、閉山直後に書かれた作文には、中学生が見た周囲の状況や将来展望、学年固有の問題等が記されていることがわかる。

表 4-3 頻出上位 30 語<sup>63</sup>

順位	抽出語	出現数	出現率	順位	抽出語	出現数	出現率
1	学校	109	56.8	16	炭鉱	41	21.4
2	自分	81	42.2	16	悲しい	41	21.4
3	友達	77	40.1	16	問題	41	21.4
4	家	76	39.6	19	就職	39	20.3
5	不安	72	37.5	20	決まる	38	19.8
6	生活	61	31.8	20	尺別炭砒	38	19.8
6	卒業	61	31.8	20	住む	38	19.8
6	炭砒	61	31.8	23	別れる	36	18.8
9	父	54	28.1	24	家庭	35	18.2
10	寂しい	50	26.0	25	高校	34	17.7
11	心配	49	25.5	26	気持ち	32	16.7
12	勉強	46	24.0	26	新しい	32	16.7
13	中学校	44	22.9	26	町	32	16.7
13	離れる	44	22.9	29	見る	31	16.1
15	仕事	42	21.9	30	山	30	15.6

出典：作文分析結果にもとづき作成。

<sup>63</sup> 前処理として、「尺別炭砒」や「卒業式」といった複合語を登録・強制抽出し、「たくさん」「いろいろ」等の副詞や作文のタイトルに含まれる「閉山」「思う」などの名詞・動詞を使用しない語に指定したうえで、頻出語を算出している (1つの作文に同じ語が何度も出現する場合は1回とカウント)。

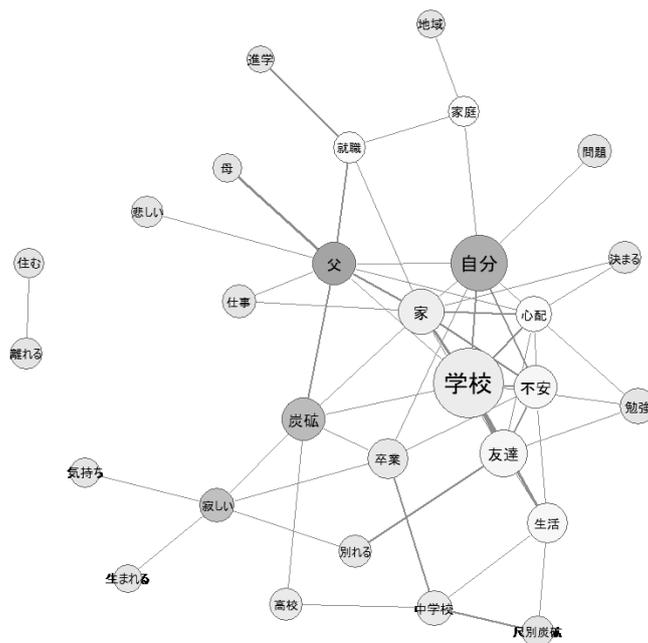


図 4-1 作文の頻出語共起ネットワーク（全体）<sup>64</sup>

出典：作文分析結果にもとづき作成。

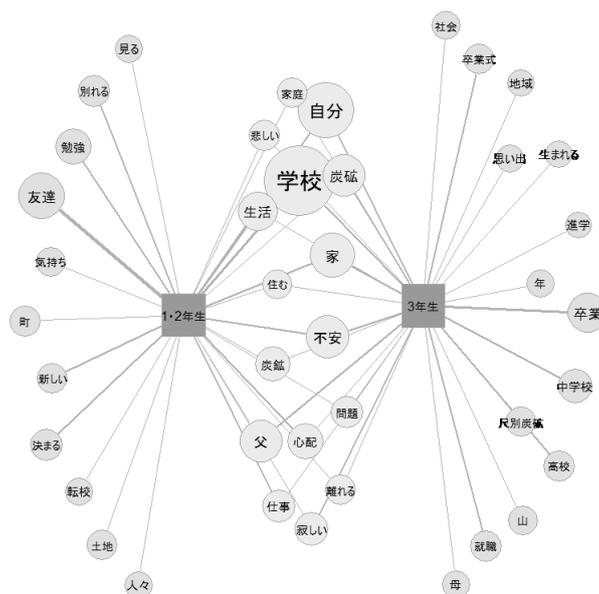


図 4-2 作文の頻出語共起ネットワーク（学年別）<sup>65</sup>

出典：作文分析結果にもとづき作成。

<sup>64</sup> 抽出語は関連性の強さを示す Jaccard 係数が 0.15 以上のものだけを描写している（段落単位）。強い共起関係ほど太い線、出現数の多い語ほど大きい円で描写されている。

<sup>65</sup> Jaccard 係数 0.23 以上のものだけを描写している（段落単位）。

これらの頻出語からは時制が判別できないため、全作文を解読し、閉山直後の「家族」「学校」「地域」に関する語の出現率を学年・性別に示した（表4-4）。どの学年も「家族」に関する記述が最も多いが（4割）、「学校」や「地域」に関する記述も3割前後におよんでいる。また、複数の項目に言及する割合も大きく、周囲の状況を総合的に捉えていたことがわかる。以下では、それぞれの項目についてどのように認識・記述されているのかみていく。

表4-4 閉山直後の周囲の状況に関する語の出現率（複数回答として分類、%）

	N	家族	学校			学校	地域		
			学校	地域	学校+地域		学校	地域	
全体	男	96	40.6	9.4	15.6	4.2	19.8	6.3	34.4
	女	91	45.1	17.6	14.3	6.6	33.0	13.2	29.7
	合計	187	42.8	13.4	15.0	5.3	26.2	9.6	32.1
1年生	男	6	50.0	0.0	33.3	0.0	0.0	0.0	50.0
	女	9	44.4	33.3	11.1	11.1	55.6	11.1	11.1
	合計	15	46.7	20.0	20.0	6.7	33.3	6.7	26.7
2年生	男	33	33.3	18.2	12.1	9.1	30.3	12.1	30.3
	女	36	61.1	27.8	13.9	11.1	38.9	16.7	27.8
	合計	69	47.8	23.2	13.0	10.1	34.8	14.5	29.0
3年生	男	57	43.9	5.3	15.8	1.8	15.8	3.5	35.1
	女	46	37.0	6.5	15.2	2.2	23.9	10.9	37.0
	合計	103	40.8	5.8	15.5	1.9	19.4	6.8	35.9

出典：作文分析結果にもとづき作成。

## 2 家族に対する認識

まず、「家族」について言及がある作文をみていく。閉山直後の中学生は、父親の離職と再就職、母親やきょうだいの対応をどのようにみていたのだろうか。「家族」に言及のある作文のうち、家族員別の割合を学年・性別でみると（表4-5）、最も言及されているのが「父」、ついで「母」、「きょうだい」となっている。とくに2年生の女子は、「父」「母」「きょうだい」いずれも最も多く言及しており、閉山直後の家族を全体的に観察していたことがわかる。

表 4-5 家族員の出現率（複数回答として分類、%）\*

		N	父	母	きょうだい
全体	男	96	24.0	11.5	1.0
	女	91	31.9	19.8	7.7
	合計	187	27.8	15.5	4.3
1年生	男	6	0.0	0.0	0.0
	女	9	33.3	11.1	0.0
	合計	15	20.0	6.7	0.0
2年生	男	33	12.1	12.1	0.0
	女	36	44.4	27.8	13.9
	合計	69	29.0	20.3	7.2
3年生	男	57	33.3	12.3	1.8
	女	46	21.7	15.2	4.3
	合計	103	28.2	13.6	2.9

\* 「両親」、「親達」等の表現は「父親」、「母親」両方に分類

出典：作文分析結果にもとづき作成。

表 4-6 家族を表す語と関連の強い語の一覧

家族		父親		母親		きょうだい	
関連語	Jaccard 係数	関連語	Jaccard 係数	関連語	Jaccard 係数	関連語	Jaccard 係数
1 家	0.23	1 家	0.21	1 父	0.21	1 母	0.18
2 仕事	0.14	2 母	0.21	2 家	0.16	2 進む	0.11
3 炭砵	0.14	3 炭砵	0.16	3 困る	0.11	3 かわいそう	0.11
4 心配	0.13	4 仕事	0.15	4 帰る	0.11	4 一緒	0.10
5 学校	0.12	5 就職	0.11	5 仕事	0.11	5 父さん	0.10
6 不安	0.10	6 年	0.11	6 弟	0.11	6 家	0.08
7 就職	0.10	7 心配	0.11	7 就職	0.10	7 会社	0.07
8 自分	0.10	8 働く	0.10	8 生活	0.10	8 うわさ	0.07
9 炭鉱	0.10	9 学校	0.10	9 兄	0.09	9 父	0.07
10 生活	0.10	10 不安	0.10	10 不安	0.09	10 移る	0.07

数値は Jaccard の類似性測度（関連が強いほど 1 に近い）

出典：作文分析結果にもとづき作成。

## (1) 父親

全体のおよそ3割におよぶ「父」については、前述の共起ネットワーク（図4-1）で示されているとおり、「炭鉱」、「家」、「母」という語と関連して記述されている。「父」に類似した表現に「父親」というコードを付与したうえで<sup>66</sup>、関連する語の一覧をみると（表4-6）、上記のほか「仕事」、「就職」などがあげられる。中学生は、父親の解雇にショックを受けていた。炭鉱労働者として長年働いてきた父親の心境を思い、心配する作文がみられる。

私の父は三十数年もの間、炭鉱に働いてきました、その父があつた「このたび会社解散のためあなたを解雇いたします」と書いてある、たった一枚のあの紙で職を失ったわけです。ものすごくむごい話しではないでしょうか。私の父はものすごく意志の強い人です。だから、平気な顔をしているのが私にはわかります。父はこの仕事にもものすごく愛着を感じているようです。だから父の気持が私にはいたいほどわかります。（231016、3年男子、父年齢等不明）

そして、彼らが最も心配していたのは、父親の再就職についてである。中学生とくに、「年」という語との関連が強くなっているように、父親の年齢や健康状態と再就職活動を結びつけて述べる作文がみられる。父親が高齢の場合、中学生は、父親の再就職が難しいのではないかと予測していた。つぎの作文はその典型である。

私の家では、父が50才なので良い仕事がなかなかみあたらず非常に親達はこまっているようです。〔中略〕今以上に良い条件の所はあると思わないけれど、それでもいいなら行き先がはっきり決まっていきたいです。（232026、3年女子、父49歳・坑外、〔 〕は引用者注）

父は身体が弱いし、もう年ですからむりな仕事はできないのです。（232047、3年女子、父42歳・坑外）

また、より具体的に再就職先の産業について言及する生徒もいた。つぎの生徒（既出、231013、3年男子、父47歳・坑内間接）は、父親をはじめ大人たちの話を聞いて、父親が他炭鉱に再就職する可能性を示唆している。

父の話しでは、年が47才なので、他の企業ではあまり<sup>(ママ)</sup>観励〔迎〕されないそうだし、「炭鉱が一番暮しやすいんだ」と言っているおやじさんもいたが、これからの石炭企業はさびれて行くだけのように思える。政権がうつらん限り。（〔 〕は引用者注）

<sup>66</sup> コーディングに用いた語は、つぎのとおりである。「父」「親父」「父さん」「お父さん」「父親」「おやじ」「オヤジ」「とうさん」。

この生徒が述べるように、中学生は石炭産業が衰退しているという認識を持っていたため、父親の炭鉱復帰は、彼らにとって望ましい再就職先ではなかった。この点は、父親が比較的若年であると捉えている生徒の作文に顕著に表れている。父親（鉱員・坑内直接）が41歳であるというつぎの生徒は、石炭産業の趨勢と父親の年齢を考慮して、閉山を産業転換・道外転出の好機と捉えている。

炭鉱などは、将来性が強くあるわけでもないし、このまま続くと父も年をとり、しゅう職先にも、こまるわけです。〔中略〕やはりこれでよかったんだと思います。いつかは、こうなるとわかっていたんですから。〔中略〕私の家は、たぶん、尺別のあった北海道から離れて行くことでしょう。（232055、3年女子、父41歳・坑内直接、〔 〕は引用者注）

このほか、中学生は、炭鉱離職者に固有の条件である炭鉱労働の特殊性や学歴の低さに言及して、父親の再就職（とくに産業転換）が難航するだろうと予測していた。

私達の父母、技術のない人々は、どこでどのような仕事を、するのだろうか。流れ作業の安い賃金で働くのだろうか。（242016、2年女子、父44歳・坑外助手）

教育が完全でないお父さん方も炭鉱の仕事ではよかったものの、他の良い職を見つけることは、とても大変であると思います。（242012、2年女子、父45歳・坑外）

このように、閉山直後の中学生は、父親の年齢と健康状態、炭鉱労働者の特性などを念頭に置いて、再就職活動や住居探しの様子を詳細に観察し、作文に表していた。父親が高齢の場合、産業転換の困難と炭鉱復帰、再就職の遅れなどを予測し、父親が若年の場合、早期の産業転換と道外転出等を予測していた。第1章で確認した炭鉱離職者の広域就職を規定するミクロな条件（離職者個人の年齢やライフステージ、炭鉱での職位・職種など）を彼らも認識していたことが読み取れる。

## （2）母親

「母親」<sup>67</sup>は「父」、「家」、「弟」、「兄」などとともに言及され（表4-6）、それぞれを心配する存在として記されている。高校入試を控えた3年生（231018、男子）は、子どもが親を心配する以上に親が子どもを心配していることを知り、「心にガツンとくるものがあった」と述べている。彼は「ひまさえあれば、おふくろは『高校だけは、入ってちょうだい。』と耳にたこができるくらい言われた」という。

「母親」という語が「就職」や「生活」について「話す」、さらには「困る」「不安」とい

<sup>67</sup> コーディングに用いた語は、つぎのとおりである。「母」「母さん」「お母さん」「おふくろ」。

った語と共起しているように、中学生は、父母が求人条件について具体的に話し合っているようすを観察していた。以下の生徒が述べるように、どの家庭でも炭鉱以上に好条件の求人を見つけることは難しく、彼らは不安に思っていた。

社たくはどうだ、給料はいくら、会社の大きさは、しょうらいせいは、仕事の内容は、などそんな話をいっしょうけんめいしている、おやじとおふくろ。おれもそんな話をきくとこんどいくところはどんなところだろういいところだといいなあと、ときどき不安になってくる。(241010、2年男子)

家庭の中で父や母が閉山になってからの今後の生活を考えて、職を考えたりしています。ただどこも炭鉱のように賃金が高くありません。その中で炭鉱町にいるからこそ住たくのお金などもとられません。都市に出ればそういきません。そんなようなことを毎日父母たちが話すのです。とてもじゃないけどとてもいやな気持ちです。(242042、2年女子)

さらに、中学生は、父母をはじめ家族関係が悪化しているようすを捉え、作文に表している。再就職先や転出先に関する母親の要望が父親のそれと異なる場合や父親の再就職活動が芳しくない場合、家族内の雰囲気が悪くなり、夫婦喧嘩に発展することもあったと述べている。

ぼくがうちにかえってきても家の空気はおもわしくない。〔中略〕家にかえたらいつものように父と母がけんかをしておもしろくない。いつも母は「閉山になるのだからあまりむだずかいするんじゃない」という。(231070、3年男子、父47歳・坑内直接)

家ではどこ<sup>(ママ)</sup> いったら良いかもきまっていませんでした。おとうさんもこれをき会に炭鉱をやめたいといっていますからよけい働く場所をきめるのにくろうしています。家の中は意見のくいちがいから暗い感じはうけるし、学校からかえってきてもなんとなくむつすりしている。いままでおかあさんとおとうさんがふうふげんかおしても私<sup>(ママ)</sup> し がてきとうに「子供の前で」とかなんとかいえば、わらいに変わるのに今は家の中もだまって家にいるのがいやなくらい。(242028、2年女子)

このように、閉山に伴う父親(夫・世帯主)の離職は、母親(妻)、子どもにとって衝撃であった。とくに、炭鉱労働者家族は、世帯主である父親の稼ぎだけが働き、母親は家庭役割を担う「稼ぎ手一人家族世帯」が一般的であったため(嶋崎 2020c: 82)、なおさらであった。父親の再就職の見通しが立たないことは、家族に不安をもたらし、家族関係の悪化につながった。中学生は、そのようすを見て不安を抱き、学校の作文に記していた。作文の性質上、父母を心配する内容が大半だが、なかには父母を批判する作文もみられる。つぎの生

徒（241004、2年男子、父38歳・坑内直接）は、「都会」への転校を予期したうえで、父母への批判を教員に訴えている。

尺別閉山についても今年になってわかっていたんでなくて、去年だって、あぶないと言うこともあったのに、父母は何も考えてはいない。ただ閉山になってからあわてている。ばかみたいなことをしていたんではだめだったのであった先生！！

### （3）きょうだい

そして、「きょうだい」<sup>68</sup>に関する記述は、父母に関する記述に比べて少ないが、2年生の女子では、1割程度が言及している（表4-5）。主に「母」「父」など家族員と関連づけて出現すると同時に、「かわいそう」など、進路変更や転校を余儀なくされるきょうだいに対する感情などを記している（表4-6）。つぎの2年生女子は、再就職先を探す兄が求人条件と自身の希望、父親の希望との間で板挟みになっていた様子を述べている。彼女もまた父親の年齢について言及している。

私の家にも、仕事関係<sup>(ママ)</sup>なパンフレット<sup>(ママ)</sup>も、いくつか来ています。その中で、良い仕事は、あるのだけれども、お兄ちゃんと父さんの年の関係で決まってくるんです。お兄ちゃんは、父さんといっしょに行くのか、一人で行くのか、わからない。お兄ちゃんが、大きい会社に、入れば、とうさんも入れると思います。でもやはり大きな会社というと、東京方面に行かなければ、なりません。でも兄ちゃんは、東京方面には、あまり気が進まないという。

（242015、2年女子、父46歳・坑内直接）

また、転校を余儀なくされる弟妹を気遣う作文も見られる。中学生は、前述のように、再就職活動をする父親の様子や父母の会話から求人条件の詳細を知っていた。一方、まだ幼い弟妹の「転校したくない」といった率直な要望も理解していたため、その間で「たまらなく」なっていた。

私も弟も、あまり大きな学校にはいりたくないといって父にいいましたが父は、小さな学校に行っても父さんの仕事がないからだめだと言った。その点では、私も理解しました。でも、まだ弟は小さな学校に行きたいなと言っている。私はそういう話をきくとやもたまらなくなりました。（242033、2年女子、父41歳・坑外）

以上のように、閉山直後の中学生は、最も身近な父親・母親・きょうだいの言動を具に観察し、それぞれが抱えている不安や悩み、今後に対する要望などを捉え、作文に記していた。

<sup>68</sup> コーディングに用いた語は、つぎのとおりである。「兄」「兄ちゃん」「兄たち」「姉」「弟」「妹」「兄弟」「弟妹」。

とくに、2年生の女子は、父親・母親・きょうだいのそれぞれに言及する傾向がみられた。いずれの学年・性別も父親の様子、再就職活動の状況が最大の関心事であり、父親の年齢に言及しながら、再就職先の条件や地域を予想していた。

### 3 学校に対する認識

一方、中学生は、家族だけでなく、二次的な行動場面である学校と仲間集団も詳細に観察し、作文に記していた。共起ネットワーク（図4-1）ならびに関連の強い語の一覧（表4-7）からわかるように、「学校」<sup>69</sup>は尺別炭砒の閉山と関連した語として出現し、「不安」や「心配」な事柄・心境とともに書かれている。前述の通り、閉山前後の尺炭中では、教員たちが通常通りの学校・学級運営を心掛け、生徒たちの不安を緩和させようとしていた。「学校へ来たら、そんなに話しをしない。学校にいたら[閉山を]わすれているのでいい」（242025、2年女子、父職：職員、〔 〕は引用者注）という生徒もいたが（ほか7名）、閉山に関する話題でもちきりだったという生徒の方が多かった（19名）。とくに「友人」との話題、転校や卒業に関する語とともに言及されている（表4-7）。

いままでの友人とのわだいがらっとかわり「閉山」というわだいになってしまいました。こうゆう話題が私達にとってはなされるということはかんがえてもみませんでした。（232018、3年女子、父43歳・坑内間接）

表4-7 学校を表す語と関連の強い語の一覧

学校		友人		教員	
関連語	Jaccard 係数	関連語	Jaccard 係数	関連語	Jaccard 係数
1 不安	0.15	1 別れる	0.22	1 生徒	0.11
2 卒業	0.15	2 学校	0.21	2 中学校	0.11
3 自分	0.15	3 不安	0.15	3 友達	0.10
4 家	0.15	4 寂しい	0.13	4 育つ	0.10
5 心配	0.13	5 家	0.13	5 女子	0.10
6 生活	0.13	6 新しい	0.11	6 人々	0.09
7 炭砒	0.13	7 見る	0.11	7 尺別炭砒	0.09
8 勉強	0.11	8 勉強	0.11	8 悩む	0.09
9 寂しい	0.11	9 炭砒	0.11	9 中学	0.09
10 尺別炭砒	0.11	10 心配	0.10	10 見る	0.09

出典：作文分析結果にもとづき作成。

<sup>69</sup> コーディングに用いた語は、つぎのとおりである。「学校」「中学校」「中学」「生徒」「中学生」「校舎」「クラス」「学生」「教室」「卒業式」「友人」（「友達」「友だち」「仲間」「友人」「友」「親友」）「教員」（「先生」「教師」）。

また、前述の家族に関する内容と同様に、3年生よりも1・2年生の方が、男子よりも女子の方が学校の状況について言及する割合が大きかった（表4-4）。卒業まで1年以上を残した1・2年生の主な話題は転校についてであった。「とかいへいったら学校でも、なにかと勉強のきょうそうりつがはげしいと友達などが話します」（242021、2年女子、父職：不明）など、転校先の学校に関するうわさが流れていた。さらに、1・2年生のなかには、教員に対する不満を述べる生徒もいた。ある学級では、教員が閉山について話したり、生徒たちに閉山について考えさせる時間が設けられていた。つぎの生徒（242004、2年女子、兄職：坑内助手）は、教員の対応について詳細に記している。

学校では、3年生、の先生の話だと、じゅうけん〔受験〕をひかえているのに、よけいなしんぱいをかけないようにと、せんせいのほうでしんぱいし、閉山の、ことなどすこしもださないそうだが、私たちは、あと一年あるからといって、いつごろまで学校があって、いつごろまできゅうしょく、をつづけ<sup>(ママ)</sup>れるなど、先生のほうでおかまいなしにいう。そんなとき、閉山しなければ、こんないやなおもいをしなくてすむのにと思った事もあった。閉山、ということで一番いやだと思ったときははらが立った。それは、HRの時に、閉山ということについて班で話し合っ、はっぴょうすれ〔しろ〕といったときであった。それは、一度話し合わなければならないかもし<sup>(ママ)</sup>らないどもきゅうに、話し合えといわれたとき自分でもなんではらが立ったのかわからないくらいにはらが立った。（〔 〕は引用者注）

一方、卒業を控えた3年生は、友人の進路について関心を持っていた。「閉山という<sup>(ママ)</sup>摩の手によって、自分の進路を変えなければならない人々もいるはずである」（231011、3年男子、父35歳・坑内直接）と推測する生徒もいた。こうした不安定な状況は、クラス的生活態度や雰囲気悪化につながった。原野の子どもであるつぎの3年男子（231055、父職：原野）は、学級の様子について、つぎのように記述している。

学級でもおちつかず、毎日が不安なゆう<sup>(ママ)</sup>つな毎日をおくっています。そのために生活がみだれてきています。気持ちがいらだってきげんが悪くなり人にやつあたりする人もいることだろう。それは生徒だけでなく先生がたにもあり<sup>(ママ)</sup>ゆることだと思ひます。

このように、生徒たちは、閉山直後の学校で、教員たちが思う以上に不安を覚えていた。前述のように、生徒たちは早くから「閉山」を予感していたが、家庭と同じく学校でも「閉山」と向き合わなければならなかった。言うまでもなく、作文の執筆自体も「閉山」と向き合う機会となった。前述の3年男子（231055）は、保健体育の時間を急遽作文の執筆（HR）に変更した教員に対し、「へんだとおもいます」と批判している。

生徒たちは、尺炭中の閉校を予想し（20名）、そのほとんどが母校の喪失を残念に思っていた。3年生は「この学校最後の卒業生として立派に卒業式やりたい」（231042、3年

男子、父職：国鉄）と意気込み、1・2年生は中学生活途上での友人や教員との別れを残念に思っていた。大半の生徒は、学校での思い出を懐かしむ内容とともに記述していたが、なかには尺炭中の否定的側面を強調する生徒もわずかにいた。職員（本社採用）の子どもで、すでに作文執筆時点で父親の転出先が決まっていたという生徒（232031、3年女子、H-1cさん）は、「尺炭教育」をはじめとする尺炭中の教育方針について「1つの思想にかたまっている学校」として、尺炭中に行かなくなることを「ひじょうにうれしい」と述べている。

このように中学生は、第二の行動場面である学校においても、友人や教員の様子を観察して作文に表し、「閉山」と向き合っていた。前章でみたように、閉山前の学校は、「一人はみんなのために、みんなは一人のために」というスローガンのもと、集団意識や平等意識を醸成する場であったが、閉山後は出身階層や父親の年齢・健康状態等による進路・転出先の違いを目の当たりにする場となっていた。さらに、閉山を機に、学校の教育や思想を相対化し、「炭鉱の学校」の特殊性に気づく生徒もいたのである。

#### 4 地域に対する認識

中学生は、「地域」の様子も作文に記し、閉山を実感していた。「地域」<sup>70</sup>は「学校」、「家」など、上記の項目と関連して出現すると同時に、「離れる」、「不安」、「寂しい」といった語とともに記されている（表4-8）。彼らが作文を執筆した3月中旬は、まだ住民の転出も少なく、「人々の生活は以前とは変りなく」「それよりものんびりと」（242043、2年女子、父職：坑内間接）とみえたが、多感な彼らは周囲のわずかな変化を察知し、地域の衰退を認識していた。「尺別全体が閉山ムードに囲まれてしまっている」（231050、3年男子、父職：坑内直接）、「前のようなさかんさがみられない。何となく、さみしさがどこからなくかんじてくる」（231058、3年男子）など抽象的な表現のほか、つぎの生徒（232007、3年女子、父職：関連会社）のように、商店や汽車などの具体的な変化に言及する者もいた。

ちよっと店にでもいけば、はっきり現実をみせつけられる。割り引きく〔割り引き〕で、どの店も品数は減り、買い手がみつかるかどうかともむずかしい中で「売家」のほり紙が出されている。／店ばかりではなく道を歩いていても緊張した感じを受ける。トラックは荷台に山もりの石炭をつけて、走り去る。トラックで石炭を運ぶぐらいだから、当然汽車は、人を運ぶだけ。今では汽車の荷台に石炭がつまれ、いくつもいくつも連なっているのを、学級の窓から数えることもできない。（〔 〕は引用者注）

<sup>70</sup> コーディングに用いた語は、つぎのとおりである。「尺別」「地域」「地」「町」「炭山」「山」「ふるさと」（「故郷」「ふる里」「古里」「ふるさと」「郷里」）。

表 4-8 地域、石炭産業・社会全般を表す語と関連の強い語の一覧

地域						石炭産業・社会全般		
全体			ふるさと					
関連語	Jaccard 係数		関連語	Jaccard 係数		関連語	Jaccard 係数	
1	学校	0.21	1	寂しい	0.10	1	炭鉱	0.10
2	友達	0.15	2	生まれる	0.10	2	石油	0.09
3	不安	0.14	3	住む	0.09	3	自分	0.09
4	家	0.13	4	山	0.08	4	自身	0.09
5	離れる	0.12	5	悲しい	0.07	5	卒業式	0.09
6	卒業	0.12	6	失う	0.07	6	問題	0.09
7	寂しい	0.12	7	運命	0.07	7	石炭	0.08
8	生活	0.12	8	遠い	0.06	8	思い出	0.07
9	自分	0.12	9	最後	0.06	9	古い	0.07
10	炭鉱	0.11	10	尺別炭鉱	0.06	10	生活	0.07

出典：作文分析結果にもとづき作成。

この描写は、指定商やインフラに関する当時の地元紙記事の内容と合致するとともに、より詳細かつ鮮明に記されている。炭山の商店や自動車は、中学生にとって身近な存在であったため、わずかな変化も閉山を実感するきっかけになっていたことがわかる。

また、中学生は、近隣住民の会話などから不安な様子を察知し、作文に記していた。前章でみたように、子どもたちは、炭住区での生活で近隣の大人たちとの関わりがあったため、閉山直後のわずかな変化に敏感であった。「ど（こ）かだれかと合（<sup>マツ</sup>）（会）うといつも言うことは同じ、これからどうやってくらしていったらいいのか」と、再就職と転出について話し、「とてもみんな、不安な気持ち」でいたという（232056、3年女子、父職：不明）。そして、炭山に「生まれ」育てられてきた中学生は、近い将来、炭山が崩壊・消滅すると予想し、「ふるさと」を「失う」ことについて「寂しい」「悲しい」と表現していた（表4-8、41名）。とくに、卒業と進路選択を目前に控えた3年生は、炭山を進路選択の「足場」と捉え、閉山のタイミングの悪さを指摘している。

これから、社会へ又、高校へ、と自分の進路をたどっていかうとする時に足場がしっかりとしていなければ、そう考えるともう少し後に閉山してほしかった、せめてぼくたちが仕事につくまで、授業に身がはいるまで残ってほしかった。（231036、3年男子）

多くの生徒は、地域崩壊を前に、炭山に対して肯定的な評価をしていた。彼らは、転出先となるであろう都会と比べて、尺別炭山は「自然豊かなところ」であり、「活気があった」と述べている。一方、学校に関する言及と同様に、閉山を機に炭山の否定的側面を指摘する生徒もいた。とくに、都市への転出を予測する生徒やすでに決まっていた生徒は、都市と対照的な尺別炭山の閉鎖性を指摘している。尺炭中について「1つの思想にかたまっている」と評価した前述の生徒（232031、3年女子、H-1cさん、父親・本社職員）は、尺別炭山に

ついてつぎのように述べている。

実にちっぽけ。実にいなか。山に囲まれ、私達の楽しむ場所もないへんびな所、尺別は頭の中をふるぼけさせ、いなか者にしてしまった。緑があるとか、のびのびしているとか、人は言うけど、私はデパートがあつたり、音楽会に行けることのほうが、魅力がある。

## 5 産業・社会に対する認識

さらに、尺別炭山を越えて石炭産業、政治、社会全般といったマクロシステムにまで言及する生徒もいた<sup>71</sup>。とくに、まもなく「卒業式」を迎え、社会に出る生徒を中心に、「自分」の将来や社会「問題」に関する内容を記している（表4-8）。つぎの生徒（231028、3年男子、父53歳・坑外・原野）は、閉山の理由を社会や時代と関連づけて考え、さらに、中学校を卒業する自分たちの位置について考えている。

閉山になるとは信じられなかった。しかし現実に閉山をした。これもしかたがないと思う。エネルギー革命のためだと思う。その中で私達卒業生約125名は、3月13日金曜日に、母校をさる。おそらくこれが最後の卒業式になると思う。みんな、色々な思い出をだいでさるのだ。あと50時間くらいで学校に別れをつける。私が作文を書いている間にも時間はどんどん流れてゆく。これは、なんともいえない気持だと思う。1970年は色々な年だ。6月にひかえている安保のほか色々ある。私にとってもだいじな年だ。

また、前述の「家族」に関する作文、とりわけ「父親」に関する作文でみたように、父親の再就職をめぐる困難や労働者の弱さ等に言及している生徒を中心に、政府や社会全般に対して疑問や不満を述べている。つぎの生徒は、閉山の原因を政府に求め、訴えかけている。

なにも石油がやすいからといって輸入し／日本でとれる石炭を使わないで／山をつぶすことはないと思う。／住居も少ない日本、その中の都市には何千人、何万人という人が行きせまい土地で暮らさなければならない。／政府はどれだけ国民を苦しめ／悲しませれば気がすむのか。／政府は国民が楽に暮らせるようにするためのものではないのか。／それを反対にいくにんの人をいつまで苦しめるのか／政府はいったいどこに目をつけ／いつまでこのようなことやっているつもりだ。／尺別だけではなく、他の山の人々も故<sup>(ママ)</sup>響<sup>(ママ)</sup>を失<sup>(ママ)</sup>ない／見知らぬ所へ旅出っていく。／その気持ちのさみしさはどうすればいいのだ。／そしてこれからの不安なきもちは！（242017、2年女子、父42歳・坑外）

<sup>71</sup> コーディングに用いた語は、つぎのとおりである。「石炭産業」「社会」「政府」「政治」「首相」「政策」「日本」「国民」「時代」。

政府や社会に訴えかける作文は決して多くはないが（15名）、尺炭小・中学校で展開された社会意識を醸成させる教育の影響が表れていたといえよう（前章参照）。

以上のように、中学生は、家族、学校、地域、さらには産業や社会全般など、マイクロマクロの生態学的環境に対する認知を拡大させていた。そのうえで、自己を環境・文脈のなかに位置づけ、将来について考えていたのである。次節では、彼らの将来に対する不安と計画的な能力について、学年別にみていく。

### 第3節 中学生の将来に対する不安

#### 1 「不安」の全体像

前節でみたように、中学生は、家族や学校、地域の状況に加えて、自らの「不安」や「心配」について書いていた。その内容は、学年によって異なっていた。「不安」に類似した語をコーディングして<sup>72</sup>、学年別に関連語検索した結果をみると（表4-9）、「学校」、「家」、「自分」に関する語が学年共通で上位を占めていることがわかる。一方、1・2年生は「新しく」「住む」「土地」の「問題」や「友達」と別れ、転校先での「勉強」などの語が「不安」と共起していた。また、3年生は、「卒業」「高校」「就職」など、進路に関する語が「不安」とともに出現している。

表4-9 「不安」コードと関連の強い語上位20

1・2年生			3年生		
関連語	Jaccard 係数		関連語	Jaccard 係数	
1	学校	0.31	1	家	0.21
2	家	0.29	2	卒業	0.18
3	友達	0.21	3	学校	0.18
4	自分	0.20	4	高校	0.17
5	決まる	0.16	5	自分	0.17
6	生活	0.15	6	炭碓	0.14
7	住む	0.13	7	就職	0.14
8	土地	0.12	8	友達	0.13
9	問題	0.12	9	親	0.13
10	寂しい	0.12	10	卒業式	0.13
11	仕事	0.12	11	中学校	0.12
12	新しい	0.11	12	自身	0.11
13	見る	0.11	13	生活	0.10
14	勉強	0.11	14	希望	0.10
15	父	0.11	15	年	0.10

出典：作文分析結果にもとづき作成。

<sup>72</sup> コーディングに用いた語は、つぎのとおりである。「不安」「心配」「悩む」。

さらに、全文を解読して中学生自らの将来に関する不安を特定・分類した（表4-10）。ここでは、中学生の「将来に関する不安」への言及の有無ならびに不安の内訳（「将来全般」：「これからが不安」など漠然とした内容、「進路」：進学・就職に関する内容、「転校・地域移動」）を学年・性別に示している。これをみると、1・2年生は「転校・地域移動」に関する不安が6割を超え、女子では7割におよぶ。一方、3年生は「進路」に関する不安が最も多く、3割を占めている。

表4-10 中学生の将来に関する不安 (%)

	N	「自身の将来に関する不安」 言及あり	（内訳：複数回答）			「自身の将来に関する不安」 言及なし	
			将来全般	進路（進学・就職）	転校・地域移動		
全体	男	96	55.2	37.5	21.9	32.3	44.8
	女	91	62.6	41.8	22.0	41.8	37.4
	合計	187	58.8	39.6	21.9	36.9	41.2
1年生	男	6	83.3	0.0	0.0	83.3	16.7
	女	9	77.8	11.1	0.0	77.8	22.2
	合計	15	80.0	6.7	0.0	80.0	20.0
2年生	男	33	57.6	54.5	12.1	45.5	42.4
	女	36	80.6	75.0	13.9	69.4	19.4
	合計	69	69.6	65.2	13.0	58.0	30.4
3年生	男	57	50.9	31.6	29.8	19.3	49.1
	女	46	45.7	21.7	32.6	13.0	54.3
	合計	103	48.5	27.2	31.1	16.5	51.5

出典：作文分析結果にもとづき作成。

さらに詳細にみると、不安の内容が父親の年齢や階層、家族の条件によって異なることがわかる。1・2年生は、主に転校先での勉強や友人関係、学校文化に関する不安を述べている。父親の産業転換・道外転出を予測する生徒は、「尺別とちがって、とうきょうあたりでは、テストがたくさんある話です。勉強がだいぶちがうと思うので一番問題です」(241013、2年男子)と、尺別と都会の学力差・カリキュラムの違いに不安を抱いていた。尺炭中では、学力形成以上に生徒の主体的学習を重視した教育を優先していたため、生徒たちは、こうした学力差・カリキュラムの違いに不安を抱いていた。

また、炭山と対照的な都市の文化について、ある生徒は「私たちは、まだ都会の恐ろしさを知らない。私たちのこの清純な心を、にごらしていくのが、都会だと思う」(242024、2年女子)と述べている。前章でみたように、職縁社会で生まれ育った彼らは、異なる産業の街に転出することへの不安を抱いていた。つぎの生徒の作文にその不安が表現されている。

尺別から一度も出たことのない人達がたくさんいる。私も生れ育った尺別炭砦。学校へ来たら回り(まわり)はみんな炭っ子、みんな同じ人ばかり。そんな中で学んだ私達が都会へ行ってなができるのだろう。(242025、2年女子、父40歳・登用職員)

こうした不安は、道内の都市部にも当てはまる。「苫小牧のほうにゆく」ことが決まっていた男子生徒(251003、1年男子、父44歳・坑内直接)は、「僕は小さいときから、ぼうずにしたことがないので、その行く学校がぼうずをする学校だともまる」と、尺炭中文化との違いを予想して不安に思っている<sup>73</sup>。

このように、異なる産業の都市への転校を予想できた生徒たちは、多大な不安を抱えたが、同時に転校後の生活について展望できた。対照的に、父親が高齢等で再就職先を予測できない生徒たちは、上記のような具体的な不安さえ持つことができなかった。「父はもう50才」という生徒(252003、1年女子)は、転校に対する不安についても言及しているが、それ以上に父親がこれから「働かないつもりでいるのかと心配」していた。

一方、3年生は、4月以降の進路に関する不安について述べている。進学志望者は、公立高校入試(3月6日)の直後に作文を書いているため、入試に関する記述が多い。彼らは、父親の再就職次第では転校しなければならず、公立高校への合格が必須であった<sup>74</sup>。したがって、「高校に落ちたら自分の好きな所にも行けないと思う。私は、高校を落ちたら、の方が問題です」(3年女子)という不安があった。前述のとおり、簡易寮の設置や通学費の助成などの支援・対策があったが、家族との別居、入寮・通学はハードルが高かった。とくに女子は「私一人だけここに残るわけにもいかない」(232053、3年女子、父41歳・登用職員)と述べるように、残留は現実的な選択肢ではなかった。さらに、道外への転校を予測する生徒は、1・2年生と同じく、都会での勉強や文化に関する不安を抱いていた。

また、父親の産業転換や道外への転出が見込めない生徒は、進学を断念せざるをえない不安を述べている。とくに、父親の炭鉱復帰が予想される場合、大きな不安要素となった。父親が他炭鉱に再就職すると聞いた男子生徒(既出、231013、父47歳・坑内間接)は、「自分の一番の希望であった工業高校進学もだめになるはめになった」と述べている。加えて、父親が高齢や健康状態が悪い、あるいは関連会社の従業員等の条件で再就職の決定時期が遅れると、生徒たちの不安は増幅した。卒業直前の閉山であったため、彼らには進路を再検討する猶予がなかったのである。

他方、就職志望者は、予定通り内定先の企業に就職できれば閉山の影響は小さかったが、彼らもまた父親の再就職先・決定時期(見通し)の影響を受けた。父親が高齢のため炭鉱復

<sup>73</sup> 尺炭中では、1960年代半ばに生徒の主体性を重視した生徒会活動の一環で、男子の「長髪」を許可する校則がつけられた。「ぼうず」になることは尺炭中の文化を捨てることと同義であった。

<sup>74</sup> 同窓生による振り返り(2017年8月18日座談会)では、当時の生徒のあいだに、「『とりあえず高校に入れ』っていう感じで、受験し、合格すると「転校できる」という認識があったという(新藤ほか2019:20)。

帰の可能性があった男子生徒（既出、231070、父 48 歳・坑内直接）は、友人と同じ企業に就職する予定だったが、「[家族が] しんぱいだからつれ<sup>(ママ)</sup> [い] ていくと [友人と] ばらばらになっていく」〔 〕は引用者注）と述べている。

なお、いずれの学年も父親の職業が炭鉱以外の場合、炭鉱の子どもに比べて、将来に対する不安は限定的だった。彼らは、友人との別れや地域崩壊に対する悲しさを述べつつ、炭鉱の子どもを心配する内容を表している。教員の子どもである生徒は、「僕は間接的にしか関係がないので僕の友たち、さぞ考えくるしんだことだろう」（231065、3年男子）と述べている。一方、炭鉱の社会・経済に依存していた商店や原野の子どもは、炭鉱の子どもと同じく将来に対する不安を抱えていた。商店の子どもは親の失業と転出、原野の子どもは炭山がなくなったあとも原野に残らなければならないことに不安を抱えていた。4月から音別中学校に転校が決まっていた原野の子どもは、尺炭中に残りたい旨を作文に記していた。

私達（原野の人々）だってもちろん影響は、あると思います。〔中略〕尺別の人はいつかは、どこか他の地域にいつてしまうけれど、原野の人達は、牛などをかっているので、他の地域にいく人はすくないと思います。だから結局は、音別の学校へ行くことに、なってしまう。それも四月からだ。〔中略〕私は、四月からなんて行きたくない。六月からでもいい。はんばからでもいい。おちついて勉強ができなくてもいい。できるだけ、長くこの学校に残っている人だけでもいいから、いっしょに勉強したい。（241037、2年男子、〔 〕は引用者注）

## 2 中学生の不安への対処と計画的能力

では、中学生は、上記のような不安にどのように対処し、将来を展望していたのだろうか。ここでは、作文の内容を「計画的能力」（Clausen 1991）の主要な3つの側面<sup>75</sup>に準拠して分類し、学年・性別にその割合を示した（表4-11）。これをみると、1・2年生は、3年生に比べて計画的能力を示す傾向になく、とくに女子は、不安や不満のみを示す作文が約6割におよんでいる。一方、3年生は計画的能力を示す作文が5割から6割におよんでいる。

---

<sup>75</sup> Clausen (1991) は、人間行為力を「計画的能力」(planful competence)に見出せるとしている。計画的能力は、「知的投資」(intellectual investment)、「自信」(self-confidence)、「信頼性」(dependability)の三次元から捉えることができる。各次元の解説は以下の通りである (Shanahan and Elder 2002: 152; 嶋崎 2008: 62-3)。「知的投資」は、自己再帰性、自己認知能力、環境選択能力であり、自己と文脈を関連づけ、自己を冷静に観察し、強みと弱みを認識して必要に応じて計画を変更する能力である。「自信」は、自己に対する信頼感、自尊心であり、他者との相互作用を容易だと感じ、環境に適合できるとみなすことである。自己の消極的・否定的感情をコントロールし、積極的・肯定的感情を促進し、社会的行為の有効性の増大を促進する能力である。そして「信頼性」は、計画性を維持するにあたっての動機づけとなるものである。社会環境における青年たちの自制と有能さに関連しており、有能な青年たちは辛抱強さ、大志ならびに責任を示す。自制心のある青年たちは、規則が彼ら社会環境を統治していることを知り、規則を尊重している。

表 4-11 中学生の計画的な能力分類 (%)

	N	計画的な能力 表明あり	(内訳:複数回答扱い)			不安・不満 のみ	将来に関する 言及なし	
			知的投資	自信	信頼性			
全体	男	96	51.0	33.3	13.5	11.5	33.3	15.6
	女	91	47.3	31.9	7.7	8.8	44.0	9.9
	合計	187	49.2	32.6	10.7	10.2	38.5	12.8
1年生	男	6	0.0	0.0	0.0	0.0	83.3	16.7
	女	9	22.2	22.2	0.0	0.0	77.8	0.0
	合計	15	13.3	13.3	0.0	0.0	80.0	6.7
2年生	男	33	60.6	42.4	15.2	6.1	33.3	6.1
	女	36	38.9	27.8	2.8	8.3	52.8	8.3
	合計	69	49.3	34.8	8.7	7.2	43.5	7.2
3年生	男	57	50.9	31.6	14.0	15.8	28.1	21.1
	女	46	58.7	37.0	13.0	10.9	30.4	13.0
	合計	103	54.4	34.0	13.6	13.6	29.1	17.5

出典：作文分析結果にもとづき作成。

中学生の計画的な能力は、つぎのような形で作文中に表れている。まず、これまでの生活に関する反省と改善の意思である（「知的投資」）。1・2年生は転校先に、3年生は進学・就職先の文化に慣れるために、尺別での生活習慣・学習スタイルを反省している。つぎの2年生（241030、男子）は、転校先での生活全般に関する不安（友人関係の構築、学校文化の違いなど）を述べ、その克服のために尺炭中の文化を相対化し、自分の改善点を述べている。

僕達の尺中は、山の中にあつて他の学校よりも、おくれていて、「のんき」だから、他の学校へ行ったら、みんなについてゆけるだろうかと思うと、なおさら、不安になってくる。自分では、「今からそのような事を言つては**いられない**」と思うのだが、どうしても、今までの、生活を反省してみると、それが、はたして直せるものだろうかと思つて、自分ながら、情なくなつて来た。まあ、何にしても、まだまだ長く苦しい人生が、<sup>(ママ)</sup>多くさんあるのだから、自分の持っている力を最後まで振り絞り、最善を尽くしたい。（下線は引用者による）

また、3年生は、突然の進路変更に対して、父母や家族に適合的な選択という意味づけをおこなっている（「知的投資」）。つぎの3年生（232015、女子）は、釧路管内の高校への進学を志望していたが、父母の転出先が不明なため、不安を抱えていた。しかし、父親の再就職活動を最優先に考へて、父母の行き先についていく決心をしている。

私の場合進学だが、自分の家がどこへ行くのかわからないために、「いちおう」ということで決めてしまった。だから、これからどうして良いのかわからない。私は尺別以外の地で生活をしたことはないので住んでみたいという希望はない。だから両親が行くという所ならどこでもふつついて行く。ただ、やはり学校のことが心配になる。小学校や中学校のよう

にすぐ転校はできるものではない。いろいろと手つづきが大変だ。そのことを考えるとここから離れたくない気がする。しかし、私の父くらいの年齢になるとそう簡単に職業がみつかるものではないので、わがままは言えない。（下線は引用者による）

こうした家族に適合的な選択としての納得の仕方は、進学を断念し、就職に変更した生徒の作文にもみられる。父親の炭鉱復帰を耳にして高校進学を断念した前述の男子生徒（231013、3年男子、父47歳・坑内間接）は、「自分の学校、勉強に対して心配してくれている親のありがたみを痛感し」、「今まであまり、親こうこうのした事のない自分だから、きっと親に心配だけはかけたくないなあと思っているしだいであります」と述べている。

また、転出先の新しい環境に適応しようとする強い意思、有能感を表す作文もみられる（「自信」）。中学生は、これまでみてきたような多大な不安を抱えていたが、消極的・否定的な感情を抑え、自らを鼓舞するような内容で作文を結んでいる。つぎの2年生（241003、男子、父44歳・坑内助手）は、閉山や転校に対する無念や尺別に対する思い入れよりも、新天地への期待を強調している。

僕が炭鉱閉山について思うことについてすなおに言えば 何とも思っていないということだ。僕はこの尺別で生れ育ったが、ちっとも哀しいとは思わない思うことは早く向こうの町へ行ってなじみたい。／これだけである。／悩みは向こうの町と教か書が違ってたりしていないか。これ一つだけだ。むこうでどうなるかわからないが、今はとても気が楽だ。／皆とは考え方が違うかもしれないが僕の考えはこれだけだ。だが向うへ行ったらときどき尺別のことを思い出すかもしれない。（下線は引用者による）

彼は尺別を離れる哀しさをコントロールして、新たな社会環境に適応できる有能さと自信を表している。ただし、ところどころ不安が述べられているように、自信を持つことは容易でなかったことがうかがえる。

また、転出先で高校生になろうとしている進学志望の3年生は、さらに確固たる自信が求められた。つぎの3年生（既出、232053、女子、父41歳・登用職員）は、転校の優遇措置がある道内ではなく道外で高校生活を送りたいという意思を示し、自らを奮起するような言葉を記している。

尺別を離れて心機一転してがんばろうという気持ちや、一度も行ったことのない地域へ行って新たな心で勉強したいという意欲もある。／〔中略〕どこへ行こうと私は私・・・家族について行こう！／〔中略〕住めば都——という言葉がある。／だから、たとえ尺別とは全く違った環境の所へ行っただとしても私は、その環境をすばらしいと思うようになるかもしれない。／この古びた校舎までが室のようにさえ思えてくる。／が、そんな感傷にばかりひたしてもいられない。／やはり私はこれからも現実をしっかりとみて、炭鉱閉山という事

を土台とし新たな心で勉強、生活に意欲を燃やしたい。（〔 〕、下線は引用者による）

そして、転出を予測し、新たな社会環境への適応を目指す生徒のなかには、さらに大きな志を持ち、動機づける者もいた（「信頼性」）。つぎの2年生（既出、242016、女子、父 44 歳・坑外助手）は、「なぜ自由な世界に、私達だけバラバラにされるのだろうか」と閉山に対する不満を述べているが、閉山という社会問題に直面した経験を、ほかの炭鉱に住む人びとや社会全般に還元しようという大志・責任感を示している。

私を心まで成長させた尺別から、生まれ故郷も友達も失って去ることは、つらく悲しい。でも、私はくじけたくない。このようなつらく悲しいできごとは、私達を悲しめるだろうけれども、それと同時に、私達を成長させてくれるからです。なぜなら私達はこんな社会的な問題を、はだで知らされたからです。このように、はだで知らされたかぎりは、やはりそれについて考え、考えたすえで、私達は、たぶん行動するでしょう。その行動で、日本は又ちがった日本として、<sup>(マツ)</sup>発達して境 えると思う。

以上の計画的能力を示す作文は、主に作文執筆時点で父親の産業転換や都市部への転出、都会の学校への転校などが見込める生徒の作文が中心である。前節でみたように、父親が高齢等で産業転換が難しい場合、不安や不満のみの作文が多い。「50 才近く」の父親の再就職について心配していた前述の1年女子（252003）は、つぎのように結んでいる。

このような気持ちをもっていたらきっと私達だって暗い未来を送るようなきもちになるだろうか。／私達はこのような書いても書ききれないほどの悩みを閉山になったばかりにこのくらいどんどこにたたきこまれてしまったのです。

また、父親の炭鉱復帰が予想されるため、就職先を変更しようとしていた前述の男子生徒（231070、父 48 歳・坑内直接）は、再度の閉山を懸念して、つぎのように述べている。

炭鉱だったらまたこんなことにもなりえない。またこんなことになったら弟や母がかわいそうだ。だからもう炭鉱にはいきたくない。〔中略〕学校にきてもいつも閉山の話になる「おまえどこいくんだ」ときかれたら「まだきまっていない」という人もいる。ぼくは炭鉱閉山のない国へいきたい。（〔 〕は引用者注）

しかし、そうしたなかでも、自らを鼓舞しようとする内容もみられる。とくに、父親の再就職が困難と予想する生徒は、家族からの支援を期待できないため、個人的資源が重要な意味を持つと認識していた。父親が高齢かつ休職中だった生徒（241017、2年男子、JH-3Fさん、父 49 歳・休職中）は、「不安な気持ちでいっぱい」と述べる一方、その「不安な気持

ちを外面に出す必要はない」と毅然とした内容を書いている（「信頼性」）。

授業中の態度が乱れていることで二年生全体で問題になっているが、このことも閉山が影響しているなどと理由<sup>(マッ)</sup>づけしたくない。ぼくたちの問題をすべて閉山のせいだの一ことで終わらせてしまう、それではあまりにも簡単すぎる。それにもっと他に理由があるはずだ。あと少しの期間に本当の理由を考える必要がある。／尺中の生活の最後にぼく達のしなければならぬことは今まであげたことだと思っている。（下線は引用者による）

#### 第4節 小括

本章では、尺別炭砒の閉山直後に書かれた中学生の作文を量的・質的に分析し、彼らの周囲に対する状況理解、将来に対する不安とそれを克服しようとする計画的な能力（人間行為力）を明らかにした。尺別炭砒閉山時の中学生は、父親が炭鉱以外（商店・教員・原野・国鉄など）の生徒も含めて、閉山の影響を強く受けていた。彼らは、いずれ炭鉱が閉山すると予測していたが、中学生のときに閉山するとは想定していなかった。炭山コミュニティの中心であった炭鉱の閉山は、当然、彼らの生活基盤と故郷喪失を意味した。

同じ閉山を経験した中学生でも、その影響の受け方は多様であった。具体的には、以下の3点が指摘できる。第一に、学年による差異である。中学生は、アイデンティティの確立や進路選択など、多くの発達の課題を抱えた段階にあり、学年が1つ違うだけで閉山の影響が大きく異なった。中学1年生は転校と友人との別れに関する不安を、2年生はそれらに加えて転校先で迎える高校受験・進路に関する不安を抱え、閉山を受け止められない心境や不満を述べる傾向にあった。対照的に、卒業間近の3年生は、閉山が卒業と重なったことを肯定的に捉え、尺炭中最後の卒業生として、立派に卒業し、新たな環境に適応しようとする前向きな作文が多くみられた。

他方、同じ学年でも差異がみられた。第二に、性別による差異である。同学年のなかで男子より女子のほうがより周囲の状況について言及し、なおかつ自己と結びつけて記述していた。とくに、2年生の女子は、家族に関する記述が多く、閉山と父親の離職に伴う家族関係の悪化について言及していた。対照的に、1年生の男子は、周囲に関する記述が少なかった。

そして第三に、父親の年齢や階層、健康状態など、再就職にあたっての条件による差異がある。中学生たちは将来を展望する際、これらの点に言及し、父親の再就職先・転出先を予測していた。父親の年齢を比較的「若年」と捉える生徒は、父親の産業転換と早期の再就職、家族の道外転出を予測した。彼らは「都会」に対する不安を抱えたが、尺別とは対照的な「都会」に対する期待やあこがれを抱き、不安を克服しようとする計画的な能力を示していた。一方、父親を「高齢」と捉える生徒は、父親の炭鉱復帰や再就職の遅れを予測し、家族の将来に不安を抱いた。彼らは、前向きな内容を書くことさえ難しかった。とくに、中学卒業直前

の3年生は、突然の進路変更を余儀なくされ、ライフコースの攪乱を経験した。

このように、尺別炭砒閉山時の中学生は、閉山と炭山の崩壊に伴う転出と「炭鉱の学校」の閉校ならびに「炭鉱の子ども」として当然の進路（兄弟や上級生が辿った近隣の高校への進学と学卒後の他産業への就職）を辿れなくなったことに強い不安と葛藤を抱いた。なにより、炭鉱労働者家族における唯一の稼ぎ手であった父親の解雇は、彼らにとって衝撃だった。そして、母親、きょうだいの不安と家族関係の悪化も、彼らに多大な不安をもたらした。しかし、父親の再就職が早かったため、『大恐慌の子どもたち』における剥奪家族のような、父親の家庭内地位の低下と母親中心・優位はみられず、中学生は父母に対する不満よりも、転出先に適応しようとする計画的能力を示していた。このように、彼らが閉山直後から広範な状況理解と高い計画的能力を持つことができた背景には、尺別炭砒の閉山がある程度予想されていたこと、父親の早期再就職が見込まれていたことに加え、前章でみた炭山コミュニティでの生活や学校教育があった<sup>76</sup>。彼らは、より困難な状況にあった父母からの支援が少なくなることを予想し、目標を明確にしていたのである。

彼らはその後、数か月以内に尺別を離れることになるが、転出先でどのように適応し、どのような進路を辿ったのだろうか。この点が次章以降の分析課題である。その際、本章でみた状況理解と計画的能力は、どのように作用するのか。中学生生活途上の1・2年生と、進路変更が難しい卒業直前の3年生たちは、それぞれどのような課題に直面し、どのような資源を活用して対処したのだろうか。それらは、彼らが作文で述べていたように、父親たちの再就職に規定された。すなわち、父親がどのような産業・地域・企業に再就職したのかによって、中学生が直面した課題と活用できる資源が異なった。次章では、父親たちの再就職について整理したうえで、閉山時の中学1・2年生（転校時の2・3年生）の転校先への適応と進路を分析し、第6章で閉山時の中学3年生の適応と進路についてみていく。

---

<sup>76</sup> 彼らの状況理解と計画的能力は、他炭鉱の閉山時中学生と比べて顕著であった。三菱大夕張炭砒（夕張市、1973年6月閉山）と北炭真谷地炭砒（夕張市、1987年10月閉山）の閉山時中学3年生と尺炭中3年生の作文を比較分析した結果、尺炭中3年生がとくに家族の生活・将来と自らの将来を結びつけて記述し、転出先に適応しようとしていた。これは、地域特性と閉山タイミングによる違いである。すなわち、尺別では転出が前提であったのに対し、大夕張では市内ビルド鉱への炭鉱復帰が一つの再就職先だったこと、尺別が高度成長期の閉山であったのに対し、真谷地では道外転出・産業転換が困難な低成長期の閉山だったことが要因としてあげられる（笠原 2018b）。

## 第5章 父親の再就職と中学生の転校と進路——閉山時中学1・2年生の生活史分析

本章では、尺別炭砒閉山当時の中学1・2年生が、転校先にいかに適応し、中卒後、どのような進路を辿ったのかについて明らかにする。前章でみたように、尺炭中の生徒たちは、炭鉱がいずれ閉山すると予想していたため、閉山直後から冷静に状況を理解し、将来に対する意気込みを示していた。一方、彼らは炭山コミュニティから離れることへの不安も述べていた。彼らは炭山コミュニティを離れてから、自らの力で将来を切り拓いていかなければならないことに気づく。そして、父親がいつ、どこに再就職するかによって、彼らが直面する課題が異なった。本章では、まず父親の再就職について整理・類型化したうえで、その類型ごとに閉山時中学1・2年生がどのような課題に直面し、どのような資源を活用して対処したのかについて明らかにする。

### 第1節 父親の再就職と中学生の適応・進路に関する分析課題

本節では、まず中学生の父親を含む尺別炭砒閉山離職者の再就職過程を概観したうえで、中学生の適応と進路に関する分析課題を提示する。

#### 1 離職者対策と求人・求職

閉山離職者の再就職活動は、閉山2日後の3月1日からスタートした。釧路職安が山元（尺別炭山）で再就職斡旋に関する援護説明会（集団指導説明会）を開き、翌2日から5日まで臨時相談所を山元に設置して、黒手帳の交付手続きや求職相談をおこなった（『釧路新聞』1970.2.24）。離職者は、失業保険の基本手当と就職促進手当の支給期間をあわせた最長3年以内で再就職先を決定することになった（嶋崎 2013: 6-7）。ただし、尺別を含む雄別三山は寒冷地にあり、炭鉱開基によって成立した炭鉱街であったため、全住民約15,000人の大移動が必至であった。したがって、離職者たちは、早期に再就職先を決定する必要があり、職安・組合・会社は手厚い対策を講じなければならなかった<sup>77</sup>。

閉山直前に釧路職業安定所がおこなった再就職先希望調査<sup>78</sup>では、道内、とくに道東を希望する者が多かった。しかし、求人は道外が大半であった。閉山直後から道外の鉄鋼、造船、自動車、家電などの成長産業から、大手企業も含めて、多くのリクルーターが来山し、その様子は「群がるカラス」、「さながら”通夜のにぎわい”」と報じられるほどだった。組合が「35

<sup>77</sup> 同社職員は、閉山のタイミングについて、つぎのように振り返る。「越冬対策として2月になった。尺別は都市から遠く、物資も届かないので越冬は厳しい。電気は北電が通してくれても、水や公的サービスはない。2月に閉山して冬が来る前に移動が現実的だった」（2017年11月インタビュー）。

<sup>78</sup> 対象は三山（鉄道、営業所を含む）の従業員3,754名。無回答「二百余人」、有効回答数は不明。希望の職業・職種は、「炭鉱」が338人とどまり、他産業の「事務員」222人、「機械工」170人、「工員」132人など60業種におよんだ。そして、希望の地域は「地元・道内」が1,390人であり、「道外」はわずか520人とどまった（『北海道新聞』1970.2.27）。

歳くらいで基本給5万円以上、住宅が完備されて、老人や未亡人もセットで雇うこと」を条件に求人をふるいにかけても、三山全体で約900社、3万3,000人と約9倍の求人となった（『アサヒグラフ』1970.4.10）。

求人の職種・作業内容は、工場労働を中心とした工員であり、賃金は炭鉱時代に比べて低い条件だった。参考までに翌年の常磐炭砦大閉山時の求人調査表から尺別炭砦離職者の採用実績がある企業の条件をみると（表5-1）、製造業の大企業でさえ、賃金（40歳・月給）は6万から7万円と炭鉱に比べて低かった<sup>79</sup>。中小企業では、職種によるが、さらに賃金が低く、雇用奨励金も還元されない等、大企業に比べて条件が劣った（表5-2）。そのほか、社宅・事業団住宅の狭さなども懸念材料となった。求人側としては、炭鉱離職者の採用実績を示し、求職者の不安を和らげようとしていた。他方、道内ビルド鉱からの求人もあり、賃金や勤務形態、社宅の点で連続性があるという利点があった（表5-3）。

離職者たちは、一般産業への就職と都市生活全般に対する不安を抱え、臨時相談所の面接等で相談していた（『釧路新聞』1970.3.3）。個別面接を担っていた山元相談員（炭鉱離職者援護協力員、労働組合執行部）は、すべての求人データに目を通し、給料、作業内容、住宅などの観点から離職者の状況に合わせて斡旋した（木村ほか 2020: 15-7）。また、職安は産業転換の難しさ、炭鉱での生活と都市生活の違いなどを説明したうえで、道外の求人を紹介した<sup>80</sup>。一方、道内ビルド鉱への再就職について、山元相談員は「新しい道を見つけたほうがいいんじゃないの、炭鉱行ったら、危ないところ行ったら大変よ」と、基本的には産業転換を勧めていた（木村ほか 2020: 20）。

---

<sup>79</sup> 閉山当時の尺別炭砦の賃金が不明のため、参考までに、釧路太平洋炭砦の平均月収をみると（1972年時点）、一般社員（直接員）で106,000円であり、比較的低賃金の坑外員でも86,000円であった（笠原 2019: 68）。

<sup>80</sup> 北海道労働部公共職業安定所が作成した「炭鉱離職者 再就職の道しるべ」（1970年9月）には、つぎのように書かれてある。「長年にわたる炭鉱での特殊な生活感情に執着をたち切り難い面もあるでしょうが、これから早く脱却することが移転就職の場合に大切なことです。（中略）ここで理解されたいことは、全般的にみて一般産業は炭鉱より賃金収入が低いということです。（中略）一般産業への就職は環境・給与条件等の変化でなれるまでは何かと苦労があると思いますが、これも一時のしんぼうで、今まで皆さんと同様に地元を離れた仲間の多数は道内外を問わずそれぞれ新たな職場で困難を克服し活躍しています」（北海道労働部公共職業安定所 1970: 2-3）。

表5-1 主な大口採用企業（集団就職先）の雇用条件（常磐炭砒閉山離職者求人条件）

再就職先企業名	常石造船KK	トビー工業KK 豊橋製作所	日産自動車KK 座間工場	三井造船KK 千葉造船所	丸五KK 茨城工場	
所在地	広島県	愛知県	神奈川県	千葉県	茨城県	
業種	製造業	製造業	製造業	製造業	製造業	
従業員規模	1000人以上	1000人以上	1000人以上	1000人以上	30-49人	
尺別炭砒閉山離職者就職者数（1970年）	18人	16人	13人	12人	11人	
常磐炭砒閉山離職者求人条件（1971年）	求人数（常磐）	195人	75人	226人以上	40人	20人
	職種作業内容	造船組立鉄工、電気配管工など	圧延、起重機・検査・旋盤など	一般工、警備員など	船体ブロック組立、電気溶接など	製造係
	賃金（40歳）	6~7万円	6~6.4万円	5.8~6.5万円	6.8万円	5.2万円
	残業	60時間	10~30時間	24~25時間	50時間	30時間
	賞与	20.4~24万円	30万円	26.5万円	32万円	20万円
	勤務形態	8時間（8:00-17:00）	7時間（4組3交替）	7時間（夜勤あり）	7時間（8:00-16:00）	8時間（8:00-17:00）
	住宅	社宅（3DK）	事業団宿舎	社宅（2DK）、事業団宿舎	事業団宿舎	社宅（2DK）
	住宅個人負担	3,000円	1,000~2,200円	4,800~6,000円	2,900円	5,000円
	雇用奨励金	本人に還元	全額還元（該当者に限る）	本人に還元	年令に比例して還元	全額還元
	炭砒離職者採用実績	330人	123人	約1,600人	250人	雄別・尺別6人

出典：常磐炭砒求人調査表（1971年）をもとに作成。

表5-2 主な中小規模採用企業の雇用条件（常磐炭砒閉山離職者求人条件）

再就職先企業名	大興製紙KK	北都電機製作所	鶴田石材KK	堀切パネ製作所KK	青柳鋼材興業KK	福島化工KK	
所在地	静岡県	愛知県	愛知県	千葉県	千葉県	埼玉県	
業種	製造業	サービス業	製造業	製造業	製造業	製造業	
従業員規模	500-999人	500-999人	300-499人	100-299人	100-299人	50-99人	
尺別炭砒閉山離職者就職者数（1970年）	2人	1人	4人	8人	3人	2人	
常磐炭砒閉山離職者求人条件（1971年）	求人数（常磐）	5人	10人	40人	8人	25人	1人
	職種作業内容	製造、保全	機器メンテナンス	運転要員、機電係、採掘係など	加工、仕上	溶断職、一般事務	所長補佐
	賃金（40歳）	6.9万円	4.5万円（35歳）	8~11万円	5.1~5.9万円	5~7.3万円	8.2万円
	残業	30時間	—	20時間	40~50時間	50時間	90時間
	賞与	23.8万円	5ヶ月分	2~3ヶ月分	4.9ヶ月分	26.5万円	16.5万円
	勤務形態	7時間15分（3交替）	7時間30分（8:30-16:45）	8時間（7:30-16:40）	7時間（8:00-16:00）	7時間30分（8:30-17:00）	8時間（8:00-17:00）
	住宅	社宅	社宅（2DK/3DK）	社宅（6・4.5・3）、事業団宿舎	社宅（6・4.5）、事業団宿舎	社宅（空家なし）、事業団宿舎	必要なければ借上げ2DK
	住宅個人負担	1,500円	2,750円	5,500円	1,000円	500~1,500円	3,000円
	雇用奨励金	還元する	—	個人還元せず福利厚生費として還元	還元できないが受入に充分配慮	還元する	還元しない
	炭砒離職者採用実績	14人	20人	雄別・尺別13人	84人	雄別11人・尺別2人	尺別2人

出典：常磐炭砒求人調査表（1971年）をもとに作成。

表5-3 主な道内ビルド炭砒の雇用条件（常磐炭砒閉山離職者求人条件）

再就職先企業名	三菱大夕張鋳業所	三菱大夕張鋳業所	
所在地	北海道・空知	北海道・空知	
業種	鋳業	鋳業	
従業員規模	1000人以上	1000人以上	
尺別炭砒閉山離職者就職者数（1970年）	28人	21人	
常磐炭砒閉山離職者求人条件（1971年）	求人数（常磐）	120人	220人
	職種作業内容	採炭、掘進など	採炭、掘進など
	賃金（40歳）	5.7~14.1万円	5~10万円
	残業	10~57時間	25~40時間
	賞与	18.3~19万円	17万円
	勤務形態	7時間（3交替）	7時間（3交替）
	住宅	社宅	社宅
	住宅個人負担	無料	50円
	雇用奨励金	なし	なし
炭砒離職者採用実績	多数	多数	

出典：常磐炭砒求人調査表（1971年）をもとに作成。

## 2 閉山離職者の再就職

離職者の再就職活動は、当初の予想通りおおむねスムーズに進み、4月上旬の時点で内定数は815世帯（道外489、道内326）、内定率は80%に達した。3月末に退職金の前渡金が支給され、再就職先が決定した者から順次、尺別を離れていった。閉山からわずか2か月で、閉山時人口の78%にあたる3,177人が離山した（笠原 2020a）。

1970（昭和45）年10月時点の再就職先決定状況をみると（表5-4）、全体では「道外他産業」が約半数、「道内他産業」と「道内他炭鉱」がそれぞれ1割から2割となっている。年齢階級別では、40代前半までは9割が再就職先を決定し、主に道外他産業に再就職している。一方、高齢になるほど再就職率は低くなり、道内他産業や「職業訓練校」「不明」が多い。前述のとおり、52歳以降であれば失業保険と就職促進手当を受けて、55歳から石炭年金に移行できたため、40代後半から51歳までの離職者が再就職するうえで最も厳しい条件だった。また、職位別にみると、「坑外」や「嘱託」で再就職率が低く、「坑外」では道内他産業の割合が大きくなっている。

つぎに、再就職先の都府県・道内地域（支庁の所管区域）をみると（表5-5）、道外では神奈川県、千葉県など関東地域や静岡県、愛知県など中京地域への移動が目立つ。これらの地域には製造業の大企業が立地しており、若年層を中心に10名以上で就職する集団就職の形態が多くみられた（表5-6）。集団就職は「職場で信頼のおける人やリーダー的人物」が主導し、求人側も「人望の厚そうな人物や職員層に声がけし、彼らに仲間集めを依頼して、同時に職員を抱き合わせ採用」して早期に行われ（嶋崎 2020d: 178）、尺別での社会関係を維持しながら再就職先での諸課題に対処できた。

一方、道内他産業への再就職は、同じ産業転換であっても企業規模が小さく、一部の企業を除いて雇用条件は劣悪だった。組合執行部による再就職先訪問記録によれば、道内他産業は、「低賃金で、実働時間が長い。残業と共稼ぎせずには生活設計は成り立たない」、「福利・厚生費の負担が何倍にもなった」、「家がせますぎる」（尺別炭鉱労働組合 1970: 43）という条件であった。それは、道内最大の都市、札幌でも同様であった<sup>81</sup>。また、一社あたりの採用人数も少ないため、生活上の諸課題に個々に対処しなければならなかった。

他方、道内のビルド鉱への再就職（炭鉱復帰）は、坑内直接（採炭・掘進など）を中心に賃金が高く、社宅もほぼ無料で提供されるなど、尺別炭山での生活との連続性があった。さらに、集団就職の形態をとったため、尺別での社会関係を維持できた。しかし、賃金（請負）制度や坑内条件の違いに慣れるのは容易ではなく、再就職してすぐにけがをした者や事故で殉職した者もいた（尺別炭鉱労働組合 1970）。最大の懸念は、石炭産業の将来に対する不安であった。実際、再就職後まもなく炭鉱の縮小や閉山を提案された者もいた（尺別炭鉱労働組合 1970: 31-3）。

<sup>81</sup> 北海道炭鉱離職者雇用援護協会が1971（昭和46）年に札幌周辺の事業団宿舎居住者を対象に行われた調査によれば（尺別以外の炭鉱離職者を含む）、「労働条件として諸手当が制度化されていないもの極めて多い」、「総体として、給与条件は超過労働に依存して居り、低賃金であると思はれる」などが指摘されている（北海道炭鉱離職者雇用援護協会 1971: 7）。

そして、最も深刻な状況にあったのは、閉山時に病気やけが等で休職中のため再就職先が  
 決まらなかった離職者である。彼らは尺別に残留し、10月頃に音別町市街の公営住宅（海  
 光団地）に移転した。

表5-4 尺別炭砒閉山離職者の再就職率と地域・産業の内訳

	N	再就職率				職業訓練校	不明	
		合計	道内他炭砒	道内他産業	道外他産業			
全体	811	83.5%	15.0%	18.4%	50.1%	2.8%	13.7%	
年齢別	30代以下	347	88.8%	20.7%	17.0%	51.0%	3.7%	7.5%
	40-44歳	190	90.0%	12.1%	21.1%	56.8%	2.1%	7.9%
	45-49歳	137	81.8%	13.1%	16.8%	51.8%	1.5%	16.8%
	50-51歳	35	71.4%	14.3%	25.7%	31.4%	5.7%	22.9%
	52-54歳	37	70.3%	2.7%	18.9%	48.6%	0.0%	29.7%
	55歳以上	14	28.6%	0.0%	7.1%	21.4%	0.0%	71.4%
職位別	職員	106	82.1%	3.8%	26.4%	51.9%	0.9%	17.0%
	坑内助手	77	85.7%	2.6%	10.4%	72.7%	3.9%	10.4%
	坑内直接	353	85.3%	28.6%	12.7%	43.9%	2.8%	11.9%
	坑内間接	128	83.6%	9.4%	22.7%	51.6%	3.1%	13.3%
	坑外助手	33	84.8%	0.0%	21.2%	63.6%	0.0%	15.2%
	坑外	93	79.6%	3.2%	32.3%	44.1%	5.4%	15.1%
	嘱託	10	40.0%	0.0%	0.0%	40.0%	0.0%	60.0%
	組合役員・書記	11	90.9%	0.0%	18.2%	72.7%	0.0%	9.1%

\*全体には年齢不明51人を含む

出典：尺別炭砒労働組合（1970）より作成。

表5-5 尺別炭砒閉山離職者の再就職先都府県・道内地域と大口採用企業（10名以上採用）

	都府県・道内地域	就職者数（人）	比率	大口採用企業				
				就職者数（人）	業種			
道外他産業	神奈川県	118	14.4	富士バルブKK 藤沢工場	43 製造業			
				日産自動車KK 座間工場	13 製造業			
	千葉県	88	10.8	車体工業KK	11 製造業			
				キャタピラ三菱KK	10 製造業			
				岡崎工業KK 君津支店	13 製造業			
				三井造船KK 千葉造船所	12 製造業			
				不二ロール工機KK	12 製造業			
				菊川工業KK 白井工場	10 製造業			
				埼玉県	49	6.0		
				東京都	30	3.7		
				静岡県	30	3.7	関東自動車工業KK 東富士工場	10 製造業
				愛知県	29	3.5	トビー工業KK 豊橋製作所	16 製造業
	茨城県	19	2.3	丸五KK 茨城工場	11 製造業			
	広島県	18	2.2	常石造船KK	18 製造業			
	宮城県	2	0.2					
	三重県	8	1.0					
	大阪府	4	0.5					
栃木県	3	0.4						
福島県	2	0.2						
山口県	2	0.2						
群馬県	1	0.1						
富山県	1	0.1						
滋賀県	1	0.1						
兵庫県	1	0.1						
計		406	49.5					
道内他産業				釧路	57 7.0			
				石狩	40 4.9			
				胆振	26 3.2			
				十勝	18 2.2			
				後志	6 0.7			
				上川	2 0.2			
				網走	2 0.2			
				留萌	1 0.1			
				渡島	1 0.1			
				計	153 18.6			
道内他炭砒	空知	118	14.4	三菱南大夕張鉱業所	28 鉱業			
				住友赤平鉱業所	22 鉱業			
				三菱大夕張鉱業所	21 鉱業			
				三井芦別鉱業所	14 鉱業			
				三井砂川鉱業所	12 鉱業			
再就職先不明・未就職・職業訓練校		141	17.2					
合計		818	100.0					

出典：尺別炭砒労働組合（1970）より作成。

表5-6 尺別炭砒閉山離職者の再就職先企業採用者数（再就職先地域・産業・年齢階級別）

	年齢	n	単独	小規模	中規模	大規模
			(本人のみ1名)	(本人を含む2-9名)	(本人を含む10-19名)	(本人を含む20-49名)
道外他産業	39歳以下	177	7.3%	45.2%	39.5%	7.9%
	40代	179	14.5%	43.0%	27.9%	14.5%
	50歳以上	32	34.4%	37.5%	18.8%	9.4%
	合計	388	12.9%	43.6%	32.5%	11.1%
道内他産業	39歳以下	59	39.0%	55.9%	5.1%	0.0%
	40代	63	41.3%	47.6%	11.1%	0.0%
	50歳以上	17	52.9%	47.1%	0.0%	0.0%
	合計	139	41.7%	51.1%	7.2%	0.0%
道内他炭砒	39歳以下	72	2.8%	29.2%	8.3%	59.7%
	40代	41	0.0%	26.8%	14.6%	58.5%
	50歳以上	6	16.7%	16.7%	33.3%	33.3%
	合計	119	2.5%	27.7%	11.8%	58.0%

出典：尺別炭砒労働組合（1970）より作成。

表5-7 閉山時中学生の父親・兄の再就職先地域・産業（年齢・職位別）

		N	道外他産業	道内他産業	道内他炭砒	道内再就職先不明・ 職業訓練校
			年齢別	30代以下	15	73.3%
	40-44歳	79	58.2%	19.0%	11.4%	11.4%
	45-49歳	45	46.7%	22.2%	11.1%	20.0%
	50-51歳	7	42.9%	14.3%	0.0%	42.9%
	52-54歳	10	30.0%	30.0%	0.0%	40.0%
職位別	職員	9	77.8%	22.2%	0.0%	0.0%
	坑内助手	19	73.7%	10.5%	0.0%	15.8%
	坑内直接	78	59.0%	12.8%	16.7%	11.5%
	坑内間接	23	69.6%	17.4%	4.3%	8.7%
	坑外助手	14	57.1%	21.4%	0.0%	21.4%
	坑外	21	23.8%	42.9%	9.5%	23.8%
	関連会社	4	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%
	原野	2	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%

\* 「年齢別」は父親のみ、「職位別」は兄を含む

出典：尺別炭砒労働組合（1970）、ライフコース調査より作成。

表5-8 世帯主（父・兄）の再就職先都府県・道内地域（閉山時中学生学年別）

	都府県・道内地域	1年生			2年生			3年生			合計	
		道外他産業	神奈川県	9	27.3%	13	17.6%	16	20.8%	38	20.9%	
	千葉県	3	9.1%	10	13.5%	10	13.0%	23	12.6%			
	愛知県	2	6.1%	4	5.4%	4	5.2%	9	4.9%			
	静岡県	3	9.1%	2	2.7%	4	5.2%	9	4.9%			
	東京都	2	6.1%	3	4.1%	2	2.6%	7	3.8%			
	埼玉県	0	0.0%	5	6.8%	1	1.3%	6	3.3%			
	茨城県	2	6.1%	2	2.7%	1	1.3%	5	2.7%			
	宮城県	0	0.0%	1	1.4%	1	1.3%	2	1.1%			
	広島県	1	3.0%	0	0.0%	1	1.3%	2	1.1%			
	三重県	1	3.0%	0	0.0%	1	1.3%	1	0.5%			
	山口県	0	0.0%	1	1.4%	0	0.0%	1	0.5%			
	滋賀県	0	0.0%	1	1.4%	0	0.0%	1	0.5%			
	大阪府	0	0.0%	0	0.0%	1	1.3%	1	0.5%			
	富山県	0	0.0%	0	0.0%	1	1.3%	1	0.5%			
	計	23	69.7%	42	56.8%	43	55.8%	106	57.6%			
道内他産業	釧路	1	3.0%	8	10.8%	9	11.7%	18	9.9%			
	胆振	2	6.1%	4	5.4%	1	1.3%	7	3.8%			
	石狩	0	0.0%	2	2.7%	2	2.6%	4	2.2%			
	十勝	1	3.0%	0	0.0%	1	1.3%	2	1.1%			
	後志	0	0.0%	1	1.4%	0	0.0%	1	0.5%			
	渡島	0	0.0%	0	0.0%	1	1.3%	1	0.5%			
	計	4	12.1%	15	20.3%	14	18.2%	33	17.9%			
	道内他炭砒	空知	2	6.1%	7	9.5%	7	9.1%	16	8.8%		
道内再就職先不明	海光団地	2	6.1%	4	5.4%	6	7.8%	12	6.6%			
	原野	1	3.0%	1	1.4%	3	3.9%	5	2.7%			
	釧路	0	0.0%	2	2.7%	2	2.6%	4	2.2%			
	石狩	1	3.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.5%			
	十勝	0	0.0%	1	1.4%	0	0.0%	1	0.5%			
	職業訓練校	0	0.0%	2	2.7%	0	0.0%	2	1.1%			
	不明	0	0.0%	0	0.0%	2	2.6%	2	1.1%			
	計	4	12.1%	10	13.5%	13	16.9%	27	14.7%			
合計		33	100.0%	74	100.0%	77	100.0%	184	100.0%			

出典：尺別炭砒労働組合（1970）、ライフコース調査より作成

### 3 閉山時中学生の父親の再就職

では、閉山時中学生の父親は、上記の再就職先分類のうち、どこに再就職したのだろうか。中学生の父親は、「中高年」（40代前半まで）または「高年」（40代後半以降）の 카테고リーに相当し、なおかつ子どもの転校・進路を考慮しなければいけないため、再就職においてさまざまなハンデを抱えていた<sup>82</sup>。

閉山時の中学生 342 名のうち、父親の再就職先が判明しているのは 184 名（54%）である。彼らの再就職先地域・産業をみると（表 5-7）、「道外他産業」が 6 割、ついで「道内他産業」が 2 割、「道内他炭鉱」（炭鉱復帰）が 1 割、「再就職先不明・未就職・職業訓練校」が 1 割となっている。閉山離職者全体のなかでも道外他産業の割合が大きく（全体 50%、中学生の父親 58%）、炭鉱復帰が少ない点（全体 14%、中学生の父親 9%）が特徴である。これを年齢別にみると、中高年（40代前半まで）の父親は、道外他産業が半数を超えているが、高年（40代後半以降）の父親では半数を下回り、道内他産業や再就職先不明・職業訓練校・未就職の割合が大きくなっている。

また、中学生の学年別に父親の再就職先を都道府県・道内地域別にみると（表 5-8）、関東・中京方面を中心に全国に移動したようすがうかがえる。主な集団就職先である神奈川県や千葉県、愛知県への転出者がとくに多い（表 5-9）。道外他産業の大企業への再就職は、中高年の父親でみられたが、高年の父親はその機会が乏しく、道内他産業の中小・零細企業に少数・単独で就職する割合が大きかった（表 5-10、5-11）。とくに、40代後半から 51 歳の父親は、石炭年金に移行（55 歳）するにはまだ若く、厳しい再就職活動を強いられた。

表 5-9 3人以上の再就職先企業と人数・所在地（閉山時中学生の父親・兄合計）

再就職先地域・産業区分	再就職先企業名	再就職人数	再就職先企業所在地
道外他産業	富士バルブKK	13	神奈川県藤沢市
	トビー工業	6	愛知県豊橋市
	日産自動車KK 座間工場	6	神奈川県座間市
	車体工業KK	5	神奈川県大和市
	三井造船KK 千葉造船所	4	千葉県市原市
	不二ロール工機KK	4	千葉県船橋市
	岡崎工業KK 君津支店	3	千葉県君津市
	堀切バネ製作所KK	3	千葉県市原市
	日本弁管工業KK	3	東京都大田区
	関東自動車工業KK 東富士工場	3	静岡県御殿場市
道内他産業	今野産業KK	4	北海道白老郡白老町
	札鶴ベニヤKK	3	北海道白糠郡白糠町
道内他炭鉱	住友赤平砒業所	6	北海道赤平市
	三井芦別砒業所	3	北海道芦別市

出典：尺別炭鉱労働組合（1970）、ライフコース調査より作成。

<sup>82</sup> 地元での再就職が可能だった常磐では、就学子のいる離職者の地域移動が抑制された（正岡ほか編 2006: 25-6）。

表5-10 閉山時中学生の父親・兄の再就職先企業採用者数（地域・産業、年齢階級別）

		n	単独	小規模	中・大規模
			(父・兄のみ1名)	(父・兄を含む2-9名)	(父・兄を含む10名以上)
道外他産業	合計	88	14.8%	30.7%	54.5%
	30代以下	10	20.0%	20.0%	60.0%
	40-44歳	43	7.0%	30.2%	62.8%
	45-49歳	20	20.0%	40.0%	40.0%
	50-54歳	5	60.0%	20.0%	20.0%
	兄	10	10.0%	30.0%	60.0%
道内他産業	合計	23	26.1%	69.6%	4.3%
	30代以下	1	0.0%	100.0%	0.0%
	40-44歳	13	30.8%	61.5%	7.7%
	45-49歳	9	22.2%	77.8%	0.0%
道内他炭鉱	合計	15	0.0%	26.7%	73.3%
	30代以下	2	0.0%	100.0%	0.0%
	40-44歳	8	0.0%	12.5%	87.5%
	45-49歳	5	0.0%	20.0%	80.0%

出典：尺別炭鉱労働組合（1970）、ライフコース調査より作成。

表5-11 閉山時中学生の父親・兄の再就職先企業規模（年齢階級別）

	n	大企業	中小企業	炭鉱
全体	96	51.0%	32.3%	16.7%
30代以下	12	50.0%	33.3%	16.7%
40-44歳	51	54.9%	27.5%	17.6%
45-49歳	22	31.8%	45.5%	22.7%
50-54歳	4	50.0%	50.0%	0.0%
兄	7	85.7%	14.3%	0.0%

\*企業規模は常磐炭鉱求人調査表および各社社史等で判別。不明企業のうち、道外大口採用企業（10名以上）は「大企業」に、道内他産業の企業は「中小企業」に分類。

出典：ライフコース調査より作成。

#### 4 中学2・3年生の適応・進路に関する分析課題

以上の結果から、父親の再就職類型は、つぎの5つに分類できる。①「道外他産業・大企業への集団就職」、②「道外他産業への少数・単独就職」、③「道内他産業・中小企業への就職」、④「道内他炭鉱への再就職（炭鉱復帰）」、⑤「未就職」である。次節以降では、父親の再就職類型ごとに、中学2・3年生（閉山時の1・2年生）の転校先への適応と進路を、転校先から送られた手紙ならびにインタビュー対象者（一覧は第2章、表2-7を参照）の生活史をもとに明らかにする（④の進路は追跡不可のため除く）。分析の前に、本論における「適応」と「進路」について定義する。

中学生の転校は、転校先の物理的環境（施設）と対人的環境（教師・級友との関係）、社会文化的環境（学業、地域言語等）への適応が要求される（小泉 1986；山本ほか編 1992）。本章では、とくに後者2つに焦点を当て、生態学的環境の維持・再構成をみる。前章でみたように、道外転出を予測していた生徒を中心に、すでに閉山直後から、炭山コミュニティならびに炭鉱の学校と対照的な「都会」の対人的環境と社会文化的環境に適応できるかどうかという不安を述べていた。転校後、彼らはこれらの課題に直面したのだろうか。直面した場

合、どのように対処したのかについて、転校当時の手紙や対象者の回顧をもとに明らかにする。

つぎに「進路」は、中卒時点だけでなく、その後の進学・就職を含めた過程を対象とする。前章でみたように、中学3年生（閉山時2年生）を中心に、閉山直後の作文に高校入試に関する不安を述べていた。とくに、彼らは進学率の高い首都圏への転校を懸念していた。全国的に1960年代の高校教育機会の拡大によって「高校へ行かないと損をする」（香川ほか2014: 54）状況となるなか、彼らはどのような課題に直面し、中卒後、どのような進路を辿ったのか。また、同じ地域に転校した生徒のなかで、どのような要因で進路の違いが生じたのか、父親の再就職類型および炭鉱における階層、本人の性別に着目して捉える。

以上の「適応」と「進路」について、前章でみた閉山直後の計画的な能力（作文分析の結果）も踏まえながら、一連の分析を道外に転校した生徒（父親の再就職類型①、②）と道内に転校した生徒（父親の再就職類型③、④、⑤）ごとに行う。分析課題は、以下のとおりである。

- 道外に転校した生徒に関する分析課題

- ①父親の道外他産業・大企業への集団就職と中学生の適応・進路

父親の集団就職によって維持された尺炭中の友人関係は、中学生の転校先への適応にとっての資源となっただろうか。また、父親の産業転換・大企業への再就職は、中学生の高卒後進路にどのような影響を与えただろうか。

- ②父親の道外他産業への少数・単独就職と中学生の適応・進路

①と異なり、周囲に活用できる友人関係がないことは、中学生の転校先への適応にどのような影響を与えただろうか。また、適応とその後の標準的な進路のために、どのような資源が活用されただろうか。

- 道内に転校した生徒に関する分析課題

- ③父親の道内他産業・中小企業への少数・単独就職と中学生の適応・進路

道外に比べて転校先への適応は容易だったか。道東の高等教育機会の不足や父親の中小企業への再就職は、高卒後の進路にどのような影響を与えただろうか。

- ④父親の道内他炭鉱への再就職（炭鉱復帰）と中学生の適応・進路（次章で分析）

尺別炭山コミュニティと類似した生活環境は、転校先への適応を促しただろうか。石炭産業の衰退と閉山は、高卒後進路にどのような影響を与えただろうか。

- ⑤父親の未就職と中学生の適応・進路

父親が未就職の状態は、中学生の適応や将来展望にどのような影響を与えただろうか。また、その後の進路のために、どのような資源が活用されただろうか。

## 第2節 父親の道外他産業への再就職と中学生の適応・進路

### 1 転校直後の適応課題

まず、転校先から尺炭中の教頭宛に送られた手紙から、転校生がどのような課題に直面したのかについてみていく。前章と同様に、KH Coder を用いて手紙の頻出語をみると（表5-13）<sup>83</sup>、「学校」（42回、87.5%）における「英語」（28回、58.3%）、「数学」（12回、25%）などの教科や「テスト」（24回、50%）などの「勉強」（26回、54.2%）に関する語が多い。さらに、転校先の「生徒」（22回、45.8%）や「友達」（21回、43.8%）など、対人的環境に関する語も頻出している。それぞれの関連の強さを共起ネットワークで表すと、尺炭中のときと「違う」点として「英語」、「教科書」などがあげられており、「厳しい」、「困る」といった語とも関連がある。また、「テスト」や「友達」が「いや」という語と関連しており、転出直後の彼らがさまざまな課題に直面していたことがわかる。

とくに、道外に転校した生徒は、尺炭中との相違点を述べている。神奈川県に転校したつぎの生徒（242042、3年女子）は、教科書やテストについて、尺炭中のときと比べながら詳細に記している。

英語は〔教頭〕先生の教え方とはちがって新しい基礎問題をあまり教えてくれないので私には良くわからなくて頭をなやませています。〔中略〕／数学なんかも尺別では初めからやってきましたがこちらは途中からやっています。だからおぼえるのにたい変です。／その他の勉強にしても教科書がちがうので大変です。／それに5月11日から中間テストがあるんです。だから1回目は悪いとあきらめています。（1970年5月7日、〔 〕は筆者注）

進路やテストに関する不安は、主に首都圏に転校した生徒の手紙に書かれている。とりわけ、独自の高校入学者選抜<sup>84</sup>を実施していた神奈川県に転校した生徒は、「高校に進学できるかどうか」という不安を抱え、尺炭中の教頭に不満を述べたり、相談していた。上記の生徒は、「こまるのは進学の事です。神奈川県では1・2年の間に『ア テスト』というのをやるそうなんです。それは入試にそうとう響くらしいんです」と記している（1970年6月20日）。不運にも尺炭中から最も多くの生徒（48人）が転校した先が神奈川県であった。そのほか、道外に転校した生徒は「言葉が変なのでバカにされています」（242045、3年女子、埼玉県、1970年7月4日）など、言葉・方言の違いを指摘する生徒もみられる。

そして、しばしば強調されていたのが、転校先の学校文化についてである。とくに、尺炭

<sup>83</sup> 転校先に関する認識を捉えるため、「尺別」、「尺中」、宛名の教頭を示す「先生」を抽出しない語に設定した。また手紙の定型文（「お元気ですか」「さようなら」）および作文分析と同じく副詞を除外した。

<sup>84</sup> 神奈川県では、内申書と各高校の学力検査（入試）に加え、中学2年次の3学期に行われる「アチーブメントテスト」（略称「ア・テスト」）の結果をもとに高校入学者選抜を行う「神奈川県方式」が採用されていた（教育委員会制度発足30周年記念誌編集委員会編 1971）。

中の特徴であった「自由な」校則や生徒会、班活動など（第3章参照）に言及する生徒が多い。たとえば、閉山直後、転校先の髪型に関する規則を気にしていた男子生徒（241020、3年生）は、転校先の静岡県では「ぼうず\*登校はズック\*その他いろいろ尺別とくらべて規律がばかみたくきびしいです」（1970年5月9日）と述べている。また、転校先の団結力や主体性のなさについて指摘する生徒も多い。埼玉県に転校した生徒（242020、3年女子）は、転校先にも「班はあるのだがぜんぜんまとまっていない」（1970年6月4日）と述べている。また、滋賀県に転校した生徒（242018、3年女子）は、転校先の生徒会が「尺中のように行事も、話し合いの場をもたず代表者まかせ」であり、改めて「尺中生徒会がどんなに生徒の意見を尊重しているか」（1970年8月26日）ということに気づいたと述べている。

## 2 父親の集団就職と中学生の適応・進路

上記の課題は、道外に転校した生徒に共通してみられるが、適応過程と中卒後の進路は、父親の再就職形態（集団就職または少数・単独）によって様相が異なった。まず、①父親の集団就職によって道外に転校した生徒についてみていこう。

父親の集団就職によって道外に転校した生徒は、新学期開始まもなく、複数人で同じ学校に転校できた。彼らはおおむね4月までに転校し、その後の手紙のなかで、ともに転校してきた尺炭中の生徒について言及している。最大の集団移住先であったバルブ製造工場のある神奈川県藤沢市内の学校には、尺炭中の生徒が13人転校した。そのうちの1人は「〇〇君とは同じクラスなのでいろいろおしえてもらう事もあるんです」（既出、242042、3年女子、1970年6月20日）と述べている。また、自動車製造工場への集団就職に伴い、横浜市に転校した生徒（242029、3年女子）は、学校に慣れるまでの間、「一緒に来た〇〇さんといつも『尺別に帰りたいね』と話していました」（1970年5月7日）と手紙に記している。このように、彼らは集団移住によって維持された友人関係を資源として、転校先の社会文化的環境に適応しようとしていたことがわかる。

集団就職者とその家族は、再就職先企業の社宅や雇用促進事業団住宅に集住した。そのため、中学生は、移植された尺別炭山コミュニティのなかで生活できた。たとえば、建材メーカーへの集団就職に伴い、千葉県船橋市に移住した総勢70名は、全員、市内の雇用促進事業団住宅に入居した。船橋市に転校したある生徒（242041、3年女子）は、移住から1週間後の手紙に「（事業団住宅で）〇〇さんがとなりで他に3年生では□□さんや△△君がいます。〔中略〕あまり尺別の人が多いので千葉ではなく尺別という気がします」（1970年4月23日、〔 〕は引用者注、記号は固有名詞）と述べている。この移植された尺別炭山コミュニティは、集団就職を主導したキーパーソンの努力によって維持され、中長期的に労働者家族が転出先地域に適応する資源となった。船橋の雇用促進事業団住宅では、異なる会社に勤める者や雄別など他炭鉱出身者も多く入居していたため、集団就職を主導した元鉱員が中心になって、1972（昭和47）年に町内会を組織した。また、造船会社への集団就職に伴

い、広島県沼隈町に移住した一団も、元組合執行部が主導して、「よそ者」でなくなるために、冠婚葬祭の協力や PTA 活動などの地域活動を積極的におこなった(木村ほか 2020: 20-3)。

父親の集団就職によって道外に転校した生徒は、以上のような資源を活用しつつ、閉山直後(3月)の作文に記した自信や有能感などをもとに、転校先の対人的・社会文化的環境に適応していった。前述の藤沢市に転校した生徒(242042、3年女子)は、転校前の作文に将来への不安や閉山に対する不満を述べたうえで、「4月か5月にはもう尺別を去らなければならないと思ったらかえって落ちついたように思います」、「都市などにいったら、今のままでいてはだめだと思います」(1970年3月11日)と述べていた。そして、転校後、最初の手紙(5月7日)では、転校先で直面した多くの問題を列記して「ガンバラなくてはいけないと思っています」と述べ、つぎの手紙(6月20日)では、「だいぶこの地域にはなれました」、「学校もだいぶなれて今では、友達と大きな声でおしゃべりしたり遊んだりとっても仲良くなりました」と適応したようすを記している。

彼らは短期的には尺炭中の友人関係を活用しながら転校先に適応できた。しかし、受験競争率の激しい首都圏に転校した生徒を中心に、中卒後の進路が大きな課題となった。手紙を送ったあとの彼らの動向について、インタビュー対象者の生活史をもとにみていこう。

父親の集団就職に伴い、千葉県船橋市に移住した JH-3a さん(転校時3年生、女子)は、転校後の生活について、「高校受験を控えて、勉強で嫌な時期だった。慣れるまでいやだった」と振り返る(2017年9月16日座談会)。彼女は閉山から1か月半後の4月中旬に、全校生徒数約1,000人の大規模な学校に、尺炭中の友人数名とともに転校した。彼女は転校から2か月後の手紙(1970年6月18日)に「東大アチーブ・中間テストといやになります。今月もまた東大アチーブがありました」と尺炭中に比べてテストが多いことに言及していた。彼女は、転校先での行事(「ピクニック」)に参加して対人的環境に適応したが、中卒後の進路は、個人的な努力だけでなく、父母の協力が不可欠であったと振り返る。彼女の父親は、閉山時の年齢が41歳と、船橋に移住した一団のなかでは最も高齢であり、なおかつ帯同世帯員数が祖父母を含む6人と最も多かった。雇用促進事業団住宅(間取り6畳・4.5畳・台所・浴場・便所)は手狭であり、「親は生活のことで一杯一杯」だった。しかし、親は彼女の進学に関して「無理をしてくれた」ため、彼女は中学卒業後、全日制高校に進学した。その後、彼女が高校1年生のとき(1971年)に、一家は雇用促進事業団住宅を離れて持家に移った。家族の生活は、なお「一杯一杯」だったが、彼女は高校卒業後、3年制の和裁専門学校に進学した。そして、専門学校を卒業したのち、千葉県内の呉服店に販売員として就職した(2017年9月16日座談会)。

このように、父親の集団就職によって首都圏に転出した中学生は、父母の再就職先への定着にむけた努力をもとに、尺別炭山では実現が難しいような進路を辿ることができた。とくに男子は、高校卒業後、4年制大学に進学する傾向にあった。本調査回答者の該当者6人中4人が大学に進学し、その後、サービス産業等の成長産業に就職している。たとえば、造船

会社への集団就職に伴い、千葉県市原市に転校した JH-3A さん（転校時 3 年生、男子）は、父親（閉山時 42 歳、鉦員）の離職と再就職を目の当たりにして、安定した職業を志向するようになったという。彼は高校、大学と進学し、教員になった進路について、つぎのように振り返る。

父の転職で炭砒以上の生活をする事ができ、大学への進学もできました。炭砒時代には、考えられなかったです。自分で仕事を選ぶ際、つぶれない会社、長く勤めることのできる職場を無意識に強くのぞんでいたと思います。結局、当時養護学校の教員になることができました。（質問紙調査自由回答）

### 3 父親の少数・単独就職と中学生の適応・進路

一方、②父親の少数・単独就職によって道外に転校した生徒は、①の生徒のような尺別時代のつながりはなく、転校直後に孤立したようすを手紙に記している。藤沢市に隣接する平塚市に転校した生徒（JH-3d さん、転校時 3 年生、女子）は、「2 日目に学校に行った時、尺中がなつかしくて自然に涙がこぼれた。近くの藤沢にはたくさん行っているようだけど、この〇〇中には私一人」（1970 年 8 月 4 日、記号は固有名詞）と述べている。とくに、道外のなかでも地方圏に転校した生徒は、転校直後に経験した孤立感や疎外感について記している。5 月半ばに宮城県に転校した生徒（242038、3 年女子、父年齢不明・本社職員）は、転校してまもなく『閉山したから、私が仙台に引っ越してきたのだ』と言っても、友達は何んだか、納得のいかない顔をしていました。そういう時、ちょっと、さびしい感じがしました」（1970 年 7 月 3 日）と述べている。また、滋賀県に転校した生徒（既出、242018、3 年女子）も、転校直後に受けたショックについて、つぎのように詳述している。

日本に住んでいながら閉山という言葉がわからない人もいますよ。私が学校へ行ってもないころ。女子の一人と話していたら、その子が「閉山てなに」って言ったんです。私は泣きながら炭砒から来たのに閉山という言葉さえ知らない人がいるか<sup>(ママ)</sup>を思うと何て言ってもいいのかわかりませんでした。（1970 年 8 月 26 日）

彼らは周囲に頼れる友人がいないなか、孤軍奮闘して転校先に適応しようとしていた。とくに閉山直後の作文で、新天地に馴染めると自信や有能感を表明していた生徒は、早期に対人的・社会文化的環境に適応したと手紙に記している。閉山直後の作文に「都会の学校の程度は高いし、知っている人もいないし」「3 年になれば受験勉強がまっているし」「追いこまれて行く人生もいやだし早く都会の学校になれなくてはならぬ！！」と述べていた男子生徒（241004、転校時 3 年生、閉山時父 38 歳・坑内直接）は、4 月に東京都日野市内の学校に単独で転校し、「学校の先生、生徒さんたちも明るくしていたので、とてもなじむことができました」（1970 年 5 月 2 日）と述べている。同じく、閉山について「ちっとも哀しいと

は思わない」「早く向こうの町へ行ってなじみたい」と転校前に述べていた男子生徒(241003、転校時3年生、閉山時父44歳、鉦員・坑内助手、前章参照)は、5月に埼玉県の全校生徒数1,000人近くの「マンモス学校」に転校し、「英語は僕は尺中でマジメにやっていたので」「ずっとたやすく感じました」、「もう幾人かの生徒と仲よくなりました」と述べている(1970年5月27日)。

一方、閉山直後の作文で将来に関する不安や社会に対する不満を強調していた生徒、とりわけ閉山時の2年女子は、転校後の手紙に不満や孤立感を強調していた。滋賀県に転校した生徒(既出、242018、3年女子)は、転校前の作文に「どうしようもない不安や心配を感じる。すみなれた尺別をはなれて、どこへ行くのか。また、友達と別れて一人になったらどうしたら良いのか」と述べていた。そして、転校後の手紙で不平不満を詳述している。

担任の先生も言っていました。「炭砒は、お父さんたちの仕事は決まっているし子供達の団結力もある。〇〇中学校の生徒達の場合は、お父さんの仕事も違うし、生徒ひとりひとりの環境も違う。だから考え方も違って来るんだよ」。だから気心の知れた親友どうしはいないんだそうです。学級も意見がぶつかるわけんかごしですよ。私はどうしたらいいのかわかりません。私はこんなに弱いなんて思ってませんでした。でも、今では、一人じゃ何んにもできないことがわかったんです。尺別にいたころは友達もたくさんいました。そりゃあ、私はなんでも言っちゃう方だったからきらわれた事もあるでしょう。でも気に入らないと思われても平気だったんですよ。ところが今ではきらわれるのがいやなんです。だから今の私は、学級会の時、自分の意見を主張するのがいやなんです。なんて弱いんだろうと自分がいやになります。広い、知らないところに、一人でいるみたいにさえ思えます。(1970年8月26日)

そして、彼らの中卒後の進路は、上記のような転校前後の経験や意思表示の連続として、個人の計画的能力と家族の期待・支援をもとに決定された。以下では、3年次に転校した2人の生徒の生活史をもとに検討する。

JH-3Cさん(男子)は、長兄(閉山時39歳、鉦員・坑内直接)の再就職に伴い、4月に静岡県に転校した。彼は、閉山直後の作文に「他の地域へ行っても死ぬわけではない。よい友達を作るのだ」と記した自信と有能感をもとに、転校先に適応しようとした。転校先は「村社会」で排他的であり、彼は転校初日にクラスメイトと「喧嘩」して勝利し、地位を得た。勉強面では尺炭中での先取り教育が功を奏し、転校直後の学力テストで上位をとった。しかし、担任の教員から「転校生には高い内申点はつけられないから、希望するところには、たぶん、行けないと思う」と言われ、ショックを受けたが、「内申点をつけてもらえないんだったら、せめてテストだけは毎回トップ取ってやろう」と奮起した(2017年9月16日座談会)。しかし、彼は転校先の教育に疑問を持ち、高校進学に対して葛藤があったため、就職するつもりだった。彼は航空自衛隊のパイロットの試験を受けて合格したが、兄に「高校は

出る」、「サラリーマンになって堅い人生を歩んでほしい」と言われ、結果的に県立工業高校に進学した。その後、彼は高校を卒業したのち、静岡県内の大手自動車メーカーの工場に就職した（2017年9月16日座談会）。

JH-3C さんとは対照的に、転校前の作文で不安や不満を強調し、転校先の対人的・社会文化的環境への適応に苦戦していた生徒は、連続的に進路の問題を抱えた。父親（閉山時40歳、登用職員）の再就職に伴い、5月に茨城県に転校した JH-3c さん（女子）は、閉山直後の作文に「〔尺炭中では〕回りはみんな炭<sup>(ママ)</sup>っ子」「そんな中で学んだ私達が都会へ行ってなにができるのだろう」と不安を述べていた。そして、転校から2週間後の手紙で、新居の周りが「田舎」で、通学時間が尺別に比べて長く、「毎日、たいへん」であること、校則が厳しく、勉強の内容も尺炭中と「まったく違う」点を指摘している。そして、転校後すぐに行われた「中間テスト」は「むずかしくてむずかしくて、とってもこまりました」と述べている（1970年6月6日）。彼女はその後成績が上がらず、家族に中学校を卒業して働く意思を示していた。しかし、父親は「もし、父さんが社長だったら、お前みたいな生徒は扱わない。高校3年行ったら、もうちょっとお利口さんになるかもしれんから、行け」と助言し、母親も勤務先の開業医や担任の教員の意見を参考に、短大まで進学するように勧めた。加えて、彼女の姉（3歳上、転校時高校3年生）が、同じく父母の勧めによって短大に進学するタイミングであり、妹の JH-3c さんも高校に進学することになった。彼女は、中学卒業後、私立高校に進学した。そして、高校卒業後、短大に進学し、その後、製造業の会社に事務職として就職した（2018年2月・5月 JH-3c さんの母親へのインタビュー）。

上記の例からわかるように、彼らは必ずしも早期に転校先に適応し、迷いなく進学したわけではなかった。彼らは尺別炭山と対照的な地域や学校に戸惑い、葛藤し、周囲と同じ進路を辿ることに抵抗感を抱いた。その際、閉山と離職を経験した父母や兄が子ども・弟妹に標準的な進路を辿ってほしいと期待し、高校進学を促したことで、彼らの高校進学と成長産業への就職が可能になった。むろん、父・兄の再就職先への定着と生活の安定が、彼らの転校先への適応と標準的進路選択の基盤となった。JH-3C さんの兄と JH-3c さんの父親は、ともに再就職先に約20年勤続し、安定していた。対照的に、父親の再就職キャリアが不安定だった場合、中学生の転校先への適応と進路選択は難航した<sup>85</sup>。

集団就職で道外に転校した生徒と同様、豊富な進学機会を活用して大学等に進学した生徒は、閉山と道外転出について、結果として「よかった」と肯定的に意味づけている。その際、再就職先への定着に苦闘した父母について言及している。JH-3c さんは、およそ50年後の振り返りで「父や母、大変な時に何も言わず一生けんめい働いてくれて本当に有りがとうございます」と述べている（質問紙調査回答より）。また、東京都内に転校したのち、高校・大学と進学した JH-3B さん（転校時3年生、男子）は、同窓会で旧友と集まったとき、閉山についてつぎのように話しているという。

<sup>85</sup> 父親が職を転々とした JH-2c さんの場合、中学2・3年次に転校を繰り返したため、対人的・社会文化的環境への適応は難しかったが、中学卒業後、全日制高校に進学した。

仲間内で集まって話すのは、「よかったんじゃないか」っていうことなんです。〔中略〕中学でもって移ったっていう時期のわれわれにとっては、子どもはよかったと思います。親は大変だった。〔中略〕時期的に「やあ、大変だったな、俺たち」ってよく話すんだけど、それ以上に、ほんとは、よかったかもしれないっていうのが実感です。(新藤ほか 2019: 42、〔 〕は引用者注)

### 第3節 父親の道内他産業への再就職・未就職と中学生の適応・進路

#### 1 父親の道内他産業への再就職と中学生の適応・進路

一方、父親の道内他産業への再就職（少数・単独就職）に伴い、道内の中学校に転校した生徒は、前節でみた②の生徒と同様、転校先での課題に個人で対応しなければならなかった。しかし、道外に比べて転校先への適応は容易だった。転校先から送られた手紙には、一部、教科書やカリキュラムの進行について言及する生徒もいたが、「教科書は、英語と社会の2さつだけちがっていました」（242047、3年女子、登別、1970年6月11日）、「社会、科学がすすんでいて、英語、数学がすこし遅れていました」（242023、3年女子、釧路、1970年4月24日）など、道外のように大きな課題にはなっていなかった。カリキュラムの進行については、尺炭中の教員らが生徒たちの転校を見越して実施した先取り教育が功を奏したといえる（前章参照）。

一方、札幌市に転校した生徒は、前節でみた道外に転校した生徒と同様の課題について述べている。3年次の4月に札幌市内の大規模な学校に転校した生徒（242031、3年女子）は、「尺別よりも学習については、きびしいようです」、「みんなは、頭はいいし努力してがんばっています」と転校先の状況を述べたうえで、「これなら1年の時からまじめにやっておくんだっとなあとつくづく思います」（1970年5月10日）と反省している。

また、学校文化の違いについては、札幌市に限らず、道内各地に転校した生徒が指摘している。釧路に転校した生徒（既出、242023）は、厳しい校則について述べたうえで、「尺別は、（校則などが）優しすぎると思います。そのために、他の学校へ行くと苦勞すると思います」と、尺炭中に残っている生徒に助言している（1970年6月）。

このように、尺炭中からの転校は、道内においても一定の障壁になっていたが、早期に転校した生徒を中心に、総じて転校先への適応と高校進学まではスムーズに進行した。本調査回答者で道内に転校した中学生5人のうち4人が高校に進学している（原野出身の JH-3f さんのみ中卒後就職）。しかし、高等教育機会が乏しい道東・釧路を中心に、道内に転校した生徒は、高卒後の進路において閉山による中長期的影響を受けることになった。以下では、中学2年次に釧路に転校した JH-2d さん（女子）の生活史をもとに、きょうだいの進路を踏まえながら検討する。

JH-2d さんの父親（閉山時 43 歳、鉱員・坑外助手）は、閉山後、詰所で残務整理をしていたため再就職が遅れ、5 月に縁故で釧路市内の金物店に再就職した。彼女の転校時期は遅れたが、「まだクラスの友人関係が定まっていなかった」ため、早期に対人的環境に適応できた。加えて、彼女は「尺別にいたころも何度か列車で釧路に遊びに行ったので、カルチャーショックは」なく、釧路の学校・地域に早期に適応できた（2017 年 8 月 18 日座談会）<sup>86</sup>。ただし、転出後の生活は厳しく、彼女の高卒後の進路に影響がおよんだ。彼女は、一家 6 名（父、母、兄（高校 1 年生）、本人、妹（小学 6 年生）、祖母）で社宅に入居し生活していたが、「6 人が住むには狭く」、「風呂場を改築して部屋に」するほどであり、「湿気がすごかった」。また家計も厳しい状況が続いた。彼女は中学卒業後、市内の公立高校（全日制）に進学し、高卒後は専門学校への進学を志望していたが、厳しい家計状況を考慮して進学を断念した。それは彼女より 2 歳下の妹も同様だった。進学を断念した理由について、姉妹はつぎのように振り返る。

JH-2d さん：兄貴は札幌の短大に行ってるんですけど、短大に行かせるだけでも（家計が大変だから、私たち 2 人は空気読んだよね。

妹：「兄は男だから学校に行かせる」ってね。

JH-2d さん：私は親に「行かせて」って言ったけど行かせてくれなかった。父親の母もいたし。（2017 年 8 月 18 日座談会）

彼女より 2 歳上の兄は、1973（昭和 48）年に札幌の短期大学に進学した。一方、JH-2d さん姉妹の高卒後進学は、父親の再就職キャリアが不安定で、家計が厳しい状況にあったため難しかった<sup>87</sup>。加えて、釧路管内の高等教育機会は乏しく<sup>88</sup>、札幌市との距離も遠いため、とりわけ女子の高卒後進学が抑制されるというジェンダー・トラックがあった（笠原 2015）。そうした構造的要因に加え、JH-2d さんが祖母と同居して家族員数が多かったという家族構成上の要因も彼女たちの進学を抑制した。このように、父親の道内他産業への再就職は、短期的には子どもの転校先への適応を促進したが、中長期的にはマイナスの影響をもたらしたのである。

---

<sup>86</sup> 同様の感想は、同じく釧路に転校したほかの生徒の手紙にもみられる。3 年次に転校した女子（242044）は、「釧路も尺別とは近いし、たいして変わりはありません」と述べる一方、「校則は尺別よりずうっときびしくて、びっくりするようなことばかりです」と述べている（1970 年 6 月）。

<sup>87</sup> JH-2d さんの父親は、末子（妹）が高校を卒業するまで（1977 年）、同じ商店で継続的に働いたが、1980（昭和 55）年にこの商店は倒産した（釧路市 2012）。その後、父親は老舗和菓子店に再就職したが、そこも数年で倒産した（2017 年 8 月 18 日座談会）。

<sup>88</sup> JH-2d さんが高校卒業を迎えた 1975（昭和 50）年時点の釧路市内には、北海道教育大学釧路分校（1948 年開校）、私立釧路短期大学（1964 年開校）があり、専門学校は釧路保育専門学校（1971 年開校）と看護系専門学校があった（釧路市史編さん員会議 1995）。なお、帯広市や北見市は通学圏ではなく、釧路市内高卒者の主な進学先（大学・短大）は札幌市や東京であった（笠原 2015）。

道内他産業に再就職した者のなかには、生活水準の低下を避けるため、短期間で再々就職する者もいた。その場合、子どもは転校先に適応する間もなく、再度の転校を余儀なくされたが、再就職先によっては中卒・高卒後の進学が促進された。JH-3e さん（転校時 3 年生、女子）はその典型である。彼女の父親（閉山時 38 歳、鉱員・坑外助手）は、閉山から 1 か月後に苫小牧にある製紙工場の下請会社に再就職したが、低賃金で居住環境や労働条件もよくなかったため<sup>89</sup>、父親が自ら再就職先を探して、同年 12 月に静岡県内の電線メーカーに再々就職した。彼女は高校入試の直前に転校したが、担任教員による適切な進路指導もあり、希望の公立高校に入学できた。そして、父親も再就職先に定着し、生活水準も上がったため、彼女は高卒後、短大に進学し、幼稚園と小学校の教員免許を取得して幼稚園の教諭として就職した。父親の再々就職によって、前述の道外他産業に転出した生徒と同様の進路を辿ることができた。彼女は、のちの振り返りで、「尺別にいたら、父が（坑外で）給料が安かったから、短大も行けなかったかもしれない」ので、「結果的によかった」と述べている（2017 年 9 月 16 日座談会）。

また、道内他産業への再就職であっても、本社職員の系列会社への再就職の場合、子どもの高卒後進学は抑制されなかった。技術系職員の息子である JH-3D さん（転校時 3 年生）は、父親の系列会社への再就職に伴い、小樽市に移住したが、彼は「（父親の）転勤がたまたま閉山と重なったという印象」と振り返っている。むろん、短期的には友人との別れを惜しんだが、同時に「都会の学校に行ったら勉強の面では良いと思う」とも述べており（1970 年 3 月 11 日の作文）、その自信と有能感をもとに、彼は転校後の学力試験で上位となり、同級生から一目置かれたという。その後、高校、大学と卒業し、高度専門職に就職した（2017 年 8 月 18 日座談会）。

以上のように、父親の道内他産業への再就職は、再就職先（中小企業）の雇用条件と高等教育機会の乏しさから、子どもの高卒後の進路に影響がおよんだ。さらに、ジェンダーならびに階層による違いもみられた。本調査回答者のうち、道内の高校に進学した 3 人のうち、大学等に進学したのは前述の JH-3D さん（本社職員の息子）だけだった。とくに、鉱員層の女子が高卒後の進学を抑制され、閉山による中長期的なマイナスの影響があったといえる。

## 2 父親の未就職と中学生の適応・進路

最後に、最も深刻な影響を受けた⑤父親が未就職だった子どもの適応と進路についてみていく。彼らは閉山直後、将来を見通せないなか、大きな不安を抱えた（前章参照）。転校先は道東の帯広や釧路であり、閉校まで残留した生徒は音別町市街の音別中学校に転校した。これまでみてきた生徒とは対照的に、家族を頼れない状況のなか、彼らの転校先への適

---

<sup>89</sup> この会社は、尺別炭鉱労働組合執行部の訪問記録でつぎのように評価されている。「御多聞<sup>(ママ)</sup>に洩れず残業が生計を営む重要なもの」であり、基本給が安く、なおかつ「借家住いで、住宅条件は、満足とは言えない」（尺別炭鉱労働組合 1970: 36-7）。

応と進路選択はいかにしてなされたのか。以下では、5月に帯広へ転出した JH-3F さん（転校時3年生、男子）と、尺炭中閉校（7月）まで残留した JH-3h さん（転校時3年生、女子）の生活史を検討する。

JH-3F さんの父親（閉山時 49 歳、鉱員・坑内直接）は、閉山当時、病気のため休職中だった。彼は閉山直後の作文に将来に対する不安を記す一方、「不安な気持ちを外面に出す必要はない」と毅然とした内容を書いていた。しかし、50 年後の振り返りでは、その作文を「強がり」と評し、「閉山前後の記憶がない」と述べており、深刻な不安を抱えていたことがわかる（2017 年 8 月 18 日座談会）。

彼は3年生の4月末に、4歳上の姉（看護職）を頼って父母とともに帯広に移り、全校生徒数 1,300 人の学校に一人で転校した。5月の手紙では、「ぼくもこちらへ来て、気持ちも新たに毎日はりきってやっています」、「学校にも、地域にもすっかり慣れ、勉強やクラブに励んでいます」と述べている。また、「学級でもクラブでも、だれとでも気楽に話すようにしているので、毎日だんだん友達が増えていくようだ」とも述べており、対人的環境に早期に適応したようすがうかがえる。のちの振り返りでは、転校先でサッカー部に入ってレギュラーになり、学力試験で「まあまあの成績で注目を浴び」るなど、「田舎ものを悟られないように、必死に振舞って」いたという。そして、1学期末に同じ学校に転校してきた尺炭中の友人（閉校まで残留していた男子生徒）とは距離を置き、「尺別を捨てた」と述べている（「自分史」、2005 年）。前述の集団就職の子どもは、尺炭中の友人関係を維持・活用していたが、彼は対照的な態度をとった。

その後、彼は中学校を卒業して、工業高校建築科に進学し、高校卒業後、札幌の建築設計会社に就職した。彼は周囲からみても大学等に進学できるほど成績が優秀だったが<sup>90</sup>、父親の代わりに土木作業員として働いていた母親を「早く楽にしてやらなければと思い」、高卒後の就職を選んだ。彼は閉山直後の作文に「閉山のせいにしてはいけない」と述べていたが、50 歳のときに書いた「自分史」には、閉山が「その後を決める最大のターニングポイントだった、と思えてならない」と述べている。

対照的に、尺炭中の閉校（7月）まで残留した生徒は、深刻な孤立感を抱き、転校後も持ち続けた。閉山当時、父親（閉山時 40 歳、鉱員・坑内間接）が病気のため休職中だった JH-3h さん（3年女子）は、4月以降、友人の転校が相次ぎ、孤立感と将来に対する不安を抱いていた。閉校前の作文につきのように述べている。

とにかく閉山のために私達は、悲しいめにあわされた。にくい閉山。国は政府は、合理化合理化と言う。合理化がなんだと言うのだ！石炭産業は、日本の大切な産業の一つではないか！／いくらもんくを言っても、不満を訴えても誰も聞き入れてくれない。いずれ日本の産

---

<sup>90</sup> JH-3F さんの従兄は、彼について「頭いいんだよ。もったいないよねえ。ああいうやつこそ、大学行ったほうがいいのに、環境的には行ける状態じゃなかったもんね」と述べている（2019 年 9 月 24 日個別インタビュー）。

業の一つである石炭産業は、なくなってしまうだろう。いや国によって政府によって、なくされてしまうんだ。尺中生活もわずか2週間で終わりだ。もう二度と尺中にくることはできないんだ。でもしっかりがんばるんだ！（1970年7月）

その後、彼女を含む残留生徒24名は、音別町市街にある音別中学校に転校した。同校には4月に転校した原野・岐線の生徒がいたが、転校のタイミングが遅れ、学校文化が尺炭中与異なったため、上記の生徒は転校先でも強い孤立感を持ち続けた。彼女は転校先で過ごした半年間について、つぎのように振り返る。

初めての転校で、それも中学校3年の夏休み前の1週間だから、残りの3月まで、受験を迎えるにあたって、なんかその生活が…。〔中略〕自分のなかでは、その半年っていうのは、ほんとに、友だちもみんななくなって、寂しいっていうかね、孤立してしまっただけっていうか、自分だけが取り残されたっていう、そういう、すごく悲しいっていうか、そういう気持ちがいっぱいの、中学校の残りの生活だったかなあって思います。（新藤ほか 2019: 23、〔 〕は引用者注）

彼女にとって孤立感を払拭する機会となったのは、高校への進学であった。彼女は中学卒業後、音別町市街の公営住宅（海光団地）から通学できる隣町の道立白糠高校に進学した。この高校には2歳上の兄が通っており、さらに姉（4歳上）も同校の卒業生だった。また、生徒たちが「いろいろなところから集まってきて、新しい生活が一から始まる」ため、彼女は「友だちもできて、楽しかった」と振り返っている。そして、彼女は高校卒業後、保育士の資格を取得するため、地元の専門学校に進学し、卒業後、十勝管内で保育士として就職した。ただし、閉山当時については、「もう40何年も前の話ですけど、そういう（寂しくて悲しかった）気持ちがずーっとありました」と述べるように、閉山の影響が一時的に潜在化しても、半生を振り返る段階で、再び顕在化していることがわかる（2017年8月18日座談会）。

このように、父親が病気等により再就職が難しい場合、中学生は将来に対する深刻な不安を抱えた。転校先への適応は、転校の時期が重要であり、JH-3Fさんのように、きょうだいを頼りに早期に転校できた場合、適応しやすかった。加えて、閉山直後の作文と転校後の手紙に記されていた自信や有能感も適応の促進因となった。一方、JH-3hさんのように、尺炭中閉校まで残留し、転校時期が遅れた場合、転校先への適応は難しかった。

彼らは、幸運にも個人的努力と親族の支援を活用しながら高校に進学し、標準的な進路に軌道修正することができた。しかし、前項でみた中学生の進路と同様、大学・短大進学は抑制された。さらに、彼らが人生回顧のなかで閉山経験を否定的に評価するように、閉山による影響が中年期・高齢期にかけて長期におよんでいたのである。

#### 第4節 小括

本章では、尺別炭砒閉山当時の中学1・2年生（転校時の2・3年生）が、転校先にどのように適応し、中学卒業後、どのような進路を辿ったのかについて、父親の再就職類型ごとに明らかにした。父親の再就職類型は、①「道外他産業・大企業への集団就職」、②「道外他産業への少数・単独就職」、③「道内他産業・中小企業への就職」、④「道内他炭鉱への再就職（炭鉱復帰）」、⑤「未就職」に分けられ、このうち本章では④を除く4つの類型について検討した。

まず、道外に転出した生徒のうち、①父親の集団就職によって転校した生徒は、尺炭中から転校してきた友人とともに転校先に適応することができた。さらに、父親の再就職先への定着と家族生活の安定は、中学生の高校進学とその後の高等教育機関への進学を促した。一方、②父親の少数・単独就職によって転校した生徒は、転校先で頼れる友人関係が少なく、強い孤立感を抱き、諸課題に個人で対処するしかなかった。また、彼らは、高校進学という標準的進路を辿ることに葛藤を抱く傾向にあり、高校進学には家族の期待・支援と個人的能力がとくに必要になった。

つぎに、道内に転校した生徒のうち、③父親の他産業・中小企業への再就職によって転校した生徒は、道外に比べて転校先への適応と高校進学は容易だったが、道東を中心に高等教育機関への進学機会が少なく、父親の不安定な再就職キャリアと生活水準の低下によって、高卒後の進学が抑制された。そして、⑤父親の未就職に伴い道東に残留した生徒は、最も深刻な影響を受けた。彼らは、将来に対する不安と孤立感を持ち続け、家族の状況を優先して自らの進路を決定した。標準的な進路を辿った生徒も、閉山に対する否定的評価を強く持ち続けていた。

このように、父親の再就職によって、転校先への適応と進路が異なったが、同じ再就職類型のなかでも、父親の階層、本人の性別と計画的能力による差異がみられた。まず、父親の階層について、本社職員の子どもは、父親の再就職条件がよいことに加え、個人的資質（主に学力）が高く、転校先に早期に適応し、高校・大学と進学できた。一方、鉱員の子どもが大学に進学するのは容易ではなく、高学歴化が進展した首都圏に転校した生徒に限られた。

また、性別について、女子のほうが転校先の対人的・社会文化的環境に違和感を持ち、手紙に記していた。これは、閉山直後の作文で、女子のほうが周囲の状況を自己と結びつけて記述していたことと連続性がある。また、進路はきょうだいのなかで女子のほうが高卒後の進学が抑制される傾向にあった。上記と関連づけて言えば、道内に再就職した鉱員の女子が最も高卒後進学を抑制されたといえる。

そして、閉山直後の作文に転校先に適応できる自信や有能感（計画的能力）を示していた生徒、とくに男子は、転校先に早期に適応し、高校進学にむけて積極的な姿勢を示していた。一方、作文で不安や不満を強調していた生徒、とくに閉山当時の2年女子（転校時3年生）は、転校先で孤立感を抱き、進路についても消極的な姿勢を示していた。

ここまでみてきたように、閉山当時の中学1・2年生は、閉山と父親の再就職に伴う転校によって、中期的に多大な困難に直面した。中生活途上での炭山コミュニティからの他出、生活基盤の喪失は、彼らのライフコースを攪乱させた。しかし、「中生活途上」であったため、早期に軌道修正できたとみることもできる。対照的に、中学卒業直前の進路変更がきかない時期に閉山を経験した中学3年生は、より困難な状況に直面した。閉山に最も翻弄された彼らのライフコースについて、次章で検討する。

## 第6章 父親の再就職と高校生の適応・進路——閉山時中学3年生の生活史分析

### 第1節 父親の再就職と高校生の適応・進路に関する分析課題

本章では、尺別炭砒閉山当時の中学3年生が、中学卒業後、どのような進路を辿ったのかについて明らかにする。彼らは、進路変更の猶予がない時期に閉山を迎え、最も混乱した状況に直面した。彼らが進学先や就職先を検討していた1月21日に、会社は尺別炭砒の閉山を提案し、2月14日に企業ぐるみ閉山を提案した。そして、2月27日に尺別炭砒を含む雄別三山が閉山した（笠原 2020a）。彼らは、3月6日に公立高校を受験した。翌日の地元紙記事には「父母の移転先が決まらないまでも高校へのパスポートを握ることが先決と受験生たちは背水の構え」とある（『北海道新聞』1970.3.7）。彼らは入試結果を待ちながら、3月10日に作文を執筆した。第4章でみたとおり、父親が比較的若年で、道外への再就職を予測していた生徒は、男女ともに道外の高校への転校を展望し、期待と不安を述べていた。一方、父親が高齢もしくは階層が低い等の理由から再就職の難航や炭鉱復帰を予測していた生徒は、進学から就職への進路変更の意思を表明していた。

彼らはその後、どのように尺別を離れ、新年度を迎えたのか。3月13日に尺別炭砒中学校の最後の卒業式が行われ、122名が卒業した。当時の校長は、彼らにむけて「このきびしい試練を乗り越えて、これからの人生の中で、あらゆる困難に堪える大きな力にしてもらいたい」、「どこの土地にいても、たくましく生きぬいてほしい」と述べた。卒業生たちは、目に涙が浮かべ、「じっと唇を噛みしめていた、きびしい表情」だった（「中学校だより」1970.3.20）。

そして、3月17日に公立高校入試の結果が発表され、道立白糠高校に尺別・上茶路から合わせて37名が合格し（大半が尺炭中出身者、『北海道新聞』1970.3.18）、釧路市内の高校には、尺炭中から20名が合格した（『北海道新聞』1970.3.17）。しかし、「ほとんどの家庭がまだ就職先も決まらず、合格者も『ほんとうに釧路の高校に行けるだろうか』と喜びと不安の入りまじった複雑な表情」だった（『北海道新聞』1970.3.17）。ここでの「合格」は、父親の再就職先に転校するときのための「パスポート」であり、合格した高校に通えると考えていた生徒は多くなかった。また、尺炭中の教員も、入学手続きを進めながら、生徒の父親が道外に再就職した場合、スムーズに転校できるどうかを懸念していた（『北海道新聞』1970.3.17）。白糠高校の教職員も、18日から山元に出向き、「身の振り方の相談」に応じた（『北海道新聞』1970.3.18）<sup>91</sup>。

音別町は、尺別炭山から白糠・釧路に通学する生徒は12名程度と見込み、山元に簡易の

<sup>91</sup> 白糠高校教職員による相談対応は、閉山前から継続的に行われていた。当時の教員は、つぎのように振り返る。「(昭和)45年1月から2月にかけて、学校に出ない時期がありましたね。生徒の転校先を世話するために家庭訪問ばかりしていたのです。そのうちに生徒ばかりでなく、親からも転職先を探してほしいと頼まれましてね。履歴書の書き方を教えたりしましたね」(北海道立白糠高等学校 1979: 150)。

学生寮を設置した。しかし、その寮は1学期末までの暫定的な寮であった（第4章参照）。大半の生徒が父親の再就職先に転出・転校することが予想され、釧路教育局ほか自治体、学校関係者は、道教委を通じて道立高校ならびに道外各都府県に転校生の受け入れ要請をおこなった。しかし、4月上旬の時点で転校が決まった生徒はごくわずかであり、高校教員は「札幌市内高校などはまったく受け入れる姿勢もない感じ」であり、「千葉、神奈川などの県立高校は同様に冷たく転入試験も受けられない苦しい実情」を訴えていた（『北海道新聞』1970.4.3）。4月2日によりやく釧路市内で転校生のための「一斉試験」を実施することが決定したが（4月6日および28日、5月以降毎月28日実施）、主な再就職先・転出先である道外については文書等で各都府県教育委員会に要請する程度にとどまった（『北海道新聞』1970.4.3）。

このように、閉山当時の中学3年生は、父親の再就職先が決まるまで、4月以降の進路を具体的に検討できなかつた。前章でみたとおり、尺別炭砒閉山離職者の約8割が、4月上旬（閉山から1か月程度）までに再就職先を決定していたが、中学3年生にとって、それは決して早くなかつた。彼らは、閉山時の1・2年生とは異なり、家族の状況・要請に応じて、進路を変更できるタイミングにあつたのである。そして、父親の再就職先が決定しても、希望の高校に転校できるか、就職先が見つかるか不明であつた。彼らは短期間に、進学か就職か、家族と同居か別居かなどを決めなければならず、さらにその後の生活と進路は、前章でみた中学生と同様、父親の再就職形態やその後のキャリア、家族生活に規定されたのである。

以下では、ライフコース調査によって把握した閉山時中学3年生29名（うち3名は閉山前転出）の生活史をもとに、父親の再就職と彼らの中卒後の進路について検討する。また、高校生の転校については、1学年上の閉山時高校1年生の生活史も参照する（以上、一覧は第2章、表2-8を参照）。まず、父親の再就職先決定時期に着目し、再就職先の決定が遅れた事例について検討する。つぎに、父親（世帯主の兄を含む）の再就職類型（前章参照）にもとづき、道外他産業、道内他産業、道内他炭鉱に再就職した事例を検討する。それぞれの分析課題は、つぎのとおりである。

#### （1）父親の再就職先決定時期の遅れ（4月以降）と中学3年生の進路

中学3年生は、どのような基準で進路を変更したのだろうか。また、進路変更の影響は、その後、どのように表れるのだろうか。

#### （2）父親の道外他産業への再就職と中学3年生の進路

親と別居・道内に残留するために、どのような資源が活用されたのか。志望校に進学した生徒は、学卒後、どの地域での就職を志向したのか。一方、道外に転出した生徒は、高校の転校時にどのような課題に直面し、どのように対処したのか。父親の再就職形態（類型①集団就職、②少数・単独就職）で、どのような差異がみられるか。

### (3) 父親の道内他産業への再就職（再就職類型③）と中学3年生の進路

高卒後の進路は、前章でみた閉山時中学1・2年生と同様、鉱員層の女子を中心に、進学が抑制されたか。

### (4) 父親の炭鉱復帰（再就職類型④）と中学3年生の進路

家族とともに炭鉱に移った生徒は、尺別炭山コミュニティと類似した生活環境のため、転校先の高校に早期に適応できただろうか。また、石炭産業の衰退と閉山は、高卒後進路にどのような影響を与えただろうか。

## 第2節 父親の再就職先決定前の進路変更——高校進学から就職へ

父親の再就職先決定が4月以降に遅れた場合、中学3年生の進路は大きく左右された。とくに、家族の経済状況や父親の年齢・階層等から、条件のよい再就職が見込めない場合、中学3年生は、早期に高校進学から就職に進路を変更しなければならなかった。彼らは、どのような企業に就職し、その後、どのような進路を辿ったのか。以下では、閉山前に進路変更を決定した生徒（H-1Dさん）と高校受験後に進路変更を決めた生徒（H-1Gさん）の事例を検討する。彼らはいずれも関連会社社員の子どもである。

### 1 閉山前の進路変更——「学校なんか行ける状況ではなかった」：H-1Dさんの事例

H-1Dさん（男子）は、閉山のうわさを中学2年生の終わりころから耳にしていたため、中学3年の12月か1月くらいに全日制高校への進学は「もう無理だな」と、「自分のなかで勝手に決めていた」。加えて、父親が関連会社（日通）の社員であり、なおかつ高齢（閉山時47歳）であったため、「就職先を斡旋してもらえるかわから」ず、家族の「経済的な条件が安定しないから、学校なんかとても行ける状況」ではなかった。彼の姉（4歳上）と兄（2歳上）は、ともに白糠高校に進学・卒業していたが、彼は中学卒業と閉山が重なったため、就職することになった。

彼は「自分で勝手に」、「投げやり」で就職することにして、定時制高校に通える化学繊維工場（岐阜県）への就職を決めた（2017年9月16日座談会）。彼が閉山直後に書いた作文には、2週間後に控えた離山と就職に対する不安を、自らを鼓舞する内容とともに述べている。

今現在の僕の心境は卒業がせまってくるにつれて、だんだん不安を感じてくる。卒業して10日ばかりしたら就職がまっているからだ。親の元を遠くはなれるのはやはり不安である。でも、こんな事ではやはりだめだと思う。やはり、自覚が必要だと思う。（1970年3月11日）

彼は3月末に、同級生4、5人とともに岐阜県に移住した。彼は働きながら定時制高校に通学した。

一方、彼の父親は、その後も再就職が決まらず、7月に静岡県内の自動車製造工場に再就職した。この工場には4月以降、雄別炭砒と尺別炭砒から、あわせて100人近くの離職者が再就職しており（『朝日新聞』1970.4.22）、H-1Dさんの父親は、やや遅れての再就職であった。彼は、定時制高校を卒業するまで紡績工場勤務し、その後、工場を辞め、父親と同じ工場に転職した（1974年、19歳）。この工場には、のちに兄も就職し、連鎖移住の形態をとった。父親は定年退職まで同工場に勤務した（1983年退職）。また、彼も一度転職して、2017年現在まで継続して就業している。

## 2 高校受験後の進路変更——「私だけ何も決まっていなかった」：H-1Gさんの事例

上記のH-1Dさんは、閉山が現実的になった段階で全日制高校の進学を諦め、就職先を探したが、一方のH-1Gさん（男子）は、高校を受験したあとに就職に変更した。彼の父親（閉山時41歳）も関連会社の社員であり、尺別炭砒の職員や鉱員に比べて、再就職に関する「情報が入らず、対応が遅れた」。3月11日に書いた作文には、「家庭は今になって本州に行くなんて言っていました」とあるが、具体的な再就職先は決まっていなかった。周囲の友人は、「作文を書いたとき、だいたい進路は決まっていた」が、「親がなかなか決断せず、親もだいたい悩んでいるような」状態だった。彼は「白糠高校に行くつもりだったが、自分だけ尺別に残るわけにはいかず」（2017年9月16日座談会）、進学から就職に変更しようと考えていた。そのときの決心と葛藤が作文に表れている。

やはり父母などは私達よりも、つらいんで<sup>(ママ)</sup>わ<sup>(ママ)</sup>ないかと思うが？／学校の事、学校に上がると言っても、やはり父母達が<sup>(ママ)</sup>行<sup>(ママ)</sup>なかったら、学校行く気にもな<sup>(ママ)</sup>てないし、へたして病気に<sup>(ママ)</sup>かかったりしたら、だれが私<sup>(ママ)</sup>を<sup>(ママ)</sup>見<sup>(ママ)</sup>てくれたりしてくれる！／〔中略〕やはり、父母あつての私<sup>(ママ)</sup>し<sup>(ママ)</sup>であつて私<sup>(ママ)</sup>し<sup>(ママ)</sup>あつての父母であつて／そ言と学校も、ふびんになる／今後、自分としては／行かなければならない道を前進して行かなければならないし、／だから今後最後には、なんやかんや、これからの1年間又2年間くろうするのは、かく実だ。／それが人生かもしれない。／閉山がなかったのなら！（1970年3月11日、〔 〕は引用者注）

上記のように、彼は父母と同じ地域での就職を希望していたが、父親の再就職先が決まっていなかったため、自らの就職先を決められずにいた。4月に入ってから、彼は前述のH-1Dさんが就職した化学繊維工場に就職することにした。決め手は、会社の寮があり、定時制高校に通えることだった。H-1Dさんたちが就職してから、1か月遅れての就職だった。このときも尺別から5、6人と一緒に就職したという。

その後、彼の父親は5月に神奈川県内の自動車製造工場に再就職したが、仕事内容が大き

く変わったため苦勞していた。また、母親も近所づきあいに気を使い、苦勞していた。H-1Gさんは、3年間、紡績工場で働きながら定時制高校に通い、父母と相談して退社・退学し、親と同居することにした。このころ、父母と「北海道に帰ろうか」という相談をしていたが、神奈川に残った。彼は移住したタイミングで自動車販売会社に就職し、2017年現在まで勤めている。

このように、彼らは、父親の再就職先決定の遅れによって、高校進学から就職に変更した。彼らの父親はいずれも関連会社社員であり、再就職活動において条件はよくなかった。彼らは、周囲の生徒と同じように全日制高校に進学できなかったことに葛藤を抱えたが、転出先で働きながら夜間定時制高校に通い、高卒学歴を取得した。そして、標準的な進路に軌道修正しようと奮闘した。いずれも転出から数年後に転職し、親子世代で道外に定着しようとしていた。しかし、H-1Gさんの例からわかるように、父母の再就職先への適応・定着は容易ではなく、子どもが父母を支えるために転職・移動したという側面もあった。

彼らは最終的に安定した職業キャリアと家族生活を得たが、閉山に対する評価は否定的であった。H-1Dさんは、「炭鉱が閉山しなければ、こんな苦勞はなかったのかなと思うけどね。そういう意味じゃ、閉山はもう一大転機だったかもしれない」と述べている。また、H-1Gさんは、「卒業のころのことは、どちらかというとなんか忘れた記憶」であり、「[友人との]絆というか、この時期の閉山でなくなったことはある」(〔 〕は引用者注)と振り返っている。

### 第3節 父親の道外他産業への再就職と高校生の適応・進路

#### 1 道内残留と志望校への進学

3月中に父親の道外他産業への再就職が決定した場合、中学3年生は、進学か就職か、進学の場合、どの学校に進学するか(転校か残留か)という選択を迫られた。多くの生徒は、家族とともに父親の再就職先に転出したが、男子を中心に、釧路周辺の学生寮やアパートなどに入り、合格した学校に進学した。以下では、家族と別居して釧路高等専門学校(釧路高専)に進学した生徒と、釧路市内の高校に在学中だった生徒の事例を検討する。

まず、釧路高専に進学したH-1Aさん(男子)についてみていこう。彼は高専進学を志望して、2月に受験した。尺別炭砒が閉山した2月27日の夜、会社から彼の父親(閉山時41歳、鉱員・坑内助手)に解雇通知が届き、その後、彼に釧路高専建築科の合格通知が届いた。彼と父母は、その2つの通知を見て「ひにくなもんだな一って」笑ったという(1970年3月11日作文)。釧路高専には学生寮があったため、彼は父親の再就職にかかわらず、入寮して高専に進学できた。父母も彼の寮生活を念頭に再就職活動をおこなった(質問紙調査自由回答より)。進路が確定していた彼は、作文のなかで、自らの将来に対する不安よりも父親の再就職について心配していた。

父の就職口もまだきまっていませんが、高専に行くぼくとは、離れることになるかもしれません。40 になっての就職口はあんまり良いところがないそうです。(1970 年 3 月 11 日)

子どもの進路が確定していることは、父親の再就職活動にとって肯定的に作用した。彼の父親は、その後、神奈川県内の大口採用企業である自動車製造工場への再就職が決定し、4 月に相模原市に移住した。H-1A さんは、1975 (昭和 50) 年に釧路高専建築科を卒業し、道東を離れ、東京都内の建設会社に就職した (質問紙調査回答より)。

このように、男子生徒は学生寮に入寮して、合格した学校に進学するという選択肢があった。前述のとおり、主な進学先であった道立白糠高校にも学生寮があり、家族と別居して通学する者もいた。この学生寮は、後述するように、父親が札幌や他炭鉱など、釧路以外の道内に再就職した場合にも使用された (H-1K さん、H-1R さん)。

また、釧路市内のアパートに下宿して、高校に通学する生徒もいた。その際、尺別関係者が経営しているアパートが選択されたり、きょうだいと同居するなど、尺別炭山でのつながり (地縁、血縁) を活用していた。閉山当時、釧路工業高校の 1 年生だった H-2A さん (男子) は、閉山まで尺別から朝一の汽車で通学していたが、高校 2 年次から釧路市内のアパートに、同じ高校に通う 1 学年上の兄と下宿して通学した。彼の父親 (閉山時 42 歳) は、閉山当時の労働組合執行委員長であり、閉山処理で忙しく、子どもは釧路に置いていくという方針だった。そこで、尺別関係者 (H-2A さんの同級生の親戚) が経営していたアパートに、「おそらく親が頼んで」下宿した。また、彼も道外に転出して「転校試験で落ちて困るの」で、転校は考えていなかった。彼の父親は、閉山処理を終えて、11 月に千葉県に再就職・移住したが、H-2A さんと兄は釧路に残り、高校卒業後、1972 (昭和 47) 年に東京で就職した (2017 年 9 月 16 日座談会)。

上記のように、父母と別居して釧路に残留した子どもは、親からの支援を受けながら生活・通学していた。集団就職をはじめ父母の再就職先での生活が安定すれば、問題なかったが、反面、再就職先で親の生活状況が悪化した場合、仕送りが途絶え、子どもの高校通学が難しくなった。2017 年に実施した座談会では、そうした状況に直面した同級生に関する話がしばしばあがっていた。ある男子生徒は、父親が埼玉県に再就職したため、釧路市内のアパートに下宿して市内の高校に通っていたが、親からの仕送りが途絶えたため中退せざるをえず、日中働いて夜間に定時制高校に通うことになったという (2017 年 8 月 19 日座談会)。

このように、父親が道外に再就職した場合、男子を中心に、学生寮やアパートなどを利用できる生徒は、親と別居して釧路周辺に残留し、志望校に進学できた。その際、親族や尺別炭山の地縁などを活用していた。こうして早期に子どもの進路が確定することは、父親の再就職活動にも肯定的影響があった。そして、彼らは高校・高専を卒業したのち、結果的に家族が転出していた道外で就職した。

## 2 道外転出と転校

一方、道内残留が難しい女子をはじめ、家族とともに道外に転出した生徒は、転出先で高校に転入できるかどうか最大の課題であった。道内のような優遇措置はなく、私立高校の生徒は、公立高校への転校資格さえなかった<sup>92</sup>。公立高校の生徒も転校先が見つからず、就職するケースもみられた。たとえば、H-1dさん（女子）は、3月上旬の高校入試に合格していたが、父親（閉山時38歳、鉦員・坑内助手）の再就職に伴い、4月に家族とともに大阪に移住した。しかし、全日制高校の受け入れ先がなく、夜間定時制高校に通うことになった。彼女は5月から大阪府職員（学校事務）として働きながら夜間学校に通学した（質問紙調査回答および2017年8月19日座談会より）。同様のケースは、当時の高校2・3年生も含めて多数報告されている<sup>93</sup>。

全日制高校に転校できた場合でも、本来進学するはずだった道東の高校と同じ学力水準の高校とは限らなかった。とくに首都圏の高校は、彼らが作文で書いていたように、道東の高校に比べて水準が高いとみなされていた<sup>94</sup>。実際、ある女子生徒は、釧路市立北陽高校に合格していたが、父親の再就職に伴い神奈川県内の女子校に転校した。しかし、その学校は県内有数の進学校であり、彼女は成績が学年で最下位になって卒業まで苦戦したという（2017年8月19日座談会）。前章でみた中学生同様、「都会」の高校への適応は容易ではなかった。

こうした道外の高校への適応は、前章でみた中学生と同様に、父親の再就職形態や雇用条件に規定された。父親が集団で再就職した場合、転出先で維持された尺別炭山コミュニティの一部を活用しながら、転校先に適応していった。父親（閉山時45歳、登用職員）が造船会社に集団就職したため、広島県沼隈町に集団移住したH-1aさん（女子）は、転出前の作文に「閉山と決まったのはとても淋しいことです。そうなると思った高校の生活への希望ももうすれてきます」と述べ、尺別から最も遠い沼隈に再就職した父親に不満を述べていた（2018年1月28日座談会）。彼女は、4月に父母とともに沼隈に移住し、近隣の高校に転校した。彼女の一家もほかの尺別関係者と同じく雇用促進事業団住宅に入居し、元組合執行部の尽力で移植・維持された尺別炭山コミュニティのなかで生活することができた。彼女は

<sup>92</sup> 前章でみたJH-3cさん（閉山時中学2年生）の姉は、閉山当時、道立白糠高校の2年生だった。彼女は私立釧路第一高校から来た生徒と茨城県内の公立高校の転入試験を受けようとしたが、「私は道立だからよかったけど、私立の人は入れなかった」という（2018年2月22日インタビュー）

<sup>93</sup> 本調査回答者のきょうだいや友人を含めると、多くの生徒が同様の課題に直面したことがわかる。たとえば、前章でみたJH-3aさん（閉山時中学2年生）の姉は、高校2年生のときに家族とともに千葉県船橋市に集団移住したが、転校先が見つからず、就職した。また、父親の再々就職に伴い、愛知県、三重県、神奈川県と転々としたJH-2cさん（閉山時中学1年生）の姉は、4月から釧路市立北陽高校に進学するはずだったが、三重県の公立高校に転校し、高校2年次に再び転出した際には転校先が見つからなかった（2017年9月16日座談会）。

<sup>94</sup> こうした認識は、文教対策を指揮していた当時の北海道教育長も持っていた。彼は、雄別・尺別・上茶路の生徒が多く通う阿寒・白糠「両校とも都市部公立高校と比べると学力に差がある」としたうえで、とくに道外の各県教育委員会に、転校に関する配慮を要請していた（『北海道新聞』1970.3.6）。

その後、専門学校に進学・卒業したのち、広島県内の製造業の会社に就職した（質問紙調査回答より）。

対照的に、父親が少数・単独で道外に再就職した場合、活用できる資源が少ないなか、転出先の個人で適応しなければならなかった。彼らは、中学卒業直前の作文に表明した自信や有能感をもとに、転出先で直面した諸課題に対処した。作文に「道内には、とどまりたくない」、「どこへ行こうと私は私・・・家族について行こう!」、「住めば都」と述べていた H-1b さん（女子）は、父親（閉山時 41 歳・登用職員）が三重県内の石材会社に再就職したため、一家 6 名（父、母、本人、弟、妹、祖母）で移住した。同社には尺別から 4 世帯で再就職し、雇用促進事業団住宅に入居した。狭い間取りに加え、父親の収入は大幅に減少し、再就職から 1 年未満で再々就職するなど、生活は不安定だった。彼女は三重県内の高校を卒業し、その後、神奈川県内で販売・セールスの職に就いた（質問紙調査回答より）。

道外に転出し、全日制高校に転校した生徒は、高卒後、高等教育機関に進学する傾向がみられた（5 人中、H-1b さんを除く 4 人）。男子のなかには、大学に進学する者もいた。H-1E さん（男子）は、閉山直後の作文で、「やっぱりいやだ俺みたいな人間なんかは、高校みたいぬるま場<sup>(マゴ)</sup> [湯] につかってられない。人にもまれもまれて成長したい」と述べていたが、父親（閉山時 51 歳、鉱員・坑内直接）の再就職に伴い、4 月に一家 5 人（父、母、姉、本人、弟）で千葉県に移住し、全日制高校に転校・卒業したのち、大学に進学した。彼は閉山が「中学卒業時での出来事（倒産）でしたので、人生を大きく変革せざるをえませんでした。それが良かったと今は思っています」と述べている（質問紙調査回答より）。

また、本社職員の子どもは、転校先の学力の低さに苦戦したうえで、卒業後、大学等に進学している。閉山直後の作文で尺別炭山や尺炭教育に否定的な内容を記していた H-1c さん（女子、第 4 章参照）は、閉山直後に父親の再就職先が決まっていたが、閉山処理のため 5 月まで残り、その後、千葉県に移住した。5 月から転入できる高校を探したが、公立高校に空きがなく、「私立に入るしか」なかった。転入した高校は、「学力の低い学校で」、彼女は「残念でした」と振り返っている。彼女は高校卒業後、短大に進学し、東京で金融業に就職した（質問紙調査回答より）。

以上のように、父親が道外他産業に再就職した場合、閉山時の中学 3 年生は、一部の男子を除いて、大半は家族とともに道外に転出し、全日制高校への転校を望んだ。しかし、道外の転校事情は、彼らが閉山直後に想定していたとおり厳しく、転出時期が遅れたり、定員に空きがない場合、私立高校や定時制高校への転校または就職に変更せざるをえなかった。とくに、親との別居・残留の選択肢がほとんどない女子は、転出先地域の条件に左右された。他方、全日制高校に転校できた生徒は、前章でみた中学生と同様、中長期的には道外都市部の豊富な進学機会を活用し、尺別炭山では実現が難しかった進路を辿ることができた。その基盤には、道外他産業での父親の再就職先への定着と家族生活の安定があった。これは道内に残留した生徒も含めて、彼らが学卒後、道外で就職する契機となった。

## 第4節 父親の道内再就職と高校生の適応・進路

### 1 父親の道内他産業への再就職と高校生の適応・進路

一方、父親が道内に再就職した場合、札幌等の遠方でない限り、閉山当時の中学3年生は、白糠や釧路の志望校に進学できた。しかし、家族の状況やニーズに応じて、転校を求められる生徒もいた。道内での転校は優遇措置があったが、高校生の転校は容易ではなかった。札幌市などの大都市はもちろん、道東でも志望校と同じ学力水準の高校に転校できるとは限らなかった。閉山後、帯広市に転出した生徒（222003、閉山時高校1年生、女子）は、「編入試験を受けて入った高校が進学校だったので」、「大変苦勞しました」と述べている（質問紙調査自由回答より）。したがって、父親が道内で再就職したとしても、男子を中心に、可能な限り学校等が用意する学生寮や親族ネットワークを利用して、志望校に進学しようとした。父親が札幌に再就職したH-1Kさん（男子）は、音別町役場の職員だった姉（6歳上、既婚）の家から白糠高校に通学した（172072、質問紙調査回答より）。

また、父親が釧路に再就職した場合、子どもはおおむね志望校に進学できたが、家族の状況次第では、転校を求められることもあった。とくに、彼らは高校に入学するタイミングであったため、高校2・3年生に比べれば転校しやすいとみられていた。無論、彼らは転校先でいくつもの課題に直面し、葛藤を抱いた。

H-1Jさん（男子）は、「近いから」という理由で白糠高校を受験して合格し、3月に入学者用のオリエンテーションに参加した。しかし、帰宅すると父親（閉山時45歳、登用職員）から「〔釧路市立〕北陽高校に行け」（〔 〕は引用者注）と言われ、転校することになった。彼の父親は3月中に釧路市内の測量会社への再就職を決め、なおかつ彼の2歳上の姉は釧路市内の高校に通っていたため、一家で釧路市内に移住することになった。釧路市内では、北陽高校が閉山離職者の子どもの転入を主に受け入れていたため、彼も同校に転校することになった。彼の記憶では「特例で、公立高校の間では、無試験で編入でき」、「同じように編入した同級生は3人から4人いた」。彼は4月上旬の10日間ほど、尺別から同校に通学し、その後、引っ越した。北陽高校のオリエンテーションには参加できなかったため、「教科書は売り切れだった」。炭鉱での生活は、ほとんどお金がかからなかったが、「釧路では何にでもお金がかかった」。彼は転校した当初、「買い食いができず、農家の子におごってもらったりした」が、「子どもだからすぐ慣れた」と振り返っている（2017年8月19日座談会）。

一方、志望校に進学できた生徒のなかには、道外への転出と転校を期待していたにもかかわらず、父親の道内・釧路での再就職によって、「仕方なく」志望校に進学した生徒もいた。とくに、閉山直後の作文で父親の道外への再就職を予測し、期待していた女子を中心に、取り残された感覚を抱いた。

H-1fさん（女子）は、父親（閉山時42歳、鉱員・坑内直接）が閉山直後の段階で埼玉に再就職することが決まっており、彼女の転校についても、再就職先企業のリクルーターに「埼玉の高校を紹介します。そこは入れますから」と言われていた。彼女は「とりあえず高

校に入っておけば」転校できるため、3月上旬に白糠高校を受験した（2017年8月19日座談会）。受験直後に書いた作文には、閉山が「卒業と重なってくれた事に」「感謝」するとともに、将来に対する期待と高校受験の結果を心配する内容を記している。

こうなった以上は過去の事ではなく未来の事を考えなくてはならないと思います。〔中略〕やはり、父の就職の事、万事、お金がかかるという事です。しかし、その様な事を私が心配しても解決できない事ですから親に心配をかけないという事です。私が卒業とどうじて助かったと思っても、高校を落ちたらそれ相当のお金もかかるし、4月は学校にたくさんお金がかかる。そういう事を考えると親に心配をかけないという程度に終わらないと思います。高校に落ちたら自分の好きな所にも行けないと思う。私は、高校を落ちたら、の方が問題です。（1970年3月11日、〔 〕は引用者注）

白糠高校に合格した彼女は、「4月ぐらいに埼玉に転出する予定だった」ので、同校の制服を購入せず、中学校の制服で入学式に参加し、通学した。しかし、母親が道外への転出を渋るようになり、埼玉への再就職・転出は白紙となった。最終的に、父親は釧路市内で再就職し、6月に市内に移住した。彼女は白糠高校に釧路市から通学することになり、6月に同校の制服をつくった。それまで、「一人だけ中学校の制服で通っていたので、落ち着かなかった」という。また、彼女は同校から転校する生徒を多数見送っていた。「こうやって転校していった同級生は、うまく編入できたようだ」とも述べている（2017年8月19日座談会）。

白糠や釧路の高校に進学した生徒たちは、高校卒業後、多くが就職した。これは前章でみた中学生と同様の傾向である。すなわち、父親の中小企業への再就職と生活水準の低下に加え、釧路市内の高等教育機会の乏しさから、女子を中心に高卒後進学が抑制された。本調査の回答者のうち、該当者（父親道内他産業再就職、本人白糠・釧路の高校に進学）13人（男子6人、女子7人）のうち、短大進学者が2人（男女1人ずつ）、専門学校進学者が1人（女子）であり、前節でみた道外の全日制高校に転校した生徒に比べて少ない。本人が高校卒業後に進学した場合でも、その弟妹が進学できないケースもあった。釧路工業高校から札幌の短大に進学した H-1L さん（男子）は、前章でみた高卒後進学を控えた JH-2d さんの兄である。また、高卒後の主な就職先は釧路であり、道外への就職は大学・短大・高専進学者が中心であった。

対照的に、閉山前に父親の転職に伴い、釧路市内に転出した生徒、とくに本社職員の子どもは、閉山の影響なしに高校・大学と進学し就職した。H-1Q さん（男子）は、閉山の1年前に父親（本社職員）が釧路市内の企業に「経営・マネジメント」として転職したため、市内の中学校に転校し、卒業後、道東随一の進学校である釧路湖陵高校理数科<sup>95</sup>に進学した。

<sup>95</sup> 同校の理数科は、北海道大学などの理系難関大学進学を目指す理数系科目重視のコースとして、1969（昭和44）年に入学定員40名で設置された（笠原 2015: 36）。

そして、高校卒業後、大学に進学し、卒業後、千葉県内の製薬会社に就職した。進路については、「閉山は全く関係ない。進路で悩むということはなかった。〔釧路に転出して〕高校進学に際して下宿しないで済んだということで、むしろ安心感があった」(〔 〕は引用者注)と述べている。

## 2 父親の炭鉱復帰と高校生の適応・進路

最後に、父親が道内他炭鉱に再就職した生徒の高校進学とその後の進路について検討する。同じ道内での再就職であっても、閉山を再び経験する可能性のある炭鉱への再就職は、子どもにとって不安の種であった。これは、閉山直後の作文に顕著に表れていた。なかには進学から就職に変更しようとする生徒もいた(第4章参照)。本調査の回答者は、高校進学者のみに限定されるが、彼らの生活史から、閉山後の不安定な状況や困難を把握できる。

父親が道内他炭鉱に再就職する場合、前述の道外他産業や札幌等に再就職したケースと同様、男子は家族とともに炭鉱へ移るより、学生寮などを利用して残留し、志望校に進学しようとした。炭鉱復帰は、比較的早期に決まったため、生徒も中学校を卒業する前から4月以降の進路について検討できた。H-1Rさん(男子)は、作文執筆時点(3月11日)すでに父親(閉山時44歳、鉱員・坑内直接)が他炭鉱に再就職することを知り、つぎのように納得しようとしていた。

大人の中にはまた炭鉱とする人もいるだろうしまた別の職業に<sup>(ママ)</sup>着く人もいると思う。ぼくは炭鉱がいいとか悪いとはいえないと思う。なぜなら人は収入を得なければならないからだ。ぼくたちはいつまでもあほうんと生活をしてはいけないと思う。それは親たちは閉山になって別の職業をさがしているのに子供がだらんとしてはいけないと思う。(1970年3月11日)

彼の父親と母親、弟と妹は、「歌志内の炭鉱」に移った。この炭鉱が住友歌志内炭鉱であれば、翌年、父親たちは再び閉山を経験することになる(父親の再就職キャリアについて無回答のため不明)。H-1Rさんは、白糠高校の寮に入って3年間通学し、同校を卒業したのち、愛知県で就職した。

一方、家族とともに炭鉱に移った生徒は、高校を転校しなければならなかったが、転校の優遇措置もあり、なおかつ尺別炭山と類似した炭山コミュニティで生活できたため、短期的にはスムーズに適応できた。しかし、転出先の炭鉱が閉山した場合、転校を相次いで経験することになった。ここでは閉山当時の白糠高校1年生だったH-2Bさん(男子)の生活史を検討する<sup>96</sup>。

H-2Bさんの父親(閉山時61歳)は、閉山当時すでに退職しており、代わりに7歳上の兄(23歳、鉱員・坑外)が世帯主であった。閉山前年に姉が帯広に嫁いだため、兄は道内

<sup>96</sup> 以下、2018年6月12日インタビューより。

で再就職先を探し、室蘭にある製鉄会社の子会社に再就職が決まった。しかし、その社宅は、5人（父、母、兄、本人、妹）が住むには狭い長屋であり、家族を養うには「炭鉱が一番生活的に楽だろうと」、羽幌炭鉱（羽幌町）の鉄道部門に再就職した。

H-2Bさんは、白糠高校に残留しようとしたが、親から「そうするなら働け」と反対され、高校2年次から道立羽幌高校に通学した。優遇措置があったため、面談のみで転校できた。彼は白糠高校のときと同じく野球部に所属し、早期に馴染むことができた。しかし、羽幌炭鉱は同年11月に閉山し、兄が住友赤平炭鉱（赤平市）に再就職したため、彼は再び転校することになった。彼は赤平市内の「頭がいいほう」の高校を希望したが、このときは優遇措置がなく、試験と面接を受けなければならなかった。彼は面接官に「勉強してきましたか」と聞かれ、「いや、してません。野球をやってきました」と答え、「赤平にはほかにも高校があるから、そっち受けに行けば」と言われ、赤平市内の別の高校に転入した。しかし、半年後、兄が三菱南大夕張炭鉱（夕張市）に再就職したため、彼も夕張に移り、道立夕張東高校に転校した。

彼は閉山や兄の転職によって相次いで転校し、「下手すると中退していたかもしれない」状況だった。しかし、どの高校でも野球部に所属したことに加え、転校先がいずれも「炭鉱の学校」で、「炭鉱の雰囲気」があったため適応し、通学できたと述べている。

俺がもし炭鉱じゃなくて、違うところに行ったら、あまり受け入れられなかったかもしれない。やっぱり、炭鉱から来てるから、炭鉱の雰囲気がわかるじゃないですか。炭鉱の雰囲気というのは、なんというか、言い方悪いけど、なんでも許されるというか、悪さしても、「まあ、これくらいの悪さなら、いいじゃないか」というのがあるじゃない。(2018年6月12日インタビュー)

彼は高校を卒業する際、「炭鉱の野球部に入らないか」と誘われたが、「東京にあこがれていた」ので断り、長兄が勤めていた千葉の会社に面接に行った。この会社は、尺別炭鉱閉山の際、離職者10人を採用した建材メーカーであり、当時、尺別出身者が人事係長だった。彼は同社に採用され、卒業直後の3月から勤務することになった。

以上のように、父親・兄が他炭鉱に再就職した場合、閉山当時の中学3年生は、男子であれば学生寮に残ることを志向し、それが難しい場合は、優遇措置のもと、産炭地の高校に転校した。炭鉱に移動した生徒は、合理化・閉山によって、相次いで転校を経験したが、転出先の炭鉱も尺別炭山コミュニティに類似した生活環境であり、炭鉱を転々とした人たち（炭鉱出身者・閉山経験者）のなかで生活していたため、早期に適応できた。ただし、高卒後の進路は、石炭産業と家族の将来に対する不安から、大学等への進学は抑制され、道外で就職した。

## 第5節 小括

本章では、尺別炭砒閉山時の中学3年生が、中学卒業後、どのような進路を辿ったのかについて、父親の再就職先決定時期ならびに再就職類型に着目して明らかにした。2月末の閉山は、中学3年生にとって「最悪」のタイミングだった。3月上旬の高校入試に合格しても、父親の再就職次第で転校しなければならず、ほとんどの生徒が転校することになった。また、再就職先の決定時期が遅れた場合、進学を断念して就職にしなければならなかった。彼らは、前章でみた中学1・2年生とは異なり、家族の状況・要請に応じて進路を変更し、家族生活の維持・安定に貢献しなければならないタイミングに閉山を経験したのである。

まず、父親が高齢または関連会社社員等の理由で再就職先の決定が4月以降に遅れた場合、中学3年生は、高校入試の前後に進学から就職に進路を変更した。彼らは、自らの選好より、家族の経済状況と将来の生活を優先して進路を変更した。そのため、葛藤を抱えたが、就職先で定時制高校に通学し、高卒学歴を取得して、標準的なライフコースに軌道修正しようとした。

一方、父親が早期（3月中）に再就職先を決めた場合でも、転出先に転校可能な公立の全日制高校がない場合、進路危機に直面した。道内は転校の優遇措置（転入試験の免除等）があったが、道外にはなく、私立高校や定時制高校への転校や就職に変更せざるをえなかった。また、彼らは家族と離れて学生寮等に入り、道東の志望校に通学するという選択肢があったが、女子にとっては現実的ではなかった。また、釧路周辺で下宿するためにも、頼れる親族ネットワークが必要だった。

全日制高校に転校できた生徒たちも、本来進学するはずだった道東の高校と学力水準や学校文化が異なる高校に転校することになり、適応は容易ではなかった。また、高卒後の進路は、前章でみた中学生と同様、父親の再就職とその後の家族の生活状況に規定された。すなわち、父親の道外他産業への再就職に伴い、道外に転校した生徒は、高等教育機関に進学し、道外で就職する傾向がみられた。一方、父親の道内他産業への再就職に伴い、道内・釧路にとどまった生徒は、高校卒業後、道内で就職する傾向がみられた。

そして、父親（本章では兄）の炭鉱復帰によって他炭鉱に移動・転校した生徒は、転出先の炭鉱で、再び合理化・閉山を経験し、転校を繰り返すことになった。短期的には尺別炭山と類似した炭山コミュニティへの移住であるため、早期に適応できた。しかし、中長期的には、家族の生活が不安定な状態が続き、彼らの高卒後の進学は抑制された。

このように、閉山時の中学3年生は、高校入試・中学卒業の直前というタイミングで閉山を経験したため、進路危機に直面し、さらに父親の再就職先決定時期や再就職先の地域・企業によって、進路が規定された。そして、転出後は、炭山コミュニティと対照的な地域への適応を要請された。彼らは二重、三重の障壁に直面したが、個人の計画的能力や父親・家族の再就職先への適応・定着をもとに、攪乱したライフコースの軌道を修正した。

## 第7章 結論——石炭産業の漸次的撤退と閉山離職者の子どものライフコース

### 第1節 尺別炭砒の閉山と中学生のライフコース

本論は、石炭産業の漸次的撤退期における大手炭鉱の閉山が、労働者の子どもにどのような影響を与えたのかについて、ライフコースの視点から明らかにした。石炭産業が急速に衰退した漸次的撤退期における内陸型炭鉱の閉山は、地域の崩壊をもたらした。なかでも、1970（昭和45）年2月27日に発生した「雄別炭砒株式会社企業ぐるみ閉山」（雄別・尺別・上茶路の閉山）は、離職者数4,800人、全住民1万5,000人の半強制的移住を強いた最大規模の閉山であった。本論では、職縁社会の原理が地理的・空間的に一致した尺別炭砒を例に、当時の中学生に対する追跡調査をおこなった。中学生は、閉山によってその後の人生を左右するような影響を受けた。ただし、彼らは、受動的であるばかりでなく、能動的に対応し、標準的な進路（高卒学歴の取得、成長産業への就職）へと軌道修正した。本章では、この軌道修正過程とその要因について考察する。

本論では、尺別炭砒の閉山を一つの歴史的出来事として位置づけ、ライフコース・アプローチならびに人間発達の生態学の枠組みを用いて、中学生の状況理解と転校先への適応、中卒後の進路を分析した。社会変動とライフコースの古典的研究である『大恐慌の子どもたち』（Elder 1974=1986）では、大恐慌による経済的剥奪の影響と家族の社会経済的地位による影響に識別するため、4グループ（「中流階級・剥奪家族」「中流階級・非剥奪家族」「労働者階級・剥奪家族」「労働者階級・非剥奪家族」）に分類し、子どもの当時の生活とその後の人生経験への影響を分析している。当時の生活への影響として、両階級ともに剥奪家族において、子どもの家庭経営への参加（男子は賃金労働、女子は家事労働）、家族関係の変化（母親中心の傾向）、家族外の世界との関わりなどがみられた。そして、この影響はその後の人生経験に累積的効果をもたらした。男子は子ども期の賃金労働経験が職業に対する予期的社会化となり、両階級ともに剥奪家族出身者で早期に職業キャリアを確立した。とくに、労働者階級で早期に労働市場に参入する傾向にあった。また、女子は、中流階級・剥奪家族で、父親との緊張関係から早期に自立・結婚する傾向にあった。

本論は、『大恐慌の子どもたち』の分析枠組みに対照させて、閉山による父親の再就職の影響と炭砒における階層の影響を識別するため、父親の再就職類型を5つに分類し（①「道外他産業・大企業への集団就職」、②「道外他産業への少数・単独就職」、③「道内他産業・中小企業への少数・単独就職」、④「炭鉱復帰」、⑤「未就職」）、それぞれの職員・鉱員・関連会社等の子どもについて分析した。また、『大恐慌の子どもたち』の分析対象は一つのコーホートに限られているが、本論では、閉山経験のタイミングに注目し、学年ごとに分析した。そして、閉山による影響を、状況理解・計画的な能力と転出先への適応（短期的影響）、中卒・高卒後の進路（中期的影響）、その後の人生移行（長期的影響）に分け、それぞれ当時の作文、手紙、ライフコース調査（質問紙調査ならびに生活史インタビュー調査）の結果

から明らかにした。加えて、本論では、炭山コミュニティの職縁社会としての特徴に注目し、転出前後の生態学的環境の変化と人間発達について検討した。

## 1 閉山経験のタイミングと短期的・中長期的影響

歴史的状況に対する人びとの対応は、「人生のどの時点でこの状況に遭遇したか、および過去の人生経験のうちからどんな『装備』をその状況にもちこむかによってかたちづくられる」(Hareven 1982=2001: 510)。本論の対象者は、そうした人生経験を積む前の中学生のときに閉山を経験したため、短期的・中長期的に大きな影響を受けた。閉山時の尺炭中教頭が述べるように、彼らは「あまりにも人生経験が乏しい。そして、何よりも、非常に多感」(嶋崎・笠原 2016: 11)なときに閉山を経験した。閉山直後の作文には、当時の切実な不安や葛藤が記されている(第4章)。また、閉山から50年近くが経った現在でも、彼らは、閉山から多岐にわたる影響(「友だちとの別れ」、「今後の生活への不安」、「進路変更」など)を受けたと振り返っている。これは、閉山当時、すでに中学校を卒業していた先行コーホート(閉山時の高校生、20歳代、30歳代)よりも多くなっている(笠原 2020b: 220-1)。

さらに、同じ中学生のなかでも、学年が一つ異なるだけで、閉山による影響とその後の対応が異なった。閉山直後の作文に書かれた状況理解や将来展望は、学年によって内容が異なった。中学生生活を半分以上残していた1年生は、転校に伴う友人との別れを惜しむ内容と、転校先の友人関係や学校文化、カリキュラムなど、対人的・社会文化的環境に適応できるかどうかという不安を記していた。また、2年生は、これらの内容に加えて、転出先での高校入試に関する不安を述べていた。とくに、道外転出を予想する生徒は、北海道と異なる「都会」の入試選抜方式や「受験競争」に不安を募らせていた(第4章)。

そして転出後、彼らは作文に述べたような課題に直面し、克服していかなければならなかった。彼らは、炭山での共同生活や学校教育のなかで集団意識を醸成していたため、個人主義的な「都会」の対人的・社会文化的環境に適応することが難しかった。転校の時期が遅れたり、単独で転校した場合、なおさらであった。また、2年生(転校時の3年生)は、転校直後から高校入試の準備・対策をしなければならなかった。彼らは、尺炭中でテストや競争主義に批判的な教育を受けてきたため、「模試」や「テスト」に抵抗感があった。なかには、転校先の教育に疑問を抱き、手紙で尺炭中の教頭に訴える生徒もいた。しかし、彼らは、次第に転校先に適応していき、中卒後、全日制高校に進学した。それを可能にした要因として、道内外ともに高校教育機会が普及していたこと、転校先で進路を再検討する時間的猶予があったことがあげられる(第5章)。

一方、最も深刻な影響を受けたのが、閉山時の中学3年生だった。彼らは、卒業と閉山が重なったため、閉山を早期に受け入れていたが、進路について多大な不安を抱えていた。彼らは、高校入試の直前(2月)に閉山を経験したため、進路を再検討する時間的猶予がなく、進路危機に直面した。これは、中学3年の1学期や2学期に閉山を経験した他炭鉱の中学生

と比べても切迫した状況であり、衝撃が大きかった<sup>97</sup>。父親の再就職活動や家族の状況次第では、高校入試に合格しても、転校または就職に進路を変更しなければならなかった（第6章）。

高校進学を断念して就職するという進路変更は、彼らにとって重大な問題だった。すでに、尺炭中や釧路においても高校進学が一般的になっていたため（1968年度尺炭中卒業生の高校進学率、7割）、彼らの葛藤は大きかった。1・2年生と異なり、3年生には父親の再就職先に帯同せず、学生寮等に入って志望校に進学するという選択肢もあった。しかし、この選択肢は女子を中心に現実的ではなく、大半の生徒が父親の再就職先に転出した。転出先に必ずしも彼らを受け入れる高校があるとは限らなかった。道内には転校に関する優遇措置（転入試験の免除等）があったが、道外にはそうした措置はなかった。転出先に受け入れ可能な全日制高校がない場合、私立高校や定時制高校に転校したり、なかには進学を諦め、就職する者もいた。また、全日制高校に転校できた場合でも、学力レベルの異なる高校に転校した場合、適応できず、中退・就職する生徒もいた。高卒学歴の取得が当然とされていた当時（香川ほか 2014）、進学から就職に進路変更を余儀なくされた彼らは、大きな葛藤を抱えた。とくに、首都圏をはじめ高校進学率が高い地域で就職した生徒は、同年代の高校進学者が多数いる環境で学歴コンプレックスなどの実存的問題（見田 [1979]2008; 山口 2016）を抱えた（第6章）。

## 2 父親、母親、きょうだいの閉山経験と中学生の適応・進路

閉山による影響は、同じ学年のなかでも、父親の再就職や家族の状況によって異なった。中学生は、閉山を直接経験したのではなく、父親の離職と再就職、母親ときょうだいの対応を介して経験した。第1章でみた「筑豊の子ども」は、父親の失業・滞留を介して深刻な影響を受けた典型的な例である。彼らは、家計維持のために賃金労働や家事労働を担い、不就学・長期欠席、学力低下、生活態度の悪化などの問題が生じた（福岡県政研究会 1959）。また、高校進学を志望していた生徒も、家族の状況を優先して就職しなければならなかった（徳本・依田 1963）。

一方、尺別炭砦は、離職者の再就職が早期に決定したため（閉山約1か月後の時点で8割）、尺炭中の生徒たちは、「筑豊の子ども」が経験したような生活の困窮等は経験しなかった。しかし、前項でみたように、父親の再就職が難航したり、家族生活の見通しが立たない場合、彼らにもマイナスの影響が表れた。中学生は、閉山直後の家族の状況を作文に記し、自らの将来について検討していた。彼らがとくに言及していたのは、父親についてであった。彼らは父親の年齢や階層などに言及しながら、再就職先とその決定時期を予想していた。たとえば、父親の年齢を「若年」と捉える生徒は、早期の再就職と産業転換・道外転出を予測し、

---

<sup>97</sup> このことは、6月（1973年）に閉山した三菱大夕張炭砦（夕張市）や10月（1987年）に閉山した北炭真谷地炭砦（夕張市）の中学3年生に比べて、尺別炭砦の3年生のほうが進路に関する不安を作文に述べる傾向にあったことから明らかである（笠原 2018b）。

「都会」の生活に対する不安と期待を述べていた。一方、父親の年齢を「高年」と捉える生徒は、再就職決定時期の遅れや他炭鉱への再就職（炭鉱復帰）を予想し、将来に対する強い不安を抱えた。このほか、父親の階層が低い（関連会社社員など）または父親が病気やけがなどで休職中だった場合、彼らは、父親の再就職が難航すると予想し、不安や不満を述べていた（第4章）。

そして、彼らは転出後、前項でみた学年ごとの課題に直面した。その際、父親の再就職先産業・地域・企業によって、対処方法が異なった。まず、父親が道外他産業・大企業に集団で再就職した場合（再就職類型①）、彼らは、尺炭中から転校してきた友人とともに転校先の対人的・社会文化的環境に適応できた。さらに、父親の再就職キャリアと家族生活が安定した結果、高校進学とその後の高等教育機関への進学が可能になった。一方、父親が道外他産業に少数・単独で再就職した場合（再就職類型②）、中学生は、周囲に頼れる友人関係がないため、諸課題に個人で対処するしかなかった。

また、父親の道内他産業（再就職類型③）によって転校した生徒は、転校先への適応と高校進学は道外に比べて容易だった。しかし、道外転出者（①、②）に比べて父親の再就職キャリアが不安定になり、彼らの高卒後進学が抑制された。とくに、高等教育機会が乏しい道東に転出した生徒は、女子を中心に大学等進学が抑制された。また、父親が道内他炭鉱に再就職した場合（炭鉱復帰、再就職類型④）、中学生は、短期的には尺別炭山と類似した環境に適応できた。ただし、父親が再就職した炭鉱が合理化・閉山した場合、家族の生活が不安定になり、高卒後の進学は抑制された。そして、父親が未就職で道東に残留した場合（再就職類型⑤）、中学生は最も深刻な影響を受けた。彼らは、閉山直後から一貫して、将来に対する不安や孤立感を持ち続けた。高校に進学できた生徒も、卒業後は家族の経済状況を考慮して、進学を控えていた。

父親の離職と再就職、それに伴う家族生活の変化は、中学生の職業意識にも影響を与えた。男子を中心に、より安定した職業（高度専門職、公務員など）を志向するようになった。彼らは、『大恐慌の子どもたち』や「筑豊の子ども」のように、子ども期に賃金労働を経験していなかったが、閉山による父親の解雇と産業転換の難しさを目の当たりにし、職業意識を明確にした（第5章、第6章）。

むろん、中学生は、父親の再就職だけでなく、母親ときょうだいの閉山経験を介して、閉山による影響を受けた。父親の産業転換は、道内外ともに収入の減少を伴った。したがって、母親が就労に出たり、高校に在学していた兄姉が家計補助のために中退して就職するなどの対応がみられた（第5章、第6章）。これらの対応は、『大恐慌の子どもたち』でみられたように、家族関係や役割地位に変化をもたらし、中学生の役割意識や職業意識に少なからず影響を与えた。このように、閉山時の中学生は、進路選択等の場面で、重要な他者である父親、母親、きょうだいの人生上の位置から影響を受けていたのである（「結び合わされる人生」）。

### 3 計画的能力とライフコースの軌道修正

上記のように、閉山当時の中学生は、閉山と父親の再就職・地域移動によって、当初予定していた進路（彼らの兄姉や上級生が辿っていた進路：近隣の高校に進学し、学卒後、他産業に就職）を辿れなくなった。これは3年生を中心に、ライフコースの攪乱を意味した。しかし、本論の対象者のほとんどが高卒以上の学歴を取得し、学卒後、製造業などの成長産業に就職した。前述の全日制高校への進学を断念した生徒も、働きながら定時制高校に通学し、高卒学歴を取得した（第6章）。その促進因となったのが、父親の再就職キャリアの安定、家族の期待と支援、転出先の豊富な進学機会に加えて、中学生の個人的能力があげられる。とくに青年中期は、成人期への軌道を定める重要な時期であり、その資源となるのが「計画的能力」である（Shanahan and Elder 2002: 152-3）。本論では、閉山直後の作文に表れた彼らの自信や有能感、目標などから計画的能力を測定した。そして、転出後の手紙と人生回顧をもとに、彼らの計画的能力が転校先への適応や中卒・高卒後の進路において、どのように作用したのかについて検討した。

彼らは、閉山直後の作文に、家族や学校、地域などの状況を記述したうえで、父親の再就職先と自らの将来について検討していた。同じ学年のなかでも、性別によって状況理解や計画的能力の程度に違いがみられた。女子は、男子よりも周囲の状況について言及し、自己と結びつけて記述する傾向がみられた。とくに、2年生の女子は、閉山後の家族関係の悪化などを指摘し、将来に対する不安と閉山に対する不満を述べていた。そして、父親の道外他産業への再就職と転出を予想する生徒は、転出先の「都会」に対する期待やあこがれを述べ、早期に適応しようとする意思や目標を明確にしていた。一方、父親の再就職が難航すると予想していた生徒は、前向きな内容よりも、不安や不満を強調していた（第4章）。

彼らが閉山直後の作文に表した計画的能力は、他炭鉱の閉山を経験した中学生と比べても顕著であった。尺別炭鉱と同時代に閉山した三菱大夕張炭鉱（夕張市、1973年閉山）では、離職者の主な再就職先の一つに市内のビルド鉱があったため、離職者とその家族の市外転出が抑制された。したがって、中学生は「都会」に対する意気込みや目標を記す必要がなく、計画的能力を示す割合は少なかった。一方、石炭産業の最終的撤退期に閉山した北炭真谷地炭鉱（夕張市、1987年）では、離職者の再就職が難航することが予想されていた。中学生は、将来の見通しを立てることができず、家族生活の今後に関する不安を強調していた（笠原 2018b）。このように、閉山した炭鉱の特徴によって、作文に表れる計画的能力の程度が異なった。尺別炭鉱の場合、閉山時点で地域の崩壊と離職者の早期再就職・産業転換がある程度予想されていたため、中学生も転出先に対する意気込みを示すことができた。加えて、彼らが職縁社会・炭山コミュニティで生活し、集団意識や主体性、社会意識を醸成させる「尺炭教育」を受けていたことなどが、計画的能力を向上させる要因となった。

閉山直後の作文にみられた計画的能力は、転出後の手紙（閉山時の2年生）にも表れていた。転校先に適応できるという自信や有能感を作文に示していた生徒は、手紙にも同様の内容を記し、転校先の対人的・社会文化的環境に適応しようとしていた。さらに、中卒後の進

路についても積極的な姿勢を示し、高校・大学等への進学を実現しようと努力していた。彼らの計画的な能力は、転出後の諸課題に対処するなかで、発達的に変化していった。対照的に、作文で不安や不満を強調していた生徒は、手紙にも転校先に対する不満を述べていた。そして、転校先で孤立感を抱き、中卒後の進路について消極的な姿勢を示していた。彼らが高校・大学等に進学するためには、家族の期待や支援が不可欠だった（第5章、第6章）。

このように、閉山直後に中学生が書いた作文の内容と転出後の手紙や人生回顧には一貫性がみられた。彼らの計画的な能力は、閉山によって攪乱したライフコースの軌道を修正するうえで重要な資源であった。もちろん、この能力を発揮するためには、父親の再就職先への定着や家族生活の安定が不可欠だった。この計画的な能力は、「外的要因との相互作用のなかで」、「みずからの人生軌道をデザインしそれを追求する」（嶋崎 2008: 60）「人間行為力」そのものである。

#### 4 尺別炭砦閉山の地理的・歴史的背景

以上のように、中学生の学年（タイミング）、重要な他者の人生上の位置（結び合わされる人生）、計画的な能力（人間行為力）によって、閉山による影響が異なった。彼らの人生経験は、ほかの炭砦の閉山に比べて、どのような特徴があるのだろうか。尺別炭砦の地理的・歴史的背景にもとづいて整理しよう。

まず、尺別炭砦の閉山は、地域の崩壊をもたらしたという点が最大の特徴である。これにより、離職者とその家族は、半強制的に他出することになった。これは、尺別炭砦の地理的条件に起因する。尺別炭砦は、道東の山間に位置した内陸型炭砦であった。炭砦開基によって拓かれた尺別炭山には、石炭産業以外に産業がなかった。また、大都市圏から離れていたため、閉山後の代替産業・企業誘致は難しかった。これは、他産業への転換が可能だった宇部（山口県）や常磐（福島県）などの産炭地と対照的である。また、炭砦都市・夕張のように、市内にビルド砦があった場合、離職者の炭砦復帰によって市外転出が抑制された。一つの炭砦で成立していた尺別炭山には、地元での再就職という選択肢はなかった。加えて、寒冷地という地理的条件も加わり、離職者とその家族は、「つぎの冬が来るまでに」、早急に炭山を去らなければならなかった。

こうした地理的条件に加えて、尺別炭砦が閉山した高度成長後期ならびに石炭産業の漸次的撤退期という時代効果も顕著であった。当時の製造業をはじめとする成長産業は、事業拡大、工場新設に伴い、多くの労働力を必要としていた。そのようなすは、尺別炭砦の閉山直後、本州から多くのリクルーターが炭山に押し寄せたことからわかる（第5章）。高度成長下の成長産業による豊富な労働力需要が、閉山離職者の早期再就職・産業転換を可能にした。さらに、尺別炭砦は、第四次石炭政策のもとで閉山したため、離職者とその家族のスムーズな移行が可能だった。第四次政策は、石炭産業のゆるやかな撤退をめざす方向へと方針を明確に転換した点で、石炭政策の大きな転機となった（牛島 2012: 126）。この政策は、閉山交付金の単価引き上げに加え、「企業ぐるみ閉山」に対する助成（特別閉山交付金）を

1969・70年度限定で設け、事業継続か解散で揺らいでいた石炭企業に対し、解散に踏み切ることへの強い政策的インセンティブを与えた（牛島 2012: 141）。尺別炭砒を含む「雄別炭砒株式会社企業ぐるみ閉山」（雄別・尺別・上茶路の三山）は、第四次政策下で最大規模の閉山であった。これらの炭鉱は、「閉山＝地域崩壊」という特性上、離職者の早期再就職が喫緊の課題となった。炭鉱離職者の産業転換と地域移動は、炭鉱労働・生活の特殊性から容易ではなかったが、会社・組合・職安による総合的な離職者対策、広域職業紹介がなされ（労働省職業安定局失業対策部編 1971）、離職者の再就職はスムーズに展開した（嶋崎 2017）。

したがって、尺別炭砒の閉山は、離職者の早期再就職・産業転換が可能だったという点において、条件のよい閉山だったといえる。むろん、成長産業都市への移動とその後の適応・定着は、離職者とその家族にとって容易ではなかった。しかし、当時の成長産業都市の中学校や高校は、炭鉱閉山以外の理由で移動してきた子どもを多く含んでいた。尺炭中から転校した生徒たちも、「多くの移動者家族の子どもの一人として適応できた」。また、「急速な中等教育の普及と高等教育の拡大という成人期への移行構造の転換」（嶋崎 2018: 95）が、彼らの高校・大学等への進学を促した。彼らは、父親の衰退産業から成長産業への産業移動をもとに、学卒後、成長産業に就職し、世代間移動を達成したのである。

対照的に、石炭産業のスクラップ・アンド・ビルド期（1950年代半ばから1960年代半ば）や最終的撤退期（1980年代後半以降）における閉山は、離職者の再就職が難航し、子どもに長期的なマイナスの影響をもたらした。石炭政策開始（1963年）以前の筑豊をはじめとする中小炭鉱では、合理化・閉山によって失業者の滞留が生じ、「筑豊の子ども」の貧困や進路変更などをもたらした（塚本 1963; 新藤 2015 など）。また、高度成長終焉後の石炭見直し期（1970年代から1980年代半ば）、最終的撤退期における空知・釧路・三池・長崎の閉山は、離職者の産業転換・炭鉱復帰ともに難しかった（嶋崎 2017）。高校進学率が9割近くにまで上昇していた当時、閉山を経験した中学生は、尺別炭砒の中学生以上に、進路に関する不安を抱くことになった（笹谷 1986; 笠原 2018b）。

## 5 「炭鉱の子ども」から「他産業の子ども」へ

このように、ライフコースの4つの構成要素に当てはめて考察すると、尺別炭砒閉山時の中学生が、父親の離職と再就職および家族の状況を介して閉山の影響を受け、家族の支援ならびに個人的資源を活用してライフコースの軌道を修正していったことがわかる。ただし、彼らが生まれ育った職縁社会・炭山コミュニティの特徴を考慮するならば、家族以外にも学校や地域など、彼らをとるまく生態学的環境を同定し、他出に伴う生態学的移行と人間発達について考察する必要がある。

職縁社会・炭山コミュニティから他産業・地域への移動・移行は、当時の中学生に中長期的影響を与えた。尺別炭山は、人口4,000人程度の完結した炭鉱街であり、職縁社会の原理（閉鎖性、家族主義的結合原理、次世代労働力の再生産）がおよぶ範囲が地理的・空間的に

一致し、人口構成も炭鉱関係者のみで占められていた。また、炭山が一つの学区を成し、全山の子どもが中学卒業まで同じ学校に通った。炭山における生態学的環境は、父親の職場である炭鉱（エクソシステム）が中心であり、家族、学校、地域（炭住区）の子どもや大人たちと、日ごろの生活や子供会・少年団活動、ヤマの行事などで活発に交流していた（マイクロシステム）。また、彼らを取り巻く家族、学校、地域の相互関係は緊密であり、人間発達に支持的な環境であった（メゾシステム）。そして、職縁社会の原理が各システム間にみられる一貫性として存在し（マクロシステム）、そのなかで彼らは「全山一家」と呼ばれる共同体意識を醸成していった。

このような環境で育った中学生は、閉山によって炭山コミュニティを離れることになり、異なる生態学的環境に移行した。道外の成長産業都市に転出した生徒を中心に、職縁社会・炭山コミュニティと対照的な「都会」で新たな友人関係を構築し、授業や部活動などに参入すること、さらには中学校から高校、大学または仕事の世界に参入することを求められた。なかには、転校先で孤立感を抱く生徒もいたが、彼らは孤立無援ではなかった。彼らは、父母やきょうだいはもちろん、集団就職であれば父親の炭鉱時代からの仲間とその家族とともに移住できた。また、先行して炭山を離れていた親族を頼って移住した「連鎖移住」もみられた。これらのケースでは、炭山での人間関係や文化的伝統を転出先に一部移植し、転出先に適応・定着するための資源として活用できた。中学生も、炭山での友人関係を維持しながら、転校先に適応できたのである。

ただし、父親の集団就職で神奈川県に転出した生徒が、転出直後の手紙に「私はもう神奈川県の子になったのだから」と記していたように、彼らはいつまでも尺別炭山の人間関係に依存したわけではなかった。なかには、早期に尺別炭山での人間関係や生活と決別し、「都会の子ども」、「他産業の子ども」になろうとする生徒もいた。彼らは、転校先への適応と進路選択といった一連の移行において、単に新たな行動場面に入りこむのではなく、炭山における行動場面（家族や学校、炭住区など）での活動や役割、対人関係のパターンを持ち込み、それまでに確立された「発達の軌道を維持したり」、「強化」（Bronfenbrenner 1979=1996: 303）しようとしていたのである。

## 第2節 本論の知見と課題

本論は、「石炭産業の転換と炭鉱離職者の子どものライフコース」研究の出発点として、漸次的撤退期の閉山が中学生にもたらした短期的・中長期的影響を明らかにした。前節でみたように、尺別炭山の閉山は、閉山離職者の再就職・産業転換が早期に決まったという点で、「条件のよい」閉山であった。その結果、子どもの高校・大学等進学と世代間移動を促進した。しかしながら、炭鉱復帰や未就職の子どもをはじめ「他産業の子ども」に移行できなかった者も少なからずいた。また、早期に移行できた者も、多くの課題に直面し、長期にわたり葛藤を抱えていた。彼らの人生経験から、中学生のときの閉山と地域崩壊が、いかに衝撃

的な出来事であったのかがわかる。

石炭産業の転換過程で、同様の経験をした炭鉱離職者の子どもは数えきれない。戦後日本における石炭産業は、1950年代からおよそ50年をかけて、政策的に転換した。最盛期(1950年代半ば)には、全国で約900の炭鉱と約30万人の労働者を擁したが(矢田 1995)、2002年に最後の坑内掘り炭鉱である太平洋炭砒(北海道釧路市)が閉山して、収束した。この間、政府は石炭産業の急速な衰退による社会的混乱を避けるため、幅広い政策を展開した。なかでも、炭鉱離職者対策は、「国家的課題として認識され、公共性がきわめて強い国家事業と位置づけられた」(嶋崎 2018a: 85)。しかし、炭鉱離職者の子どもについては、政策の対象外であった。政策は、離職者の再就職までが対象であり、再就職後のキャリアと家族の生活は把握されていなかった。

また、炭鉱離職者の子どもは、これまで社会学の研究対象にほとんどならなかった。炭鉱離職者に関する研究は、石炭政策開始前(1950年代)から最後の炭鉱まで(嶋崎・須藤 2013)、転換過程の全体についてほとんど網羅されている。しかし、炭鉱離職者の子どもに関する研究は、産業転換初期(1950年代から60年代前半)の「筑豊の子ども」に関する同時代の研究に限られる(塚本 1963など)。炭鉱離職者臨時措置法施行(1959年12月)以降、離職者の広域就職に帯同して全国に移動した子どもが、その後、どのような人生を送っているのかについて、明らかにされてこなかった。例外として、第1章でみた常磐炭砒閉山離職者の再就職キャリアに関する追跡研究(正岡ほか 1998-2007)では、広域就職者の収入が減少し、若年層の大口求人企業に再就職した者を除いて、再就職キャリアが不安定になったことが明らかにされている。また、この研究では、離職者の子どもが、鉱員層・職員層ともに、おおむね標準的な成人期への移行を達成したことも明らかにしている(正岡ほか 2006)。ただし、離職者の子どもが閉山をどのように経験し、どのように標準的移行を達成したのかについては明らかにされていない。炭鉱離職者の子どもが閉山から直接的かつ中長期的影響を受けているのではないか、という問題関心から、本研究はスタートしている。

この着想に至ったきっかけは、本論で分析した尺別炭砒中学校の生徒による「炭鉱閉山に思う」というタイトルの作文との出会いである(2014年)。彼らの作文一つひとつが、閉山当時の深刻な不安や葛藤、社会に対する不満、将来に対する期待と決意などを訴えている。また、尺別炭砒に限らず、全国の産炭地に炭鉱の事故や閉山に関する小中学生の作文が保存されている(笠原 2017)。この膨大かつ貴重な資料に光を当て、彼らの当時の経験を明らかにすることが本研究の第一の課題である。さらに、興味深いことに、作文を書いた当時の炭鉱の子どもが、現在、中年期から高齢期に差し掛かり、同窓会や同郷会などで再結合している。彼らに会い、炭山での生活と閉山当時のようす、その後の人生について聴くことで、「石炭産業の転換と炭鉱離職者の子どものライフコース」を明らかにすることができる。

本論は、そのなかでも典型的な職縁社会である尺別炭山を例に、国策によって進められた漸次的撤退期の「閉山＝地域崩壊」が中学生にもたらした影響を明らかにした。その結果、「石炭産業の転換と炭鉱離職者の子どものライフコース」を展開していくうえで有用な3

つの知見を導出した。第一に、他出した子どもの短期的・中長期的を明らかにした点である。これまでの炭鉱離職者の子どもに関する研究は、「筑豊の子ども」をはじめ、産炭地に残留した子どもを主な対象としている。一方、父親の産業転換に伴い、他産業の地域に転出した子どもは、条件のよい「優良児」（福岡県教職員組合 1965: 123）とみなされ、その後については不問に付されていた。しかし、本論では「閉山＝地域崩壊」によって全校生徒が転出した事例を検討し、彼らが転出先で直面した課題とその対処について明らかにした。また、転出先の地域による影響の違いについても明らかにした。首都圏をはじめ高等教育機会が豊富にある地域に転出した生徒は、大学等への進学が促進された。一方、産炭地周辺（北海道では空知管内、釧路管内）に転出した生徒は、高等教育機会が乏しく、大学等進学が抑制された。とくに、北海道内の場合、道東では女子の地域移動を伴う大学等進学が抑制された（「ジェンダー・トラック」、笠原 2015）。

第二に、父親の再就職とその後のキャリアが、子どもの転校先への適応と進学や就職に影響をもたらしていた点である。先行研究では、閉山直後の子どもの生活実態や学力など、短期的影響に焦点が当てられ、中長期的影響は明らかにされていなかった。本論は、追跡調査をもとに、転出後の適応と進路について明らかにした。前述した常磐炭砦の閉山離職者と同様、尺別炭砦の閉山離職者も産業転換によって収入が減少し、都市生活への適応に苦戦した。父親の再就職キャリアが不安定になった場合、子どもは再度の転校を経験し、対人的環境・社会文化的環境への適応が難しかった。さらに、高卒後の進学は、父親の安定した再就職キャリアが要件だった。父親の再就職キャリアが不安定だった場合、子どもは、家計に負担をかけないため、進学ではなく就職を選択した。さらに、父親の再就職は、子どもの職業意識にも影響を与えた。とくに、男子は、父親の閉山離職を受けて、高学歴・安定職を志向するようになった。

また、本論で明らかにした炭鉱復帰ならびに未就職の子どもの不安や孤立感、進路変更などは、高度成長期終焉後の閉山を経験した中学生にも当てはまる。1980年代以降の閉山では、離職者の産業転換と炭鉱復帰ともに難しくなり、中学生に深刻な影響がおよんだ。同時代の研究（笹谷 1986、北炭夕張新鉱の閉山（1982年）を対象）では、低階層かつ再就職困難層の子どもを中心に、明確な進路意識と教育期待（大学進学志向など）を持てなかったことが明らかにされている。また、閉山直後の中学生の作文を分析した研究（笠原 2018b、北炭真谷地炭砦の閉山（1987年）を対象）では、多くの生徒が高校に進学できるかどうかという不安を述べていた。漸次的撤退期に比べて、高校進学がさらに普及していた当時、中学生の進路危機は深刻だった。彼らが実際にどのような進路を辿ったのかを明らかにするためには、今後、追跡調査が必要である。

第三に、職縁社会・炭山コミュニティでの生活・教育経験と転出後の適応や進路との連続性を明らかにした点である。炭鉱の子どもに関する同時代の研究は、出身階層の文化や教育期待に注目していたが（矢野 1954a など）、炭住区での生活や炭鉱の学校における教育など、生態学的環境への着目と各行動場面での子どもの活動、役割、対人関係などは十分に考

慮されていなかった。本論は、職縁社会の原理が地理的・空間的に一致していた尺別炭山を対象としたことで、産業と家族、学校、地域の強度な結びつきと、そのなかでの子どもの教育、発達を捉えた。子どもは、父母以外の大人やきょうだい以外の子どもと関わり、課題志向的活動（子供会など）を通して発達していった。また、炭鉱の学校では、集団意識や主体性を醸成させる教育が行われた。彼らは「炭鉱の子ども」として育てられた。それゆえ、炭山を離れて「他産業の子ども」になることに不安を抱えた。彼らは地域移動に加えて、父親の産業移動（産業転換）という二重の移動を経験したため、より困難な状況に直面したのである。

彼らは、炭山コミュニティで身につけた能力や炭山から移植した人間関係などの資源を活用して、転出先に適応し、標準的な進路に軌道修正していった。このことは、典型的な職縁社会ならではの特征なのか。より規模の大きい炭鉱（三菱大夕張炭鉱）や都市炭鉱（太平洋炭鉱、三井三池炭鉱）、さらには他産業の事例との比較を通して、検証していく必要がある。

以上のように、本論は、炭鉱閉山を歴史的出来事として取り上げ、離職者の子どもがどのようにライフコースを再形成したのかについてみてきた。炭鉱閉山は一回性の出来事ではなく、50年にわたる石炭産業の構造転換において、「連続体として、あるいは閉山『群』としてそれ自体が、石炭産業の収束過程の構成要素」（嶋崎 2017: 154）であった。このメゾ水準の産業時間を導入することで、離職者とその子どものライフコース再形成過程を動的に把握できる。本論で明らかにした漸次的撤退期における閉山離職者とその家族の動態を基軸に、今後、スクラップ・アンド・ビルド期（1950年代から60年代半ば）、石炭見直し期（1970年代から80年半ば）、最終的撤退期（1980年代後半以降）の閉山に展開し、連続的に捉えていく。とりわけ、本論では十分に追跡ができなかった炭鉱復帰の子どものその後を捉えるためにも、1970年代以降の空知地方を対象とした研究が喫緊の課題である<sup>98</sup>。

さらに、本研究は、現代につながる以下の研究課題への展開が可能である。第一に、炭鉱離職者の子どもの現在、中年期から高齢期に移行した彼らの人生の再検討についてである。全国に離散した炭鉱離職者の子どもは、現在、同郷会や同窓会で学縁を結び直している。とくに、尺別炭鉱の子どもと同様に、閉山によって故郷を喪失した子どもが活発に同郷会・同窓会活動をおこなっている。彼らは、高齢期の発達課題である「人生の再検討」（Clausen 1986=2000: 281-2）をどのように行い、閉山や故郷喪失を意味づけているのか。また、その意味づけは、閉山から現在までの人生経路によって異なるのか。彼らの人生経験を記録・継承することは、他の出来事によって故郷を喪失した人たち（たとえば、2011年の原子力災害で故郷を追われている人たち）のライフコースを検討するうえでも重要である。

第二に、本研究は、石炭産業の転換以外の歴史的出来事と子どものライフコースとの連関

---

<sup>98</sup> 現在、尺別炭鉱閉山離職者の受け入れ先となった空知地方のビルド鉱について、三菱大夕張炭鉱（夕張市、1973年閉山）、三井芦別炭鉱（芦別市、1992年閉山）を中心に調査を進めている。

を探究するうえで重要な示唆を提供する。本論で取り組んだ特定の産業・地域を対象とした事例研究は、マクロな現象（歴史的出来事）がメゾ水準の諸変数（家族、教育、地域など）を介して、ミクロな現象（ライフコース）に影響をもたらすメカニズムを捉えるうえで有用であった。また、本論のオリジナリティである作文分析と執筆者への追跡調査も、他の歴史的出来事を対象とした研究に応用可能である。先行研究では十分に把握されていなかった子どもの認知、状況理解、計画的能力とその変化の測定は、彼らがとった行動・選択の動機を理解するうえで重要である。今後、「石炭産業の転換と炭鉱離職者の子どものライフコース」研究を遂行し、他産業の転換や他の歴史的出来事に関する研究へと展開することで、社会変動とライフコース研究の進展に貢献していく。

## 参考資料・文献

### 参考資料

北海道，1958-69，『北海道統計書』。

北海道音別高等学校同窓会編，1988，『よみがえる群像——音別高校 11 年のあしあと』。

北海道炭鉱離職者雇用援護協会，1971，「炭鉱離職者生活実態（アンケート）調査総括表」。

北海道立白糠高等学校，1979，『三十年史』北海道立白糠高等学校創立三十周年記念協賛会。

北海道労働部公共職業安定所，1970，「炭鉱離職者再就職の道しるべ」。

開校 50 周年記念誌編纂委員会編，1969，『尺炭小 50 年の足跡』尺炭幼小 PTA 広報委員会。

記念誌編集委員会編，2000，『尺別炭砦中学校閉校 30 周年記念誌 あこがれ』。

工藤義光，1999，「私と尺別事件」佐藤進編『ヤマの残響』緑鯨社：29-34。

教育委員会制度発足 30 周年記念誌編集委員会編，1979，『教育委員会制度発足 30 周年記念誌  
神奈川の教育——戦後 30 年のあゆみ』神奈川県教育委員会。

釧路市，2012，「釧路市統合年表」，釧路市ホームページ，（2021 年 11 月 27 日取得，  
<https://www.city.kushiro.lg.jp/common/000017297.pdf>）。

釧路市立博物館，2011，『ヤマの話を聞く会記録集 平成 22 年度』。

釧路市史編さん員会議，1995，『新修釧路市史 第二巻』釧路市。

石炭政策史編纂委員会編，2002，『石炭政策史 【資料編】』石炭エネルギーセンター。

尺別炭砦小学校，1966，『でか・ちび・のっぽ』。

尺別炭砦中学校，1969，『1ヶ年のあゆみ』。

———，1970，『地底の灯——尺別炭砦中学校廃校記念誌』。

尺別炭砦中学校生徒会編，1962-70，『あこがれ』。

尺別炭砦労働組合，1966，『尺労のあゆみ——二十年史』。

———，1970，『道標——山峡の灯』。

炭鉱山文化協會，1957，『炭鉱々山に於ける子供會の研究——九州・山口地区を対象として』。

雄別炭砦株式会社尺別礦業所，1964，「入社要綱」。

### 参考文献

Bronfenbrenner, Urie., 1979, *The Ecology of Human Development: Experiments by Nature and Design*, Harvard College. (磯貝芳郎・福富護訳，1996，『人間発達の生態学』川島書店。)

Clausen, John, 1986, *The Life Course: A Sociological Perspective*, Prentice Hall. (佐藤慶幸・小島茂訳，2000，『ライフコースの社会学 新装版』早稲田大学出版部。)

———，1991, “Adolescent Competence and the Shaping of the Life Course,” *American Journal of Sociology*, 96: 805-42.

Elder, Glen. H., Jr., 1974, *Children of the Great Depression: Social Change in Life Experience*,

- The University of Chicago. (本田時雄・川浦康至・池田政子・伊藤祐子・田代俊子訳, 1986, 『大恐慌の子どもたち——社会変動と人間発達』明石書店.)
- , 1995, "The Life Course Paradigm: Social Change and Individual Development," Moen, Phyllis・Glen H. Elder, Jr. and Kurt Luscher eds., *Examining Lives in Context: Perspectives on the Ecology of Human Development*, Washington, DC: American Psychological Association, 101-39.
- Elder, Glen. H., Jr., and J. Z. Giele. eds., 2009, *The Craft of Life Course Research*, The Guilford Press. (本田時雄・岡林秀樹監訳, 2013, 『ライフコース研究の技法——多様でダイナミックな人生を捉えるために』明石書店.)
- 藤野豊, 2019, 『「黒い羽根」の戦後史——炭鉱合理化政策と失業問題』六花出版.
- 藤吉利男・塚本正三郎, 1962, 「炭鉱不況が教育に与えた影響——とくに学業成績、身体、心情行動を中心として」『福岡学芸大学紀要 第四部教職編』11: 57-89.
- 福岡県教職員組合, 1965, 『産炭地教育白書第二集 産炭地の教師は訴える』日本教職員組合・福岡県教職員組合.
- 福岡県政研究会, 1959, 『炭鉱不況の中の子供たち』.
- 布施晶子, 1976, 「賃労働者層の労働—生活過程と家族の構造・機能——炭鉱労働者三層(職員層, 鉱員層, 組夫層)の家族の比較を中心とする実証的研究」『社会学評論』27(1): 18-55.
- Giele, Janet Z. and Glen H. Elder, Jr., 1998, *Methods of Life Course Research: Qualitative and Quantitative Approaches*, Sage Publications (正岡寛司・藤見純子訳, 2003, 『ライフコース研究の方法 質的ならびに量的アプローチ』明石書店.)
- 原俊之, 1954, 「北九州炭鉱地帯小学校における教育調査の一断面——とくに児童の頻繁な転出入の実態に関する考察を中心とする」『九州大学教育学部紀要』2: 63-73.
- Hareven, Tamara K., 1982, *Family Time and Industrial Time*, New York: Cambridge University Press. (正岡寛司訳, 2001, 『家族時間と産業時間』早稲田大学出版部.)
- 畑山直子, 2020, 「閉山後の再就職——離散からの再出発」嶋崎尚子・新藤慶・木村至聖・笠原良太・畑山直子『〈つながり〉の戦後史——尺別炭硯閉山とその後のドキュメント』青弓社: 156-74.
- 林正登, 1983, 『炭坑の子ども・学校史——納屋学校から「筑豊の子どもたち」まで』葦書房.
- 北海道新聞社編, 2003, 「炭鉱——盛衰の記憶」北海道新聞社.
- 市原博, 1997, 『炭鉱の労働社会史——日本の伝統的労働・社会秩序と管理』多賀出版.
- 石原孝一・石井茂, 1956, 「炭鉱地帯の青少年の生活と教育」『北海道大学教育学部紀要』4: 13-48.
- 石川孝織・佐藤富喜雄・福本寛, 2012, 「釧路炭田における戦時下「急速転換」——経験者の証言を中心に」『エネルギー史研究——石炭を中心として』27: 49-70.
- 香川めい・児玉英靖・相澤真一, 2014, 『〈高卒当然社会〉の戦後史——誰でも高校に通える社会は維持できるのか』新曜社.

- 笠原良太, 2015, 「地域社会の変容と成人期への移行の世代間比較——北海道釧路市の進学校を事例に」早稲田大学大学院文学研究科 2014 年度修士論文.
- , 2017, 「石炭産業研究における作文資料の可能性と課題——炭鉱での生活, 事故, 閉山に関する小中学生の作文を事例に」『早稲田大学総合人文科学研究センター研究誌=WASEDA RILAS JOURNAL』5: 109-21.
- , 2018a, 『尺炭教育史——尺別炭砒地域における独創的な教育実践の記録』(JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパーVol.15 全 56 頁).
- , 2018b, 「1970~80 年代における炭鉱閉山と青年たちの進路危機——中学3年生の作文分析」『早稲田大学総合人文科学研究センター研究誌=WASEDA RILAS JOURNAL』6: 127-39.
- , 2019, 「太平洋炭砒での暮らし」嶋崎尚子・中澤秀雄・島西智輝・石川孝織編『太平洋炭砒——なぜ日本最後の坑内堀炭鉱になりえたのか 下巻』釧路市教育委員会: 55-90.
- , 2020a, 「尺別炭砒の閉山と地域崩壊——閉山ドキュメント」嶋崎尚子・新藤慶・木村至聖・笠原良太・畑山直子『〈つながり〉の戦後史——尺別炭砒閉山とその後のドキュメント』青弓社: 136-55.
- , 2020b, 「『学縁』の展開——閉山時高校生・中学生の五十年」嶋崎尚子・新藤慶・木村至聖・笠原良太・畑山直子『〈つながり〉の戦後史——尺別炭砒閉山とその後のドキュメント』青弓社: 219-34.
- 笠原良太・嶋崎尚子・新藤慶・木村至聖・畑山直子, 2019, 『尺別炭砒で暮らした人びと調査(2)——最終集計結果集[内部利用版]』(JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパーVol.17 全 227 頁).
- 木村至聖・嶋崎尚子・新藤慶・笠原良太, 2020, 『尺別炭砒閉山後の移住と定着——尺別炭砒から広島県への移住者のインタビュー・座談会記録』(JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパーVol.16 全 58 頁).
- 小林朋子・櫻田智子, 2012, 「災害を体験した中学生の心理的変化——中越大震災 1 ヶ月後の作文の質的分析より」教育心理学研究 60: 430-42.
- 小泉令三, 1986, 「転校児童の新しい学校への適応過程」『教育心理学研究』34(4): 289-96.
- 正岡寛司, 1996, 「ライフコース研究の課題」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『ライフコースの社会学』岩波書店: 189-221.
- 正岡寛司・藤見純子・嶋崎尚子・澤口恵一編, 1998-2007, 『炭砒労働者の閉山離職とキャリアの再形成——旧常磐炭砒 K.K.砒員の縦断調査研究 PART I ~ X』.
- 松島静雄, 1951, 「鉱山労働者の営む共同生活体としての友子」松島静雄『労働社会学序説』福村出版: 209-395. (再掲: 稲上毅・川喜多喬編, 1987, 『リーディングス 日本の社会学 9 産業・労働』東京大学出版会, 42-59.)
- 見田宗介, 1979, 「まなざしの地獄——現代社会の実存構造」見田宗介『現代社会の社会意識』弘文堂: 1-57. (再掲: 見田宗介, 2008, 『まなざしの地獄——尽きなく生きることの社会学』河出書房新社, 5-76. )

- 三輪紀元, 2014, 「第四次石炭政策下での雄別炭礦株式会社の企業ぐるみ閉山」『エネルギー史研究』29: 91-6.
- 森岡清美, 1993, 『決死の世代と遺書——太平洋戦争末期の若者の生と死 補訂版』吉川弘文館.
- 元森絵里子, 2016, 「大人と子どもが語る『貧困』と『子ども』——どのようにして経済問題が忘れられていったか」相澤真一・土屋敦・小山裕・開田奈穂美・元森絵里子『子どもと貧困の戦後史』青弓社: 133-62.
- 守屋慶子・森万岐子・平崎慶明・坂上典子, 1972, 「児童の自己認識の発達——児童の作文の分析を通して」『教育心理学研究』20(4): 205-15.
- 尾高邦雄, 1948, 「職業と生活共同態——出雲地方の鉄山について」尾高邦雄『職業と近代社会』要書房: 149-210. (再掲: 稲上毅・川喜多喬編, 1987, 『リーディングス 日本の社会学9 産業・労働』東京大学出版会, 30-41.)
- 岡崎由夫・古川史郎・寺島敏治, 1974, 『釧路炭田——資源とヤマの盛衰』釧路市役所.
- 朴沙羅, 2017, 「幻の『転回』——オーラルヒストリー研究の対象と方法をめぐって」『現代思想』45(20): 100-11.
- 労働省職業安定局失業対策部編, 1971, 『炭鉱離職者対策十年史』日刊労働通信社.
- 笹谷春美, 1986, 「地域社会変動と教育・発達問題——夕張市における基幹産業の衰退が子ども達に与える諸影響を中心として(実証的研究その1)」『北海道教育大学紀要』37: 17-32.
- Shanahan, Michael J., and Glen H. Elder, Jr., 2002, "History, Agency, and the Life Course," Lisa J. Crockett eds., *Agency, Motivation, and the Life Course*, Nebraska: The University of Nebraska Press, 145-86.
- 島西智輝, 2011, 『日本石炭産業の戦後史——市場構造変化と企業行動』慶應義塾大学出版会.
- , 2018, 「炭鉱の歴史から学べること」中澤秀雄・嶋崎尚子編『炭鉱と「日本の奇跡」——石炭の多面性を掘り直す』青弓社: 51-73.
- 嶋崎尚子, 1999, 「経済恐慌と子ども、そして家族」正岡寛司・嶋崎尚子『近代社会と人生経験』放送大学教育振興会: 53-67.
- , 2003, 「炭鉱離職者の再就職決定過程——昭和46年常磐炭鉱KK大閉山時のマイクロデータ分析」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』49: 43-56.
- , 2008, 『ライフコースの社会学』学文社.
- , 2011, 「ライフコース論の現在」藤村正之編『いのちとライフコースの社会学』弘文堂: 112-24.
- , 2013, 「石炭産業の収束過程における離職者支援」『日本労働研究雑誌』641: 4-14.
- , 2017, 「炭鉱閉山と労働者・家族のライフコース——産業時間による説明の試み」岩上真珠・池岡義孝・大久保孝治編『変容する社会と社会学——家族・ライフコース・地域社会』学文社: 152-76.
- , 2018a, 「炭鉱閉山と家族——戦後最初のリストラ」中澤秀雄・嶋崎尚子編『炭鉱と「日本の奇跡」——石炭の多面性を掘り直す』青弓社: 80-103.

- , 2018b, 「コラム 日本の石炭政策」中澤秀雄・嶋崎尚子編『炭鉱と「日本の奇跡」——石炭の多面性を掘り直す』青弓社: 104-10.
- , 2019, 「ライフコース論——個人の人生軌道から家族過程をとらえる」西野理子・米村千代編『よくわかる家族社会学』ミネルヴァ書房: 28-9.
- , 2020a, 「尺別炭鉱——戦後のあゆみ」嶋崎尚子・新藤慶・木村至聖・笠原良太・畑山直子『〈つながり〉の戦後史——尺別炭鉱閉山とその後のドキュメント』青弓社: 36-52.
- , 2020b, 「炭鉱労働での『職縁』——〈つながり〉と信頼」嶋崎尚子・新藤慶・木村至聖・笠原良太・畑山直子『〈つながり〉の戦後史——尺別炭鉱閉山とその後のドキュメント』青弓社: 54-70.
- , 2020c, 「炭鉱家族の『血縁』——〈つながり〉と暮らし」嶋崎尚子・新藤慶・木村至聖・笠原良太・畑山直子『〈つながり〉の戦後史——尺別炭鉱閉山とその後のドキュメント』青弓社: 71-87.
- , 2020d, 「尺別からの転出——『縁』を活用した再就職と移動」嶋崎尚子・新藤慶・木村至聖・笠原良太・畑山直子『〈つながり〉の戦後史——尺別炭鉱閉山とその後のドキュメント』青弓社: 175-91.
- 嶋崎尚子・笠原良太, 2016, 『尺別炭鉱の閉山と子どもたち——元尺別炭鉱中学校教頭松実寛氏による講演の記録』（JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパーVol.7 全 46 頁）.
- 嶋崎尚子・新藤慶・木村至聖・笠原良太・畑山直子, 2020, 『〈つながり〉の戦後史——尺別炭鉱閉山とその後のドキュメント』青弓社.
- 嶋崎尚子・須藤直子, 2013, 『『最後のヤマ』閉山離職者の再就職過程——太平洋炭礦と釧路地域』『地域社会学年報』25: 109-25.
- 新藤慶, 2015, 「産炭地における子どもの姿と教育実践——1950年代～1960年代前半の研究をもとにして」『群馬大学教育実践研究』32: 123-34.
- , 2016, 『炭鉱閉山がもたらす子どもの生活と意識の変容——尺別炭鉱閉山前後の中学生の作文・手紙を通して』（JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパーVol.9 全 46 頁）.
- , 2020, 『『地縁』のゆくえ——同郷団体にみる新たな〈つながり〉』嶋崎尚子・新藤慶・木村至聖・笠原良太・畑山直子『〈つながり〉の戦後史——尺別炭鉱閉山とその後のドキュメント』青弓社: 204-18.
- 新藤慶・嶋崎尚子・石川孝織・木村至聖・畑山直子・笠原良太, 2019, 『中学生からみた尺別炭鉱の学校生活と閉山の影響——尺別炭鉱中学校 23・24・25 期生の座談会記録』（JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパーVol.14 全 47 頁）.
- 高橋伸一, 2002, 「石炭産業と労働者」高橋伸一編『移動社会と生活ネットワーク——元炭鉱労働者の生活史研究』高菅出版: 19-42.
- 武田良三, 1963, 『炭鉱と地域社会』早稲田大学社会科学研究所.
- 戸木田嘉久, 1989, 『九州炭鉱労働調査集成』法律文化社.
- 徳本政彦・依田精一, 1963, 『石炭不況と地域社会の変容』法律文化社.

- 塚本正三郎, 1963, 「炭鉱社会の変貌と炭鉱労働者・失業者の教育意識——福岡県筑豊・大牟田の場合」『教育社会学研究』18: 138-51.
- 牛島利明, 2012, 「第4次石炭政策と企業再編」杉山伸也・牛島利明編『日本石炭産業の衰退——戦後北海道における企業と地域』慶応義塾大学出版会: 125-53.
- 矢野俊, 1954a, 「炭鉱地の家庭環境と親の教育的関心」『教育社会学研究』5: 64-78.
- , 1954b, 「社会階層とその教育的効果について——炭鉱地域社会実態調査を通して」『九州大学教育学部紀要』2: 74-109.
- 矢田俊文, 1995, 「石炭産業」産業学会編『戦後日本産業史』東洋経済新報社: 994-1013.
- 吉田秀和, 2002, 「広域移動離職者の生活歴」高橋伸一編『移動社会と生活ネットワーク——元炭鉱労働者の生活史研究』高菅出版: 129-53.
- 山口覚, 2016, 『集団就職とは何であったか——〈金の卵〉の時空間』ミネルヴァ書房.
- 山本真子・小松孝至, 2016, 「児童の日記にあらわれる他者との関係の中の自己」『教育心理学研究』64(1): 76-87.
- 山本多喜司・ワップナー編, 1992, 『人生移行の発達心理学』北大路書房.